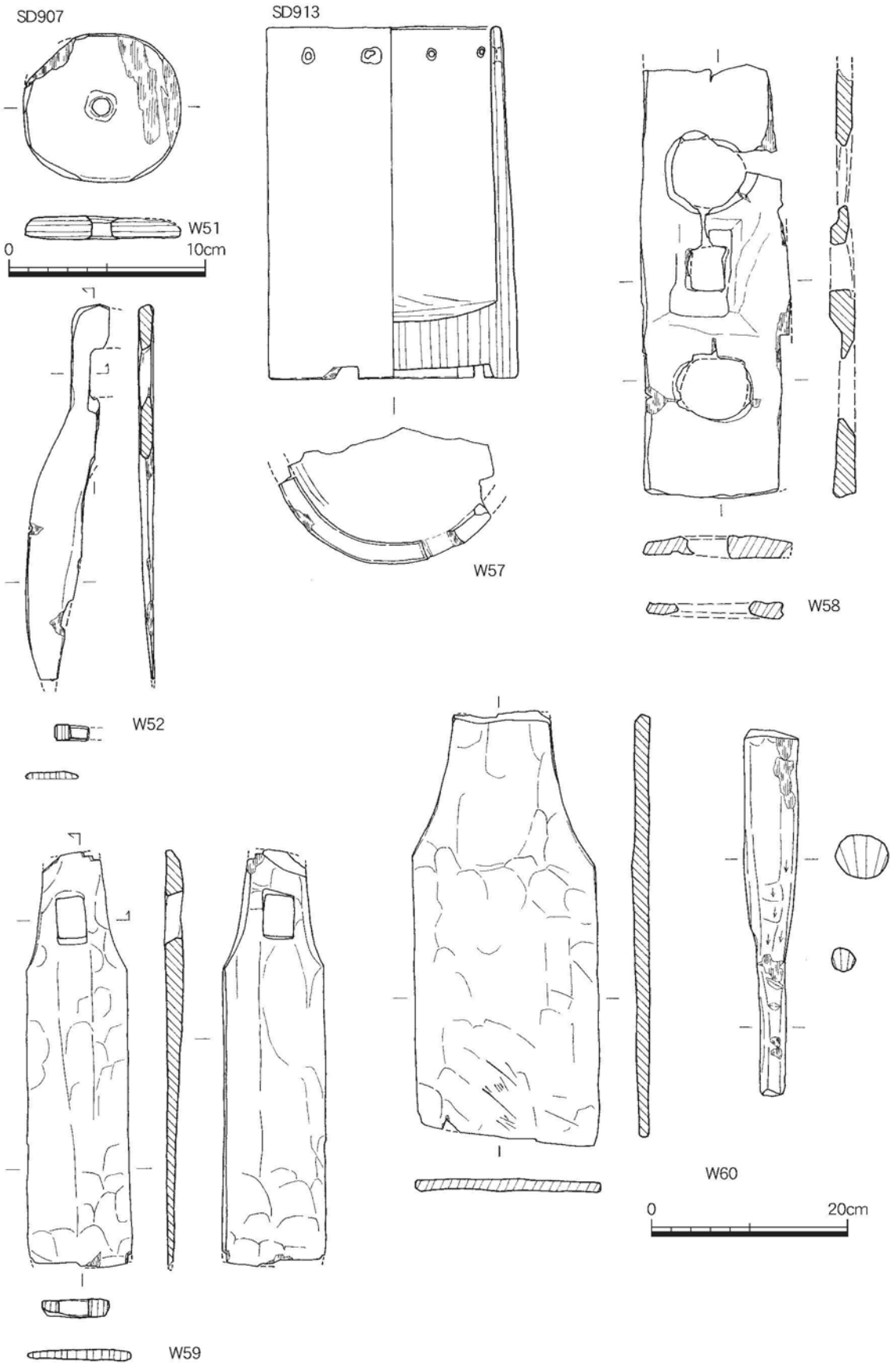



Fig.97　SD907・913① 出土木器（1/3・1/6）※W51・57 は 1/3

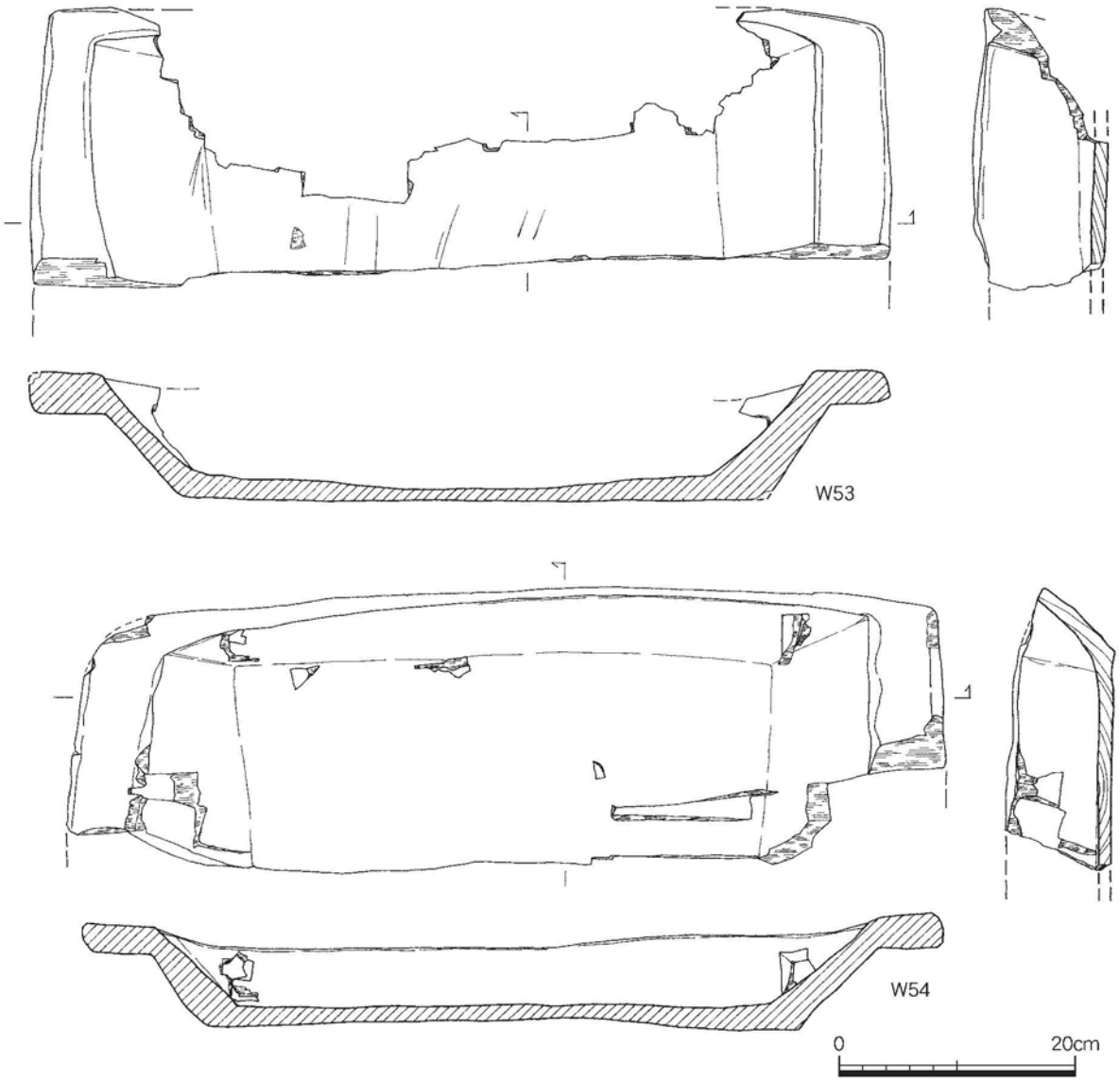



Fig.98　SD909（SX911）出土木器①（1/6）

樹種はよく農耕具に使われるものであり、転用品の可能性がある。W59は平鍬。残存長42.0cm、最大幅10.4cm、最大厚2.0cmを測る。基部に5.0×3.0cmの方形着柄孔がある。細長い肩の張る形態で、表面に削り加工痕が残る。W60はW59と同形態の未製品。全長44.0cm、最大幅18.6cm、最大厚1.6cmを測る。刃部と着柄孔は未成形である。表面の加工は粗い削りの段階である。W59・60共柾目で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。W61は敲打具。全長37.0cm、最大径5.2×4.5cm、握部径2.6×2.5cmを測る。表面は少し欠損するが、削り加工。割材で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。W62・63は容器の蓋か。W62は全長25.1cm、最大幅14.9cm、厚さ0.9cmを測る。下部に両端大2個、中央部に小1個の円孔がある。孔の廻りには使用痕は認められない。調整は全面削りである。平鍬に類似しており、転用品か。W63は全長25.1cm、最大幅18.2cm、最大厚1.0cmを測る。全面削り加工である。端部と中央部にそれぞれ2個の円孔を持つ。孔間には紐の圧痕らしきものが認められ、何かに装着したものと思われる。いずれも柾目材で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。W64は荷負い棒か。残長89.4cm、最大径3.4×3.5cmを測る。両端は削り加工で尖らす。表面には樹皮が残る。芯持ちのコナラ属クヌギ節である。

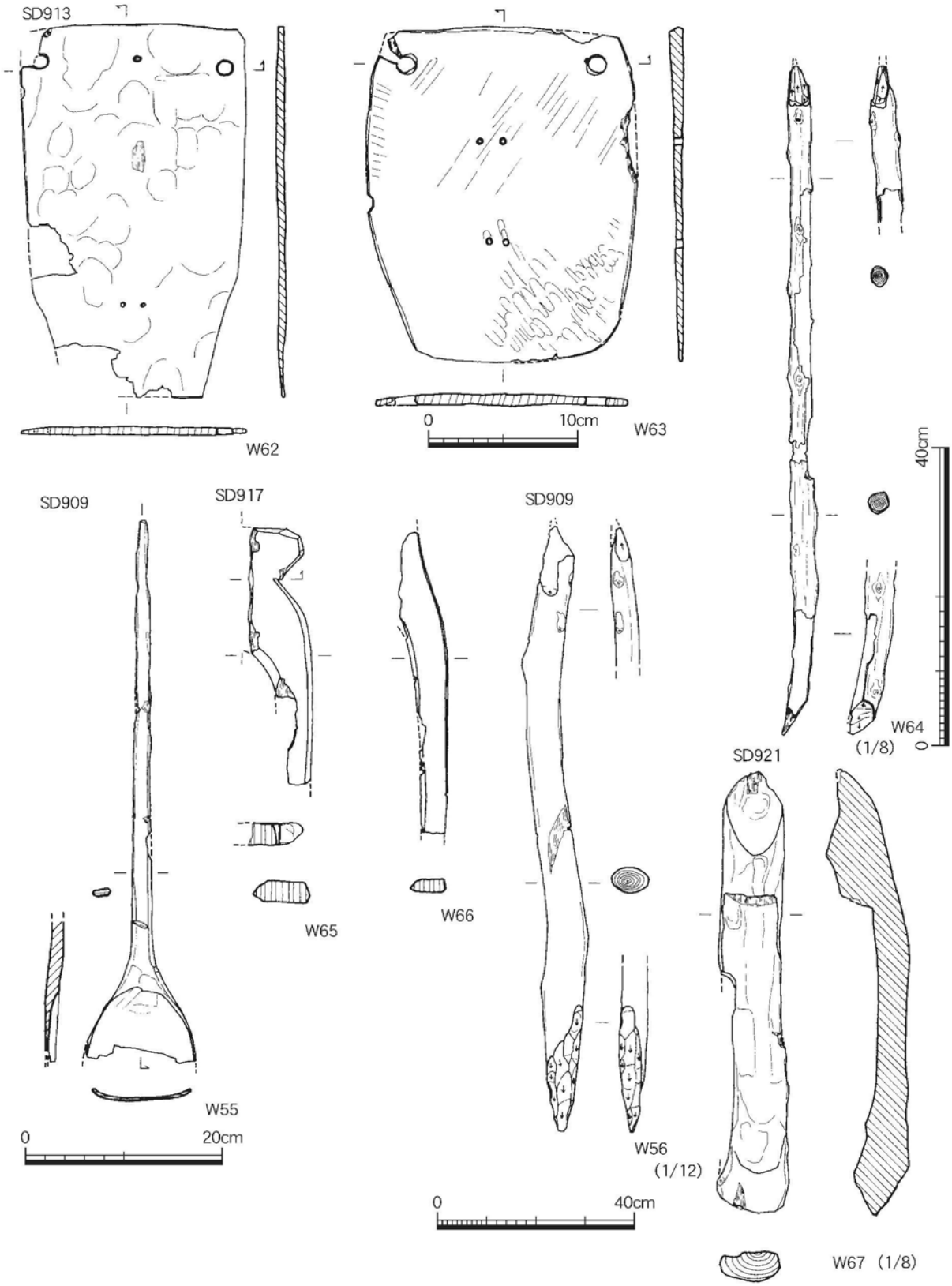



Fig.99　SD909-②・913-②・917・921 出土木器（1/4・1/6・1/8・1/12）

**SD917**（PL.37）

SD909の東側で検出した不定形状の溝。南側はSD893に連なり、G-31区で立上る。溝幅は1.5～3m、深さは最大でも0.08m程で、浅い落ち込みの可能性もある。

**出土遺物**（Fig.90・94・99、PL.93）　弥生時代中期以降の土器片が少量出土した。

261は中期中頃の逆L字形口縁の甕。復元口径は31.2cmを測る。調整はヨコナデ。

S13は刃部が三角形を呈す石庖丁。残存長9.6cm、最大刃幅4.1cm、厚さ0.65cm、孔径0.7～0.9cmを測る。孔間距離は2.4cmを測る。表面は研磨調整で、刃部は両側から研ぎ出す。石材は輝緑凝灰岩。

W65は一木の三又鋤。残存長25.8cmを測る。表面削り加工である。W66は三又鍬の刃で、残存長30.1cmを測る。全面削り加工である。いずれも柾目で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

**SD918**

SD913から南側に続く浅い溝。

**出土遺物**（Fig.90）　弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が少量出土している。

262は布留式土器の甕口縁部細片。調整は口縁部ヨコナデで、胴部はヘラケズリ。

**SD921**（Fig.91、PL.37）

調査区南西隅、SD854の下層溝、SD818の西側で検出したもので、流路の一部であろうか。埋土は粗砂が主体となる。この上面には埋没時に廃棄されたと思われる土器群SX853があった。SD818より古い溝であるが、時期的に余り差はない。

**出土遺物**（Fig.92～94・99・100、PL.91・93）　弥生時代中期から後期末迄の土器で、後期後半から終末のものが多く、古墳時代初頭の土器も少量含む。

263～269は壺。263は短頸の小型壺。復元口径10.6cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、胴部はナデである。264は口縁部で復元口径16.6cmを測る。調整はヨコナデ。265は扁球の胴部。中央にヘラによる刻目突帯が付く。調整は外面ヘラミガキ、内面は板ナデ。266は広口の壺でほぼ完存。底部は僅かに平底気味。口径は14.4cm、器高17.0cmを測る。調整は外面胴部ハケメ後ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、内面口縁部はハケメ、胴部はナデで、焼成後外から穿孔した3.0×0.7cmの孔がある。外面には黒斑がある。267は畿内系の古墳時代初頭の壺。頸部には三角突帯が巡り、その下に二段の竹管文が付く。調整は外面丁寧なナデ、内面はハケメ。胎土は雲母片を多く含み精良。268・269は複合口縁壺。後期後半代である。復元口径は29.2cm・22.0cmを測る。268の調整は口縁部外面ハケメ後ナデ、内面ハケメ後ナデ消し。外面には工具痕が残る。258は長頸で、口縁と頸部の境に刻目が付く。調整は口縁部ヨコナデ、径部内外面はハケメ。270～277は甕。270は口縁の開きが弱い。復元口径は復元口径13.2cmを測る。調整は内外面ハケメ。271～273は「く」字形口縁の小型甕。復元口径は14.4cm・18.2cmを測る。調整は、271は外面ヨコナデ、内面はハケメ。272は口縁部内外面ハケメ後ヨコナデである。273は頸部片で、調整は内外面ハケメ。274は長胴の小型甕。器壁は厚手で、調整な内外面ハケメ。275～277は大型甕。275は「く」字形に外反する口縁で、径部に1条の三角突帯が貼り付く。復元口径は46.1cmを測る。調整は口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部はハケメである。276は上胴部で、刻目突帯が1条巡る。最大胴径48cmを測る。調整は内外面粗いハケメ。277は下胴部で、退化した三角突帯が付く。残存部最大径は38.6cmを測る。調整はハケメで、突帯部はヨコナデ。278～281は鉢。278は底が深い形態で、復元口径は15.2cmを測る。調整は内外面ヘラミガキ。279・280は内湾する口縁部片。いずれも調整はナデ。281は口縁が外折して鍔状に開く形態。調整は内外面ハケメと板ナデである。282～284は脚台付鉢。底深の鉢に大きく開く脚が付く。調整は282が外面ハケメ後ナデ、内面はナデ。283は内外面ナデで、外面と脚内面は板ナデ。284は脚台部。脚裾径は15.2cmを測る。脚部の調整は内

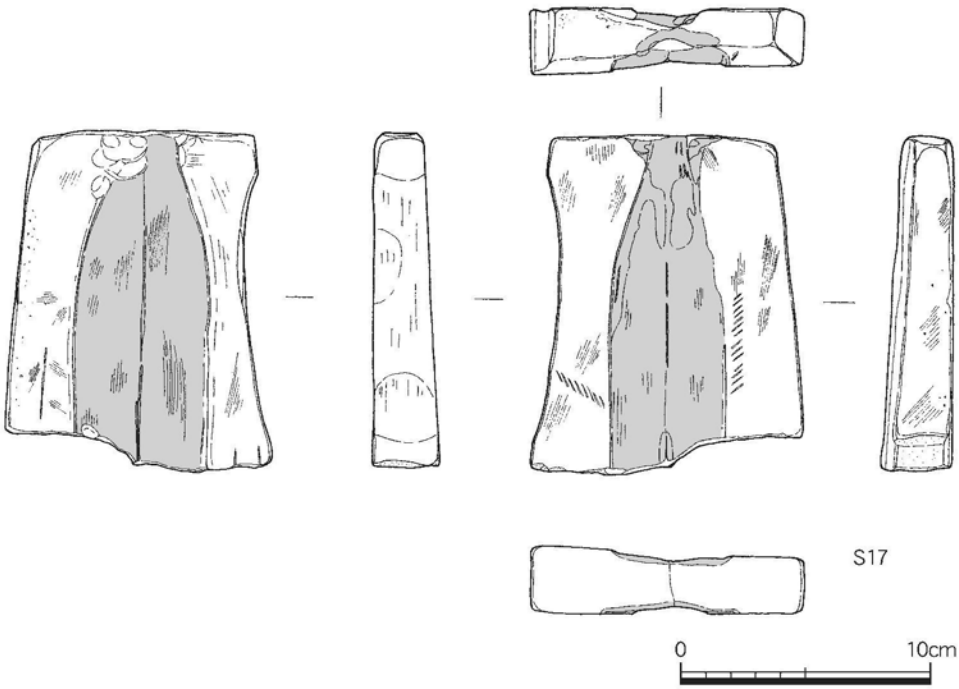



Fig.100　SD921 出土鋳型（1/3）

外面ハケメ。285～287は高坏。274は坏底部。調整は外面ハケメ後ヘラミガキ。内面はヘラミガキ。286は古墳時代前期初頭の高坏。脚径12.3cmを測る。脚部に４か所径0.5×0.7cmの円形透孔がある。調整は外面ヘラミガキ、内面はハケメ。287は大きく開く脚部。脚裾径18.1cmを測る。外面ハケメ後ヘラミガキ、内面はハケメ後ナデ。胎土は精良。288は古墳時代初頭の器台。口径12.8cm、器高17.1cmを測る。調整は外面上半がハケメ、下半はナデ、内面は口縁部ハケメ、体部はナデ上げる。289は区上部に突起を持つ沓形器台。調整は内外面ナデで、内面シボリ痕が残る。頂部径7.2cmの円孔が空く。290は弥生時代前期の木葉痕が残る底部片。復元底径は9.6cmを測る。調整はナデ。291は籾圧痕が残る底部。籾圧痕は0.5×0.7cm程である。調整は内面不明、外面はナデ。

S15は磨石。石鹸形で、長さ9.3cm、幅7.1cm、厚さ3.4cmを測る。各面研磨で、下小口は使用により窪む。S16は円形の磨石兼敲石。縦長6.7cm、横幅8.8cm、厚さ5.5cmを測る。表面は磨滅で擦られているが、上下面・左右側面に敲き使用で窪む。石材は玄武岩か。S17は両面に鋳面を持つ銅戈鋳型片。大きさは残存長13.5cm、湯口部で8.6cm、厚さは上小口部の湯口部で2.0cm、下小口で2.7cmを測る。刃幅はＡ面で5.3cm、Ｂ面で4.5cmを測る。銅戈の形式としては中細である。破損後砥石に転用され各面摩り減り、鋳型面も残りが悪い。

W67は舟形の模造船。全長59.2cm、最大幅8.5cm、最大厚8.2cmを測る。両端を削って尖らせ、中央部は平坦に削り込む。全体に傷みがひどい。樹種はコナラ属コナラ亜属クヌギ節である。

## ② 掘立柱建物

（4次～8次調査の集落遺構と立地）

掘立柱建物をはじめ集落に関した遺構は調査区南側の微高地で検出された。第Ⅱ面においても南際で第Ⅲ面の集落遺構が検出される下層の黒色粘土層の高まりが一部見えていた。この微高地は南側の8次調査と合わせ南北に160m以上、東西に約35mの幅で湾曲しながら延びていることが判っている。また、西側は約30m幅の低地（第Ⅱ面では洪水流路となった範囲）をはさみ、第6次調査で検出された集落と対峙している。

この第6次調査で検出された集落は東西に幅約35m、南北の延長が75m以上に及ぶ。集落の範囲規模としては前者に比べ小さいが、遺構密度はほぼ変わらず高い。時期は弥生時代の板付Ⅰ式期の比較的新しい時期から始まる。その後、中期中葉以降に活発な活動がみられ、古墳時代はじめの布留式期まで続く。このような時期変遷は6次調査成果とほぼ変わらないが、板付Ⅰ式期の遺物や遺構については7次、8次調査では少ない。

7次調査で検出された集落の西側は水路と考えられるSD818で限られる。SD818の埋没時期は布留式期まで降り、集落の廃止時期ともほぼ対応している。同様に6次調査で検出された集落の西側も水路と考えられるSD369で限られている。この溝の埋没時期も同じく布留式期の終わり頃と考えられ、この2本の溝は約80mの間隔を置いて平行して走行していることになる。

7次調査の集落東側は第Ⅱ面で検出された旧河川SD735で切られ外郭施設の有無は不明である。6次調査では遡った弥生終末土器を多く含むSD388に限られている。

このように6次調査と7次調査で検出された集落は共通する要素をもっているが、更に掘立柱建物の構造や構成にも類似点を見出すことができる。

概ね第6次調査地点で検出された掘立柱建物跡は、1×2間規模の建物を主体として、外郭に沿って巡らしていることから、先述の溝と合わせ区画の要素も有していた可能性がある。その外郭のほぼ中央には性格は不明であるが、特異な方形周溝も掘立柱建物と向きを同じくして立地している。竪穴住居跡は削平のためか明確なものは3軒しか検出されていない。

7次調査の検出された掘立柱建物跡においても以下に記すように6次調査同様の構造と配置がみられた。

（7次調査の集落遺構）

微高地で検出された集落に関する主な遺構は掘立柱建物跡20棟、竪穴住居跡3軒、土壙2基である。掘立柱建物跡を構成する柱穴は北際と東際に縁辺に沿って集中し、中央から西側にかけては比較的少なくなる。これは中央部にかけては竪穴住居跡が構築された可能性があることや、西側は第Ⅰ面のSD720や第Ⅱ面のSD734の洪水時に洗い流されたことによる。既述した通り、第Ⅱ面の調査時には第Ⅲ面の黒色粘土が一部見える位に高い場所であったので後世の削平を受けやすい。また、SD818も微高地の西際を開析している。その他、細い溝が数条検出された。これは施設を区画した機能のほか排水も担っていた可能性がある。検出された溝のなかでSD830はこの微高地をやや湾曲しながら横断している。この溝付近のSB13とSB14を境に棟の方向が若干異なることも関連している可能性がある。

（7次調査の掘立柱建物跡）

検出された柱穴から復元した掘立柱建物跡は22棟である。先述のとおり削平を免れた微高地の北と東側縁辺に沿って棟の方向を揃え建ち並ぶ。柵列は検出されていないが、掘立柱建物が建ち並び区画していたことも想像される。

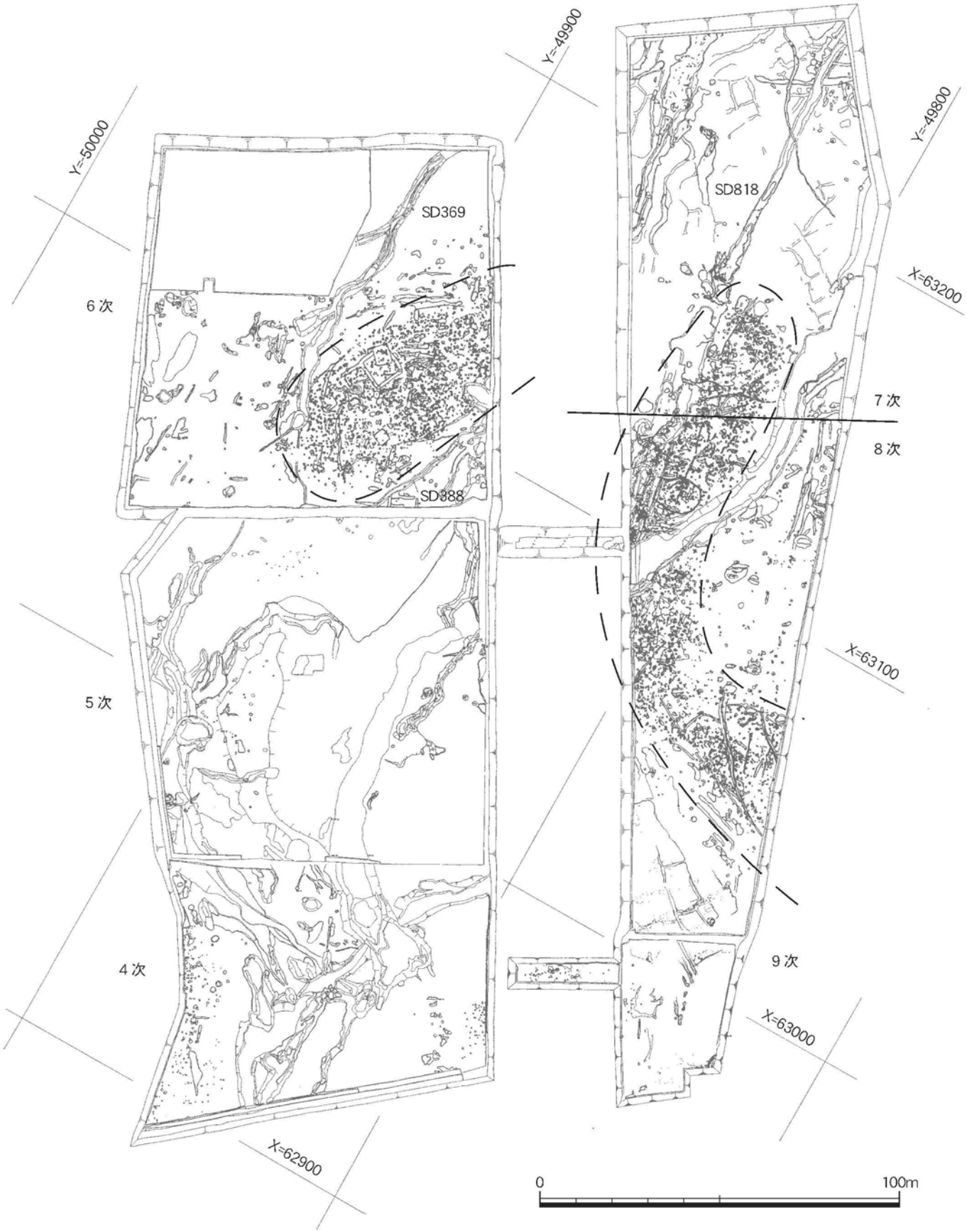



Fig.101　第4～9次集落遺構配置図（1/1,500）

Fig.102　微高地集落遺構図（1/200）

Fig.103　第Ⅲ面掘立柱建物配置図（1/200）

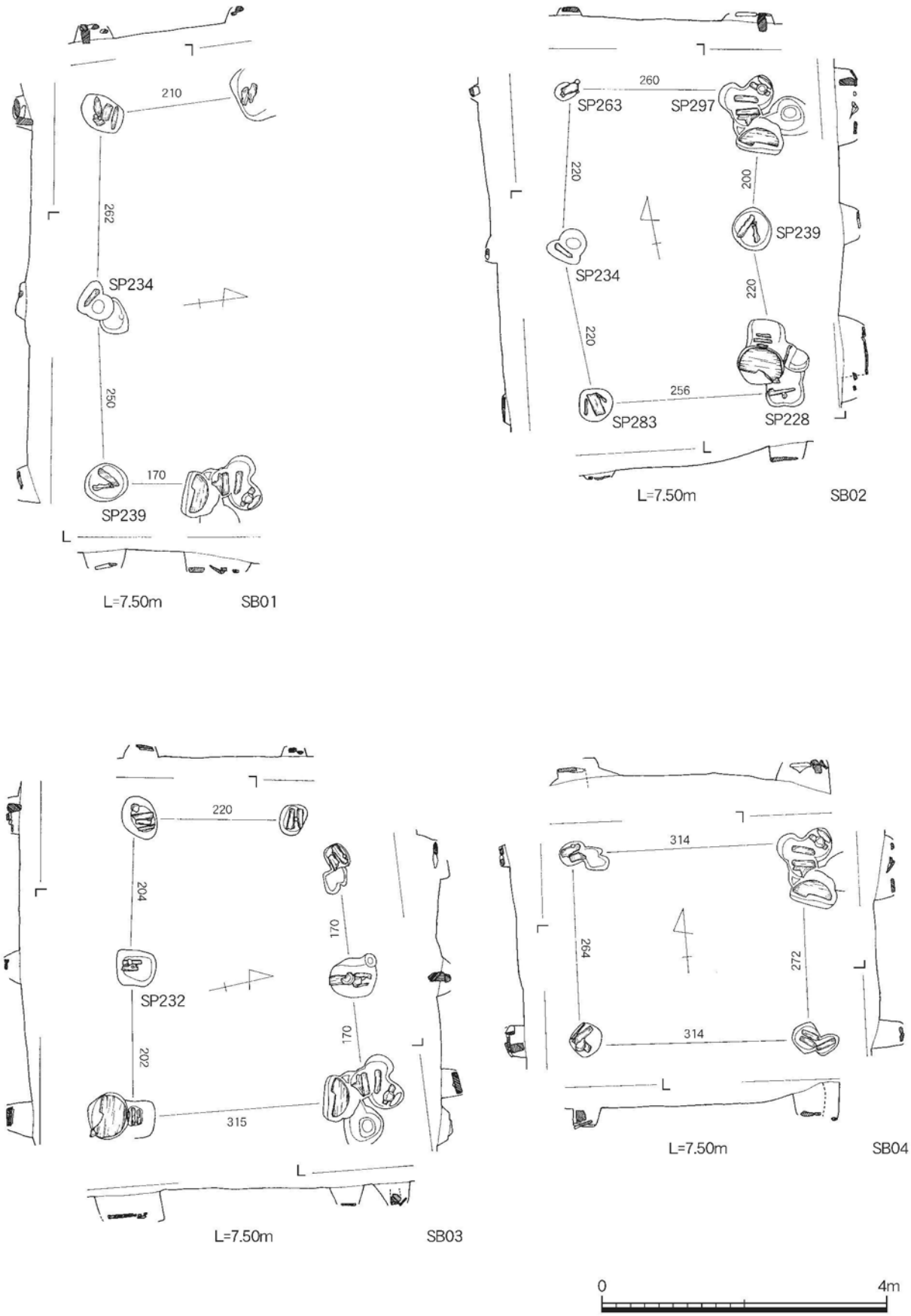



Fig.104　掘立柱建物跡実測図（SB01～04　1/80）

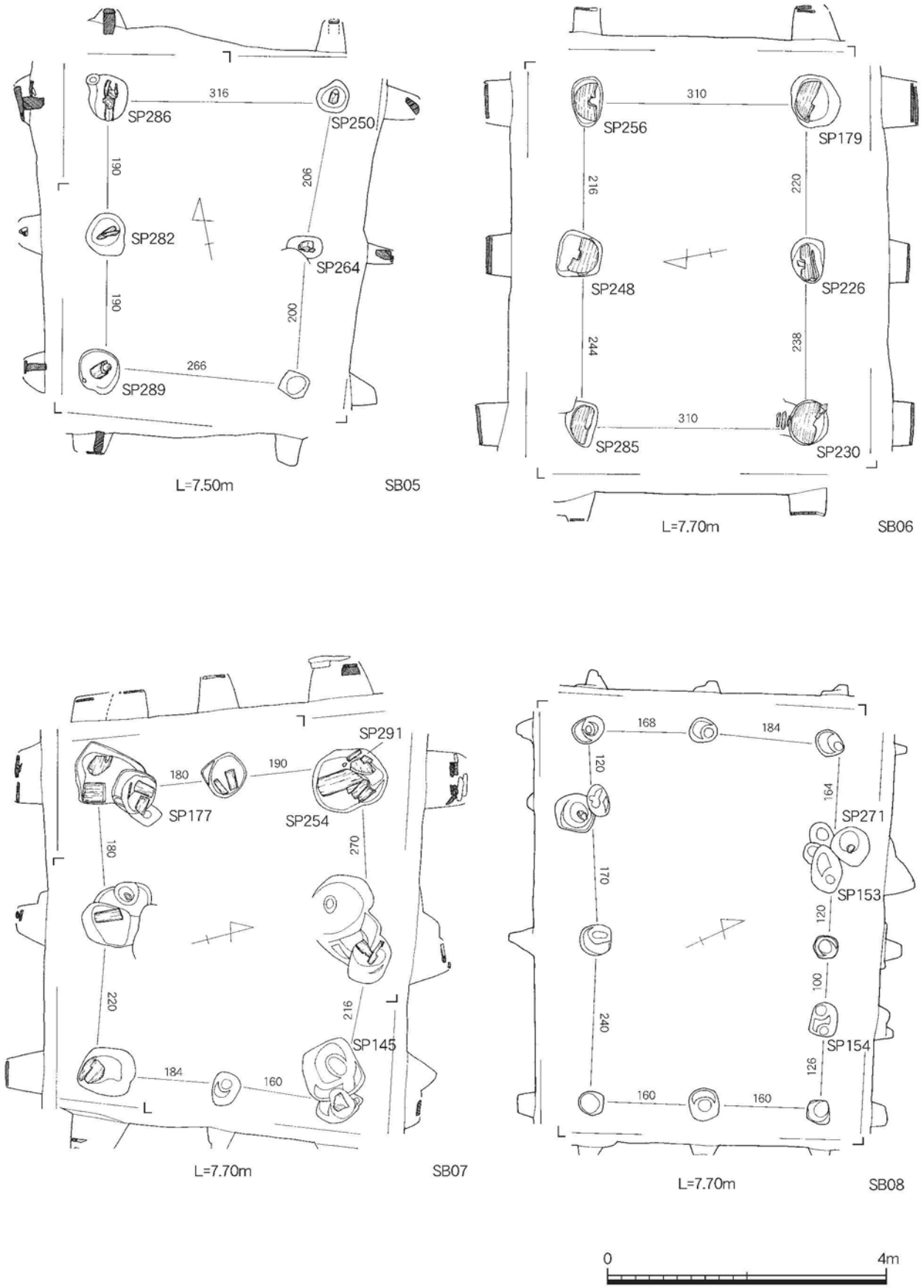



Fig.105　掘立柱建物跡実測図（SB05～08　1/80）

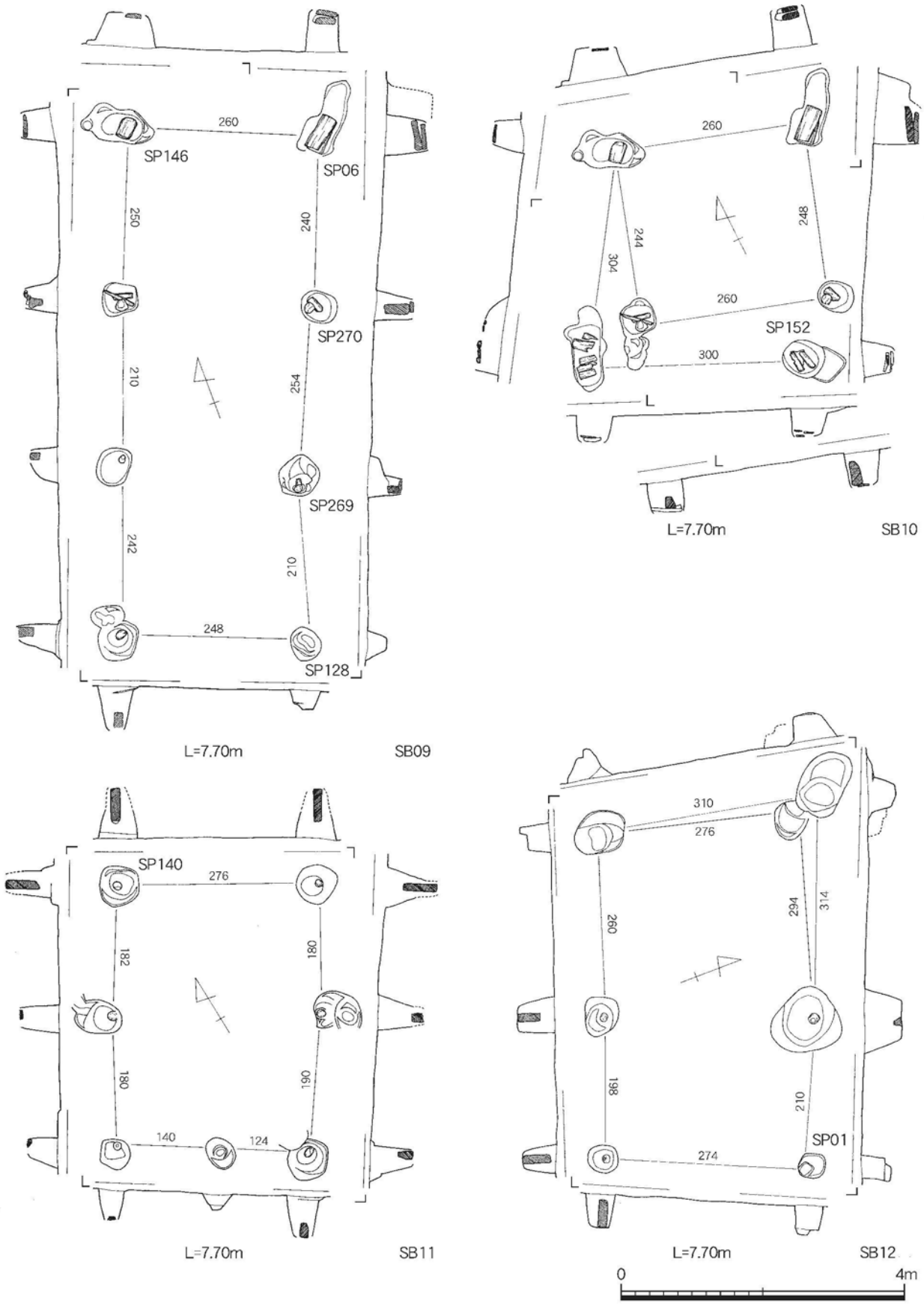



Fig.106　掘立柱建物跡実測図（SB09～12　1/80）

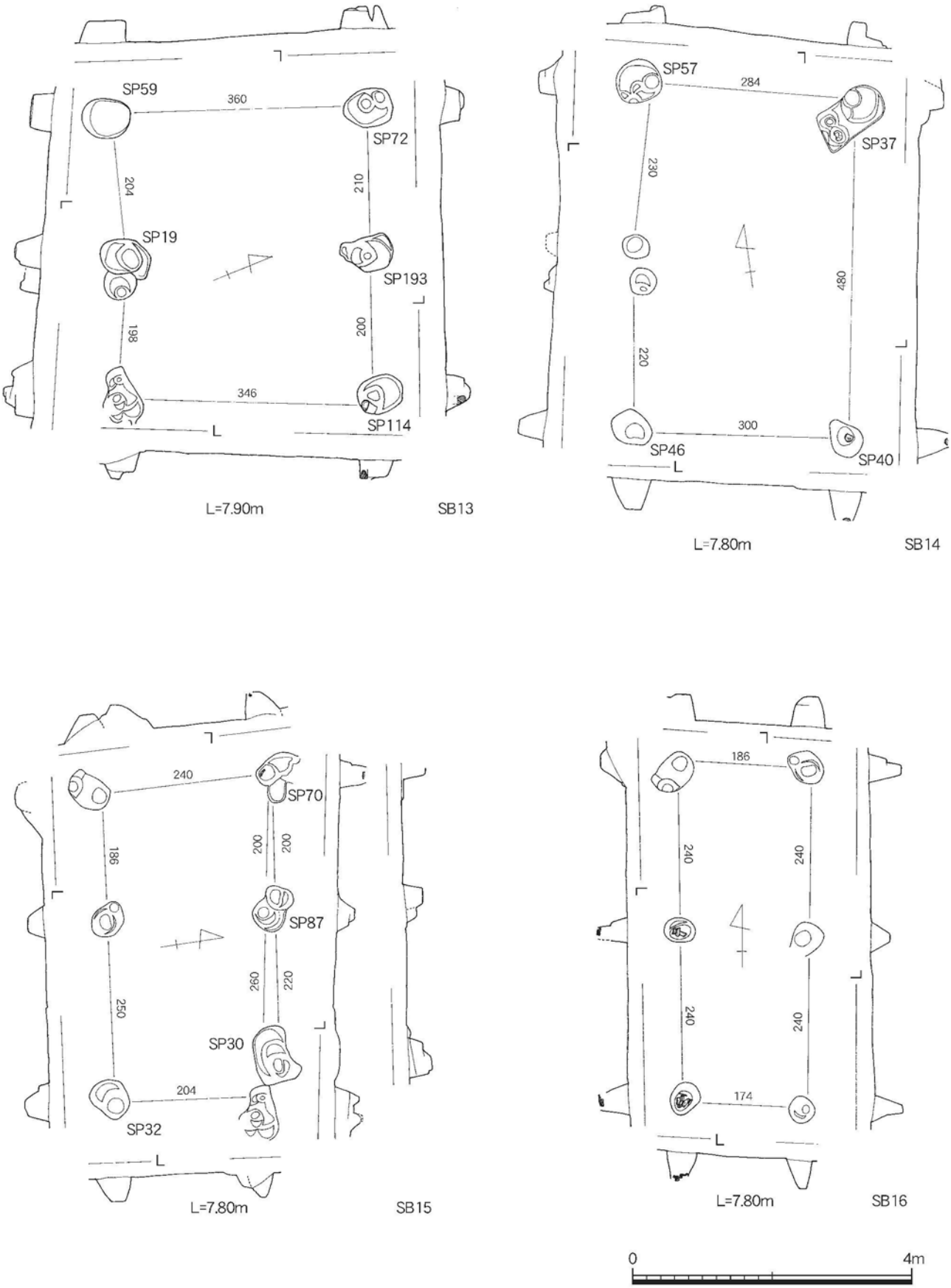
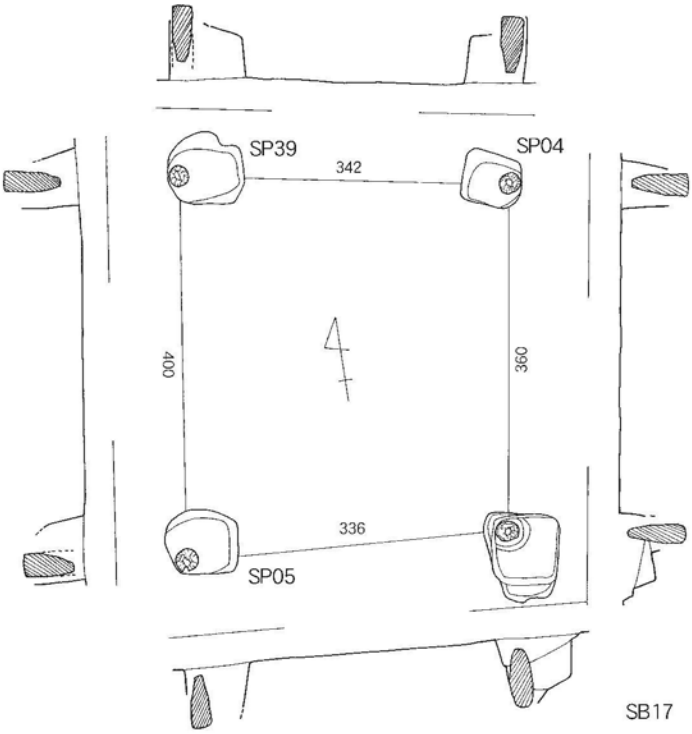
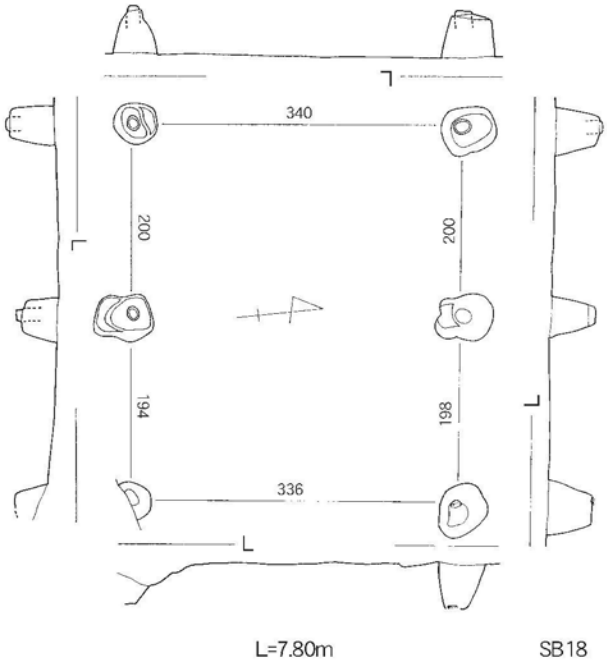
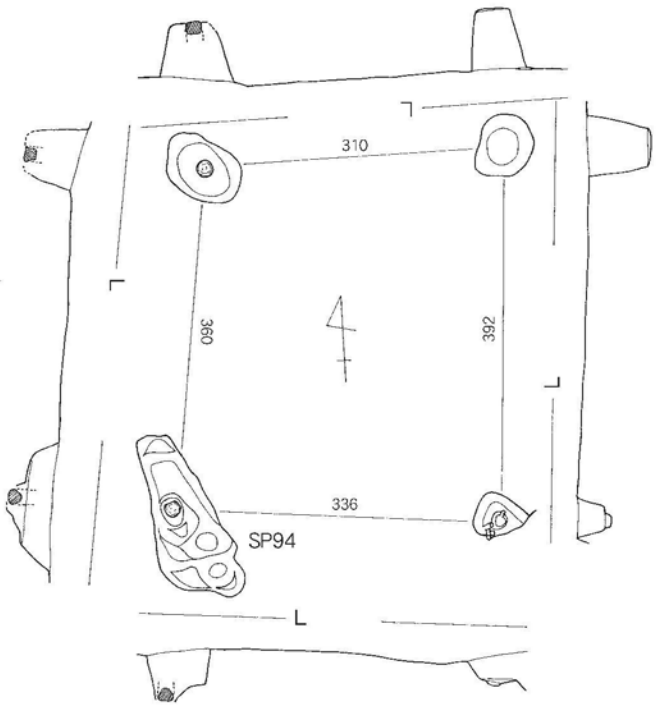



Fig.107　掘立柱建物跡実測図（SB13～16　1/80）



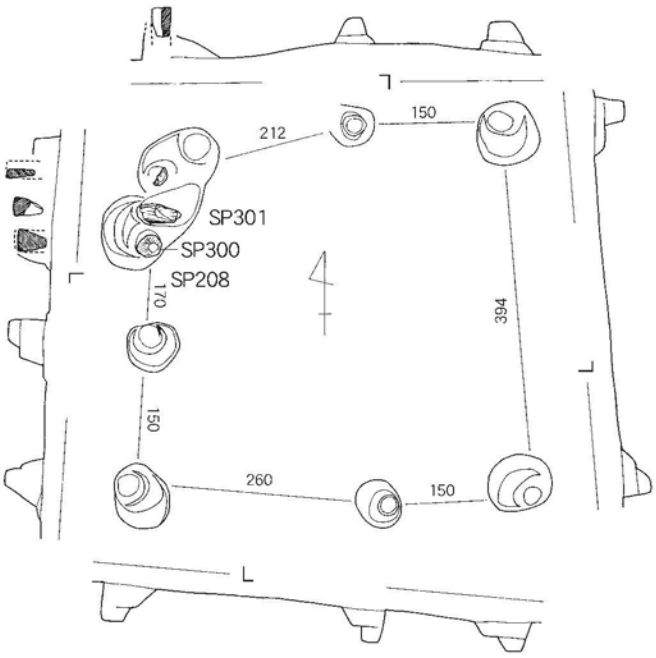



Fig.108　掘立柱建物跡実測図（SB17～20　1/80）

（復元した掘立柱建物跡の概要）（Fig.104～108）

復元した掘立柱建物跡22棟の内訳は柱間が１×２間が最も多く11棟、２×２間が４棟、１×１間が５棟、１×３間が１棟、２×３間が１棟である。

６次調査で復元された掘立柱建物も含めて表とグラフにしたものをp-148に掲載した。これによれば梁間１間、桁行２間の構造に集中しているのは明らかであるが、その寸法（規模）をみると梁間は2.7m前後と、3.4m前後に、桁行は４～５ｍに集中していることが判る。

１×２間はSB06の礎板にみられるように高床式倉庫の可能性が最も高く、１×１間のものは竪穴住居跡の主柱の可能性は高いが、収蔵する物の種類によっては平地式の倉庫も考えられ、SB17にみられるように礎板を敷かず、柱が径25㎝のものを用いている建物がある。

礎板については板を組み合わせたものがほとんどで、６次や雀居でみられた鉄アレイ状に加工した丸太材に柱をはめ込んだものは無い。集団間の違いを示しているものか。

以下、個別に概要を記す。なお、復元した掘立柱建物跡の番号は北西から順次付している。

**SB01**

微高地の北西端で検出された。北側が開析され柱穴が消滅しているが、２×２間の東西棟であろう。礎板に２、３枚の板を並べて用いる。

**SB02**

１×２間の南北棟である。同じく南北棟のSB05が重複し建て替えが行われている。礎板には２、３枚の細い板が並べられている。

**SB03**

１×２間の東西棟である。南側桁行と北西の柱穴は礎板の形状や方向が整然としているが、開析を受けている北辺の柱列は疑問である。

**SB04**

１×１間の東西棟である。SB02、03と重複している。柱間の間隔や方向は整然とし、礎板に板を２、３枚敷き並べている。

**SB05**

１×２間の南北棟である。先述の通り同じく南北棟のSB02と建て替えられたものであろう。１、２枚の板上に柱材が残る。SP286の柱材はクリである。

**SB06**

１×２間の東西棟である。柱穴間隔、方向が最も整然としている。礎板にクスノキ材のねずみ返しを半裁した板材を用いる。２箇所の柱穴ではこれを２枚重ねている。SB06は復元したSB01～07と切り合い併存しない。

**SB07**

２×２間の東西棟である。SB06の東側で切り合っている。礎板として広めの板材を１、２枚敷く。

**SB08**

微高地北東部でSB09、11と切り合っている。礎板は検出されていない。

**SB09**

微高地の北東隅で検出された１×３間の南北棟である。柱穴がSB10と重複しているので桁行が異なる可能性がある。径10～19㎝の柱が残る

**SB10**

ほぼ同間隔の１×１間の竪穴住居跡の主柱穴もしくは掘立柱建物跡である。SB09と重複した柱穴

を用いている。外側の組み合わせでは北東の柱穴が歪みすぎた位置になる。

**SB11**

1×2間の南北棟である。SB08、09と切り合い、併存することができるのはSB10のみである。柱材が良く残る。

**SB12**

微高地の東側縁辺でSB08、SB13とともに棟を揃えて併存していた可能性がある。北西隅の柱穴は内側のものが間隔や位置から合っていると思われる。

**SB13**

1×2間の東西棟である。SB08、12と棟の方向を合わせ建ち並ぶ。

**SB14**

1×2間の南北棟である。これより以南では北側の掘立柱建物とは棟方向が少し異なる。

**SB15**

1×2間の東西棟である。SB14とは直交して切り合う。

**SB16**

1×2間の南北棟である。SB15と直交し、2つの柱穴が重複している。

**SB17**

南東の柱穴が第8次調査範囲に位置する1×1間の南北棟である。1辺約70cmの方形掘方の大型柱穴に径約25cmの柱根が残る。柱穴内には礎板は敷かれていない。

**SB18**

1×2間の東西棟である。柱間の間隔や柱穴の位置が整然と配列されている。SB17とは棟方向を直交させ、併存していた可能性が高い。

**SB19**

1×1間の南北棟である。北東の柱穴が歪んだ位置にあるが、SB17に極めて近い柱間に配置されている。

**SB20**

1×1間の可能性があるが、柱筋に柱穴が検出されているので一応関連した柱穴として図示する。

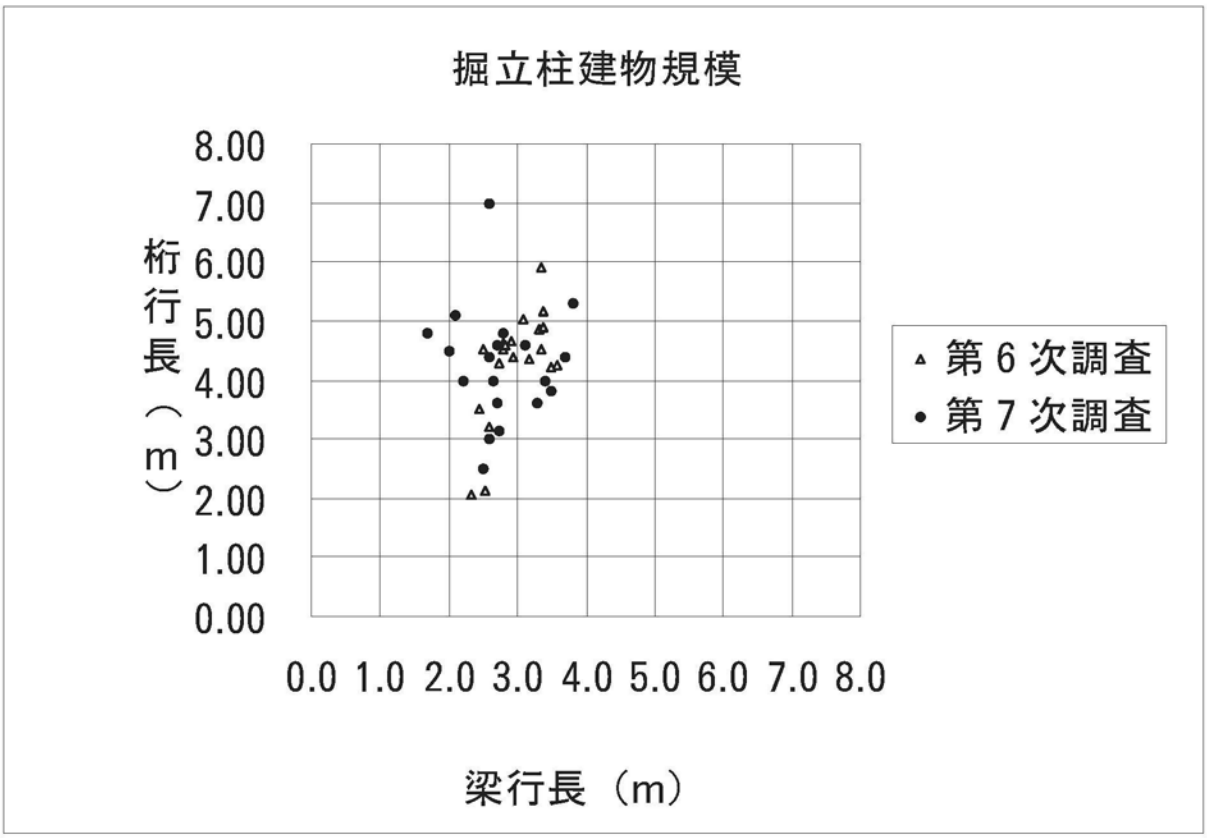
**柱穴出土遺物**（Fig.109、PL.100）

294の甕は外面胴部にタタキを施す。295は弥生中期の壺底部。296の外面には細かい暗文がみられる。297は器壁が薄く、外面に横位の丁寧なミガキが施されている。298はわずかに丸みを帯びた壺底部である。外底部ナデ調整を施す。299の内面は横位のハケ後ナデを加える。300は内外面ハケメを施した後口縁端部周辺をナデ調整している。301の鉢は外面ナデ調整、内面もナデ調整を施すが粗いハケメが一部残る。302は鋤先状の壺口縁部。303も袋状口縁部の壺である。304、305は器台、306の甕の内面胴部には明瞭にハケメが残る。307の底部周辺には押しつぶれた粘土の皺がみられ底部には草の繊維状の圧痕が残る。309、310は器台、311の甕内面はナデ調整。312は赤色顔料を塗布した磨研土器。313は高坏の坏部。内面に暗文がみられる。314は器台。

柱穴からの出土遺物は弥生中期後半から多くみられるが、下限の時期を示すものは弥生後期後半代から終末にかけてと思われる。

| 第6次調査第Ⅳ面掘立柱建物一覧表 | | | |
|---|---|---|---|
| 遺構番号 | 規模 | 梁行長(m) | 桁行長(m) |
| SB579 | 1×2間 | 3.16 | 4.34 |
| SB580 | 1×2間 | 2.78 | 4.54 |
| SB581 | 1×2間 | 3.08 | 5.02 |
| SB582 | 1×2間? | 2.52 | 2.12+α |
| SB584 | 1×2間 | 3.35 | 5.90 |
| SB585 | 1×2間 | 2.50 | 4.52 |
| SB586 | 1×2間 | 2.78 | 4.62 |
| SB588 | 1×2間 | 2.82 | 4.59 |
| SB589 | 1×2間 | 2.74 | 4.30 |
| SB590 | 1×2間 | 2.94 | 4.38 |
| SB591 | 変則的 | 3.57 | 4.26 |
| SB592 | 1×2間 | 2.32 | 2.06+α |
| SB593 | 1×2間? | 2.92 | 4.66 |
| SB598 | 1×2間 | 3.50 | 4.22 |
| SB599 | 1×2間 | 3.34 | 4.52 |
| SB600 | 1×2間 | 3.36 | 5.16 |
| SB601 | 1×2間 | 3.32 | 4.86 |
| SB605 | 1×2間 | 3.36 | 4.90 |
| SB606 | 1×1間 | 2.44 | 3.52 |
| SB607 | 1×1間 | 2.60 | 3.20 |

| 第7次調査第Ⅲ面掘立柱建物一覧表 | | | |
|---|---|---|---|
| 遺構番号 | 規模 | 梁行長(m) | 桁行長(m) |
| SB01 | 2×2間 | 2.10+α | 5.10 |
| SB02 | 1×2間 | 2.60 | 4.40 |
| SB03 | 1×2間 | 2.20 | 4.00 |
| SB04 | 1×1間 | 2.72 | 3.14 |
| SB05 | 1×2間 | 2.66 | 4.00 |
| SB06 | 1×2間 | 3.10 | 4.60 |
| SB07 | 2×2間 | 3.70 | 4.40 |
| SB08 | 2×3(4)間 | 3.80 | 5.30 |
| SB09 | 1×3間 | 2.60 | 7.00 |
| SB10 | 1×1間 | 2.60 | 3.00 |
| SB10 | 1×1間 | 2.50 | 2.50 |
| SB11 | 1(2)×2間 | 2.70 | 3.60 |
| SB12 | 1×2間 | 2.70 | 4.60 |
| SB13 | 1×2間 | 3.40 | 4.00 |
| SB14 | 1×1(2)間 | 2.80 | 4.80 |
| SB15 | 1×2間 | 2.00 | 4.50 |
| SB16 | 1×2間 | 1.70 | 4.80 |
| SB17 | 1×1間 | 3.40 | 4.00 |
| SB18 | 1×2間 | 3.40 | 4.00 |
| SB19 | 1×1間 | 3.50 | 3.80 |
| SB20 | 2×1(2)間 | 3.30 | 3.60 |



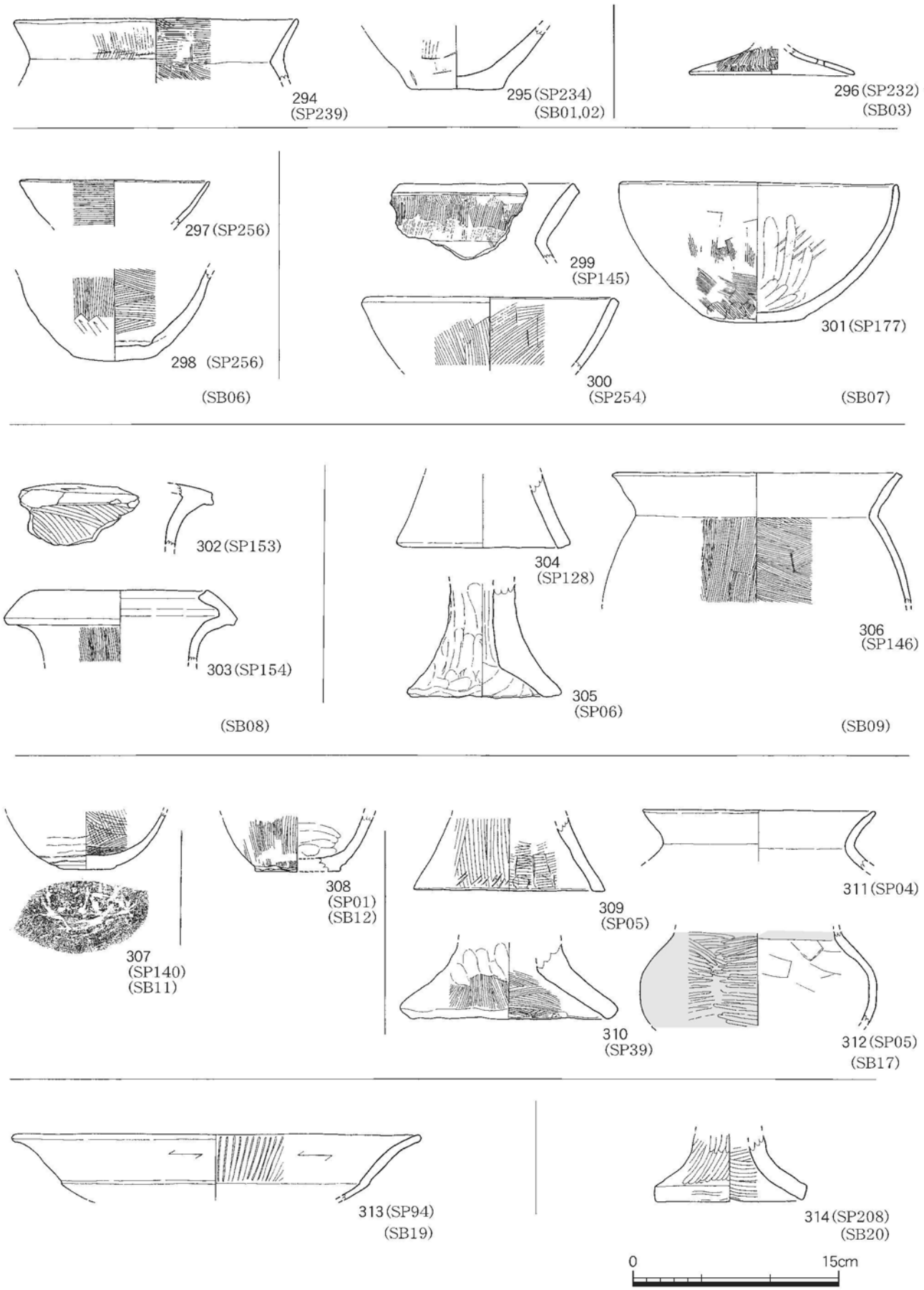



Fig.109　掘立柱建物跡柱穴出土遺物（1/4）

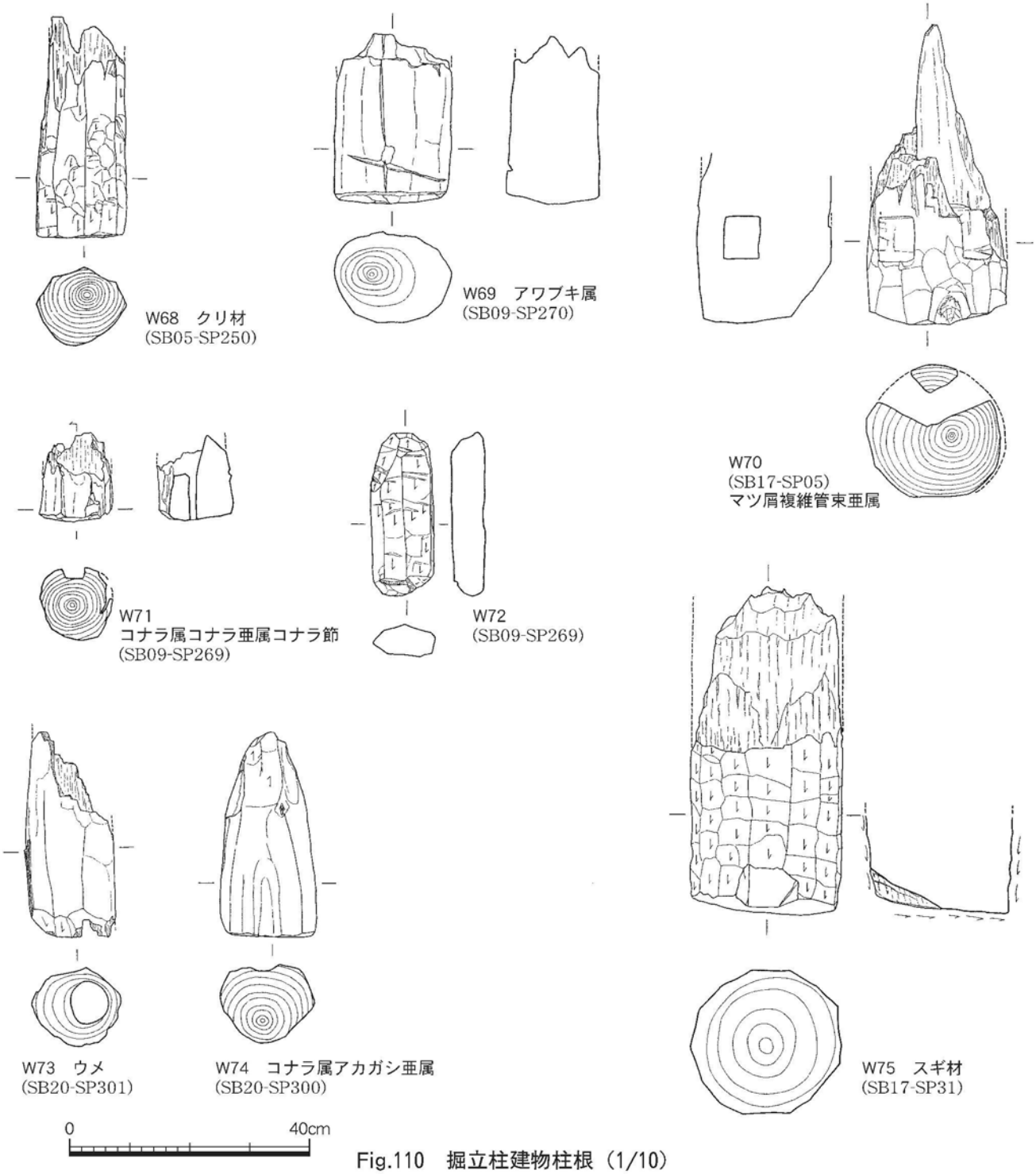



Fig.110 掘立柱建物柱根（1/10）

**掘立柱建物柱根**（Fig.110、PL.99）

検出された柱根は径15cm前後のものが多いが、SB17の柱穴から出土した柱根は径25cm前後と大きく、材もスギ、マツ属複維管束亜属、タブノキ属と各異なっていた。柱に使用された材はFig.110に示した他にスダジイ、ツバキ属があるが、スダジイとクリ材が目立つ。

**掘立柱礎板**（Fig.111、PL.97・98）

SB06の総ての柱穴にねずみ返しの半裁されたものが礎板として用いられていた。材はすべてクスノキである。礎板には他にスダジイ、ムクノキ、コナラ属コナラ亜属コナラ節などが用いられていた。

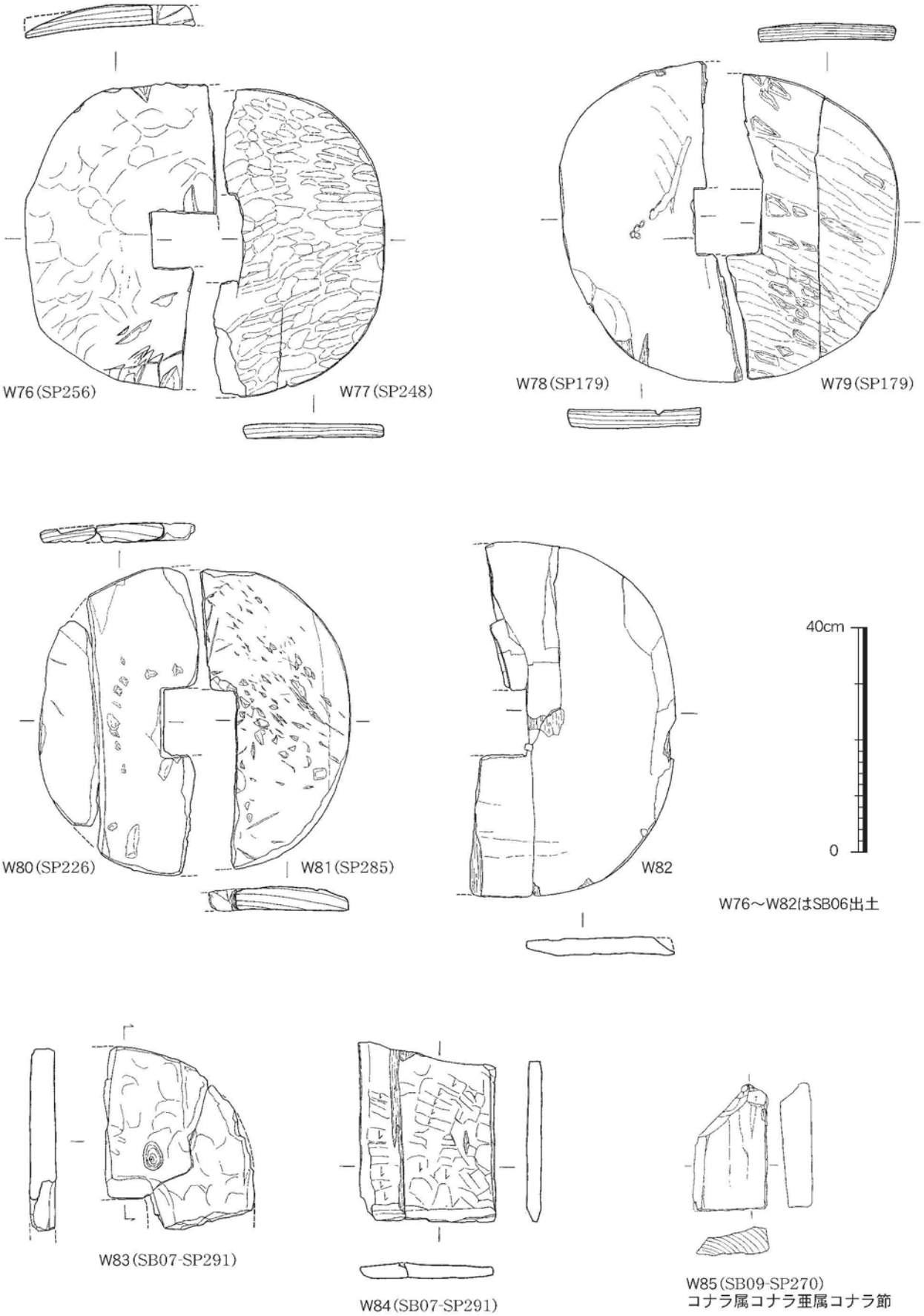



Fig.111　掘立柱建物礎板（1/10）

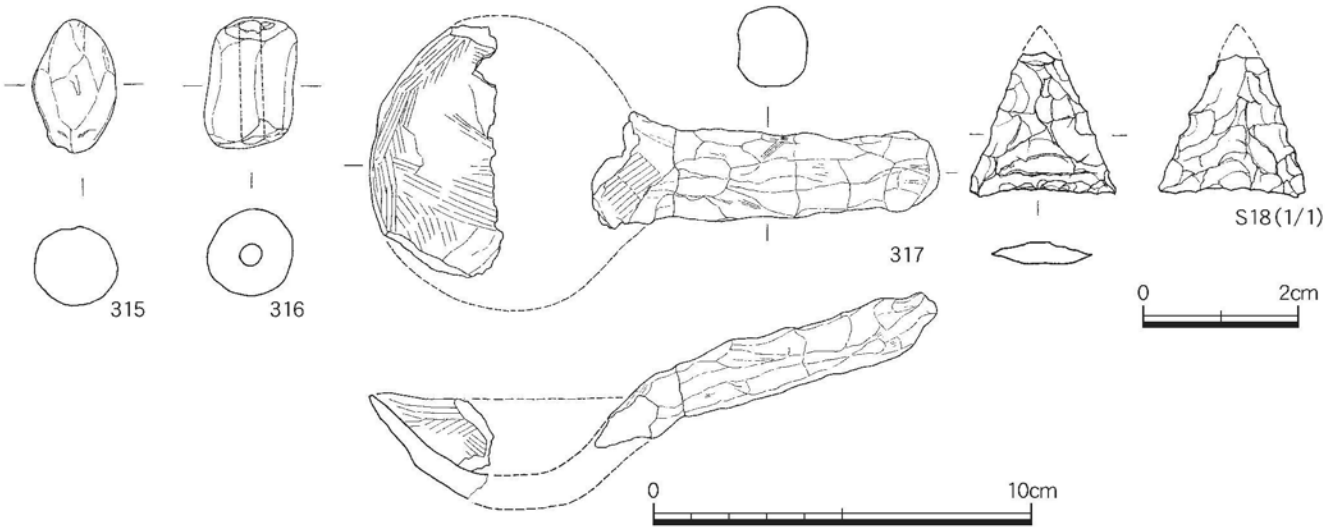



Fig.112　柱穴出土土製品、石鏃（1/2、1/1）

**柱穴出土土製品、石鏃**（FIg.112、PL.101）

315は土製投弾、316は土錘、317は杓子状の土製品である。杓部（坏部）は径７㎝前後に復元され、柄部は幅2.3㎝、長さ7.5㎝を測る。坏部外面と柄部は指頭痕による凹凸が顕著である。坏部内面は粗いハケメが施されている。燻されて全面黒色を呈す。６次調査でも同様の土製品が出土している。S18は安山岩製の石鏃である。

**SC814**（Fig.113）

微高地の西より中央部で検出された。検出時に方形に近い黒色土の覆土を検出したが、深さ約４㎝と浅く、不明瞭なプランとなった。主柱穴の可能性がある４個の柱穴を検出したが、南側の２つの柱穴は先述のSB19に用いている。

**出土遺物**（Fig.114、PL.100）

318は小形の壺であるが、器面が剥落し調整は不明瞭である。おそらくミガキが施されたものと思われるが下地の浅いハケメやヨコナデが外面にみられる。319は外面頸部下に緩いカーブと大きくうねったカーブの波状文が上下に櫛歯で描かれている。内面は横位のハケメ、灰白色を呈す。321は弥生土器壺の胴部、320は高坏の坏部。内外面に暗文がみられる。322の壺口縁部は端部大きく外反させる。外面に粗いハケメがみられる。323の壺体部には内外面に粗いハケメが残る。S19は３箇所に径６㎜以上の孔を穿ったあとがみられる。S20の石包丁は安山岩と思われる石材である。M3は床面から出土したガラス小玉である。コバルトブルーに発色している。

以上、遺構が浅く異なった遺構の遺物が混入している可能性は高いが下限は弥生終末に押さえられると考える。

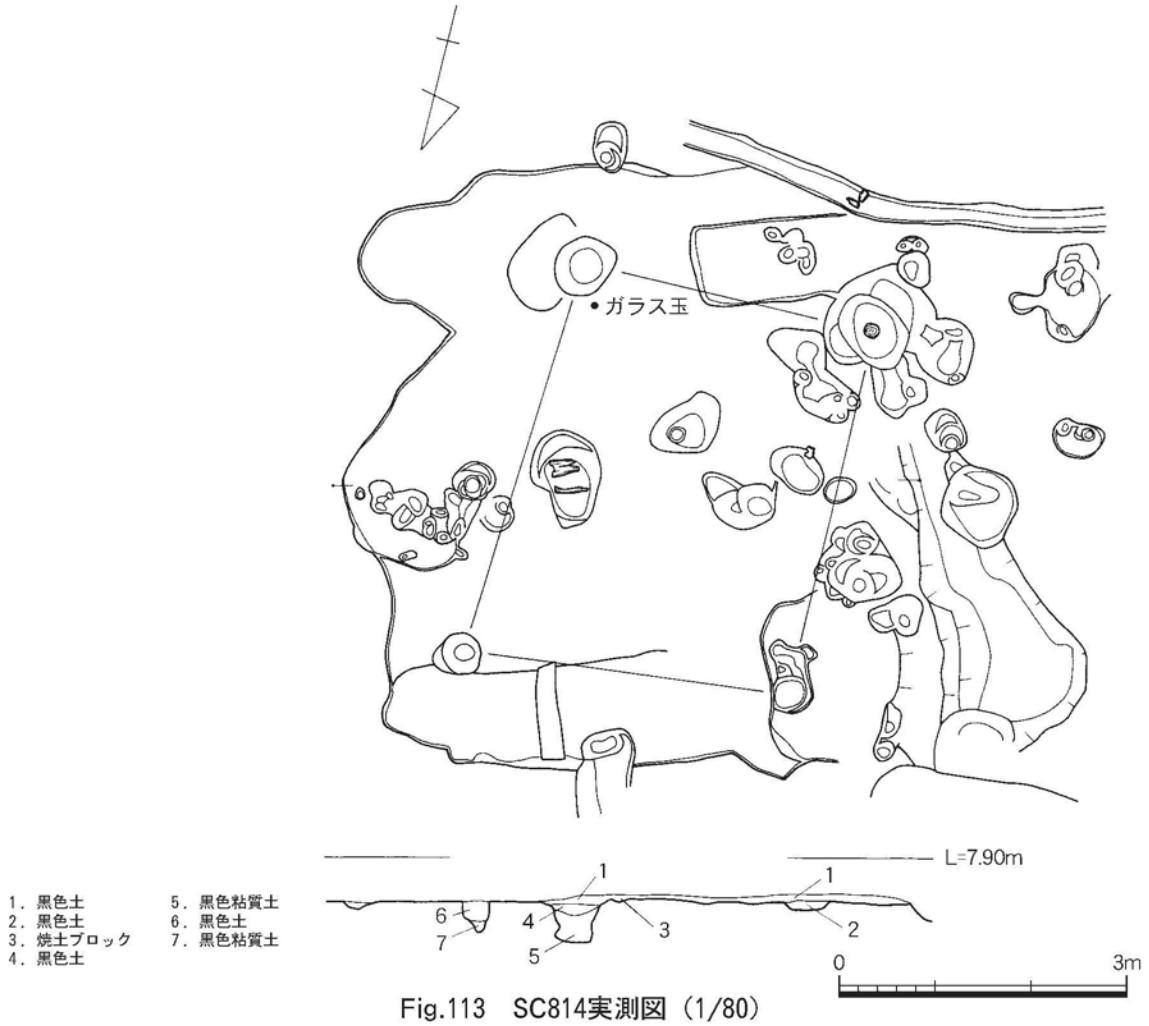



Fig.113　SC814実測図（1/80）

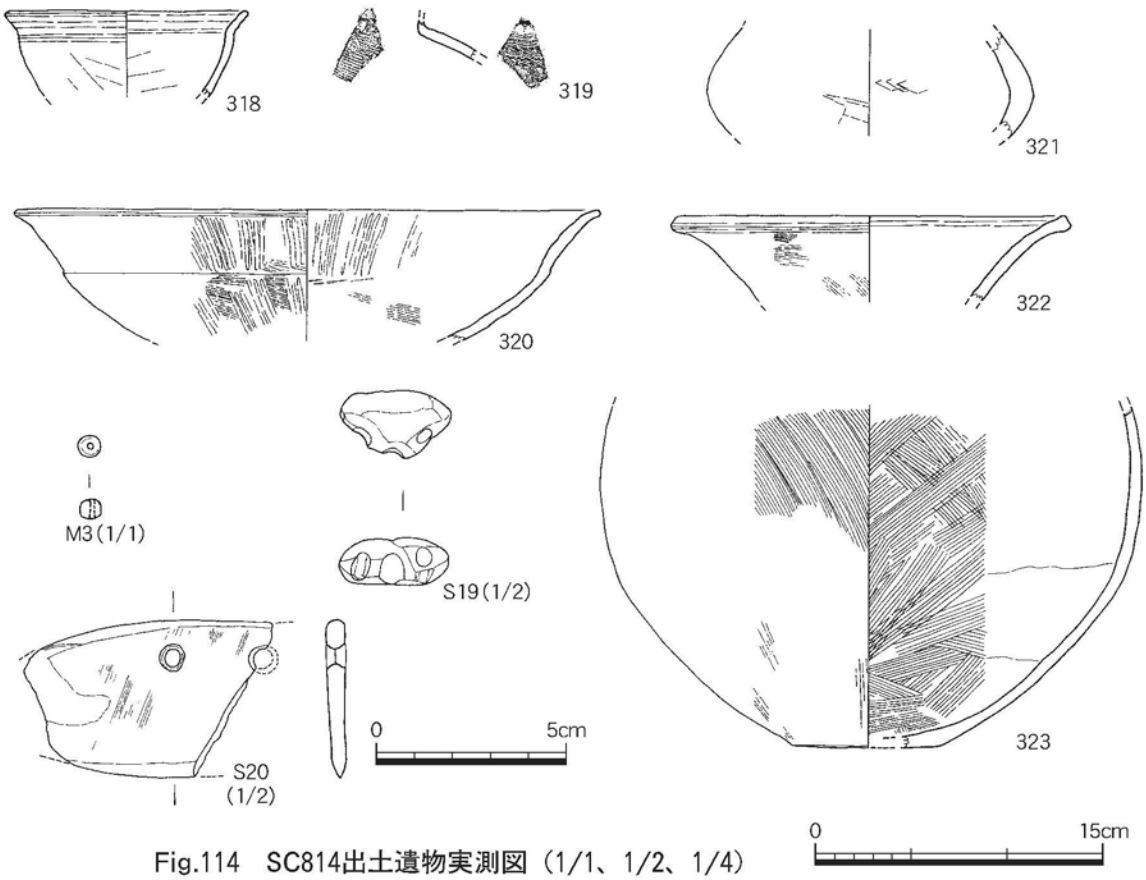



Fig.114　SC814出土遺物実測図（1/1、1/2、1/4）

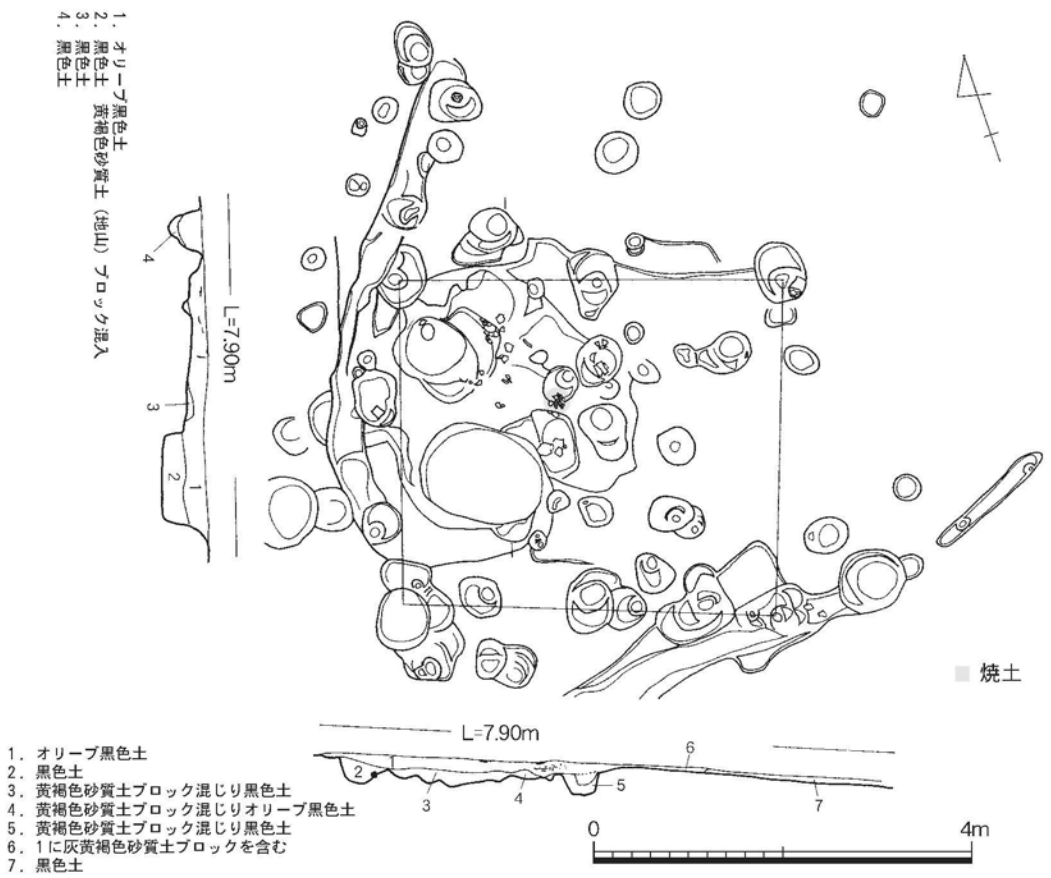



Fig.115　SC881実測図（1/80）

**SC881**（Fig.115、PL.57-1）

微高地の南東縁辺で検出された。これも黒い覆土が一面に検出され、幅約30㎝壁溝が露呈され竪穴住居跡の可能性が高いが明確なプランをつかむことはできなかった。掘立柱建物13が重複し、その内部で焼土検出されたことから掘立柱建物跡13は竪穴住居跡 SC881 の主柱穴の可能性がある。

**出土遺物**（Fig.116、PL.100）

焼土周辺から遺物が多く出土した。324は台付きの壺である。内外面に赤色顔料が塗布され、外面は縦方向の細かいミガキがみられる。内面はナデ調整。325は尖底の鉢である。外面にはタタキが施され、口縁部周辺はナデ消されている。内面には粗いハケメが掻きあげられている。底部には径６㎜の孔が穿たれている。灰色を呈し、砂粒を多く含む。327の壺は口縁部内外面をヨコナデ、体部外面は縦位の粗いハケ後斜位から横位のハケメを順次上から施す。内面は頸部付近を指押さえ屈曲点より下に４㎝離れた位置から横位のヘラケズリを施す。328の甕は外面口縁部以下タタキ、内面は体部上位は横位のハケメ、下位はヘラケズリを施す。329の甕は口径17.0㎝、器高26.0㎝を測る。外面の下位は時計回りのタタキ後粗いハケメを部分的になで上げる。上位は全面にタタキが残り、口縁部と頸部はヨコナデによって消されている。内面は上位に浅いハケメが残る。330の甕底部は外面タタキ後粗い縦位から斜位のハケメを施す。内面はヘラケズリを施す。331は土製投弾。

以上、弥生終末から古墳初頭の様相を示している。

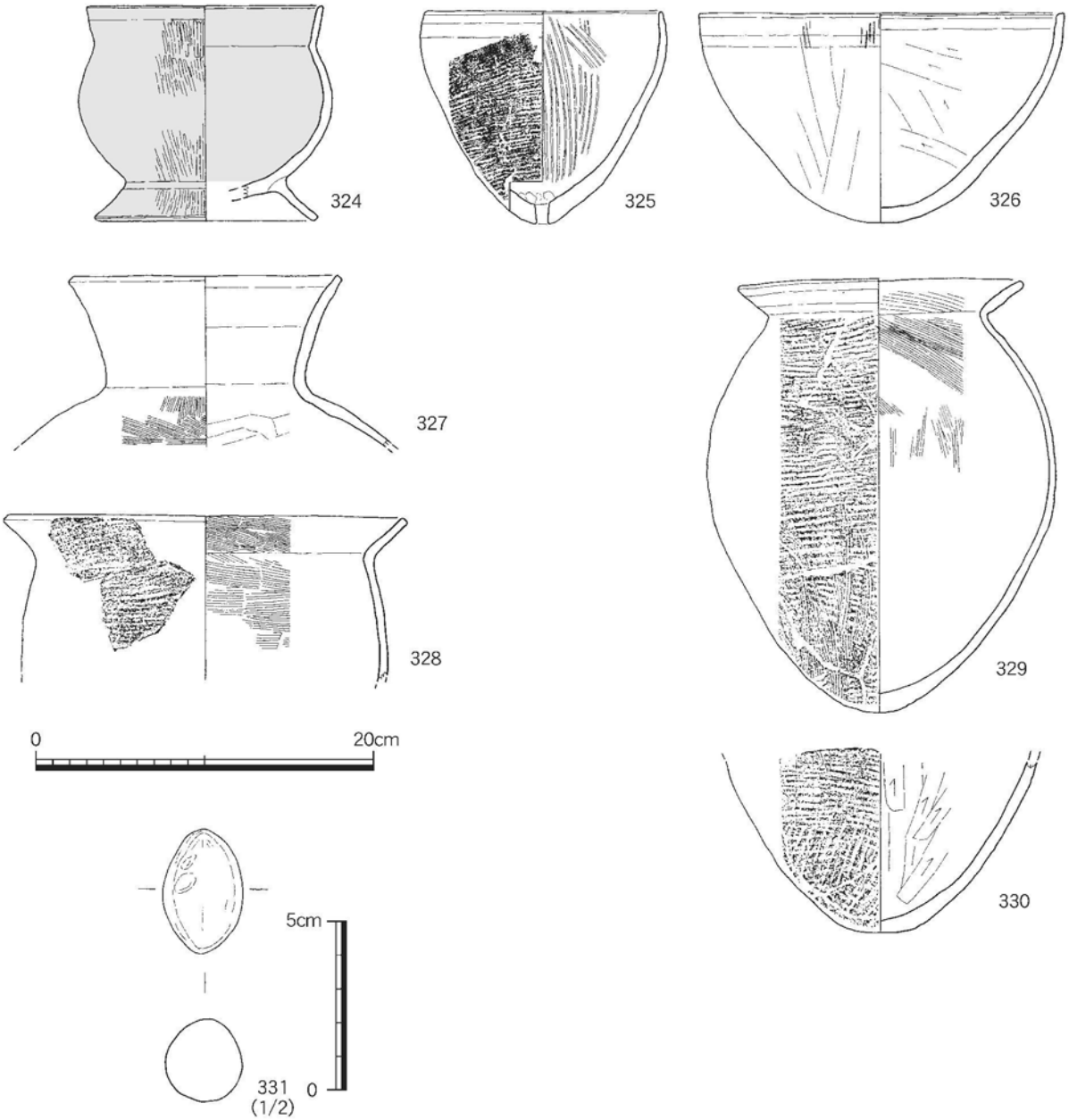



Fig.116　SC881出土遺物実測図（1/2、1/4）

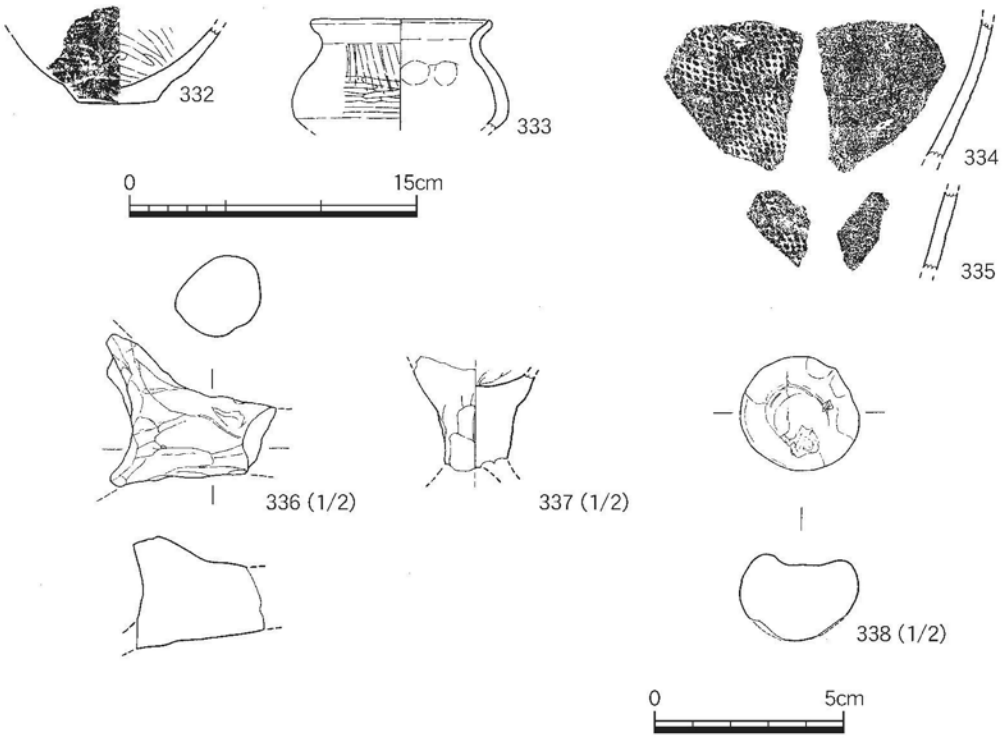



Fig.117　SX803出土遺物実測図（1/4、336～338は、1/2）

**SX803**（Fig.102）

第７次調査区の南際に位置する。不整形プランをした黒色土を検出し、竪穴住居跡の可能性を考慮し、掘りさげたが明確な遺構のプランは検出できなかった。

**出土遺物**（Fig.117、PL.102）

332の突出した底部は外面はタタキ、内面ナデ調整を施す。333の小形壺は外面に縦位から横位のミガキ、内面は横位のハケ後ナデ調整。334、335は小さい楕円の押形文が施され、内面は板もしくはヘラ状のものでナデている。336、337は杓子形土製品の柄の付け根部分である。338は手捏ねのミニュチュア土器で、球体の中央を軽く指で押さえたもの。

**柱穴出土土器**

その他検出された柱穴からの出土遺物を以下に記す。

339は手捏ね土器で外面の指頭痕が顕著である。340の鉢は丸底で、外面に細かいハケメが浅く残り、内面にも荒く回したハケメが浅く残る。341の鉢は完形品である。外面は器面があれて砂粒が浮き出ている。調整は不明瞭であるが、底部付近はナデ押さえている。内面はハケメを口縁部近くまで右回りにねじり上げている。342は外面体部下位はハケメ、上位はヨコナデ、内面は丁寧なナデを施す。器壁は薄い。343の外面は最大径部以下が炭化し、内底部も黒く炭化している。内外面ナデ調整を施し指押さえによる凹凸が顕著である。344の鉢は外面は斜位に荒くミガキを施し、内面は上方へ磨いた上から斜位に磨き上げ更に口縁部付近を横位に磨く。345の高坏は内外面に暗文の細かいミガキを施す。346の高坏は外面に暗文の縦位のミガキを施し、内面にもミガキが施されているが、その単位は不明瞭である。347の外面は斜位から縦位にヘラケズリ状に掻きあげ、ナデもしくは若干のミガキを施す。口縁部付近は横位に磨く。内面は横位に磨いた後に暗文状の縦位の細いミガキを加えている。348は椀形の口縁部を呈し、内外面に丁寧なヨコナデを施す。349は弥生中期の甕、350の直口の甕は外面に左上がりの斜位のハケメ、内面に横位のハケメを施す。351の甕は調整が不明瞭であるが、内

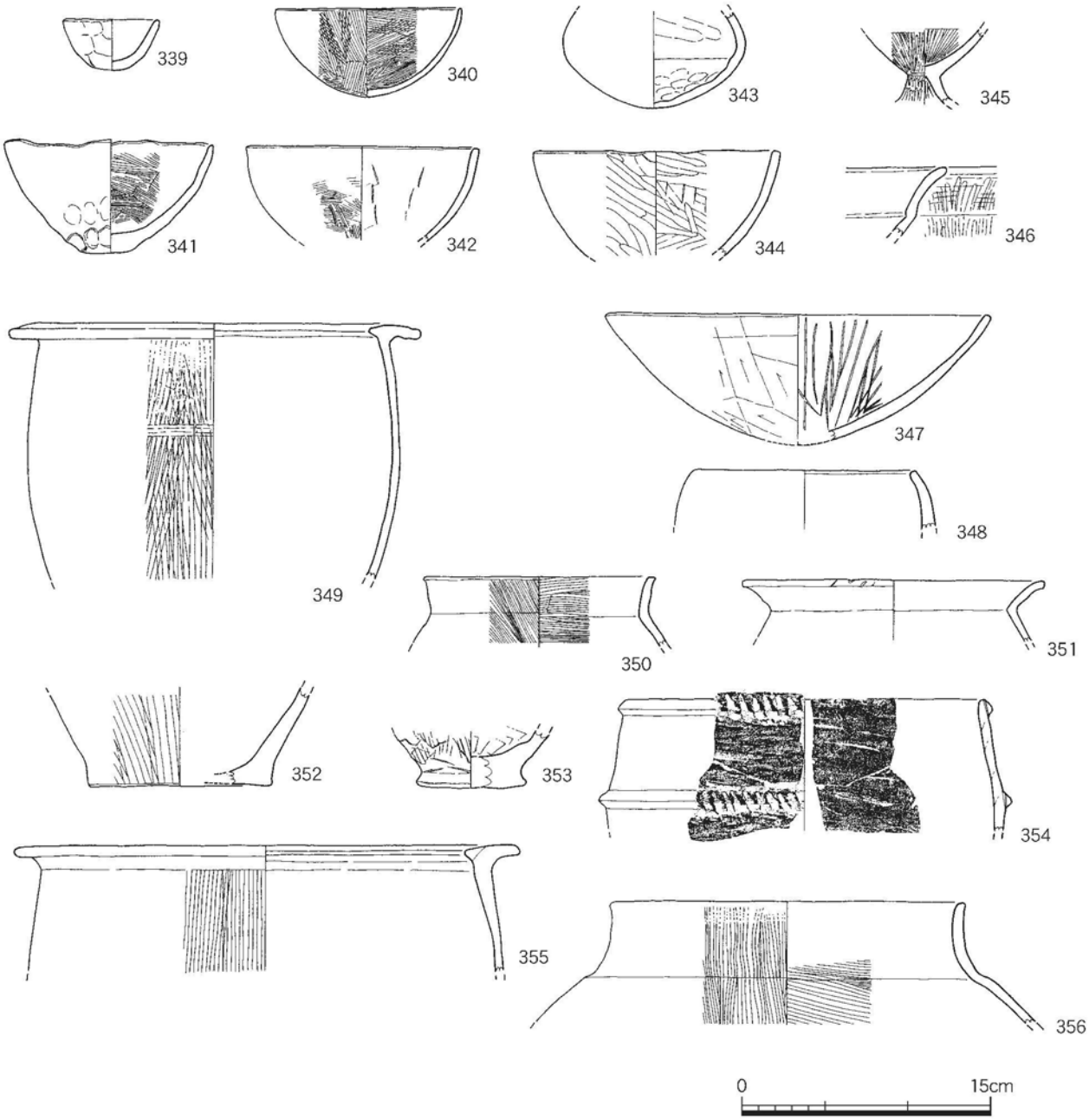



Fig.118　柱穴出土土器実測図（1/4）

面の遺存する体部はナデ調整。352は弥生中期甕底部、353は弥生前期の底部である。外面に条痕、内面はあらくナデ回している。354は突帯文系の甕である。外面は条痕、内面は横位のナデ調整。355は弥生中期甕、356の直口壺は外面頸部以下に縦位のハケ、口縁部に横位のハケを施した後にナデ調整。

以上、古いところでは6次調査において比較的多く出土した板付Ⅰ式の新期も含むが少量である。続く前期末から中期初頭にかけての遺物はほとんどみない。遺物が多くみられるのは弥生中期中葉以降で古墳初頭まで連綿と続く。遺物が最も多くみうけられるのは、弥生終末から古墳初頭にかけての時期である。

**SD829、830**（Fig.102）

SD830は微高地の南際近くで東西に走行している。途中分岐して南側にSD829が延長していく。また、分岐した地点近くから西側へSD831が延長していく。溝の規模は幅70cm、深さ約30cmと小規模で、このように分岐していく形状は暗渠的な排水機能の役割が大きいと思われる。しかし、掘立柱建物の項でも記した通り、SD830が走行するSB15以南の掘立柱建物の棟方向が少し変化したことは注意される。

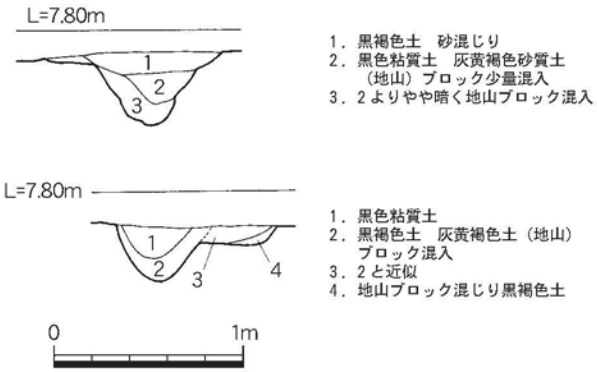



Fig.119　SD829、830土層断面図（1/40）

## ④　土壙

**SK869**（Fig.120、PL.59）

微高地のほぼ中央で検出された。径120cmの円形プランを呈し、深さ70cmを測る。底面に大型甕361の破片が集中し、これより25cm上部から357～360が出土した。357の小形壺は完形品、359の器台口縁部を一部欠く程度で完形に近い。底部の甕61の廃棄との間にどれほどの時間差があったのか不明であるが土層からも357～360は後に廃棄されたことが判る。

**出土遺物**（Fig.120、PL.102・103）

357は完形の小形壺である。外面は器面が剥落し調整は不明であるが、内面はヨコナデを施す。358高坏の脚部である。外面に縦ハケを施したのち裾をヨコナデしている。脚部と坏部の接合は坏部の突起をソケット状にはめこむ。359は完形に近い器台である。口縁端部が少し内側に張り出す。外面に細かいタテハケを施し、口縁部と脚裾部はヨコナデを加える。内面にも細かいタテハケが施されているが、ナデによってほとんど消されている。360の甕は2/3が遺存する。外面頸部以下はタテハケ、内面はナデ調整で凹凸がみられる。361は図示した部分までは完存し、以下を打ち欠いている。井筒のように使用した可能性がある。

以上の遺物の時期は弥生中期中葉から中期後半にかけての時期に含まれると考える。

**SK849**（Fig.121、PL.58-1）

微高地の調査区南際で検出された。上面は長軸長140cm、短軸長110cm長方形プランを呈し、2段掘り状となって内部に長軸長100cm、短軸長70cmの方形プランの落ち込みが検出された。この2段目部分まで壁が直に立ち上がる、基底までの深さは75cmを測る。

**出土遺物**

362は球形の胴部に径6㎜の穿孔が1箇所みられる。内面粗いナデ、外面もナデ調整を施す。363の壺底部は上部から出土した。外面には交互にクロスしたタテハケがみられ、内面のタテハケも明瞭に残す。また、底部の内外面にもハケメを施し残す。

**SK884**（Fig.123、PL.57-2）

微高地の南東縁辺で検出された。SC881内に位置している。長軸長140cm、短軸長100cmの隅丸方形に近いプランである。底部までの深さは40cmを測る。

**SX806**（Fig.124、PL.58-2）

SB17の中央に土器片が集中したSX806が検出された。SB07は竪穴住居跡の主柱穴の可能性があり、SX806も関連している可能性がある。

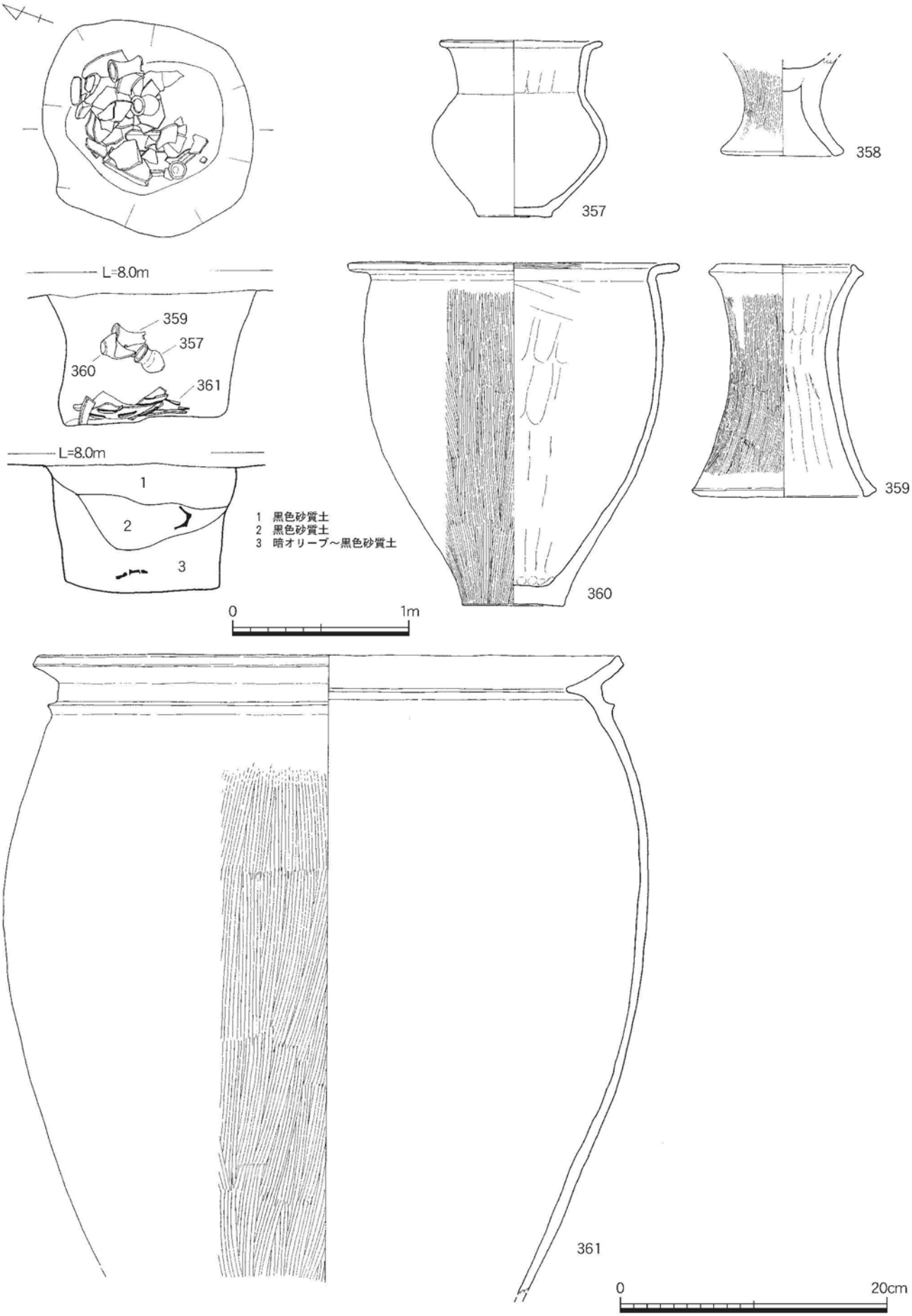



Fig.120　SK869実測図（1/30）、SK869出土遺物実測図（1/4）

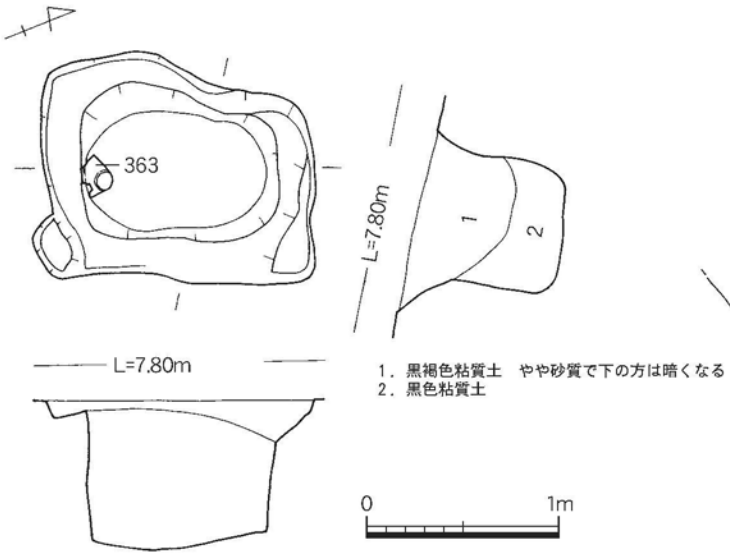



Fig.121　SK849実測図（1/40）

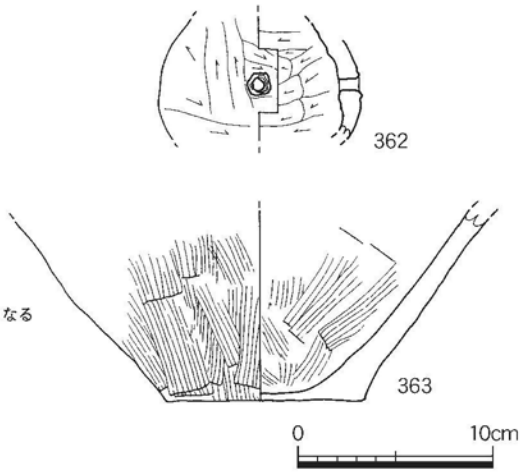



Fig.122　SK849出土遺物実測図（1/4）

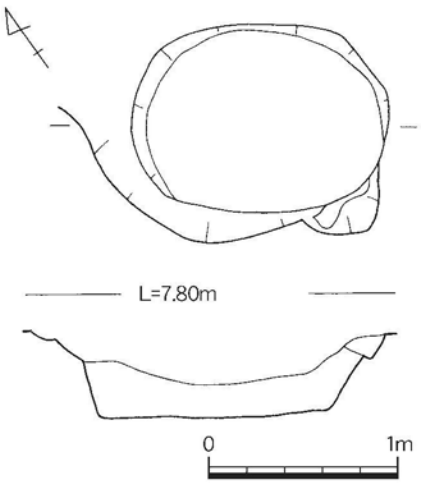



Fig.123　SK884実測図（1/40）

**出土遺物**（Fig.125・136、PL.103）

364は赤色顔料を塗布した磨研土器である。365は弥生中期壺底部。366は鋤先状の口縁端部に沈線を境に上下2段の刻みを有す。内外面ヨコナデ。367も鋤先状口縁の壺口縁部である。弥生中期後半とみられる。

**SX853**（Fig.126、PL.60）

微高地の西際に広がる砂層流域である。先述の通り第6次調査で検出された集落とこの7次調査の集落が立地する微高地との間には谷部が広がり、度重なる流水に洗われている（Fig.101）。この微高地の際を開析しながら北流していく流路は第Ⅱ面でもみられたが、SX853は遡った時期に洪水によって堆積した砂層である。このSX853を切って水路SD818はさらに微高地の西際を走行している。

このSX853の砂層中には完形に近い土器も多く含まれ、突如に大きく集落の西際が洗い流され砂層に包み込まれたものと思われる。368は完形の支脚である。外面はローリングを受けているがハケメは良く残る。嘴状に支える部位が貼り付けられている。369は高坏の脚部である。遺存する部位の1箇所に穿孔がみられる。370は小さな底部をもった小形壺の完形品である。外面には縦位のミガキが施され、内面はナデ調整。371は胴部の内外面に明瞭にハケメを残した壺である。外面は縦方向と斜め方向のハケメを交互に交錯させている。内面は横位のハケメを施す。372は丸みを帯びた底部を有した複合口縁の壺である。内外面にハケメを明瞭に残すが、下位はナデ消されている。

**SX889**（Fig.102）

微高地の西際で検出された不整形土壙群である。この部分は第Ⅰ面で検出されたSD720や第Ⅱ面で検出されたSD734によっても洗い出された位置である。

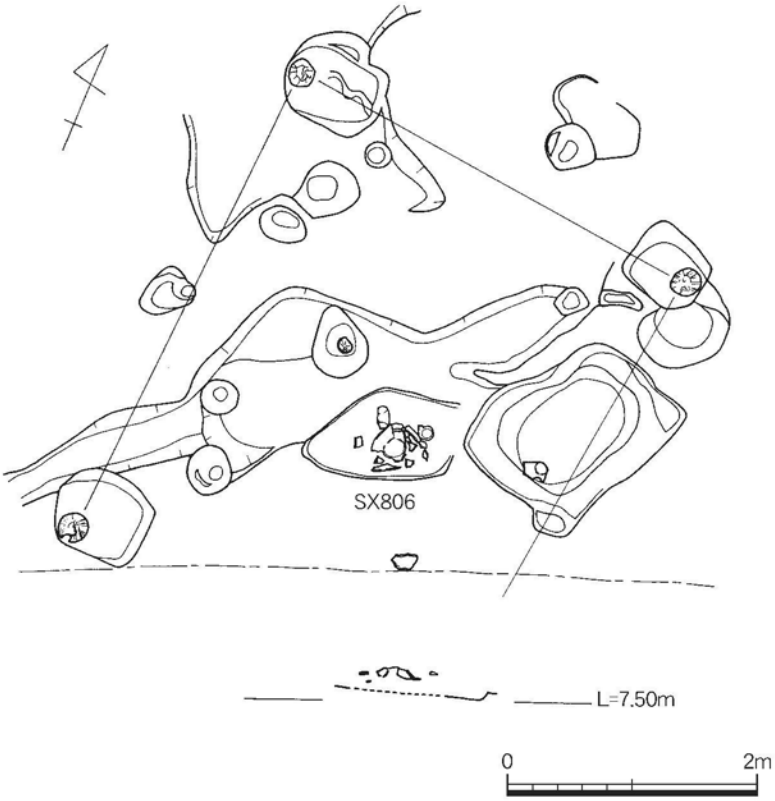



Fig.124　SX806実測図（1/60）

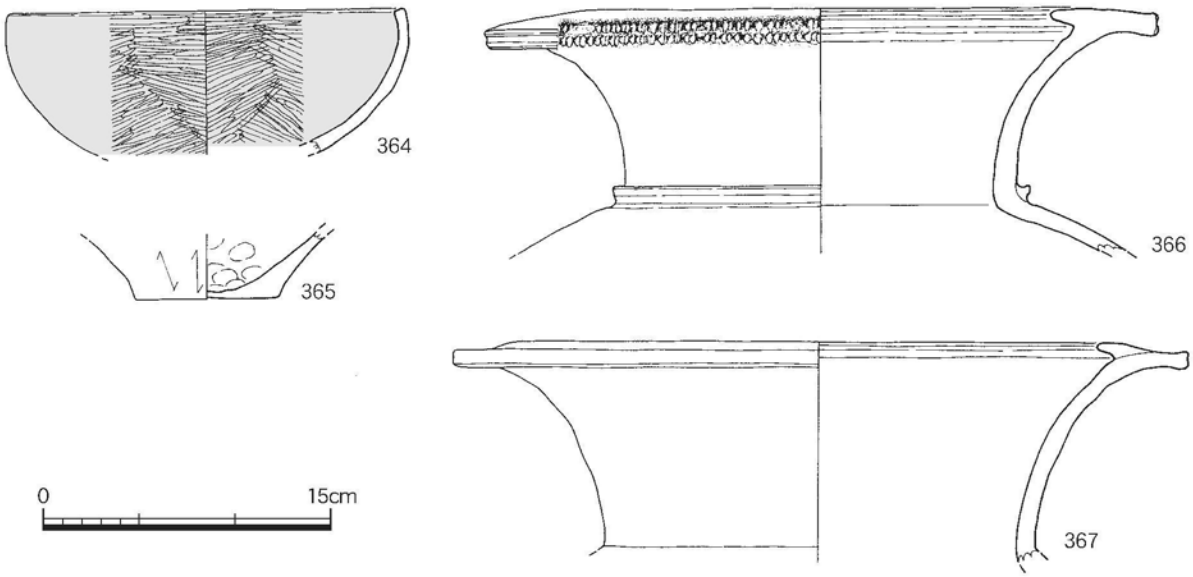



Fig.125　SX806出土遺物実測図（1/4）

Fig.126　SX853実測図（1/50）

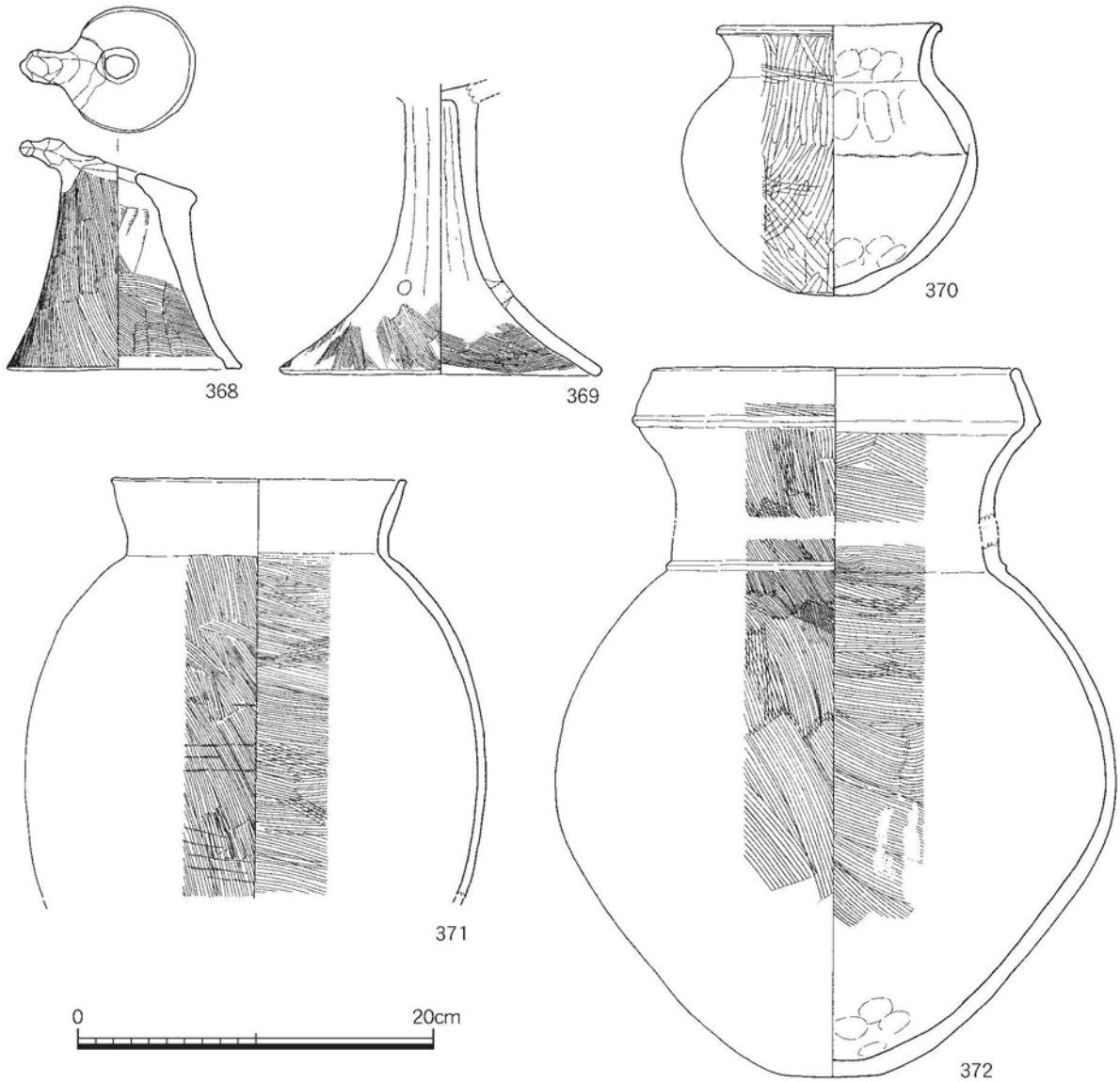
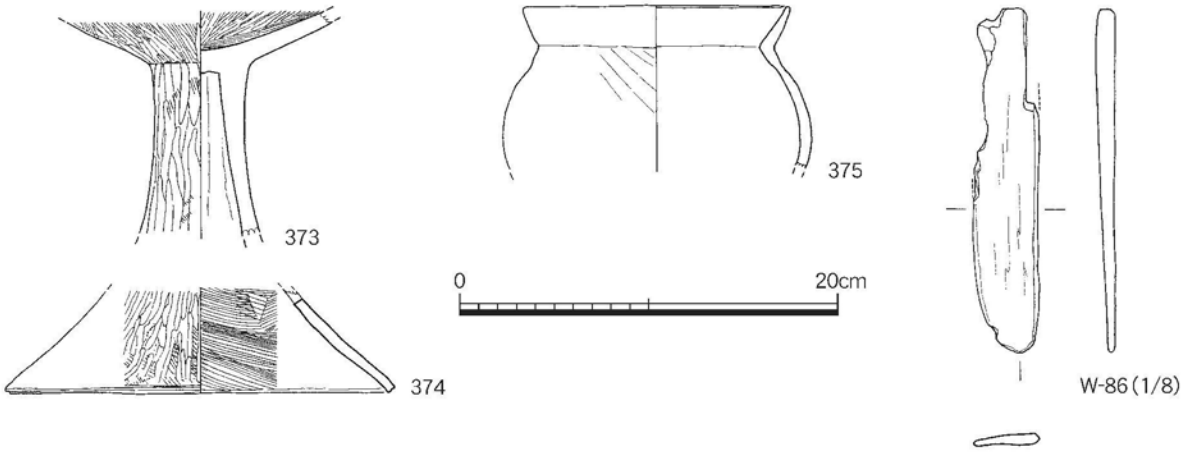



Fig.127　SX853出土遺物実測図（1/4）

**出土遺物**

373、374は高坏の脚部である。外面に縦位の細かいミガキが施されている。内面の裾部にはハケメが明瞭に残る。375の外面は左上がりの斜め方向になで上げている。内面は頸部にヘラケズリが認められるが、体部はナデ調整。W86は鍬の欠損品と思われる。材はコナラ属アカガシ亜属の柾目材。S21の石包丁は滑石に近い石材を用いる。




畦畔について

低地部では畦畔自体は検出されなかったが、畦畔と近似した形状の黄褐色を呈した酸化鉄層の帯がみられた。これは上層の畦畔がプリントされたものと思われる。

まず中央部のSD826に沿った方向で南北2箇所に畦畔状の区画がみられた。形状は方形に近い。

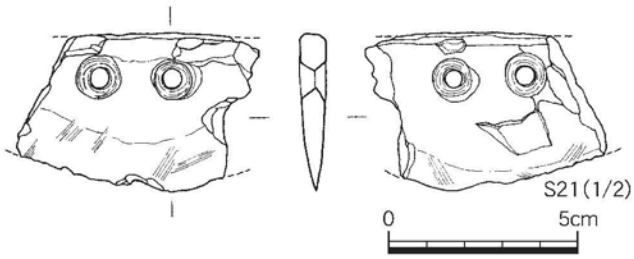



Fig.128　SX889出土遺物実測図（1/2、1/4、1/8）

幅も1m程度みられ第Ⅱ面で検出された畦畔に比べると広い。SD826がSD818を切っていることは明きらかであるのでプリントされた畦畔の時期は第Ⅲ面で検出された遺構のなかでは新期のものとしてとらえることができる。さらに、北西部のSD909の西側でも畦畔が検出された。この範囲では接点が鈍角に交わった多角形に近い区画がみられる。区画の方向がSD818やSD882、883に沿っているので、これらの溝と近い時期が考えられる。しかし、SD882、883の南側は第Ⅱ面のSD746とほぼ変わらない流路をとり、長い期間にわたって水路として踏襲し続けられていたとみられ、第4次、5次調査の古墳時代や弥生時代の遺構面（Fig.167、168）に見られるように洪水流路ともなるが、水路として度重なる修復が重ねられていることが窺える。従ってプリントされた畦畔の時期を特定することは難しいが、遺構面の時期から弥生時代から古墳後期以前までの時期ではおさえることができる。

また、地形からこの水路を境に東西で水田面の高さが異なっていたことが考えられ、そのことによって洪水による水田面の流失の程度や復旧された田面の高さも従前と違ったことが推測される。そのために検出された畦畔の時期も異なっている可能性がある。4次～6次調査を含めた第Ⅱ面の畦畔の形状や時期が異なっていること（p-86～88）や第Ⅲ面の上述した畦畔のプリントの区画方向が異なっていることもこれに起因しているものと思われる。遺構面のレベルとしては第Ⅲ面ではSD882、883の東西ではほぼ変わらず、第Ⅱ面ではSD746の東西で約10㎝の比高差で検出した。この水路の西側では低地のために洪水砂を多く被り、流失が東側に比べ大きいものと推測されることから、同一遺構面の時期幅のなかでは古期の畦畔が比較的良く残るものと思われ、逆に東側では高所のために復旧された新期のものが残りやすいものと思われる。

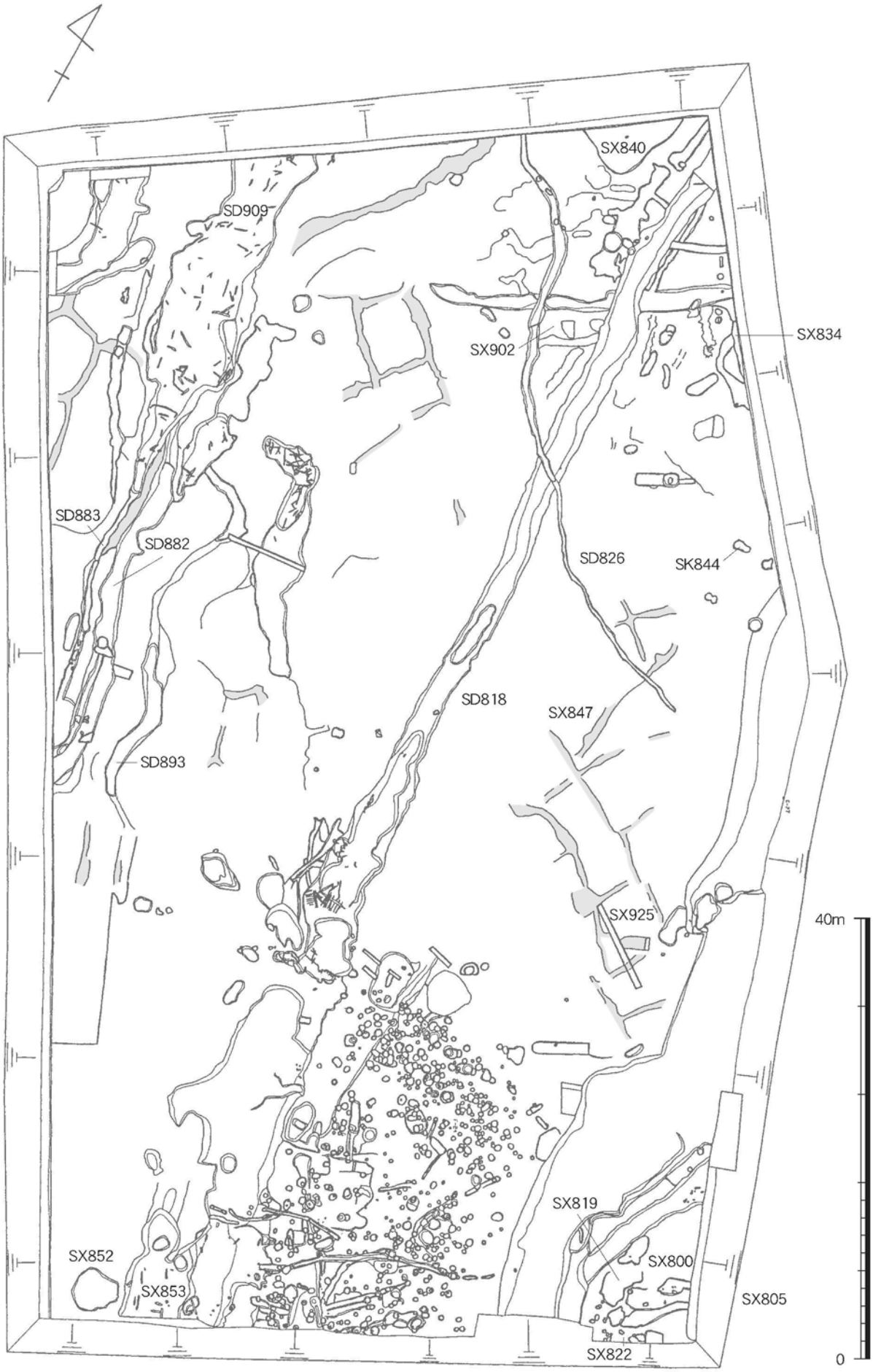



Fig.129　第Ⅲ面水田関連施設実測図（1/500）

**第Ⅲ面北東部**（Fig.63）

SD818の北側延長の周辺は洪水によって洗い流されている。特に調査区北東隅では撹拌され凹凸が著しい。こうした不整形土壙や流路としてSX840、SX902、SX834が確認された。

さらに南側のSD826の東側でも撹拌された不整形土壙のSX847、SK844が検出された。

**出土遺物**（Fig.131）

376はSX840から出土した。口縁端部と突帯に櫛歯によって刻みを入れている。口縁端部の刻みはジグザグ状に、突帯には斜位に連続的に施す。口縁部内面に斜位のハケメを施した後にナデを加えている。口縁端部付近はヨコナデ。外面のハケメはほとんど消えている。灰白色を呈し、胎土は砂粒をほとんど含まず精良である。377はSX902から出土した弥生中期甕底部である。378はSX834から出土した。外面の体部中位に弱い屈曲がみられ、この屈曲を境に上位では横方向に、下位では斜め方向にミガキを施す。内面には口縁部付近を横方向にミガキ、その後に暗文状のミガキを放射状に施している。胎土には赤色粒を多く含む。379はSK844から出土した弥生中期の高坏である。380はSX847から出土した甕胴部である。外面は斜位のハケメが施され、頸部より上位はヨコナデ調整によってハケメが消されている。内面はナデ調整。381、382は先述のSD826の左岸で検出された畦畔のプリントが検出された付近（SX925）で出土した。381は口縁端部を内側にひねる。弥生後期か。382の底部は丸みを帯びた弥生後期の壺底部である。

**第Ⅲ面南東部**（Fig.130）

微高地の東側は第Ⅱ面で検出されたSD735によって切られているが、遺構の分布状況からも東へはあまり広がっていなかったものと思われる（Fig.101）。また、土質も灰色シルトから粘土のややグライ化した土壌であった。しかし、これは上部が洗い流されている可能性があり、土器の一括廃棄土壙のSX805にみられるように集落の生活範囲に一部及んでいたとも考えられる。

**SX805**（PL.62-2）

南東部のSD804東側で検出された。掘方は不明瞭であるが1.4×1.7mの楕円形状の範囲に土器片が集中していた。

**出土遺物**（Fig.132）

383の手捏ね土器は外面を指押さえて短い口縁部を外反させる。内面は滑らかにナデ仕上げる。384は鉢形を呈す。外面下位はタテハケ、口縁部付近はヨコナデ。内面はあれて調整不明。385は赤色顔料を塗布した無頸壺である。胎土および内面は黒色を呈す。386の甕は内外面にハケメが施され浅く残る。387は弥生中期の壺であるが、器面が剥落し調整不明。胎土には砂粒が比較的多い。389も弥生中期壺の頸部である。内外面あれて調整不明。390は弥生中期の壺底部である。外面底部付近に板状のナデ、内面に指頭痕が目立つナデが施されている。

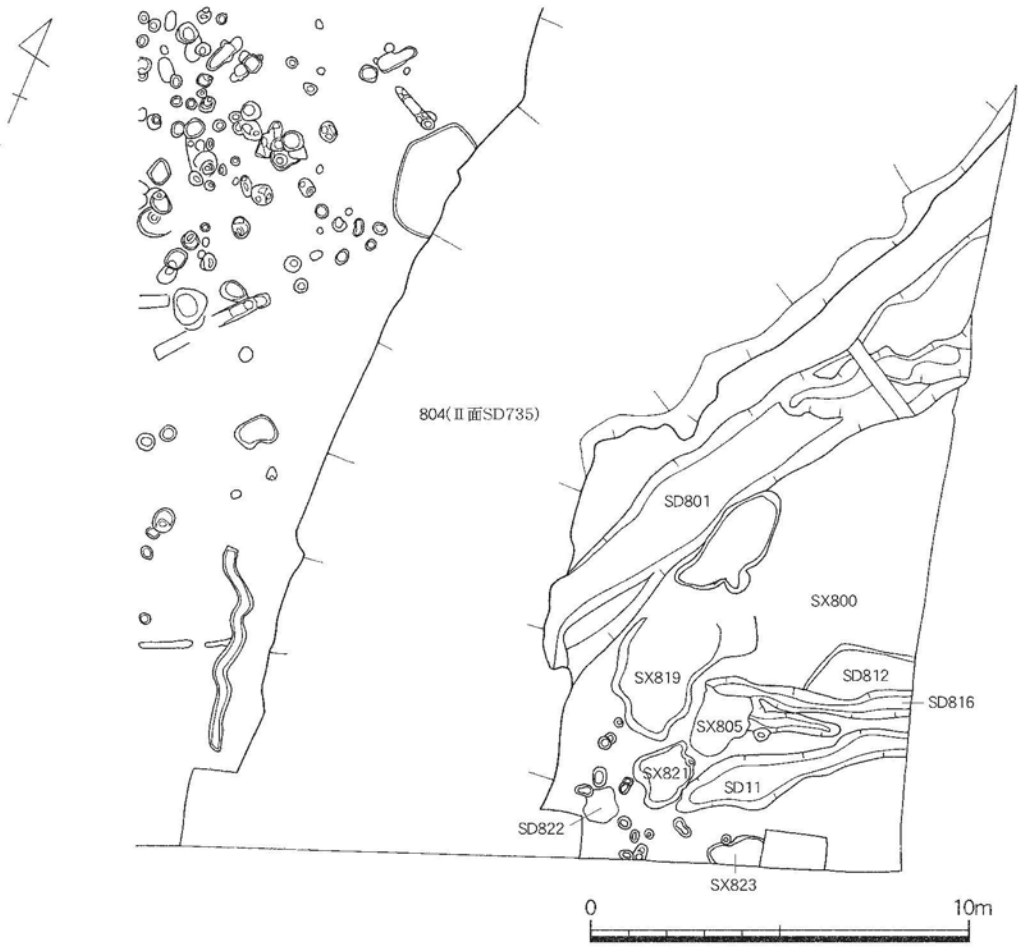



Fig.130　第Ⅲ面南東部実測図（1/200）

**調査区南東部出土遺物**（Fig.133・134、PL.104～106）

調査区南東部（Fig.130）の遺構から出土した遺物である。391～393は第Ⅱ面で検出された旧河川SD735から出土した弥生土器である。391は坏部内面の器面が剥落し、ハケメがみえる。394、395はSX822とした流路域の撹拌された土壙から出土した。394は部位は不明であるが格子状の線刻がある。395は赤色顔料を塗布した壺の口縁下に鈎状の浮文を付ける。那珂遺跡でもみられる祭祀に伴う土器である。口縁端部にはヘラによって斜めに連続した刻みをいれる。

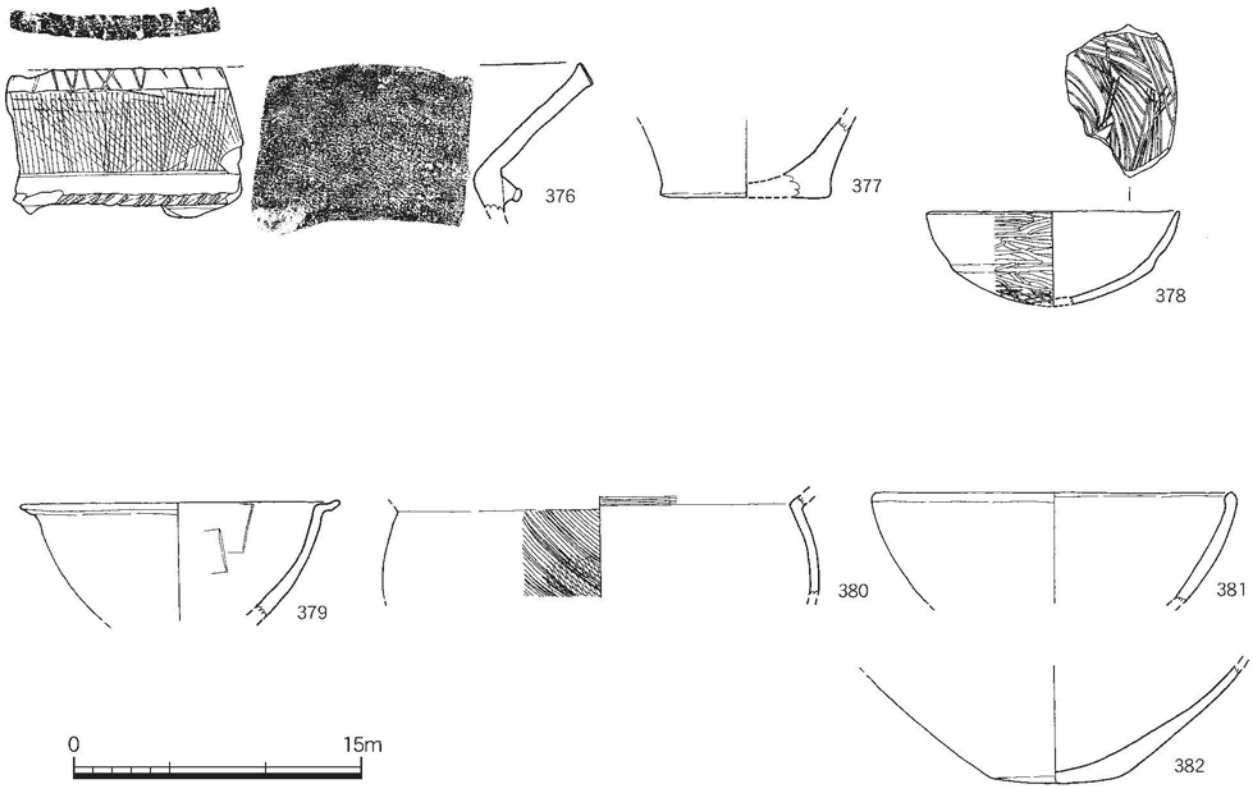



Fig.131　第Ⅲ面南東部遺構出土遺物実測図（1/4）

396～409は南東部一帯で出土した土器で包含層として扱った。時期的には402の須恵器が最も新しく、405が弥生終末に降るほかは、弥生中期から後期前半の範囲に収まるものと思われる。

396は手捏ねのミニュチュア土器である。397の内面は指頭痕が目立ち手捏ねに近い。398はヨコハケ後に縦位に暗文状のミガキが施されている。399は内面にハケメを残すが外面とともにナデが加えられている。400、401の蓋は外面にミガキ、内面に板状のものを横に回し成形している。402は須恵器壺蓋である。つまみの中央は凹ませている。404は口縁端部が面をなし、外面は丁寧なナデが施されている。胴部内面もナデ調整。406は赤色顔料が塗布された磨研土器である。口縁端部にヘラによる刻みが施されている。口縁部上面から径6㎜の孔が穿たれている。407の甕形土器の外面は黒く炭化している。408は赤色顔料を塗布した磨研土器である。409～413も流路域の撹拌された不整形土壙SX819から出土した。弥生中期の範囲におさまる。

414、415は南東部の包含層であるSX800から出土した土製玉（弾）である。416はSX805から出土した土製紡錘車、417はSX800から出土した杓子形土製品である。S22はSX804から出土した磨製石斧の再利用品である。大きく剥離した石斧の側縁に細かい剥離を連続的に行う。刃部には敲打痕が残る。玄武岩製。S23はSX800から、S24はSX805から出土した石包丁の未製品である。周縁に細かい剥離を施す。ともに石材は緑泥片岩。S25はSX800から出土した砥石である。砂岩製。S26はSX804（包含層）出土、S27はSX805出土の黒曜石製石鏃である。S28は東側のSX925周辺の遺構面から出土した黒曜石製石鏃である。

S29は調査区南西部の包含層としたSX855出土の安山岩製の打製石斧である。両側縁に抉りを作り出す。418は包含層から出土した土製投弾である。

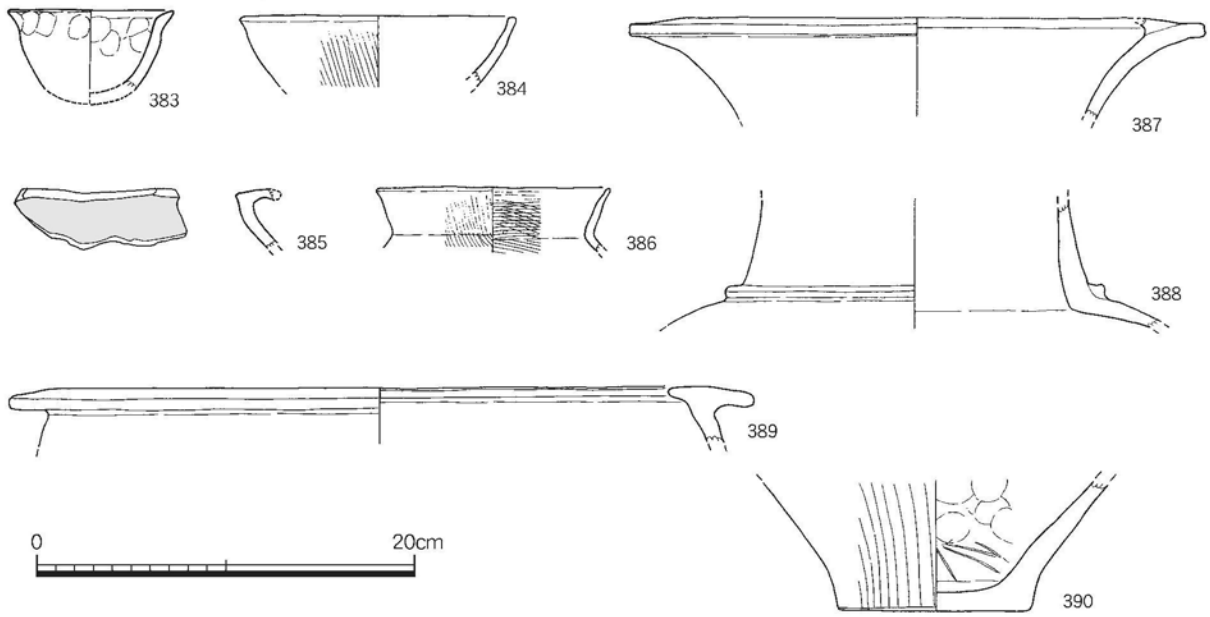



Fig.132　SX805出土土器実測図（1/4）

**調査区南西部**（Fig.136）

微高地の西側は第Ⅰ面ではSD720の流路となり、第Ⅱ面ではSD734、SD762の流路となり常に洪水域に位置していた。特に微高地の際は大きく水流が当たり開析されたことが想像される。このように攻撃面となり砂層が巻き返しながら堆積していったのがSX853と考えられる。ここでは砂層中から完形品を含む多くの遺物が出土した。この砂層中には湿潤な凹地として、上層に黒色粘土が堆積していた部分もあった。流路の撹拌した凹みはSX852やSD856にみることができる。その後、水路SD818が掘削され水田が完備されていくが、この水路に含まれる布留式期まで降る遺物は今回の7次調査で行った微高地の集落範囲では少ない。時期的には遡る弥生終末が多く見受けられる。集落の細かな時期的な変遷については来年度の整理において再度考えてみたい。

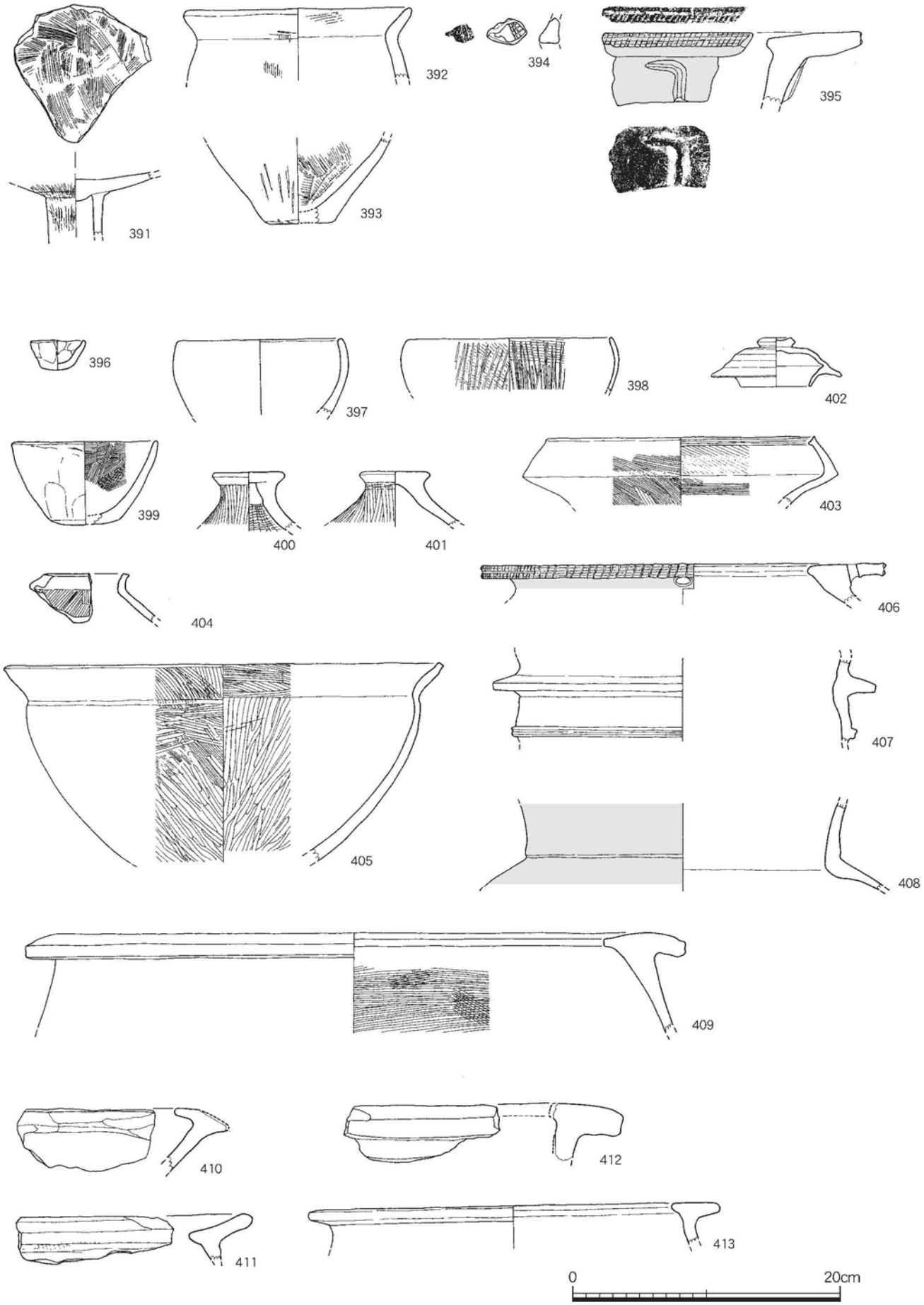



Fig.133　SX804、822 包含層出土土器実測図（1/4）

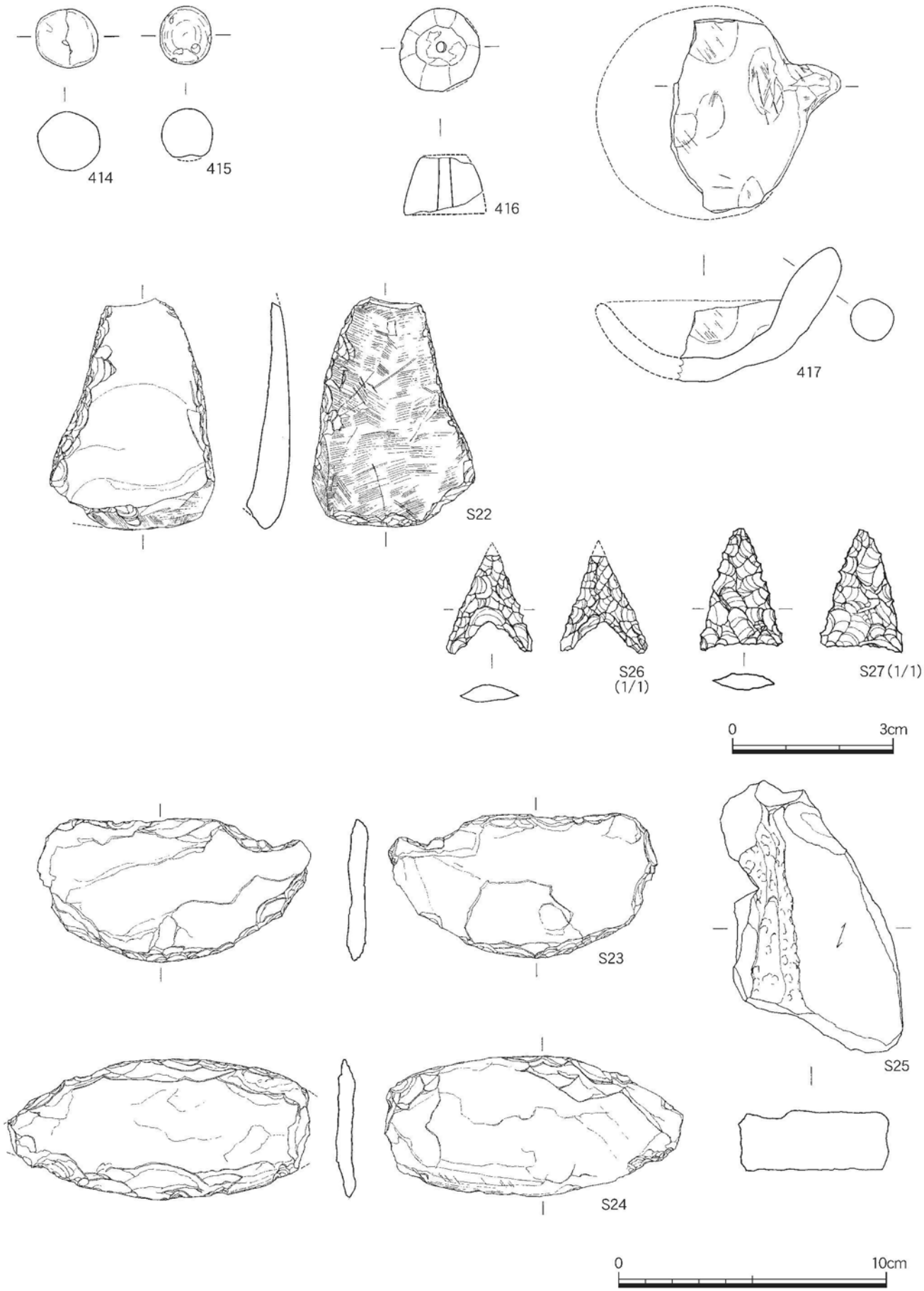



Fig.134　SX800、804、805出土土製品、石器実測図（1/1、1/2）

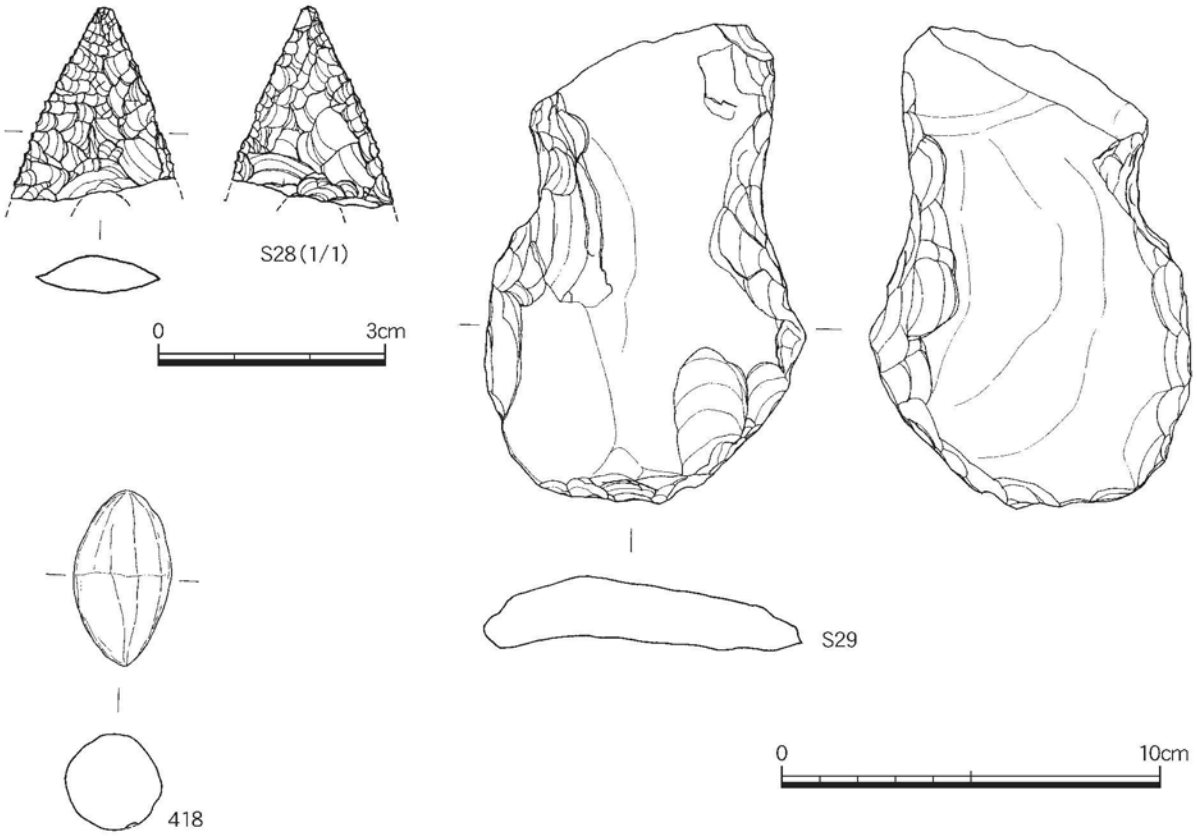



Fig.135　包含層、遺構面出土遺物実測図（1/1、1/2）

SX853 遺物出土状況

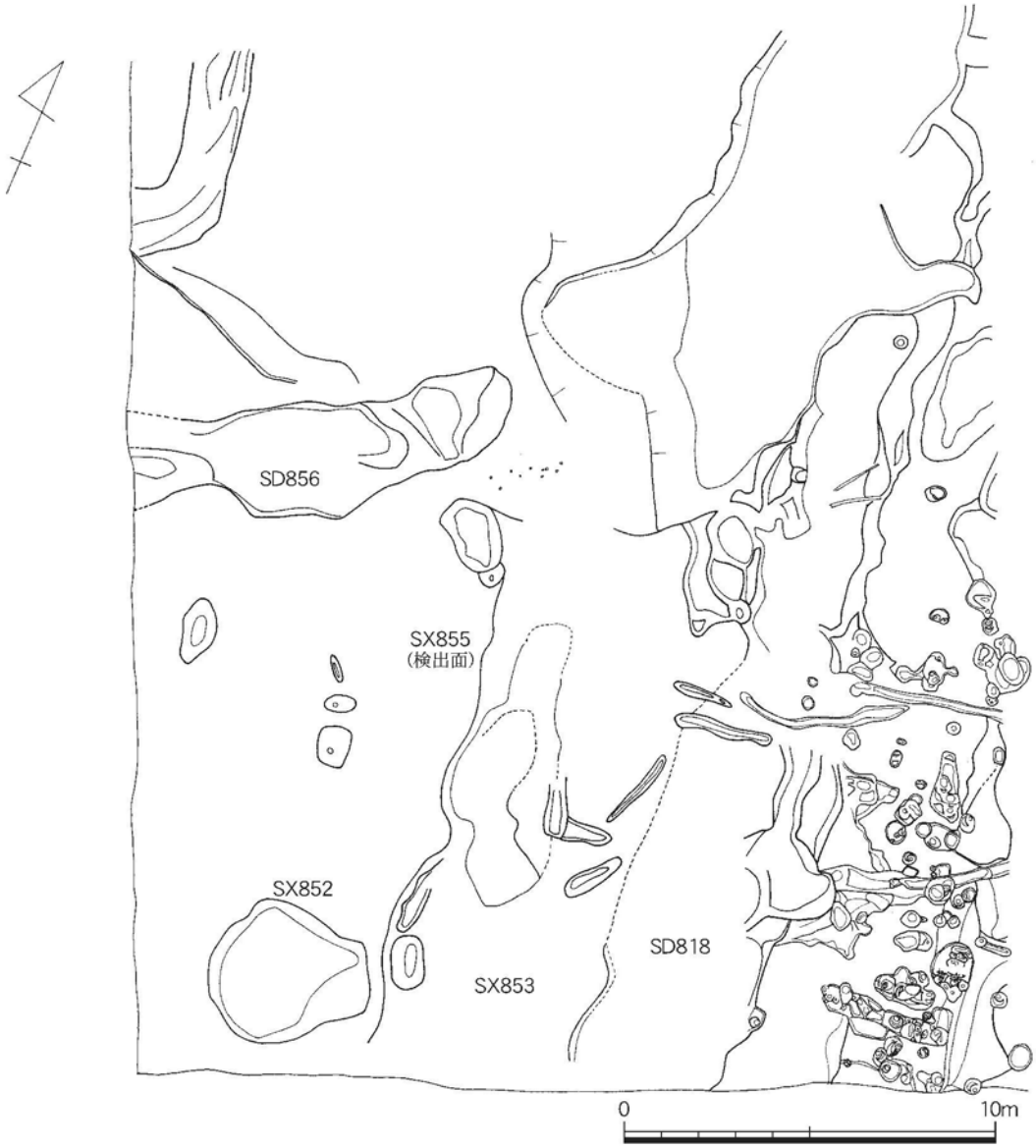
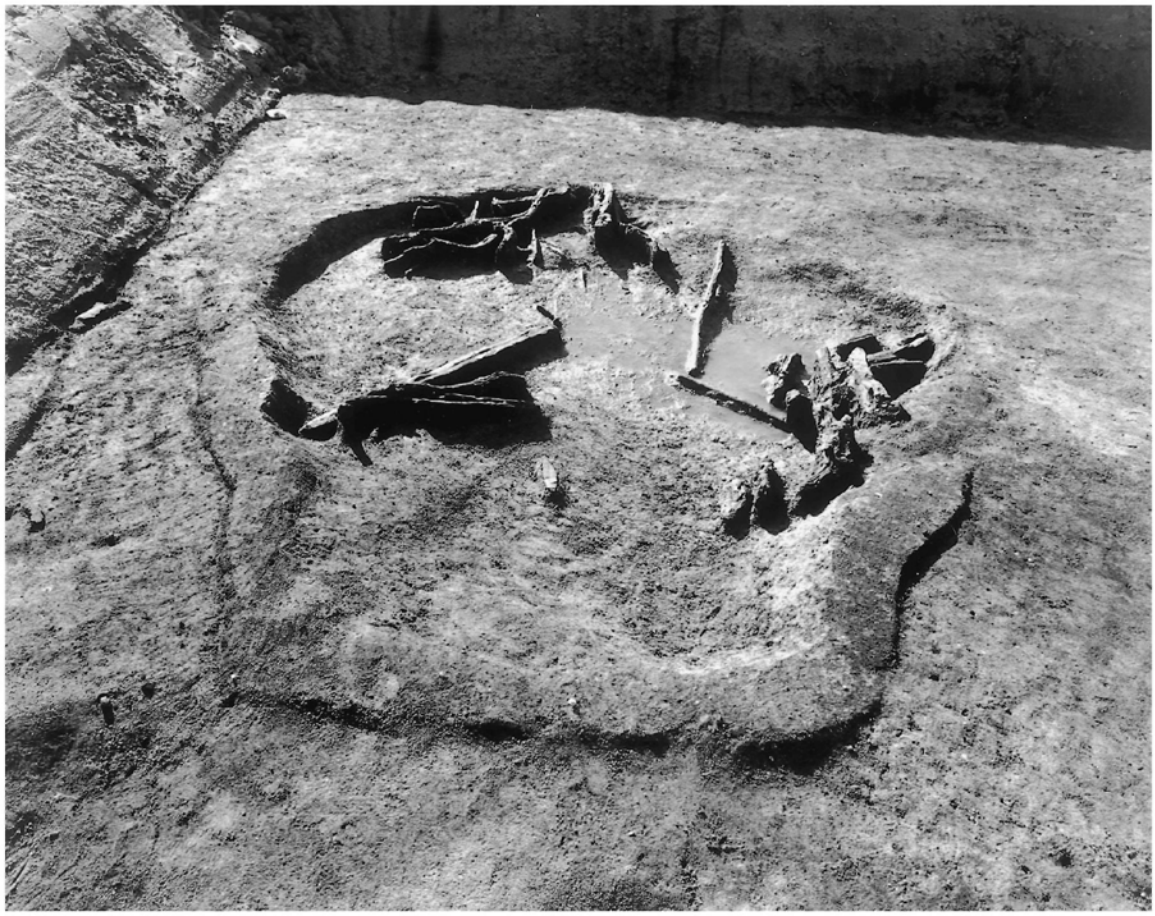



Fig.136　調査区南西部実測図（1/200）



SK852 検出状況

**SK852**（Fig.137、PL.61-1）

調査区南西部で検出した。径3～3.4mの楕円形に近いプランを呈す。埋土は黒色粘土が堆積していた。土壙内には流木が多く含まれていたが、そのなかにはW87の木器も含まれていた。

**出土遺物**（Fig.137・138）

W87は二又鍬を再加工したものである。刃部に抉りを入れ再利用を図ったと思われる。遺存長18.6㎝を測る。材はコナラ属アカガシ亜属の柾目材を用いる。419～421はSX852出土である。419は歪な手捏ね土器である。420は丸底の底部である。外面ナデ、内面はナデもしくは板ナデを施す。421は直口の鉢形土器はある。口縁端部が波状になっている。内外面にナデ調整が施されるがハケメが浅く残る。423は調査区南西部の検出面からの出土である。外面には厚くススが付着し、内面には粗いハケメが浅く残る。

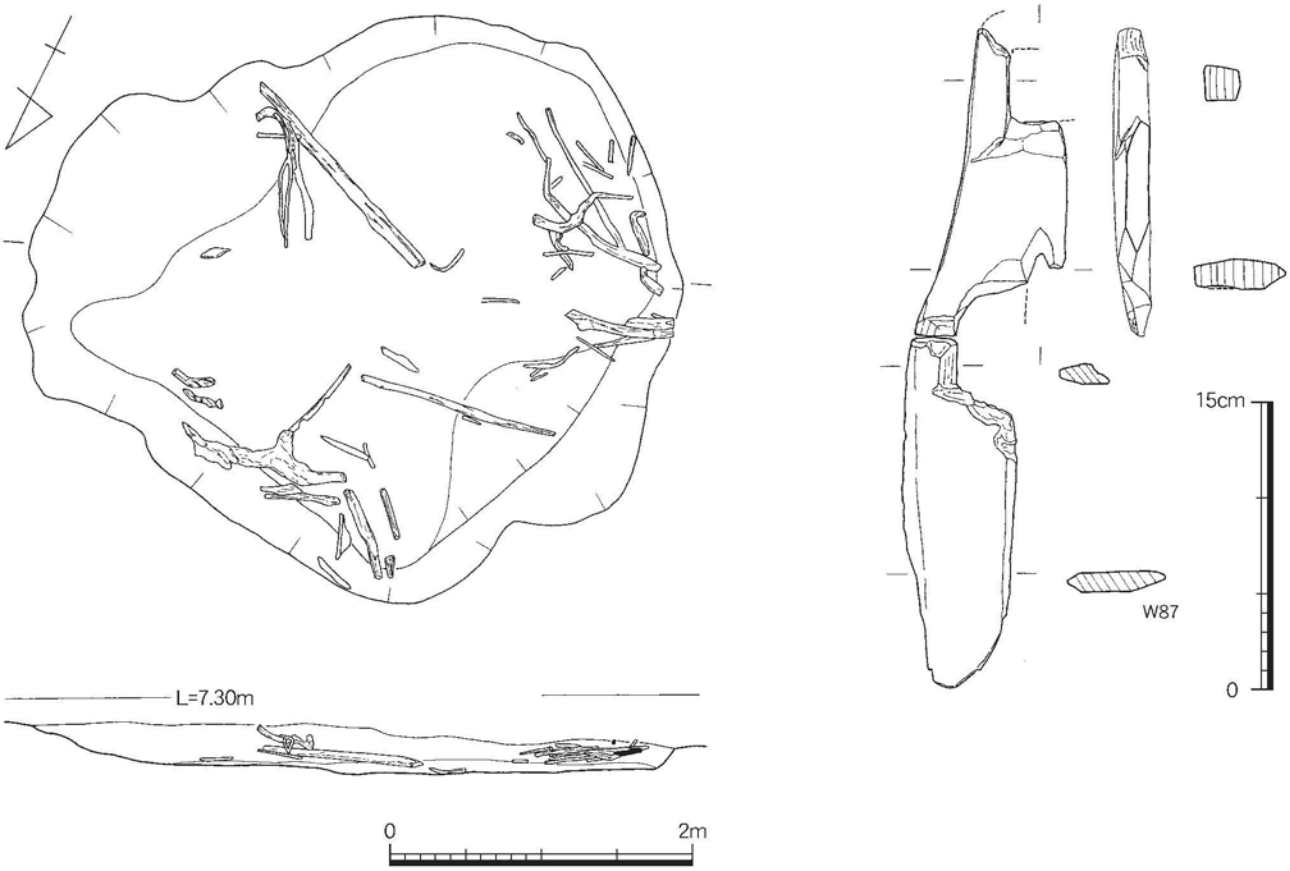



Fig.137　SK852実測図（1/50）

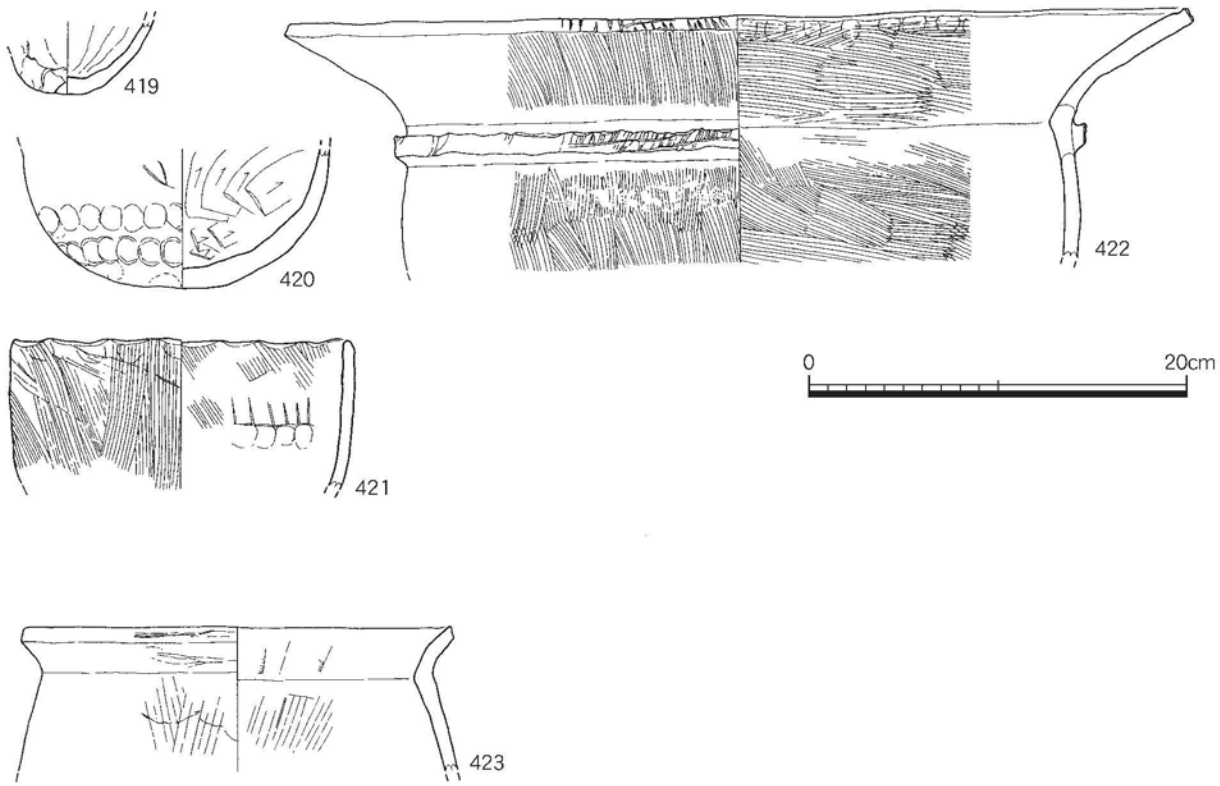



Fig.138　SK852、SX855包含層出土遺物実測図（1/4）

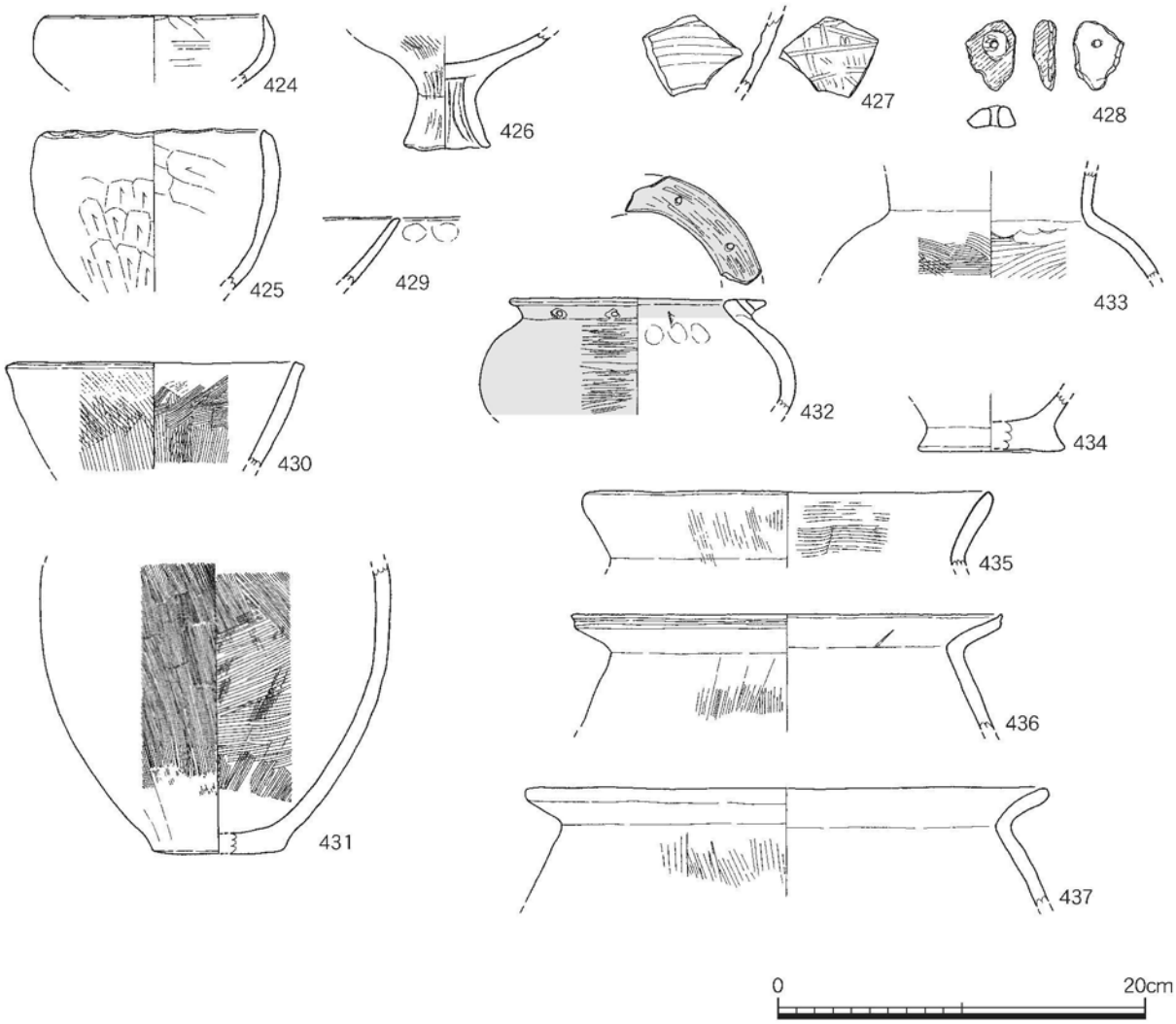



Fig.139　包含層、遺構面出土遺物実測図（1/4）

**包含層、遺構面出土遺物**（Fig.139）

ここでは微高地周辺の調査区南東部と南西部を除くその他の遺構検出面からの出土遺物をとりあげる。

424は器面が剥落しているが、おそらく赤色顔料を塗布した磨研土器である。425は外面体部下位がヘラケズリ、内面はナデと板ナデ調整を施す。胎土は砂粒を多く含み粗い。426の脚部は短く収める。坏部外面には粗いハケメ、脚部はミガキ、坏部内面はミガキを施す。胎土は砂粒をほとんど含まず精良。427は外面を黒色に燻した瓦質土器である。外面にジグザクな筋状にミガキを入れた後に縦位に部分的にミガキを加える。内面はヨコナデ。楽浪系土器か。428は器面が剥落しているが、赤色顔料を塗布した磨研土器と思われる。径5㎜の穿孔がみられる。429は甕口縁部か。砂粒を多く含む。430は内外面にハケメを明瞭に残す。口縁部はヨコナデ。431の底部は少し突出させている。外面タテハケ、底部近くはナデ。内面は底部近くと体部上位はタテハケ、中位はヨコハケを残す。432は赤色顔料を塗布した磨研土器。433は外面の頸部下にヨコハケ、内面も頸部下に斜位の粗いハケメを残す。434は弥生中期の甕底部。435は内面の頸部近くにヨコハケを残す。436は口縁端部にシャープな平坦面をつくる。胴部内面ナデ調整。外面にススが付着。437の外面のハケメは浅く残る。体部内面ナデ調整。

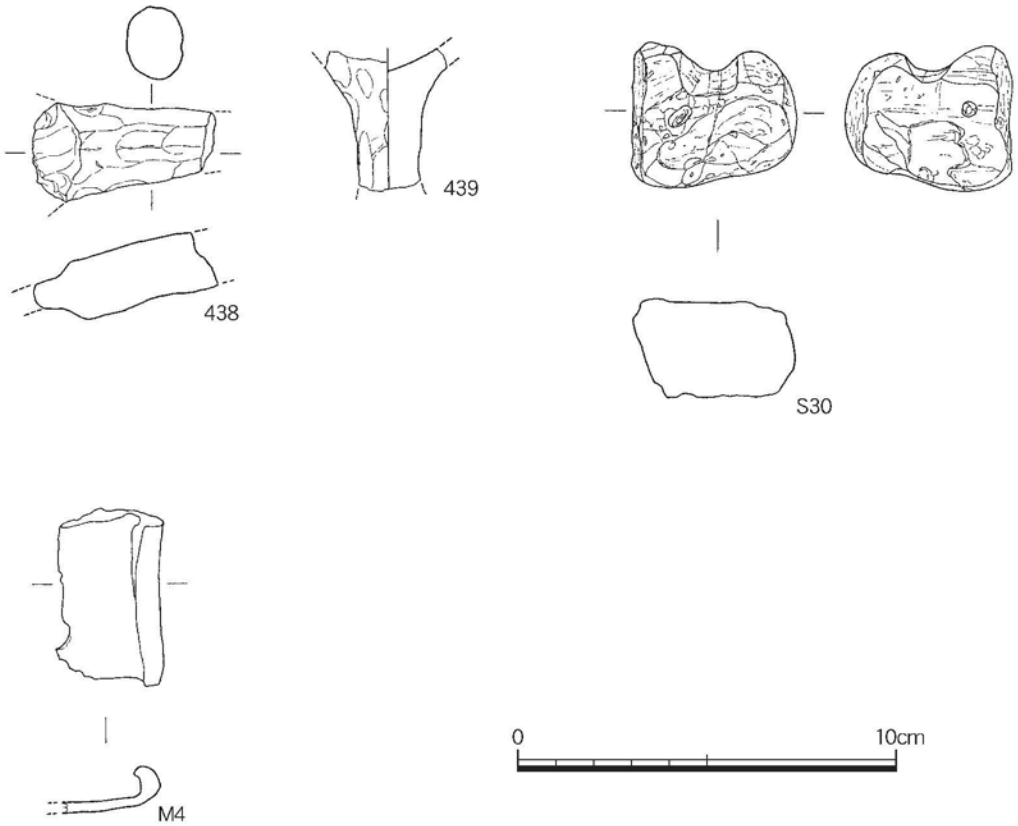



Fig.140　低地部出土土製品、石器、鉄器（1/2）

**低地部出土土製品、石器、鉄器**（Fig.140、PL.106）

438、439は杓子形土製品の柄部と思われる。S30は縄掛けの抉りを有した浮子と思われる。M4は調査区北東部の流路域に分布した凹みから出土した青銅製鋤先である。

第Ⅲ面の集落遺構と水田開発

ここでは第Ⅲ面のなかでの変遷について若干ふれておく。

出土遺物のなかで縄文早期の押型文や中期の阿高系土器が出土したが、この時期の遺構を見出すことはできない。微高地に生活遺構を見出すようになるのは現在までのところ板付Ⅰ式期の新段階になってからである。しかし、その活動は第6次調査では遺物や遺構を比較的多く見ることができるのに対し、7次調査では少なく、違いをみせている。その後、6次調査同様に弥生中期中葉遺構から遺物や遺構を多く目にするようになる。特に弥生終末前後の遺物は多く、検出された遺構のなかで1×2間の掘立柱建物跡は大半がこの時期に属しているものと考えられる。

集落が廃止された時期は未整理な部分もあり確定的なことは次年度の整理に委ねたいが、集落際を走行しているSD818に布留期の遺物をみることができるので、この時期までは降る可能性が高いと考えられる。

低地の水田施設遺構のなかで、その時期が押さえられるのは水路と考えられるSD818とSD826である。その切り合いからSD826が新しいことは明らかであり、5世紀代まで降る。ここで注意されるのは既述（P-164）のとおり、プリントされたと考えられる畦畔がこの水路に平行していることである。しかし、この方向の水路や畦畔はその後に踏襲されない。

調査区の北西隅でもプリントされた畦畔が検出された。この区域のものはSD892、883や形状から洪水の流路とも考えられる地形に則して流下するSD909に平行している。この方向の水路や畦畔の方向、区画は第Ⅱ面にも継がれていくことになる。時期的には第2面調査区西側の畦畔や水路の大凡の区画や方向が6世紀後半代までさかのぼることは確かであると考えられるのでこの5世紀～6世紀後半までの間で改変があったことも推察される。なお、周辺で5世紀代の水田施設は見出すのは難しいが、市内、三筑遺跡でこの時期の水田施設が検出された。第2面で検出された置簀もこの時期にすでに用いられていた技法で、近世にまで引き継がれるような完成された農法を持ち得ていたと思われる。

# 5．第2区の調査

## 1）調査の概要

第2区は第6次調査区北側の調査区。第6次調査第Ⅱ面で検出した旧河川内護岸遺構SX395の続きの調査である。遺構面は地表下1.6mで、旧河川を検出した。旧河川は西側と東側で立ち上がり岸となるが、調査区内は大半が川の中である。西岸の西側は試掘調査では水田面を確認しており、調査は出来なかったが、古代以降の水田面が広がると思われる。検出した遺構は護岸遺構SX395の続きと内部に構築された護岸杭列や堰である。遺構の時期としては古代後期である。

## 2）遺構と遺物

### ①　溝状遺構（SD）

**SD362**（Fig.141、PL.63・66・70）

第6次調査区から続く旧河川である。調査区北側の西と東端で微高地状の高まりが確認出来た。河幅は北側で少なくとも25mはあるものと思われるが、流路が度々変わったのか、調査区南半部の川底には流れによって深く抉られた溝や土坑状の落ち込みなどが残る。川の埋砂は鉄分を含んだ黄白色粗砂礫であるが、その中からは西岸に沿った杭列SX933とそれから分岐して続くと思われる堰SX935を検出した。この部分では川底は更に深くなる。川底は黒褐色の包含層であり、弥生時代後期を中心とした土器が多く含まれていた。時間の都合上で調査は出来なかったが、包含層下の基盤面にも遺構がある可能性がある。

**出土遺物**（Fig.143～146・159、PL.107～109・114）　弥生時代中期から後期の土器、古墳時代土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器、木製品などが多量に出土している。下層から溝底は弥生土器が多い。

1～3は上層出土。1は内面燻しの黒色土器椀Aである。外面ナデ、内面は丁寧なミガキで調整。内面口縁直下に沈線状の圏線が1条巡る。2～53は土師器。2・3は皿で9世紀前半のもの。口径はいずれも14.6cmを測る。外底部は回転ヘラ切り後ナデ、その他は回転ナデ調整である。

4～89は下層を中心とする出土。調査グリッドに沿って報告する。4は須恵器の坏。完存で口径13.1cm、器高4.2cmを測る。外底部には板状圧痕が残る。胎土、焼成は良好。5～34は土師器の坏。口径の法量は12～14cm前後、器高は2～4cmの範囲である。9世紀前半代のものが多い。調整は外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内底面はナデ。5は1/3片で、復元口径13.4cm、器高3.0cmを測る。外底部には板状圧痕が残り、胎土は精良で金雲母を含む。外面にはススが付着する。6はほぼ完存で、口径13.6cm、器高4.3cmを測る。7は1/4片で、復元口径12.6cm、器高2.8cmを測る。口径が小さくなっており、9世紀後半代のもの。外底部は回転ヘラケズリ後雑なナデで、一部黒化する。8は口径13.5cm、器高3.3cmを測る。器壁はやや磨滅する。9は1/4片で、復元口径12.6cm、器高2.0cmを測り、口縁が大きく開く形態。外底には板圧痕が残る。10は1/4片で、復元口径12.5cm、器高3.3cmを測る。外底部回転ケズリ後、雑なナデ、体部は回転ナデ、内面はナデ調整。11は口縁部1/6片で、復元口径14.2cm、器高3.2cmを測る。外底部は丁寧な回転ケズリ、体部は回転ナデ調整。12は底部1/2片で、復元口径13.2cm、器高3.9cmを測る。13は1/3片。口径は13.3cm、器高は3.7cmを測る。やや磨滅する。14は1/2片で、復元口径13.0cm、器高4.1cmを測る。15は1/4片で。歪みが大きいが、復元口径は12.2cm、器高は最高で3.85cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。焼成はやや不良。16は口

Fig.141　第２区遺構全体図（1/200）

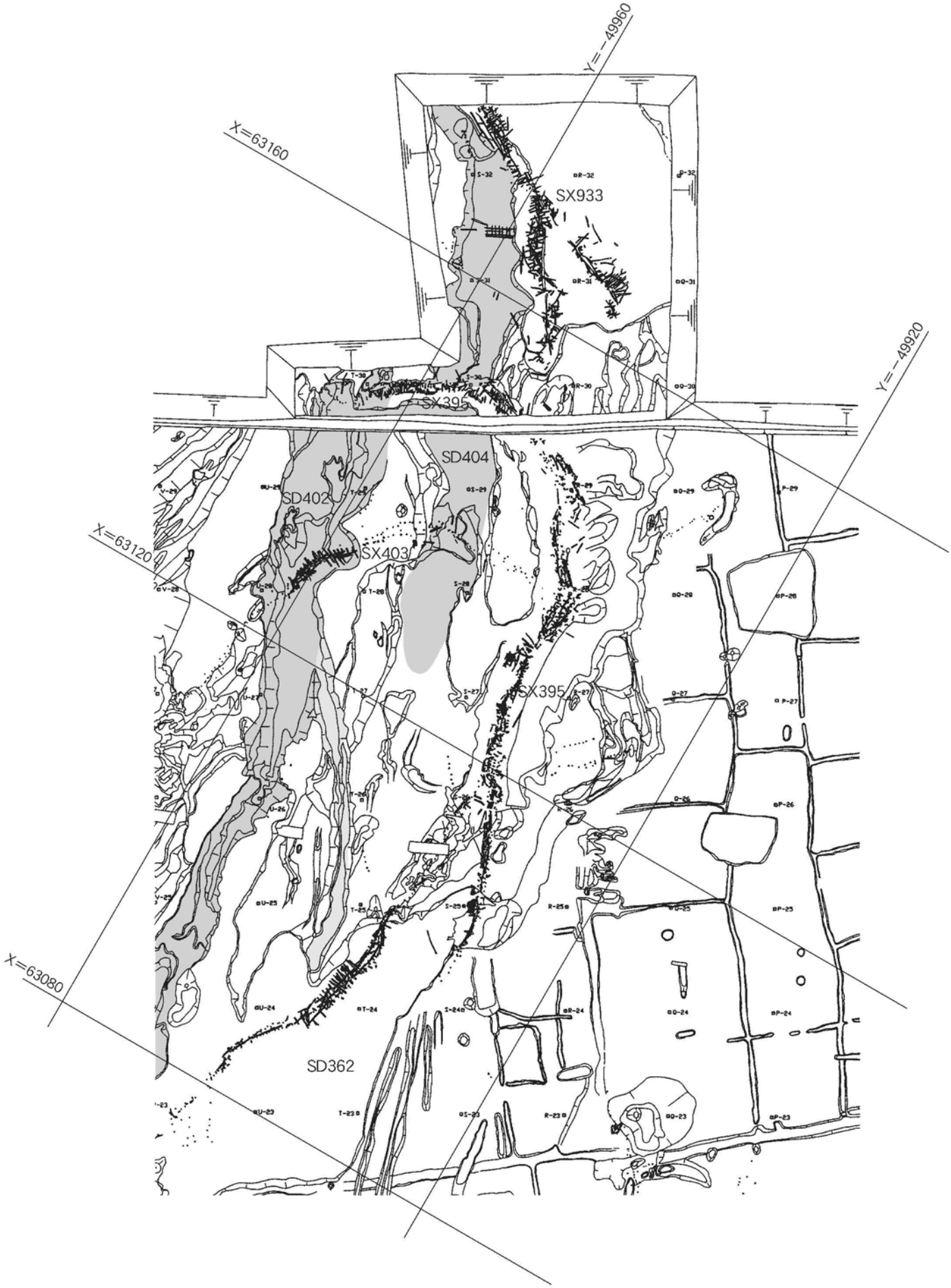



Fig.142　第２区・第６次調査区旧河川遺構配置図　(1/250)

縁部 1/3 欠で、口径は13.1㎝、器高3.4㎝を測る。外底部回転ケズリ後丁寧なナデ、ハケ目が部分的に入る。部分的に鉄分が付着する。17は底から体部片。復元口径は13.5㎝、復元器高3.3㎝を測る。外底部回転ケズリ後ナデ。体部は回転ヨコナデ調整。内外面色調が違う。18はほぼ完存。やや歪んでいるが口径13.6㎝、器高4.3㎝を測る。器表面は磨滅するが、外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ナデ調整か。19はほぼ完存。口径は13.4㎝、器高4.1㎝を測る。20は 1/3 片で、復元口径13.8㎝、器高は3.6㎝を測る。外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部から内底部は回転ヨコナデ。胎土に赤褐色粒子・雲母細片を含む。21は 1/2 強片。口径13.3㎝、器高3.6㎝を測る。外底部雑な回転ヘラケズリ後ナデで、内面にススが付着する。22は 3/4 片。口径は13.4㎝、器高は3.7㎝を測る。外底部には板状圧痕が残る。23は 2/3 片。口径は13.1㎝、器高は4.05㎝を測る。外底部には板状圧痕が残る。口縁端部に油が付着する。24は底部。外底部には板状圧痕が残る。体部は磨滅が著しいが回転ヨコナデ。内底部には傷が多く残る。焼成はやや不良。25は 1/2 片で、復元口径14.6㎝、器高4.0㎝を測る。外底部は回転ケズリ後雑なナデ。26は完存。口径は14.7㎝、器高3.9㎝を測る。27は 1/3 片で歪みがある。復元口径は14.2㎝、器高4.1㎝を測る。内面には鉄分が付着している。28は 1/2 片。復元口径は13.2㎝、器高は3.4㎝を測る。表面はやや磨滅する。29は 1/3 片。復元口径は12.8㎝、器高3.6㎝を測る。外底部には板状圧痕が残る。30は 1/3片。復元口径14.3㎝、器高3.4㎝を測る。31は 1/2 片で、復元口径13.6㎝、器高3.9㎝を測る。外底部は丁寧なナデ仕上げ、体部は回転ヨコナデ、内底部はナデ。内外面鉄分が付着する。32は 1/4 片で、復元口径は13.0㎝、器高は4.0㎝を測る。外底部は磨滅し調整不明、体部は回転ヨコナデ、内底部はナデ。33は 1/6 片。体部が丸みを持つ。復元口径は13.6㎝、器高は3.05㎝を測る。調整はナデ。34～38は高台の付く坏。34は完存で、口径は14.3㎝、器高5.4m を測る。底部は回転ヘラケズリ後板状圧痕、体部は回転ヨコナデ、内底部はナデ。9 世紀後半のもの。35は 1/2 片で、復元底径9.0㎝を測る。ナデ調整で、内底部は黒色を呈しススが付着か。外底部には墨書の痕跡が残る。9 世紀前半のもの。36は 1/2 片で、復元口径は15.0㎝、器高は5.9㎝を測る。調整は高台部ナデ、体部から内面は回転ヨコナデ。9 世紀前半のもの。37は底部片。復元底径は7.5㎝を測る。全体に磨滅がひどく、調整は不明。38は底部 1/4 片で、復元底径は10.8㎝を測る。外底部回転ヘラケズリ、その他は回転ナデである。8 世紀前半のもの。39は鉢 1/4 片で、高台が付くと思われる。復元口径18.2㎝を測る。体部の調整は回転ヨコナデ、内面に厚くススが付着する。9 世紀前半のもの。40～49は皿。40は口が大きく開く皿 1/3 片。復元口径は15.0㎝、器高2.0㎝を測る。外底部回転ヘラケズリ後ナデ。体部は回転ヨコナデ。9 世紀前半のもの。41～49は底部から口縁が短く外に開く器形。口径が15～16㎝で大形の皿で、大半が 8 世紀後半代のもの。調整は外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内底面はナデである。41は 1/6 片。復元口径は14.0㎝、器高1.75㎝を測る。磨滅がひどく調整は不明。42は完存。口径は14.9㎝、器高2.3㎝を測る。外底部は回転ヘラケズリ後ナデで粘土塊が付く。口唇部に一部黒斑がある。内面鉄分が付着する。43はほぼ完存で、歪みが大きい。口径は15.1㎝を測る。44は 1/3 片で、復元口径14.8㎝、器高1.9㎝を測る。外底部のナデは雑。体部表面は剥落するが回転ヨコナデ。胎土には 1 ～ 5 ㎜の粗砂粒を含む。45は口縁部が 1/4 欠。やや肉厚の器壁を持つ。口径は15.4㎝、器高は2.4㎝を測る。外底部のナデは雑。46は 1/3 片で、復元口径は14.8㎝、器高は1.7㎝を測る。表面はやや磨滅する。47は 1/2 片で、復元口径17.1㎝、器高2.1㎝を測る。外底部は回転ケズリ後丁寧なナデで、ヘラ記号がある。体部外面は丁寧なヨコナデ、内面は丁寧なミガキに近いナデで、全体に丁寧な作り。48は口縁部 1/6 片。復元口径15.9㎝、器高1.8㎝を測る。49は 1/3 片。復元口径は16.2㎝、器高2.1㎝を測る。外底部は回転ケズリ後ナデで、巻上げ痕が残る。体部回転ヨコナデ、内底部は丁寧なナデ。9 世紀前半のもの。50～52は土師器の甕。50・51は口縁部

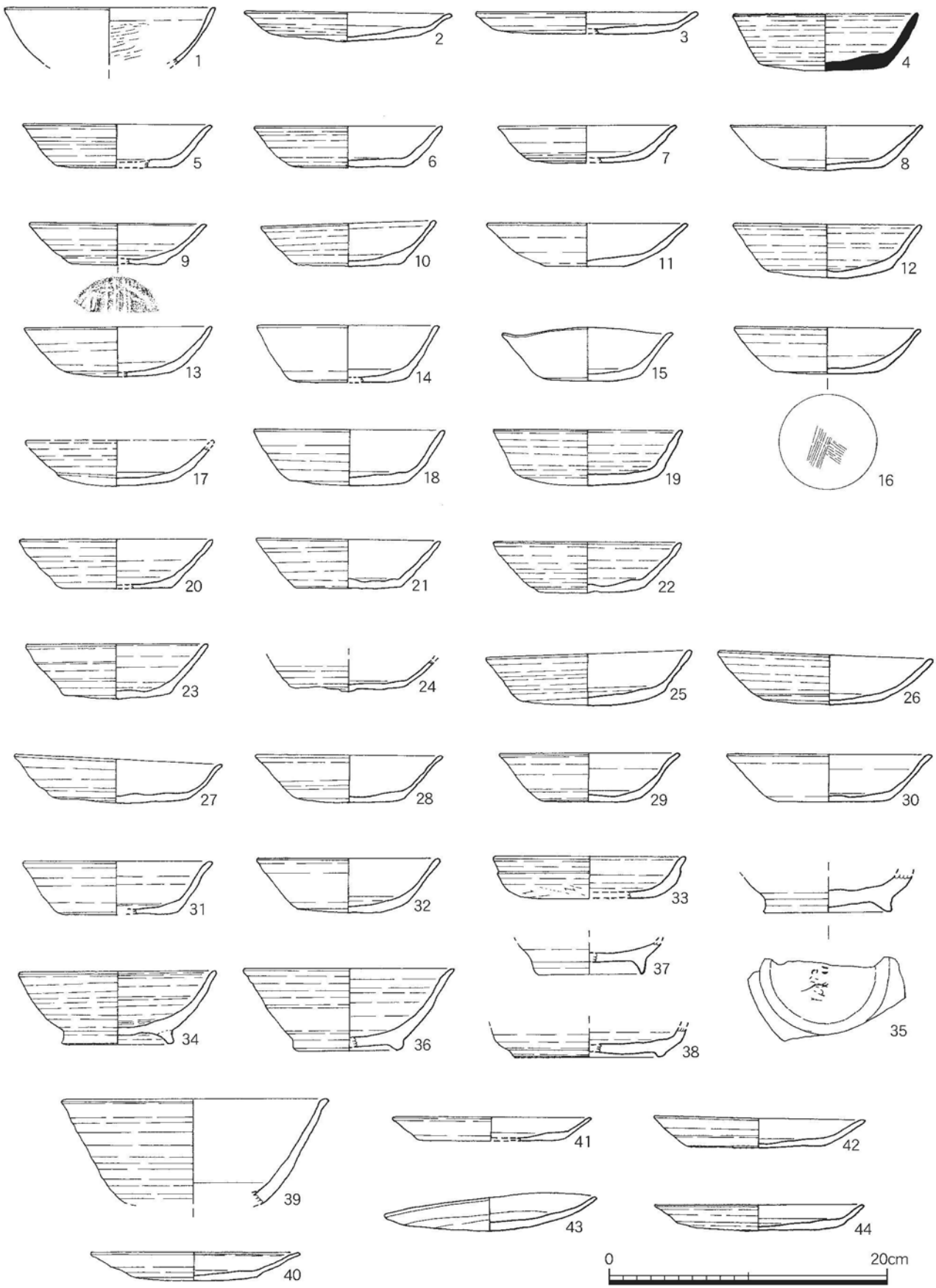



Fig.143　SD362 出土土器①（1/4）

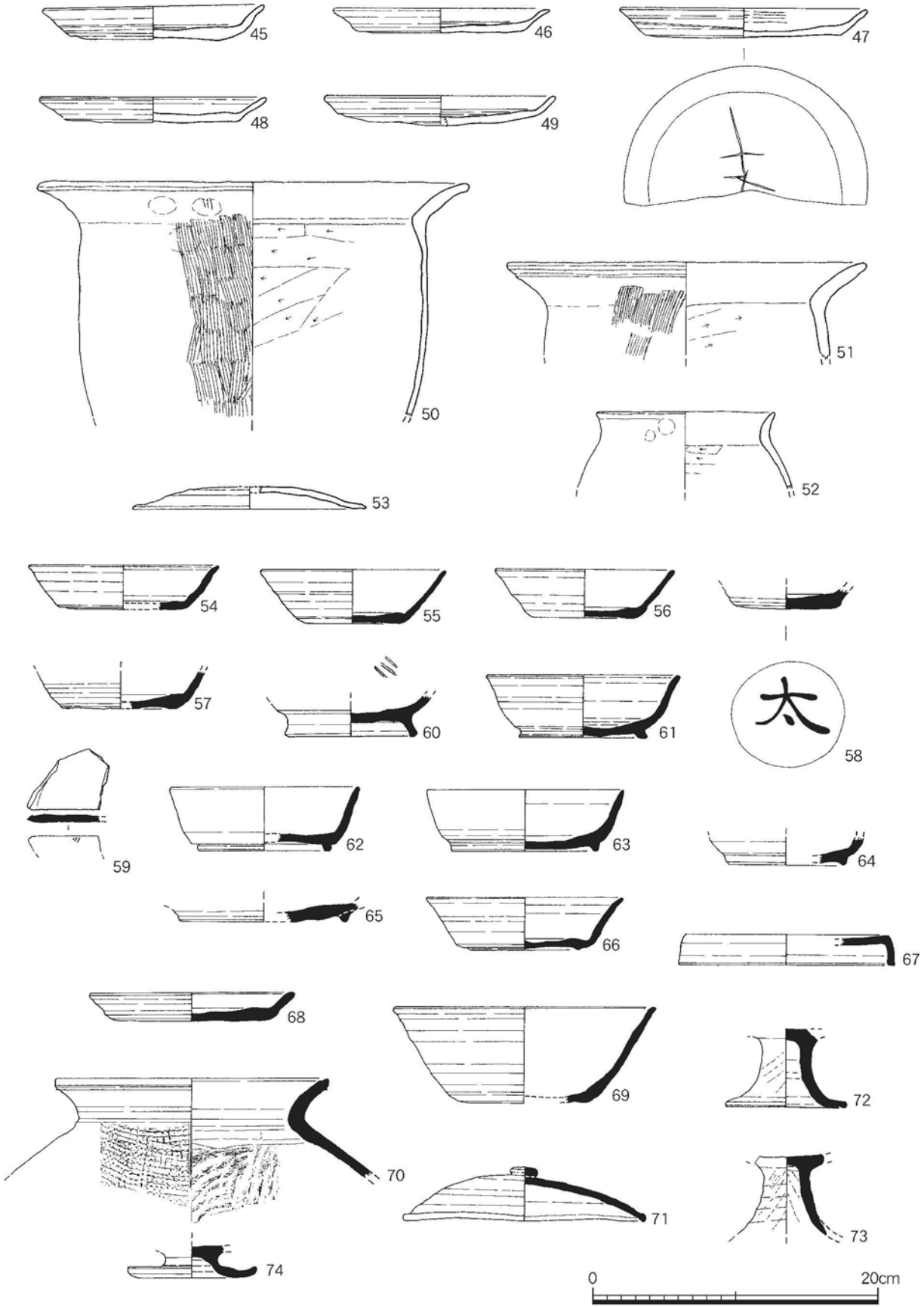



Fig.144　SD362 出土土器②（1/4）

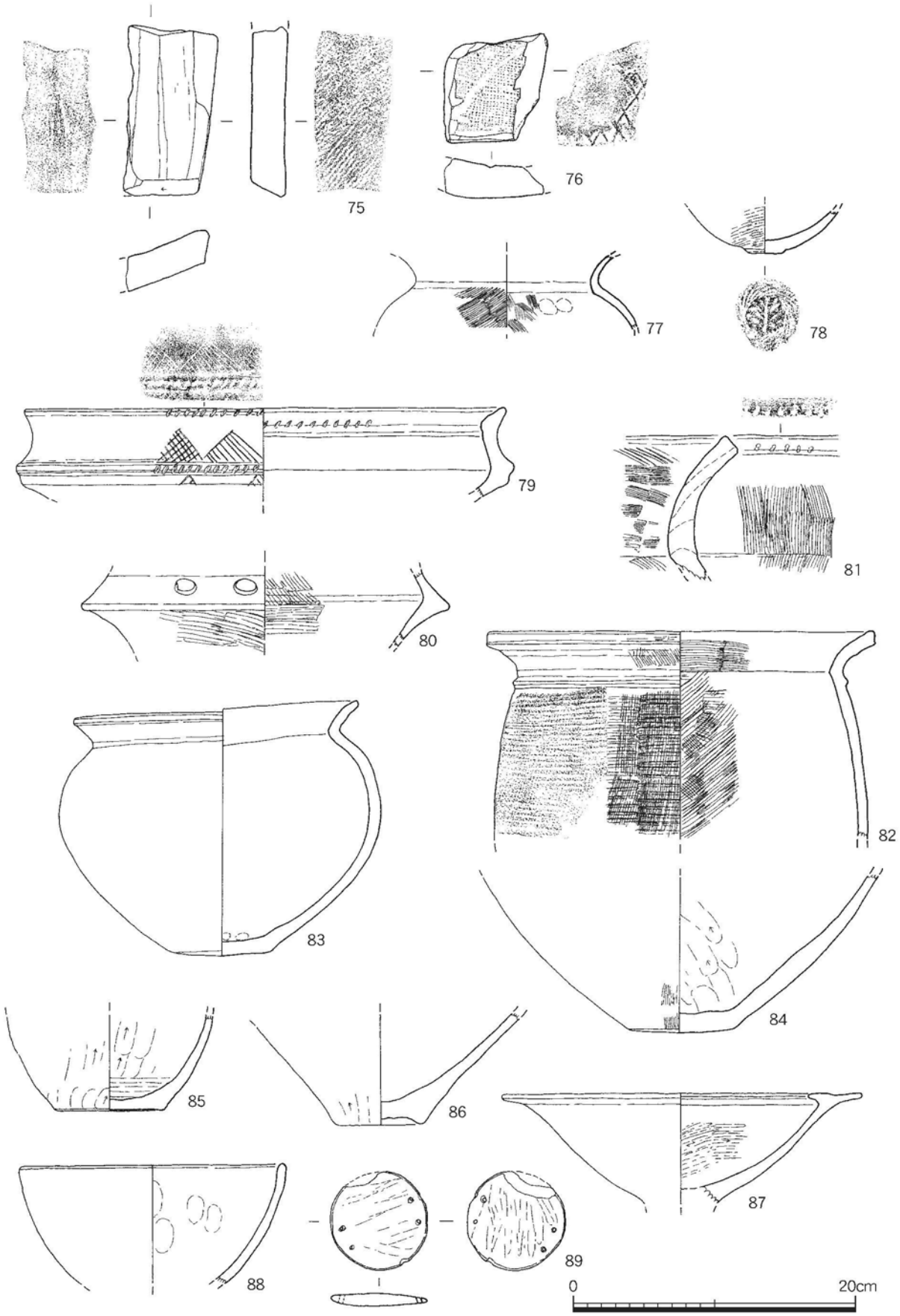



Fig.145　SD362 出土土器③（1/4）

が外反する8世紀後半のもの。50は口縁から胴部1/5片。復元口径は30.0㎝を測る。胴部外面は粗いタテハケ目、内面はヘラケズリで、内面にススが付着する。51は1/8片で、復元口径25.0㎝を測る。調整は胴部外面がナナメの粗いハケ目、内面はヘラケズリ、口縁部はナデ調整。胎土に粗砂を多く含む。52は口縁部1/4片で、復元口径は12.3㎝を測る。外面の磨滅は進むが、胴部内面の調整はケズリである。口縁部の形態から6世紀代のもの。53は蓋1/8片で、復元口径は16.2㎝を測る。天井部は回転ヘラケズリ、その他は回転ヨコナデ。内面にはススが付着し黒い。

54～74は須恵器。54～66は坏で7世紀後半から9世紀前半のもの。55～58は高台を持たず口が外に開く形態。54～56は1/3～1/4片、57は底部。口径は12.4～13.2㎝、器高は3.1～3.8㎝を測る。調整はいずれも外底部は回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内底部はナデである。55・56共焼成はやや不良。57は底部が回転ヘラケズリ後雑な仕上げで、粘土塊が残る。58は底が丸みを持つ平底で底径7.3㎝を測る、調整は外底部回転ヘラケズリ後ナデで、板状圧痕が残り、「太」という墨書が残る。8世紀後半から9世紀前半のもの。59は底部片で、墨書の痕跡が残る。60～66は貼付高台の坏。60・61は高台が細く外方に開く形態。外底部は回転ヘラケズリ後ナデ、体部から内底面までは回転ヨコナデ。60は体部が丸みを持つ7世紀後半のもの。61は9世紀前半のもの。内面にヘラ状工具による刻線が入る。62～66は短い高台で8世紀のもの。62・63は口縁の外方の開きが小さい。いずれも外底部が回転ヘラケズリ、体部から内底にかけて回転ヨコナデからナデ。口径は13.2㎝、13.6㎝を測る。64・65は底部片。いずれも調整はナデ。66は2/3片。復元口径は13.6㎝を測る。僅かに残る高台で、体部が外反し口縁が開く形態。8世紀前半のもの。67・71は蓋。67は口縁部1/8片で、復元口径は14.8㎝を測る。天井部回転ヘラケズリ、体部から口縁部は回転ヨコナデ、内面はナデ。8世紀後半のもの。71は1/4片で、復元口径は16.8㎝を測る。丸い扁平な擬宝珠形の摘みが付く。天井部は回転ヘラケズリ、体部から口縁部は回転ヨコナデ、内面はナデである。全体に焼き歪みが大きい。8世紀前半のもの。68は皿1/8片で、復元口径は14.2㎝を測る。外底部は回転ヘラケズリ後丁寧なナデ、体部は回転ヨコナデ、内底はナデ。色調はにぶい黄褐色を呈し、赤焼けに近い須恵器。69は鉢。1/3片で口縁が斜め外方に開く形態。復元口径は18.2㎝、器高は6.8㎝を測る。調整は体部下半から外底部は回転ヘラケズリ、体部は回転ヨコナデ。内外面に酸化鉄分が付着する。70は甕の口縁部1/5片。復元口径は18.8㎝を測る。口縁部回転ヨコナデ、体部格子目叩き、内面は同心円状の叩き痕である。8世紀前半のもの。72～74は高坏の脚部。形態から7世紀後半から8世紀のもの。72は1/4片。端部は水平に延びる。復元脚径は8.3㎝を測る。内外面回転ヨコナデであるが、シボリ痕が残る。73は脚筒部で、回転ヨコナデ調整で、シボリ痕が残る。74は短脚で大きく開く形態。復元脚径は9.0㎝を測る。外面回転ヨコナデ、内面は丁寧なヘラケズリ。75・76は平瓦。いずれも細片で、75は残存長12.0㎝、76は7.2㎝を測る。75の側面はヘラケズリ仕上げ、凹面は工具によるナデ、凸面は縄目叩き後ナデ。色調は赤みを帯びたにぶい黄褐色で、酸化炎焼成か。76は須恵質で、凹面は目の細かい布目痕が残り、凸面は格子目叩きである。胎土に粗砂を含む。

以下は弥生土器である。77は畿内第Ⅴ様式の甕。調整は口縁部ナデ、胴部外面はナナメの並行叩き、内面はナデに細かいハケメで同心円状の当て具痕が残る。78は畿内系甕の底部で、外面は時計廻りの並行叩き、直径2.6㎝の小さな底部には木葉痕が残る。79・80は弥生時代後期の複合口縁壺。79は終末期の瀬戸内系のもの。復元口径は34㎝を測る。口唇部の内外面と口縁の屈曲部にヘラによる刻み目が付く。口縁部外面にはヘラによる鋸歯文、器壁は磨滅するが、ナデ調整。胎土は精良。80は口縁部の小片で、外面に円形の貼付浮文がある。内外面粗いハケメ調整。81・82は弥生時代後期の甕。81は細片で口唇部に二重の竹管文が付き、内外面ハケメ調整。外面口縁と胴部の境には軽く粘土紐接合の

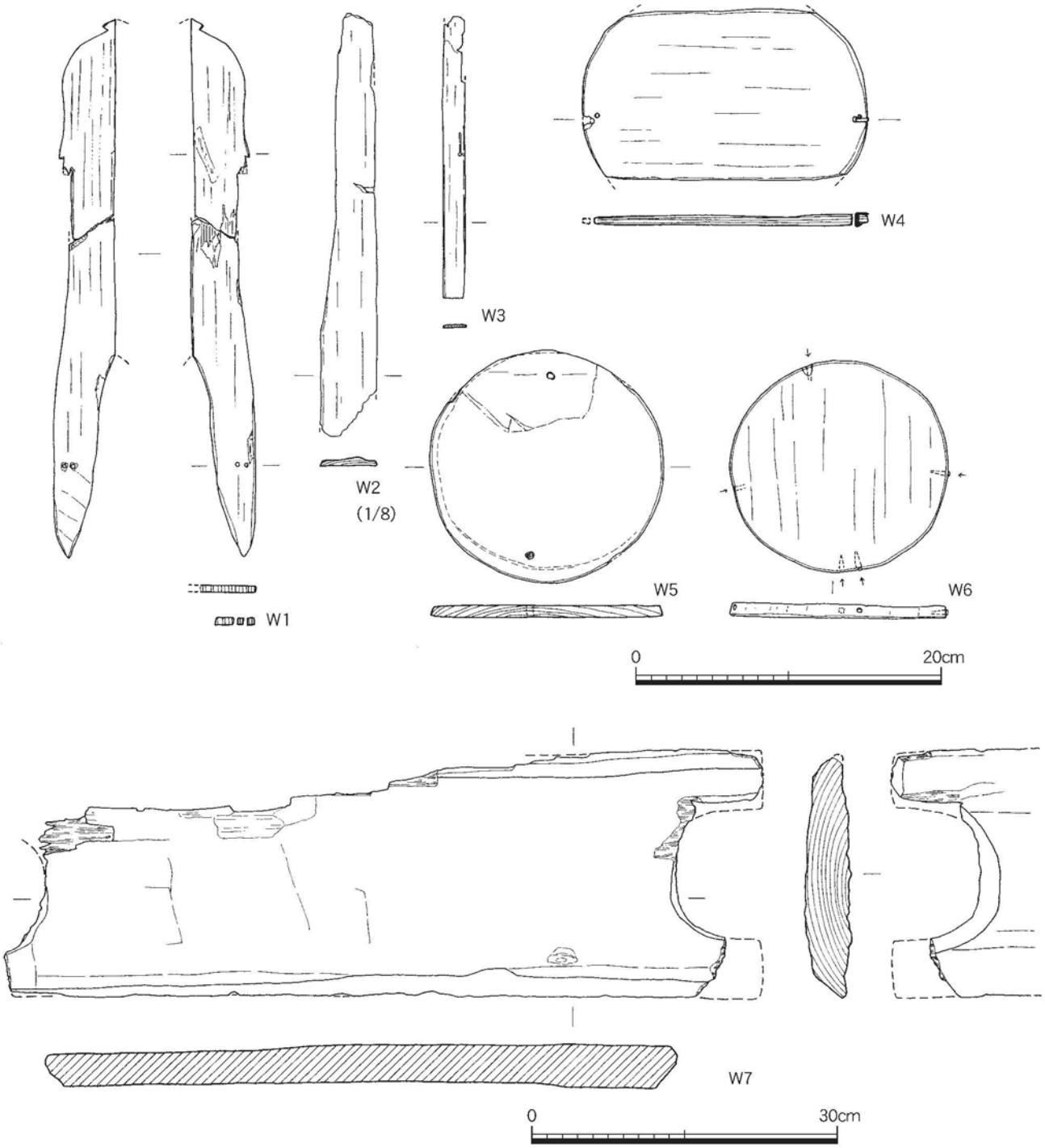



Fig.146　SD362 出土木器（1/4・1/6・1/8）

段が付く。82は口縁から胴部 1/8 片で、復元口径27.0cmを測る。頸部に 1 条の三角突帯が付く。胴部外面はヨコ平行叩き後タテハケメ、口縁部はハケメ、胴部内面はハケメ調整。83は鉢で完存である。「く」字状を呈す口縁部を持つ。やや歪むが口径は19.9cm、器高は18.2cmを測る。器壁はやや磨滅するがナデで、外面には黒斑がある。弥生時代後期のもの。84～86は壺か甕の底部。84は大形で、底部はややレンズ状を呈す。底径7.2cmを測る。外面ナデでハケメが残り、内面指ナデ。85は平底で底径7.8cmを測る。ナデ調整である。84・85はいずれも弥生時代後期。86は壺で底部は上底。底径は6.1cm

を測る。調整はナデである。内底部指押さえ痕が残る。87は鋤状の口縁を持つ高坏坏部1/4片。復元口径は25.0cmを測る。内外面は磨滅が著しいがナデで、内面はヘラミガキか。88は椀形の鉢1/5片。復元口径は19.0cmを測る。内外面調整はナデで、口縁部の一部に黒斑がある。89は小型の蓋で、一部欠損するが、直径6.8～7.0cm、最大厚0.9cmを測る。内外面丁寧なミガキ、左右2個一対の円孔がある。孔径は3～4mmを測る。胎土は精良。

192は焼けた粘土塊で、長軸長8.4cm、短軸幅5.7cm、最大厚3.5cmを測る。全体に磨滅がひどいが、指押さえ仕上げである。胎土は精良。193は円孔のある土器片。最大幅5.1cm、厚さ0.7cm、孔径0.8cmを測る。調整は磨滅で不明。

W1は木製祭祀具の横顔の人形。頭に被り物を削り出し、足の部分には何かと組み合わせるためか孔が2か所ある。全体に丁寧な削りで表面は平滑に仕上げられる。全長36.9cm、厚さ0.5cmを測る。W2は加工板材。残存長55.6cm、幅7.4cm、厚さ0.8cmを測る。柾目材である。W3は曲物の側板の一部と思われる。残存長19.6cm、幅1.4cm、厚さ0.2cmを測る。右側面沿いに紐通し孔が1か所ある。W4～6は曲物底板。両端を欠損するが、W4は最大径18.4cm、厚さ0.6cmを測る。両側に2か所ずつ径0.3cm程の孔があり、樹皮の紐が残る。W5・6は円形で、直径は15.0cm・14.0cm、厚さ0.8cm・1.0cmを測る。いずれも表面は丁寧に平滑に仕上げるが、W5の上面には側板の圧痕が残り、2か所に径0.4～0.5cmの孔がある。孔には木釘が残っていた。W6の側面には4か所木釘が残る。W7は建築材の一部か。残存長73.9cm、幅30.6cm、厚さ3.3～4.3cmを測る。右側小口を丸く切り込んでいる。表面の傷み、欠損は著しい。W8は建築材で柄を持った部材と思われ、残存長157.0cm、径5.0×6.5cmを測る。断面は丸から隅丸方形で、表面の枝は打ち落とされている。マツ属の芯持ち材である。

S1・2は砥石片。S1は残存長13.1cm、最大幅7.2cmを測る。断面は方形で、砥面は4面で敲打調整痕が部分的に残る。石材は砂岩で、色調は黄味がかった灰白色を呈す。目の細かさは普通。S2は最大長が7.8cm、厚さ2.4cmを測る。上下、左側面が砥面。色調は褐灰色を呈す粘板岩か泥岩である。

## ② 堰・護岸杭列（SX）

**SX395**（Fig.147、PL.64・65・68・70）

第6次調査区からの続きで、当初は北に延びると予想していたが、予想に反して調査区で西側にアーチ状に曲って西岸に続く遺構。杭自体は北側に倒れるので、南側第6次調査で検出したSD404流路からの流れを受けたものであろう。堰の周囲は水流で抉られたのか、土坑状に一段と深くなる。確認規模は長さ16m、幅1.5mを測る。更に西側高所部に向かって杭が散漫に続いていく。構築方法は横木の前後に縦杭を密に打ち込み、間に植物の葉や小枝などが挟まっていた。堰の前面には植物の葉や樹皮が編み物のように付着していた。杭は密に打ち込まれている所と疎らな所があり、これは洪水などの破損によるものか。使用された杭材の樹種は一部を分析したのみであるが、クヌギ、サカキ、ハイノキ、サクラ、シキミなど各種に亘り、周辺の林で容易に採取出来るものである。

**出土遺物**（Fig.148～151、PL.109・110・114・115）　弥生時代中期から後期の土器、古墳時代土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器、木製祭祀具などの木製品が周辺、内部から出土している。

90～108は土師器。90～97は坏。90は底部の1/3片。やや上底で体部が丸みを持って開く形態。復元口径12.6cm、器高2.7cmとやや小ぶり。調整は不明。91～97は底部から体部が外方に開く形態。底部平底であるが、凸レンズ状を呈すものもある。口径は12.4～13.7cm、器高は3.3～4.5cmの範囲である。法量から9世紀前半のもの。調整は外底部が回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内底部はナデ。98・99は大形の坏で、体部が内湾して外に開く形態。口径14.8cm・15.2cm、器高3.0cm・

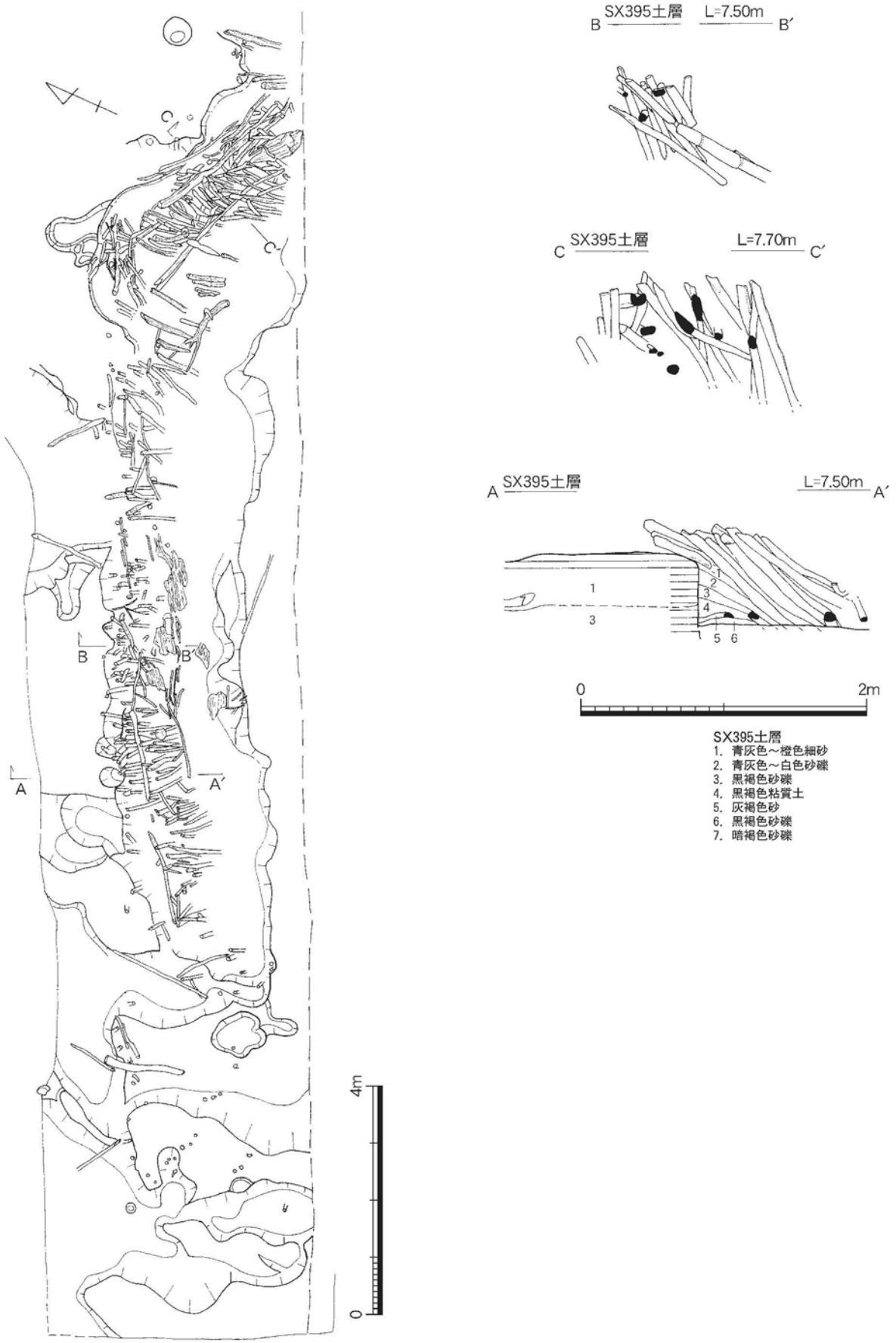



Fig.147　SX395（1/40・1/100）

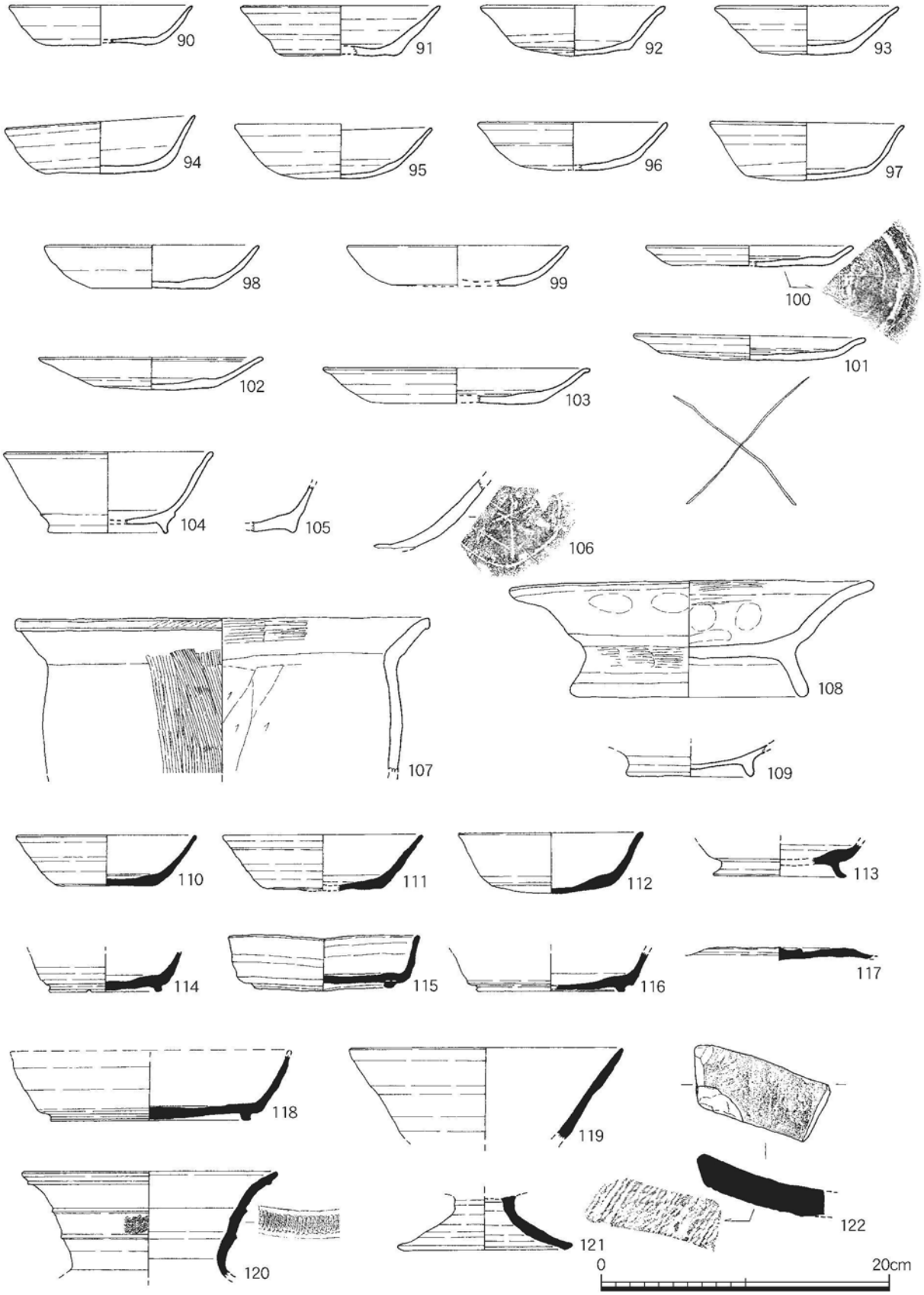



Fig.148　SX395 出土土器（1/4）

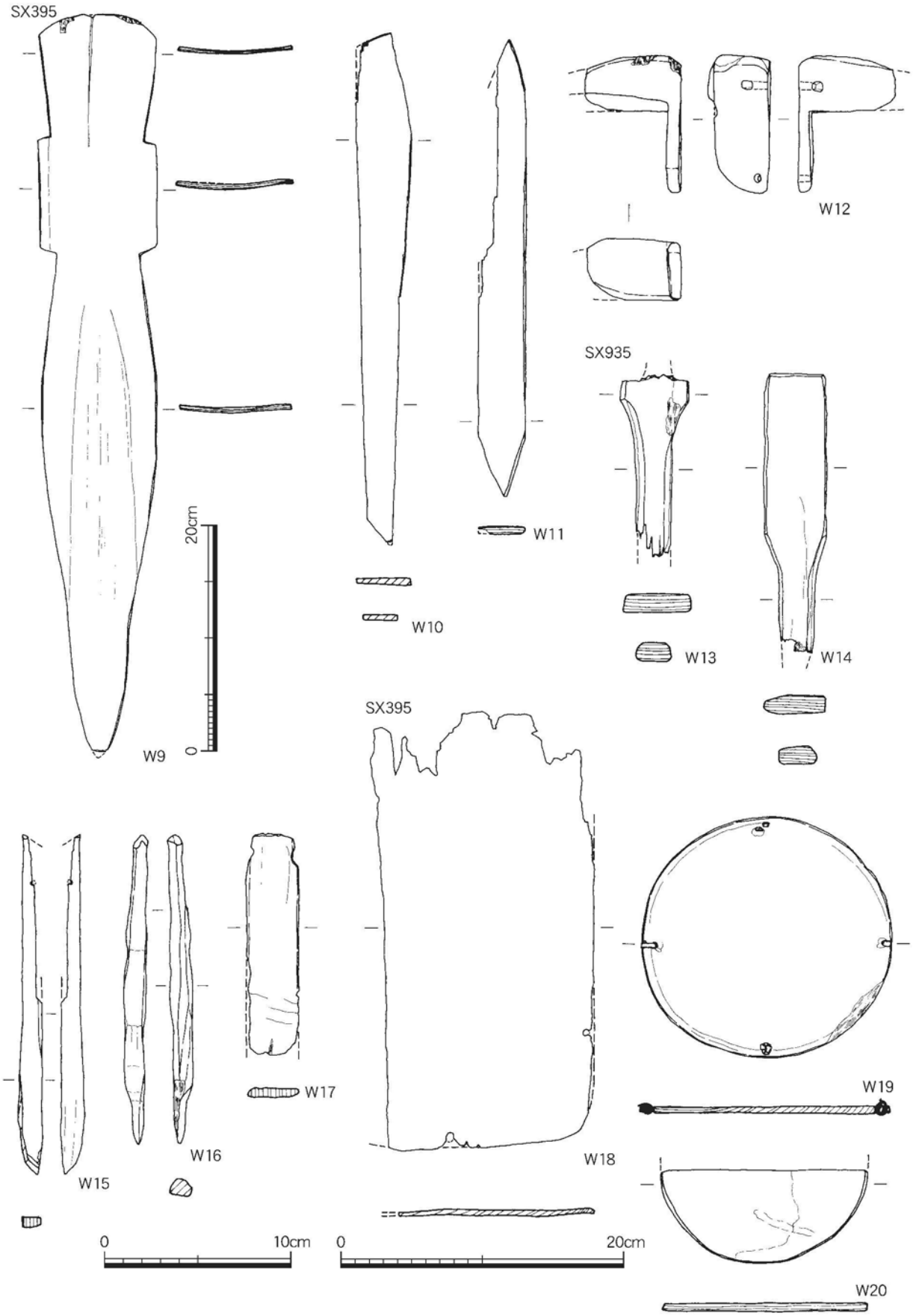



Fig.149　SX395-①・935 出土木器（1/3・1/4・1/5）※W9・10 は1/5、W18～20 は1/4

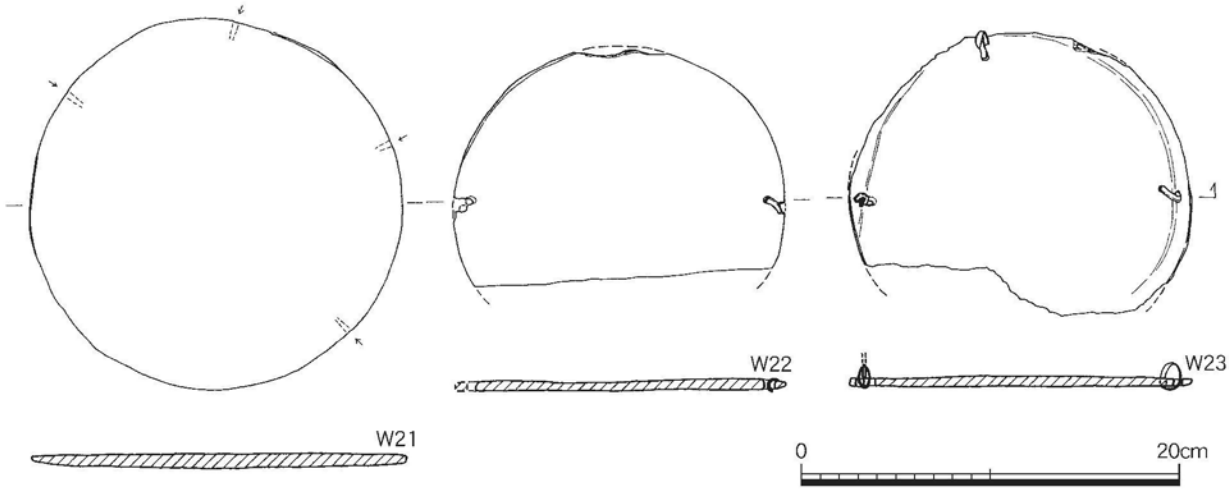



Fig.150　SX395 出土木器②（1/4）

2.8cmを測る。調整は99が磨滅し不明であるが、98は外底部回転ヘラケズリ後ナデ、回転ヨコナデ、内底部はナデ。100～103は皿で9世紀前半のもの。100・101は底部から体部が短く外に開く形態。口径が14.2cm・15.8cm、器高は1.4cm・1.8cmを測る。調整は外底部回転ケズリ後ナデ、体部は回転ナデ、内面はナデで、101の底部には「×」のヘラ記号がある。102は底部から体部が大きく開く形態。底部は下方に押し出されている。口径は15.4cm、器高2.3cmを測る。器壁はやや磨滅するが、外底部回転ヘラケズリ、内底部はナデ。口唇部内面に浅い沈線が巡る。103は大形で、復元口径が18.4cm、器高2.45cmを測る。口縁端部は外反する。外面磨滅し、調整不明。内面は体部回転ヨコナデ、内底部はナデ。104・105は9世紀の高台付坏。104は1/4片で、復元口径14.4cm、器高は6.6cmを測る。高台は貼付で、ナデ調整。105は底部細片。僅かに高台が付く。ナデ調整。106は壺などの底部細片。ナデ調整で、外面ヘラ記号がある。107は甕。口縁から胴部1/8片。復元口径28.6cmを測る。調整は外面ハケメで頸部に工具痕が残る。胴部内面はケズリである。外面に炭化物が付着し、黒化する。108は高い高台が付く皿か鉢。2/3片で、口径は24.9cm、器高8.1cmを測る。高さ3cmの高台が付く。ロクロ成形でなく、器形は歪む、調整はナデでハケメを加える、指押さえ痕が残る。一部黒斑がある。粗砂粒を多く含む。8世紀後半か。

109は内外面燻しの黒色土器B椀の底部1/3片。高台部はナデ、内底と体部はミガキ。胎土は精良。9世紀後半以降か。

110～121は須恵器。110～112は8世紀後半から9世紀前半。110・111は外方に直線状に開く形態。口径は12.6cm・13.8cm、器高は3.5cm・3.9cmを測る。調整は外面回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ。112は底部から体部が丸みを持って外反気味に開く形態。復元口径は12.5cm、器高は4.2cmを測る。全体に磨滅し調整不明。113～116は高台付坏。113は外に開く高台で、7世紀後半のもの。体部は回転ヨコナデ、その他はナデ。114～116は短い高台で、体部の開きが小さい形態。8世紀前半のもの。調整はいずれも外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内底部はナデ。115の口径は13.2cm、器高3.9cmを測り、器形の歪みは大きい。117は蓋。天井部1/3片で、天井部には扁平な擬宝珠形摘みが付く。天井部は回転ケズリ、体部は回転ヨコナデ、内面はナデ。摘み径は3.0cmを測る。118は大形の坏か鉢1/3片。体部は外方に開き復元口径は19.4cmを測る。外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内底部はナデ。8世紀後半のもの。119は鉢口縁部1/4片で、復元口径18.8cmを測る。体部は回転ヨコナデで、内面鉄分が多く付着する。焼成はやや不良。9世紀前半

のもの。120は壺口縁部1/4片。復元口径は17.4㎝を測る。調整は回転ヨコナデで、口唇部外面と頸部に2条の三角突帯が巡り、頸部の突帯間には櫛描き波状文を施す。全体に良好な作り。陶質土器に近く5世紀のもの。121は高坏の脚部。復元脚端径12.0㎝を測る。脚部の調整は回転ヨコナデで7世紀代のもの。122は須恵質の平瓦細片である。厚さ1.9㎝を測る。凹面はナデ調整で細かい布目痕が残る。凸面はやや磨滅するが縄目叩き。焼成はやや不良で、色調は灰白色を呈す。

W9は人形。杭に絡まって出土した。全長65.4㎝、最大幅10.25㎝、厚さ0.3〜0.5㎝を測る。頭部を山形に、胴部を台形形状に、下半身を細長く削り出し、簡略化した作りである。W10は板状の木製品で、祭祀具の一部と思われる。全長45.2㎝、最大幅4.9㎝、厚さ0.6㎝を測る。W11は両端を尖らせた斎串か。全長24.3㎝、最大幅2.5㎝、厚さ0.5㎝を測る。W12は不明木製品である。L型に削り出し、接合する為の孔が2か所残る。W15・16は細長い加工木材。W15は先端の一部に細かい削りを加える。祭祀具の一部か。W17は荷札木簡。残存長11.8㎝、幅2.7㎝、厚さ0.5㎝を測る。上部に紐掛けの抉りを入れるが、磨滅が著しい。墨書はない。W18は曲物などの底板か。残存長31.1㎝、残存幅13.8㎝、厚さ0.6㎝を測る。削りで平滑に仕上げるが、乾燥や腐蝕で傷みがある。2か所側板を留める為の径0.5㎝程の孔がある。W19〜23は曲物の底か蓋板で、表面は平滑に削って仕上げられている。W19は全周が残る。直径は17.7㎝、厚さ0.6㎝を測る。表面に側板の圧痕が残り、周縁に4か所に紐を通す孔がある。W20は半存で、長径は14.5㎝、厚さ0.6㎝を測る。W21は全周が残る。直径は19.6㎝、中央部が厚く、最大厚は0.8㎝を測る。側面には2か所木釘が残る。W22・23は約2/3存である。W22は直径17.3㎝、厚さは0.7㎝を測る両端2か所に紐通し孔がある。W23は直径17.7㎝、厚さ0.6㎝を測る。上面に側板の厚痕が残り、3か所紐

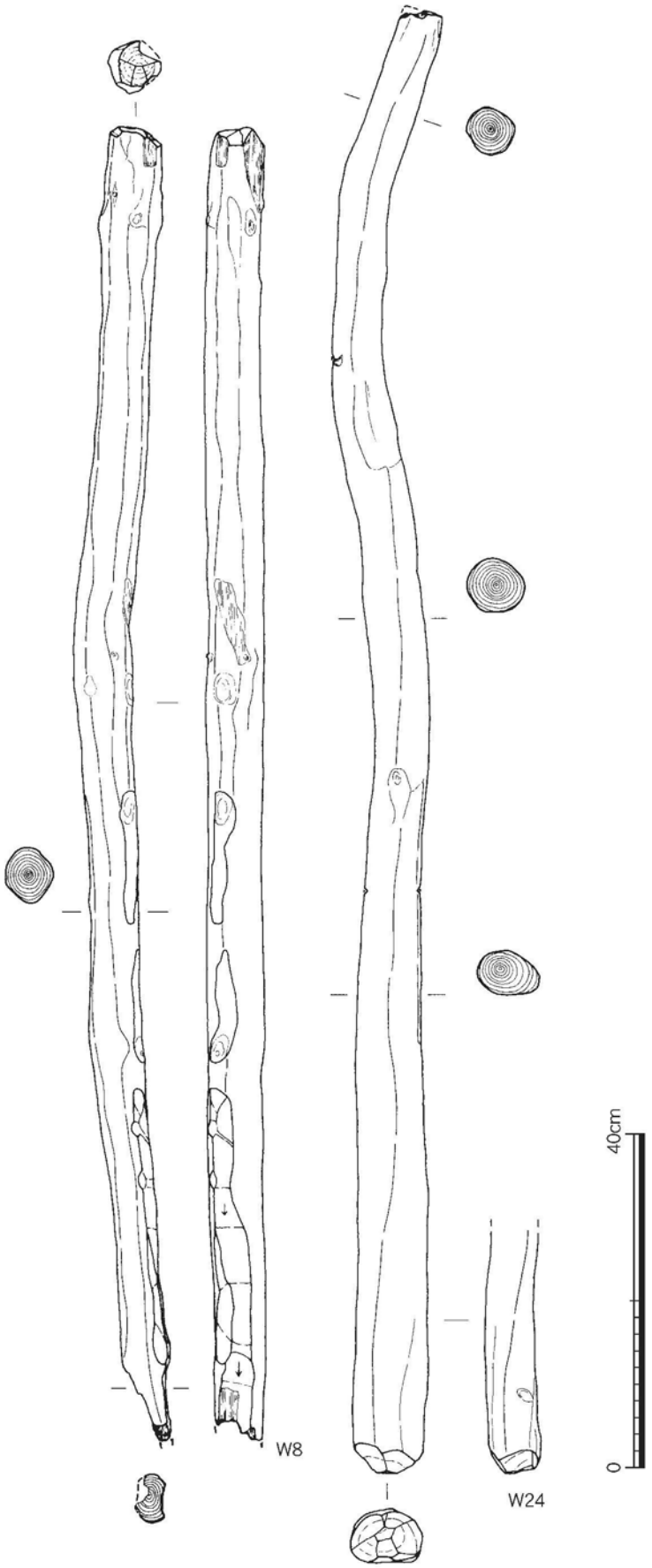



Fig.151　SX395出土木器③（1/8）

通し孔がある。本来は4か所あったのであろう。W24は護岸杭で、建築材を転用したものと思われる。全長175.1cmを測る。材は曲っている。先端に削り加工を行う。全体に傷みがある。

**SX933**（Fig.152、PL.66～68・70）

西岸から7～10mの間をとって並行する杭列。南側の堰SX395とは5mの間隔がある。全長3～6m、径5～20cm程の横木の前後に、全長1.5～2mで、径10cmに満たない細い縦杭を密に打ち込んでいる。間に植物の葉や小枝などが挟まっていた。堰の前面には植物の葉や樹皮が編み物のように付着していた。縦杭は東側に倒れている。使用された杭材は2本分析したがユズリハとクスノキであった。又、南側のSX395北側川底に残る流れの痕跡や杭の傾斜の具合から、西側を北流する流れがあったものと思われる。堰の西側前面は流れで抉られ一段と深くなる。SX933を築くことで、水を北西方向に分流したのであろうか。SX932はSX933西側で検出した遺構に伴う落込みである。

**出土遺物**（Fig.153・156・158・159、PL.115・116）　弥生時代中期から後期の土器、古墳時代土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器、木製祭祀具などの木製品が周辺、内部から出土している。木製祭祀具や曲物などは針葉樹のスギなどが使われている。

123～132は土師器。123～128は坏。やや丸みのある平底から体部が斜めに開く形態で9世紀前半のもの。125・126は完存。口径は12.8～14.2cm、器高は3.1～3.7cmの範囲であるが、126は口径16.0cm、器高3.8cmと大きい。調整はいずれも外底部回転ヘラケズリ、体部は回転ヨコナデ。126の外底部には「里長」と書かれた墨書がある。129は皿1/5片で、復元口径17.0cm、器高1.9cmを測る。調整は外底部回転ケズリ、体部回転ヨコナデ。内底部はナデ。130は擬宝珠の摘みが付く蓋1/3片。復元口径は17.6cm、器高3.4cmを測る。調整は摘み部がナデ、天井部回転ケズリ、体部回転ヨコナデ、内面はナデ。8世紀後半のもの。131は甕口縁部1/6片。復元口径23.6cmを測る。口縁が肥厚し、外反する形態。調整は口縁部ヨコハケ、胴部外面粗いタテハケ、内面ケズリ。132はミニチュアの手捏ね皿。口径は5.0cm、器高1.1cmを測る。焼成は良好。

133～142は須恵器。133～136は坏。133・134はやや丸みを持つ平底の坏1/3片。体部の開きは大きく、復元口径は13.5cm・13.4cm、器高は4.3cm・3.7cmを測る。調整は外底部回転ヘラケズリ、体部は回転ヨコナデ。133の焼成は不良。9世紀前半頃か。135・136は低い高台が付く。1/6片・1/4片で、復元口径は13.0cm・13.2cmを測る。調整は外底部が回転ヘラケズリ後ナデ、体部が回転ヨコナデ、内底部がナデ。8世紀前半頃か。137・138は皿1/3片・1/6片。137は歪みが大きいが復元口径は17.3cm・18.6cmを測る。調整は、137は外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部～内底部はナデ。139は蓋1/4片。復元口径は14.2cmを測る。口縁端部が三角形を呈す。8世紀前半か。140は坏蓋1/4片。復元口径は14.0cmを測る。天井部と体部の境に段を有す。調整は天井部回転ヘラケズリ、体部回転ヨコナデ、内面はナデ。6世紀前半である。141・142は甕。141は頸部1/6片で。外面自然釉がかかり、口縁内面は回転ヨコナデ、胴部内面には同心円状の当て具痕が残る。142は胴部片。外面タテの並行叩き、内面は同心円状の当て具痕があり、凹凸が激しい。143は古墳時代前期の布留式土器の甕口縁部から胴部片。復元口径は16.8cmを測る。口縁部ヨコナデ、胴部外面は細かいハケメ、内面は丁寧なヘラケズリ。外面僅かにススが付着する。144は弥生土器壺底部。胴部の膨らみの割に底部が小さく、砂が付着する。外面タテの粗いミガキ、内面ヨコ板ナデで工具痕が残る。弥生後期後半頃の時期か。

S3は石庖丁で、両側が湾曲する形態。残存長8.9cm、最大幅4.2cm、厚さ0.7cm、孔間は2.0cmを測る。傷みはあるが表面は研磨仕上げである。S4は滑石製円板。径は2.3cmで周囲を削って仕上げる。表面はケンマを加える。祭祀品である。

W25は船形木製品の舳先部分。残存長7.6cm、横幅3.7cm、残存高3.3cmを測る。削り仕上げであるが、

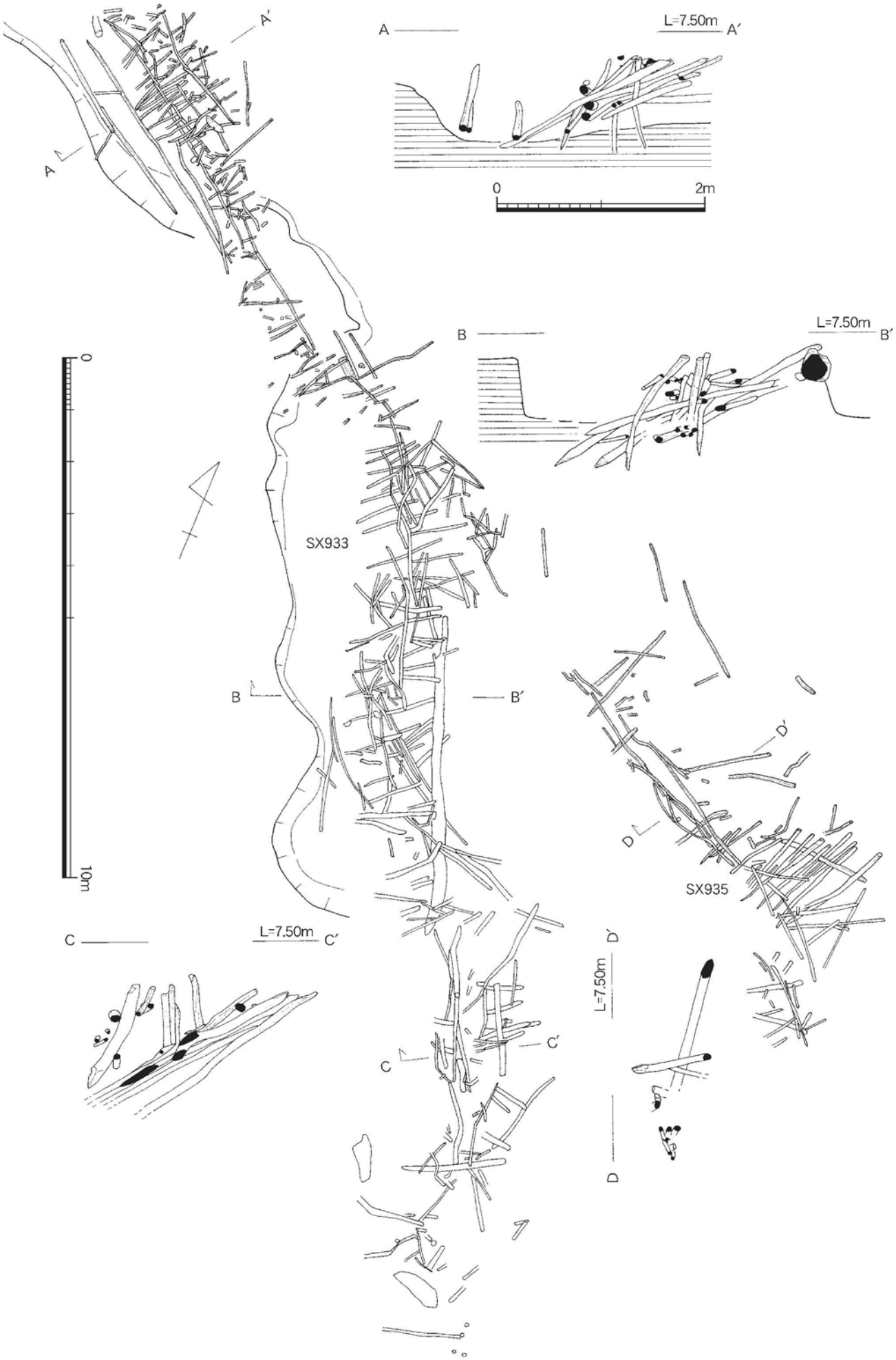



Fig.152　堰・護岸状遺構 SX933・935（1/100・1/50）

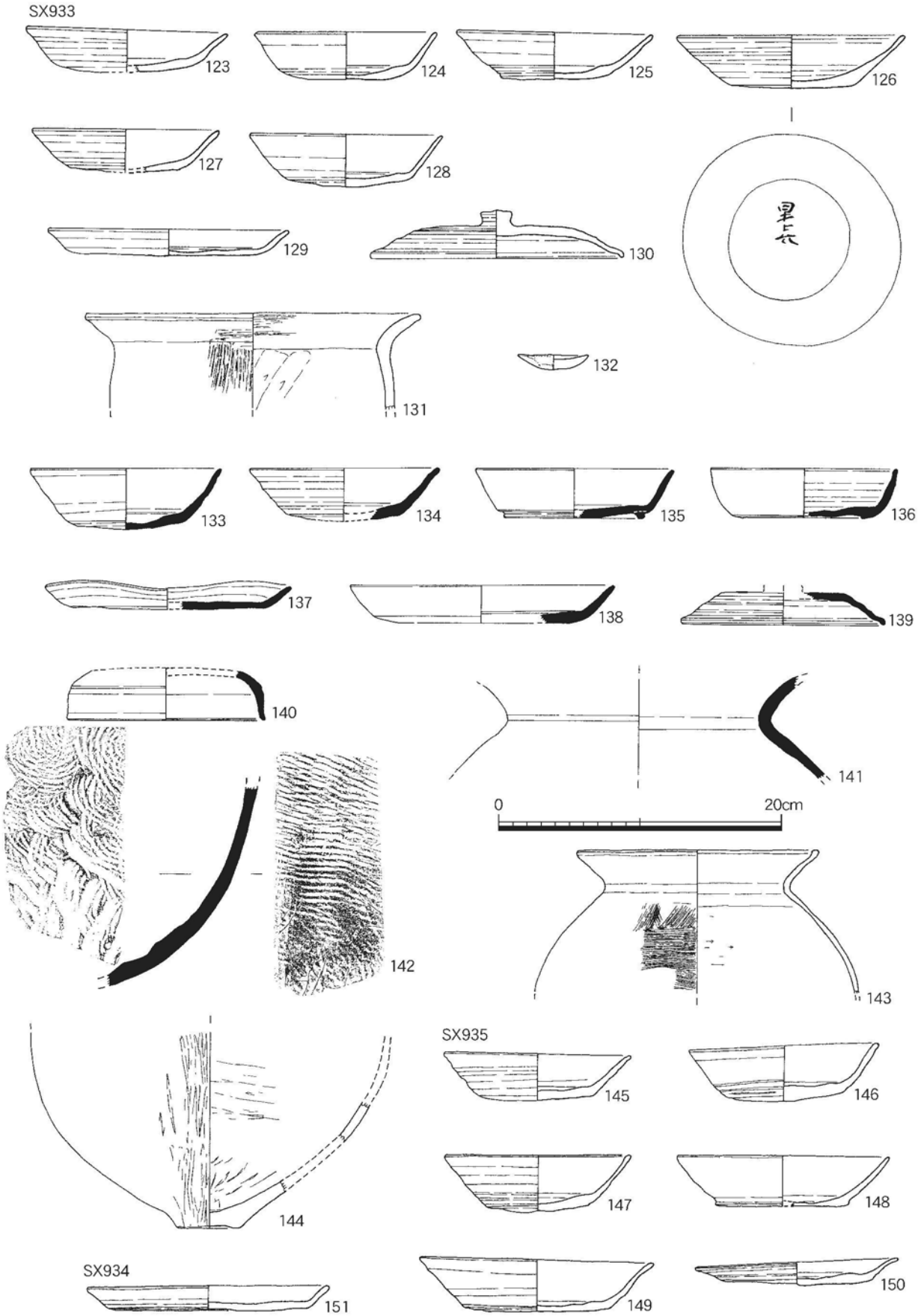



Fig.153　SX933～935 出土土器（1/4）

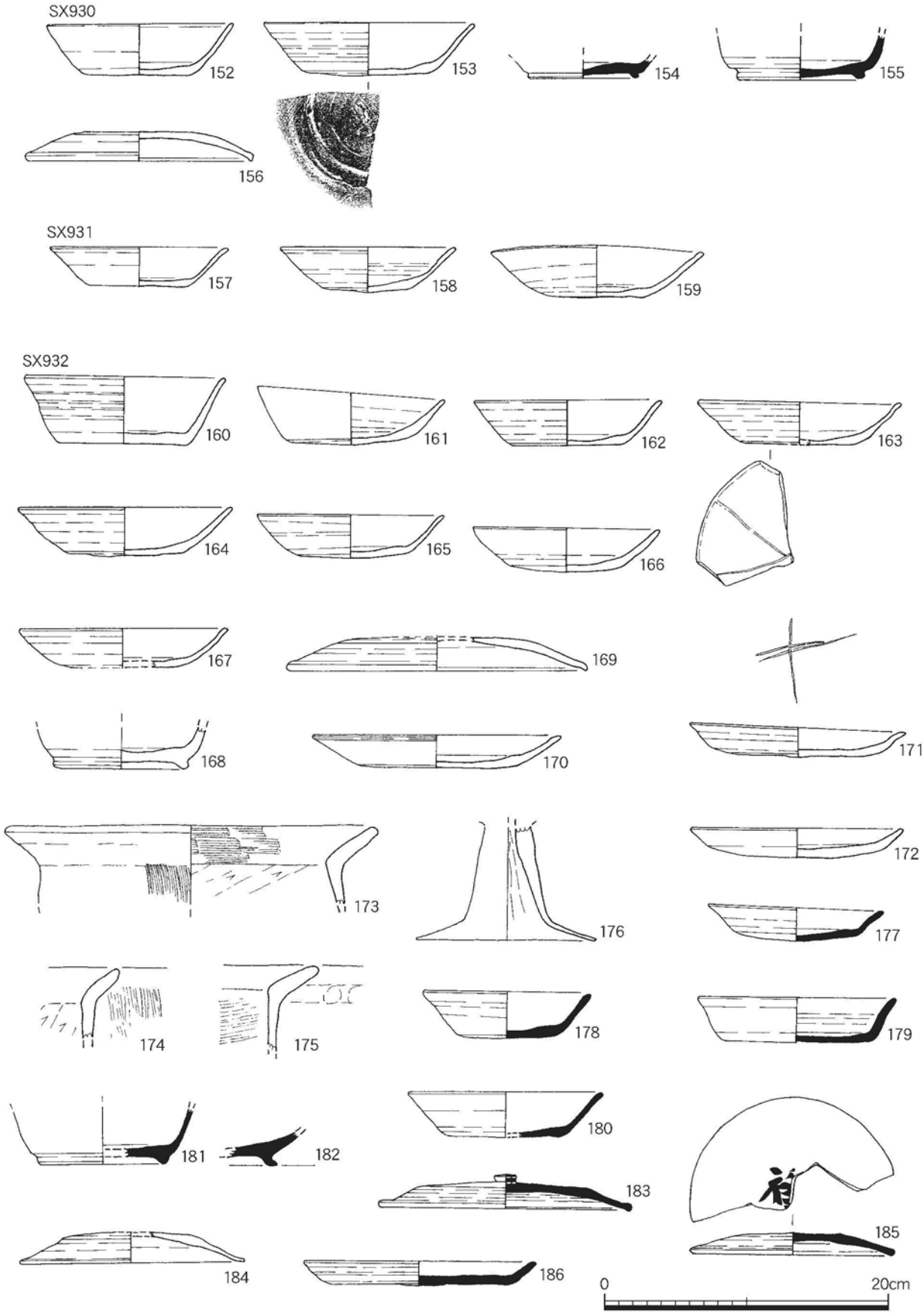



Fig.154　SX930・931・932-① 出土土器（1/4）

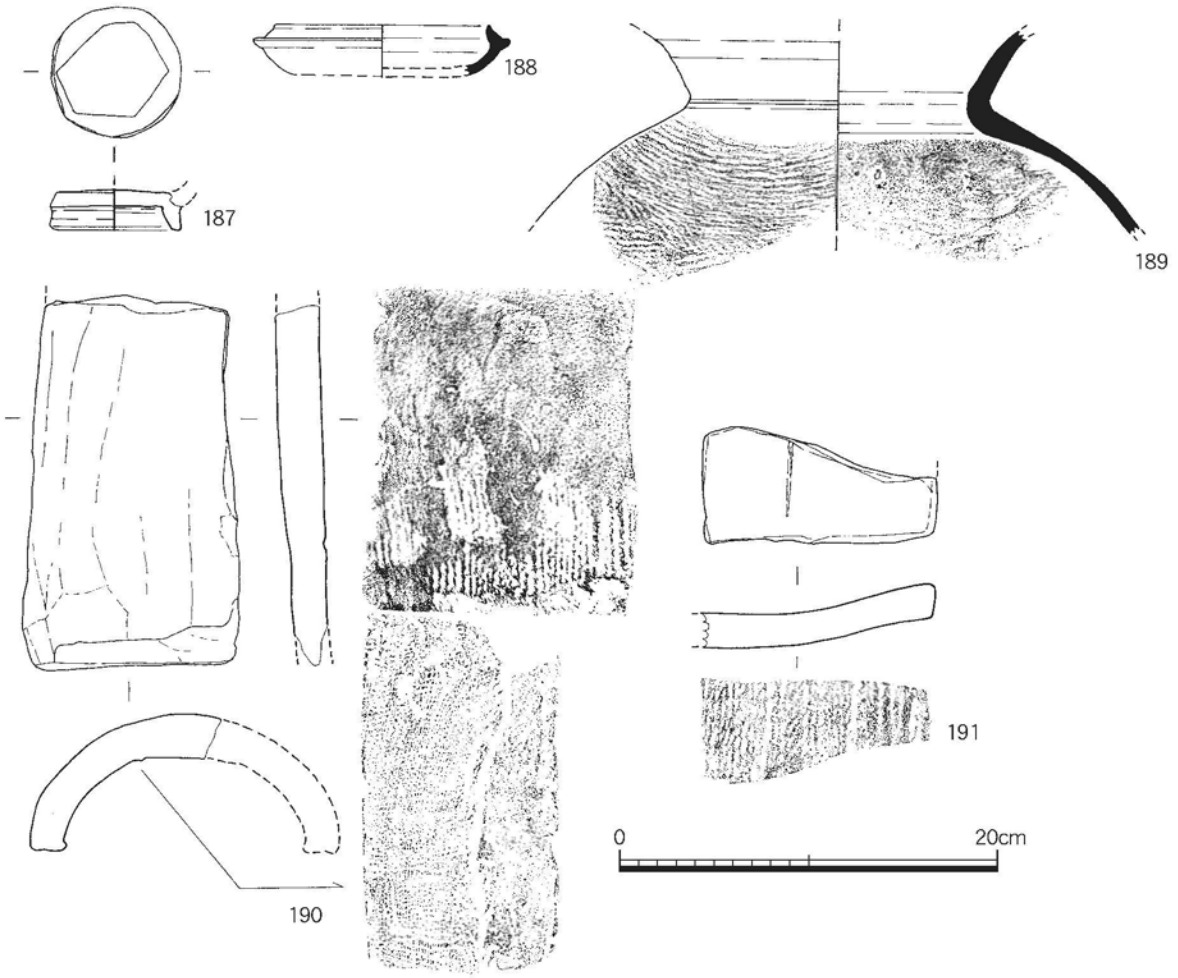



Fig.155　SX932 出土土器②（1/4）

表面の磨滅は著しい。W26は下駄。台と歯を一木から加工した連歯下駄。残存長17.5㎝、幅9.1㎝、高さ6.8㎝、台部厚さ1.2㎝を測る。歯は台形に削り出している。鼻緒の孔が３か所残り、前緒両側部分は指圧痕か凹んでいる。W27は細長い板材。残存28.3㎝、幅3.3㎝、厚さ0.7㎝を測る。表面は削りで平滑に仕上げる。板目材。W28は細長く削った板材。残存長24.8㎝、幅1.2㎝、厚さ0.3㎝を測る。下端側面削り加工痕残る。W29は板材で一端を細く削り加工する。残存長24.1㎝、幅6.3㎝、厚砂0.7㎝を測る。木製祭祀具の一部か。W30・31は曲物の底か蓋板。W30の残りは悪く、1/2 に満たない。周縁に１か所紐通し孔と紐が残る。W31は円形の板で直径18.7㎝、最大厚0.3㎝を測る。高さ3.4㎝の側板が 1/2 周程残る。側板を接合するための紐孔が２か所対で４か所残り、桜皮が残っている。板はスギの板目材である。W32は大形で楕円形を呈す曲物の底板と思われる一部。残存長44.2㎝、残存幅13.2㎝、厚さ1.2㎝を測る。周縁に沿って２か所づつ紐通し孔がある。樹種はスギ材である。W33は折敷の底板か。残存長58.0㎝、幅18.7㎝、厚さ0.3～0.5㎝を測る。薄い板材で、縁に１か所接合孔はあり、桜皮が残る。W36は横木に転用されていた建築材。全長327㎝、最大径は15.8㎝を測る。芯持ち材で、一端を削って尖らせる。全体に傷み、欠損が著しい。

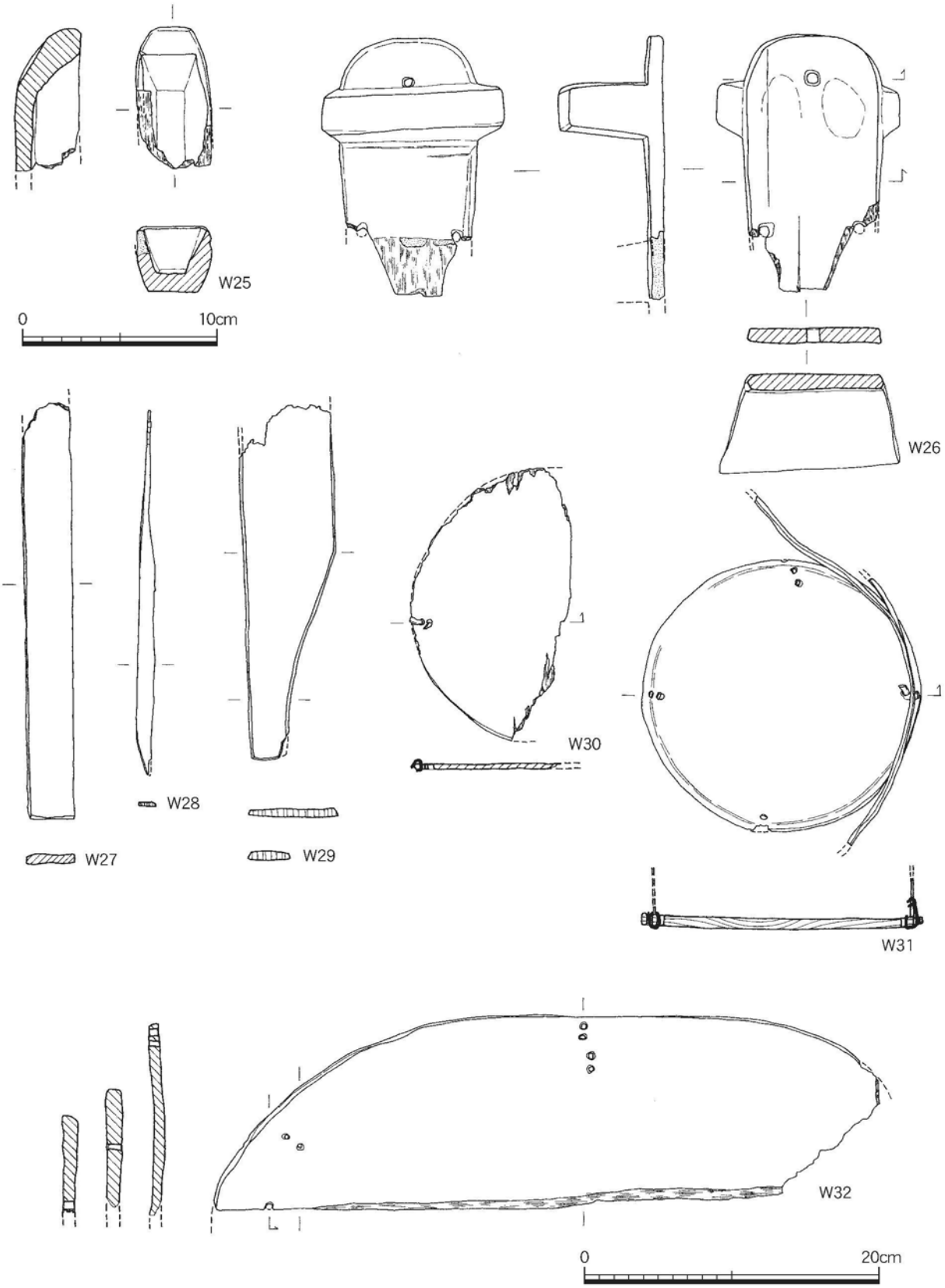



Fig.156　SX933 出土木器①（1/3・1/4）※W25は1/3

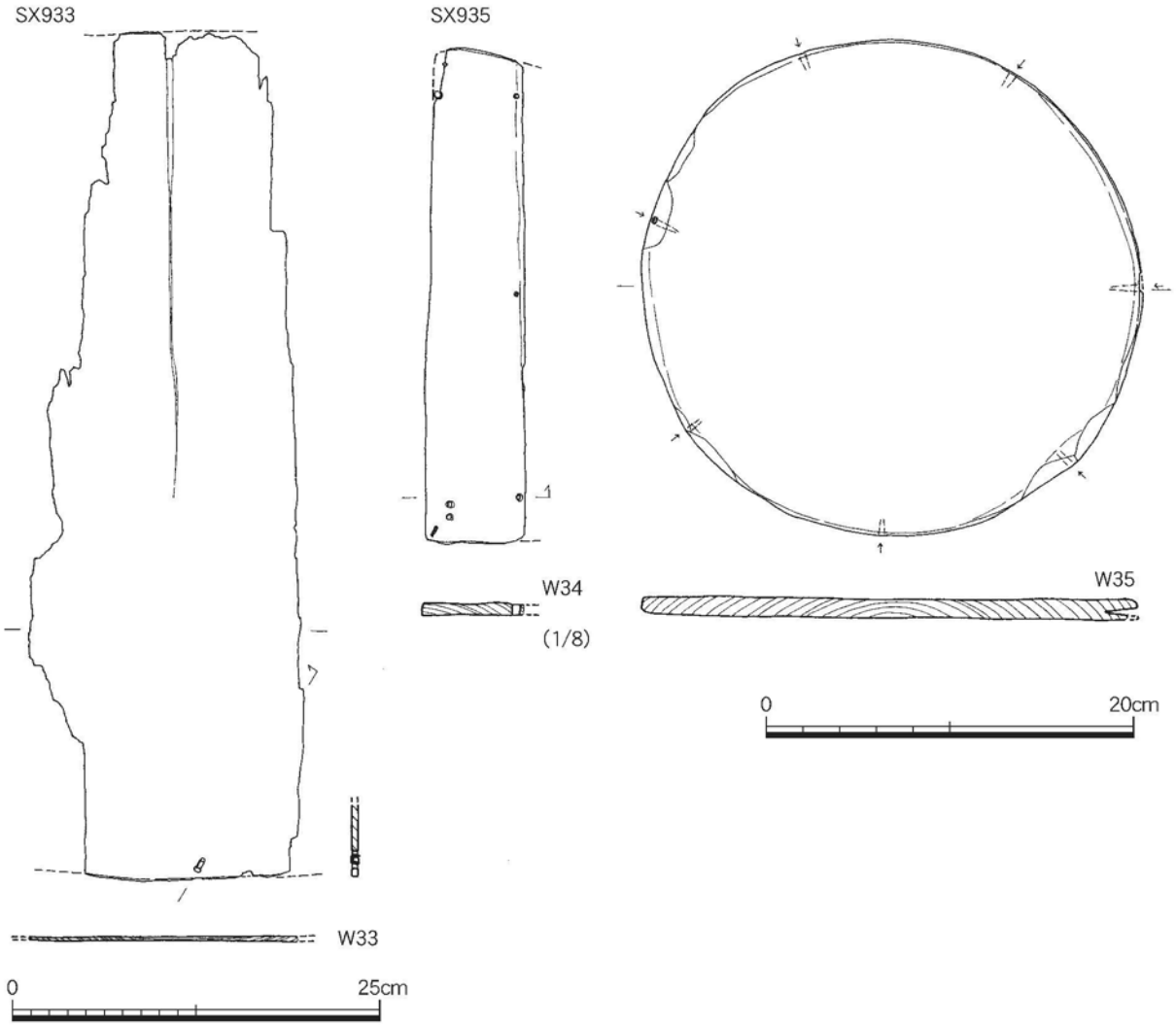



Fig.157　SX933-②・935 出土木器（1/4・1/5・1/8）

**SX935**（Fig.152、PL.67）

SX933 から 3 m程間をおいて構築された堰、幅 9 m、奥行き2.5mを測る。横2.5～ 4 m程の横木に長さ 2 m程の縦杭を打ち込んでいるが、洪水で流されたのか杭は疎まばらである。堰内には土器や木製品、木の葉・樹皮や小枝、植物の葉などが絡まっていた。使用材について 5 試料分析したが、コナラ・マツ属・クリ・タニウツギなどであった。

**出土遺物**（Fig.153・157、PL.116）　弥生時代中期から後期の土器、古墳時代土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器などが周辺、内部から出土している。

145～150は土師器。145～149は平底の坏。145・146は完存である。体部の開きは大きい。8 世紀後半から 9 世紀のもの。口径は13.0～14.8㎝、器高は3.5～4.2㎝を測る。調整は外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内底面はナデ。150は皿 1/4 片。復元口径は14.0㎝、器高1.9㎝を測る。体部が外反して開く形態。外底部は回転ヘラケズリ、体部から内面は回転ヨコナデ。9 世紀前半のもの。

W13・14は紡織具の部材。残存長は9.6㎝・14.7㎝、幅3.6㎝・3.3㎝、厚さは 1 ㎝を測る。表面は羽子板状に削り出し、平滑に仕上げる。W34は薄い板材で、残存長54.0㎝、幅10.8㎝、厚さ0.7㎝を測る。

Fig.158　SX933-③・934 出土木器（1/5・1/8・1/12）※W36は1/12、W40は1/8

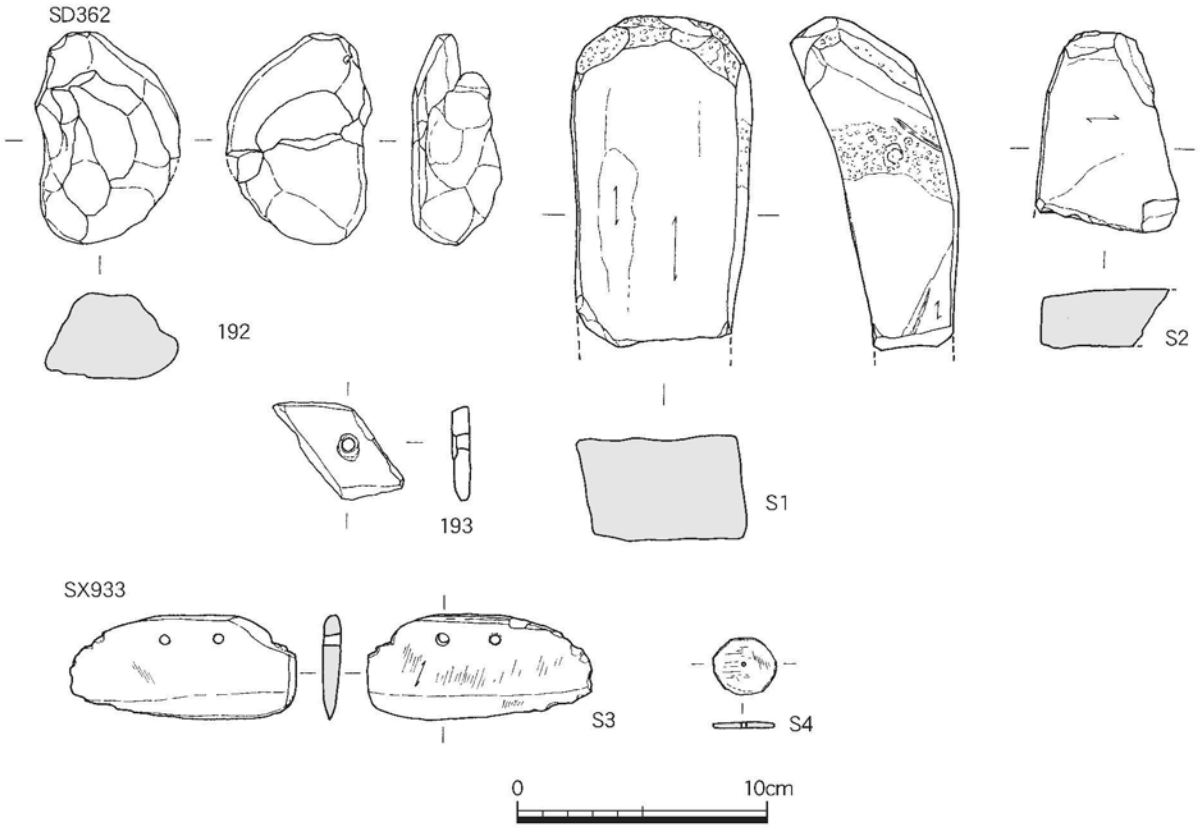



Fig.159　SD362・SX933 出土土製品・石器・石製品（1/3）

孔が 2 か所残る。W35は曲物の底板。直径27.0㎝を測る。側面に釘孔が残り、所々焼け炭化する。板目材である。

## ③　簗状遺構

**SX934**（Fig.160、PL.69）

SD362 西岸沿いで検出した簗状の枠組み。枠組みの大きさは縦長3.15m、横幅1.2m を測る。雑木を格子状に組んだ遺構で、南側外枠は幅10㎝程の材であり、その中に縦 8 列、横 2 列に芯持ちの小木を組んで骨組みを作り。その間に小枝を網代状に組んでいたようである。縦の骨組みの木は南側の形枠に差し込んでおり、横木と交差する部分はやや凹んでいる。流路に沿っており、簗のような漁労遺構であろうか。使用された材の樹種はクスノキ、バラ科ナシ亜科、アワブキ属サカキ、イネ科タケ亜科などであった。

**出土遺物**（Fig.153・158、PL.116）　弥生土器から古墳時代、古代の土師器・須恵器が少量出土している。

151は土師器の皿で完存である。やや歪むが口径は17.1㎝、器高1.7㎝を測る。外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内底面はナデ。

W37～40は中に縦に組まれていた骨組み。残りは余り良くない。長さは89.0～111.0㎝、径は 2 ～ 3 ㎝程の芯持ちの枝のような小木で、両端部に削り加工がある。W37・38のいずれも表面には樹皮が残る。W40は横に組まれていた骨組み。長さ149.8㎝、径5.0㎝を測る。一端は削り加工で拳状に削り出す。

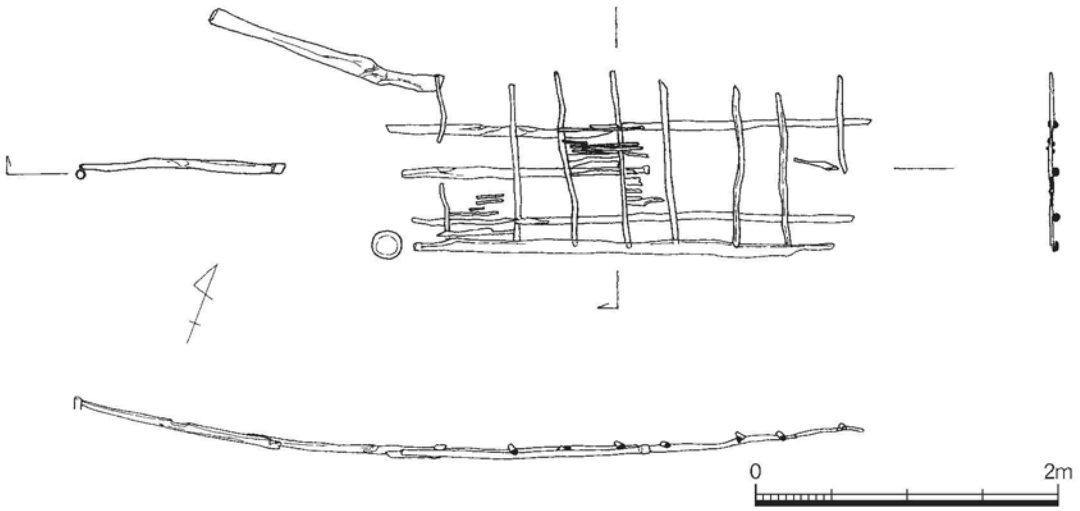



Fig.160　SX934（1/50）

## ④　その他の遺構

### SX930

SX395の周辺の落込み。本来SX395と関連すると思うが、別々に報告する。SX395で塞き止められた流れが結果であろう。

**出土遺物**（Fig.154）　弥生土器から古墳時代・古代の土師器・須恵器が少量出土している。

152・153は土師器の坏。平底で体部の開きが大きい。口径は13.0㎝・14.8㎝、器高は3.8㎝を測る。調整は回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内面はナデ。152は焼成がやや不良。154・155は低い高台が付く坏。復元高台径は7.7㎝。調整はいずれもナデである。8世紀前半のもの。156は摘みの無い蓋1/4片。復元口径は16.0㎝を測る。端部はやや尖る。天井部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内面はナデ。ヘラ記号がある。

### SX931

SX395北側の調査区西壁で検出した落込み。流れによって作られた窪みである。

**出土遺物**（Fig.154）　弥生土器から古墳時代・古代の土師器・須恵器が少量出土している。

157～159は土師器の坏で9世紀のもの。いずれも平底で、体部の開きが大きい。口径は12.4㎝・12.2㎝・14.6㎝、器高は2.8㎝・3.2㎝・3.8㎝を測る。157・158は口径が小型化しており、9世紀後半か。調整は外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内底面はナデで、158の底面にはヘラ記号がある。159は板状圧痕が残る。

### SX932

護岸杭列SX933の西側の落込みである。埋土は粗砂が主体で、植物なども入っていた。

**出土遺物**（Fig.155、PL.111・112・114）　弥生土器から古墳時代・古代の土師器・須恵器が少量出土している。

160～176は土師器。160～167は坏。160は底の深い坏で、復元口径14.2㎝、器高4.8㎝を測る。外底部はナデで粘土巻上げ痕が残り、体部から内底迄は回転ヨコナデ。内面にはススが付着する。8世紀後半のもの。161～164は平底から体部が開く形態。165～167は平底であるがやや丸みを持つ形態。161～164口径13.0～15.0㎝、器高3.1～4.2㎝を測る。165～167は口径13.0～14.6㎝、器高は2.8～3.3㎝を測る。調整はおおよそ外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内底面はナデ。163の

底部にはヘラ記号がある。168は坏で短い断面コ字形の高台がつく。1/2片で、復元高台径は9.5cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。169は蓋1/3片。大形の扁平な形態で、口縁端部は折れ直立する。復元口径は21.0cmを測る。天井部回転ヘラケズリ、体部から内面は回転ヨコナデとナデ。内面に黒いしみが付く。170～172は皿。170はやや大形で復元口径は17.2cm、器高2.4cmを測る。底部は平底。171は体部がやや外反し、口縁は傾く。口径は14.8cm、器高2.5cmを測る。172の底部はやや丸みを持つ。復元口径14.6cm、器高2.1cmを測る。調整は外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内底面はナデ。171の底には粘土巻上げ痕が残りヘラ記号がある。173～175は甕口縁部で、8世紀代のもの。173は1/4片、174・175は細片。173は復元口径26.2cmを測る。調整は、173・174は胴外面が粗いハケメ、内面はケズリ、口縁部は内面が粗いヨコハケメ、外面にはススが付着する。175は胴部内面ハケメ、外面はナデでススが付着する。176は脚部が屈折し外に開く高坏脚部で、脚端径12.6cmを測る。内面にはしぼり痕が残る。古墳時代中期前半のもの。

177～186は須恵器。177～180は坏。177・178は小型で、口径は12.1cm・11.6cm、器高は2.8cm・3.5cmを測る。178は体部が外反する形態で、復元口径は13.6cm、器高は3.2cmを測る。調整はいずれも外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内面はナデ。焼成はやや不良である。8世紀のもの。177の外底部には墨書痕が残る。180は1/3片で、復元口径13.6cm、器高3.3cmを測る。調整は底部雑なナデ、体部が回転ヨコナデ、内面はナデ。181は高台の付く坏。底部1/3片で復元高台径は9.0cmを測る。調整は回転ヨコナデ。8世紀前半のもの。182は壺の高台部細片か。調整は回転ヨコナデ。8世紀前半のもの。183～185は蓋。183は1/3片で、復元口径は17.2cm、器高2.5cmを測る。擬宝珠形の摘みが付く形態で、口縁部は直に屈折する。天井部ヘラケズリ後雑なナデ。体部は回転ヨコナデ、内面はナデ。内外面酸化鉄分が付着する。8世紀前半。184は体部が開く。復元口径15.8cm、器高2.2cmを測る。185は184より器高が低い。復元口径14.2cm、器高1.5cmを測る。いずれも調整は天井部回転ヘラケズリ、体部回転ヨコナデ。185の天井には判読出来ないが、「福」と思われる墨書が残る。時期はいずれも9世紀前半のもの。186は皿1/3片で、復元口径16.2cm、器高1.7cmを測る。外底部ナデ、体部は回転ヨコナデ、内面はナデ。8世紀後半のもの。

187は内面燻しの黒色土器A類椀の底部片。復元高台径6.8cmを測る。調整は高台部回転ヨコナデ、内底面はミガキである。188・189は須恵器。188は坏身1/6片。復元口径は13.6cmを測る。体部から口縁部の調整は回転ヨコナデ。6世紀末頃のもの。189は甕頸胴部片。調整は頸部回転ヨコナデ、胴部外面は細かい平行叩き、内面は当て具痕をナデ消す。190・191は瓦。190は丸瓦片。残存長20cm、復元幅16.2cm、器高7.3cmを測る。凸面ナデで縄目が残る。凹面は布目痕が残る。側面・端部はヘラ切り調整。色調は灰黄色を呈すが須恵質の焼きである。191は平瓦細片。残存幅12.2cm、厚さ1.8cmを測る。磨滅し調整は不明であるが、凸面縄目叩きが残る。表面に酸化鉄分が付着し、焼成はやや不良で、色調は浅黄色を呈す。

### ⑤ 包含層（Fig.161～164、PL.70・112・113）

SD362川底が黒褐色の包含層となっており、掘下げを行った結果、弥生時代後期を中心とする土器が多く出土したので報告する。一部、川の時代の遺物も混入しているので併せて報告する。

194～199は土師器。8世紀後半から9世紀前半のもの。194・195は坏。194は体部がやや内湾して開き、195は直に開く形態。復元口径は13.1cm・14.0cm、器高は2.8cm・3.45cmを測る。いずれも調整は外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内底面はナデで、195の底部には叩き痕が残る。196・197は皿。196は底部が丸みを持ち、体部が大きく開く形態。口径は14.5cm、器高2.5cmを測

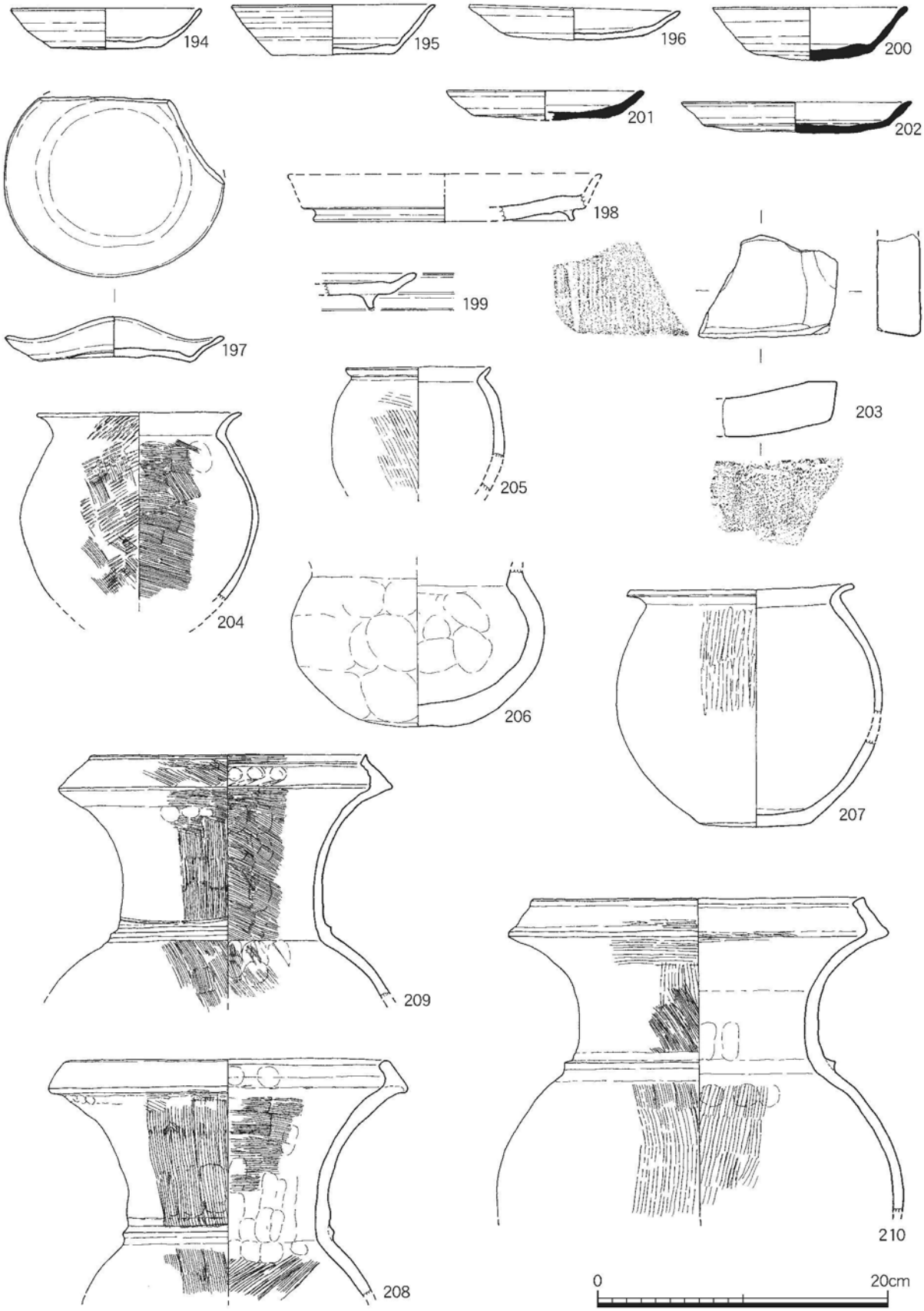



Fig.161　包含層出土土器①（1/4）

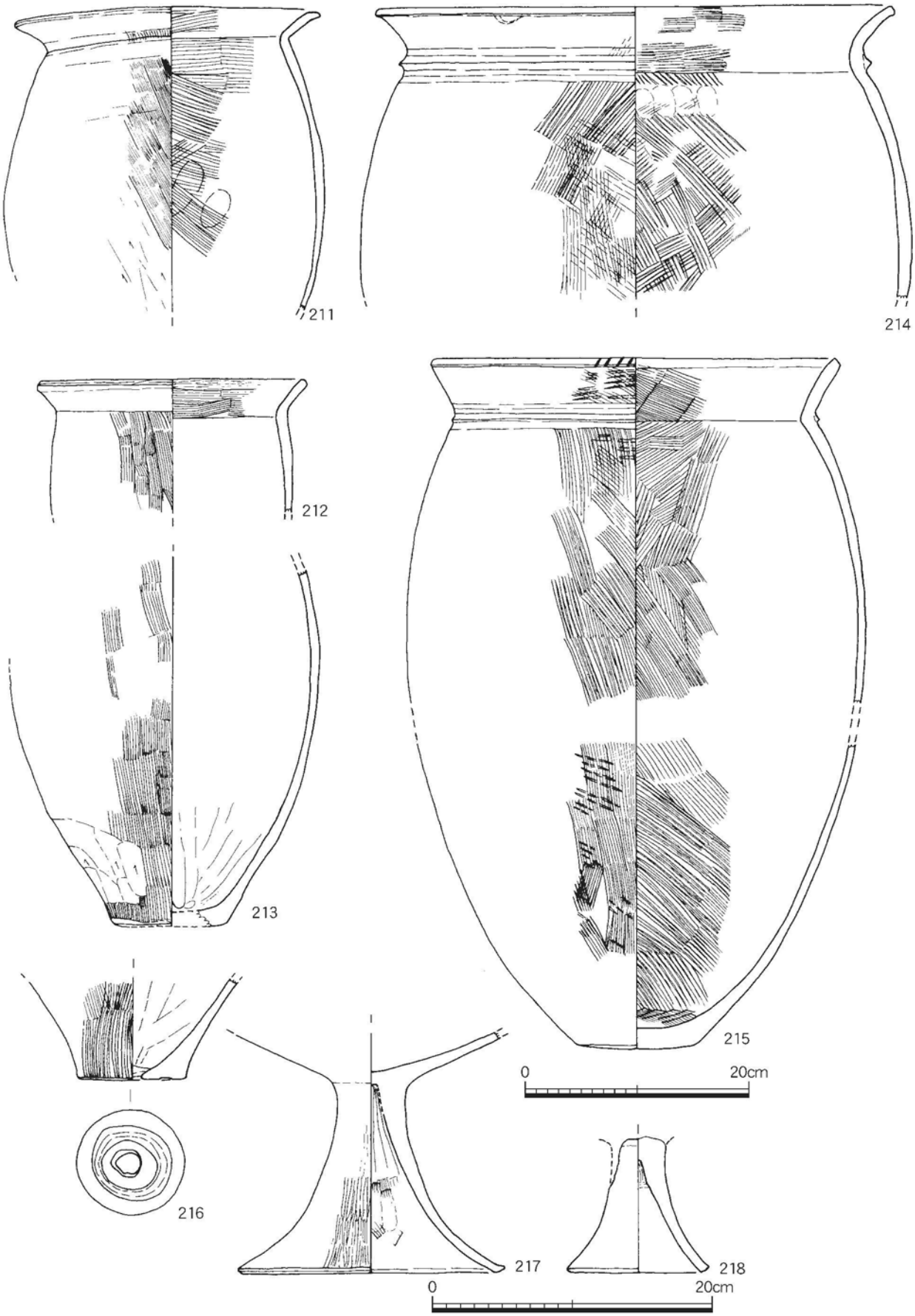



Fig.162　包含層出土土器②（1/4・1/5）※215は1/5

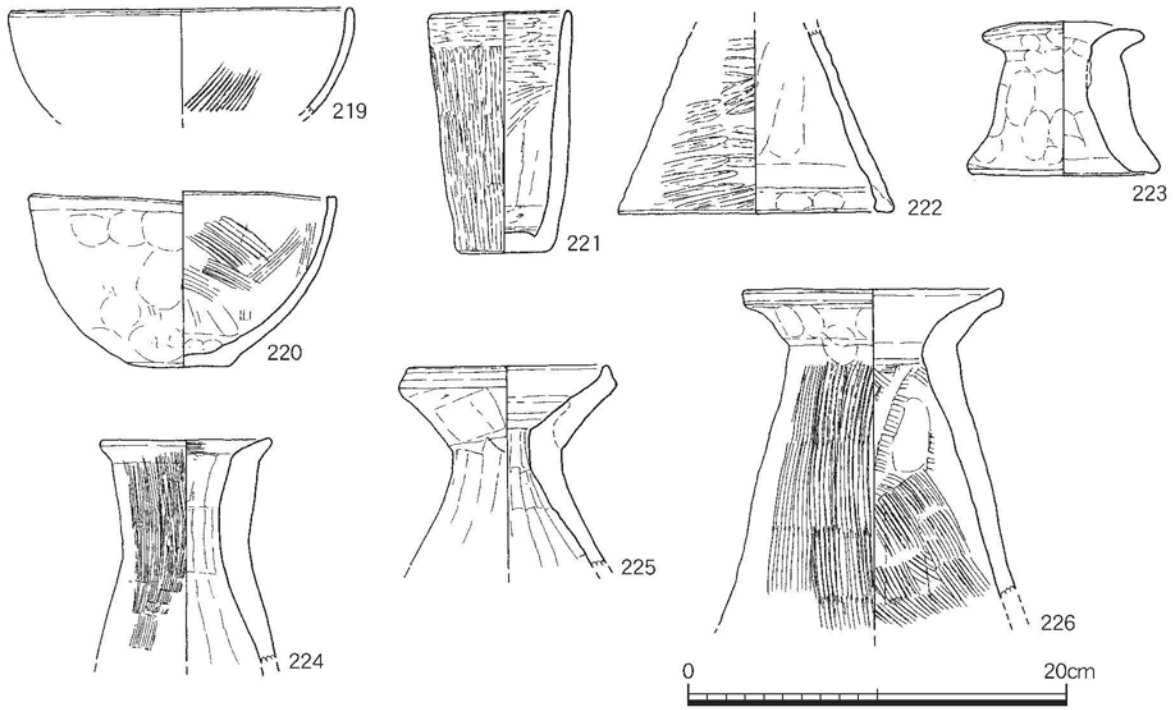



Fig.163　包含層出土土器③（1/4）

る。197は大きく歪む形態。口径は15.0cm、器高は1.5～3.0cmを測る。調整は外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内底はナデ。198は高台が付く大形の皿。復元高台径17.8cmを測る。調整ややや磨滅するがナデ。いずれも8世紀後半から末のもの。199は高台が付く皿の底部細片。

200～202は須恵器。200は坏で口径13.1cm、器高3.7cmを測る。口縁部は黒化する。底部はやや丸みを持ち、法量から9世紀前半頃のもの。201・202は皿。口径は13.6cm・15.6cm、器高は2.0cm・2.15cmを測る。調整は外底部回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ、内面はナデ。小型化し9世紀前半のもの。203は厚さ2.8cmを測る須恵質の平瓦片。凹面布目痕、凸面は縄目叩きで、側面は丁寧な面取りケズリ仕上げ。

204～226は弥生土器。204・205は甕。204は庄内式土器の甕1/3片。復元口径14.0cmを測る。調整は口縁部から胴部外面叩き後細かいハケメ、内面はナデと胴部は細かいハケメで、当て具痕のような丸い窪みが残る。205は小型の短頸甕で、口径は9.8cmを測る。外面かなり磨滅するがナナメの粗いハケメ、内面調整不明。206～210は壺。206は胴底部で、底部は丸みを持つ平底。器壁は磨滅するが、厚手で武骨な作りで、指押さえ痕が残る。最大7㎜程度の粗砂粒を多く混入する。207は短頸の壺で、口縁部など所々欠くがほぼ完存する。口径15.3cm、器高16.8cmを測る。調整は胴部外面丁寧なタテミガキ、口縁部から内底までと外底部はナデである。胴部下半には黒斑が1か所ある。208～210は弥生時代後期中頃の複合口縁壺。いずれも頸部に1条の三角突帯が付く。口径は22.0cm・18.8cm・22.6cmを測る。調

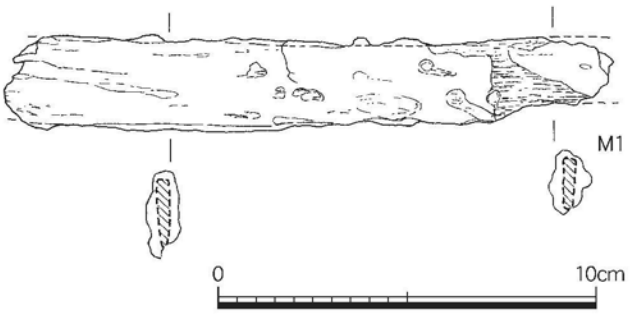



Fig.164　包含層出土鉄器（1/2）

整は外面ハケメ、内面はハケメやナデで、指押さえ痕が残る。208には口縁部内面には工具痕が残る。211～216は後期の甕。211は最大胴径を中央やや下に持つ長胴の甕。歪みが大きい。復元口径は21.6㎝を測る。調整は外面胴部上半がナナメのハケメ後ヨコナデ、胴下半が板ナデ。口縁部外面はハケメをナデ消し、内面は胴部中央迄ハケメ、下半はナデ。212・213は長胴の甕で、同一個体の可能性が強いが歪みが大きく、接合・図面でも復元できないので、別々に報告する。212は復元口径19.0㎝を測る。調整は胴部外面がタテハケメで、213の底部近くはケズリを加える。胴上半はハケメをナデ消すが、212ではハケメが密に入る。口縁部は外面ナデ、内面はヨコハケメ、胴内面は丁寧なナデで、胴の底部近く下から指でナデ上げる。214・215は大形の甕。いずれも頸部に１条の三角突帯が付く。214は1/4片で復元口径36.6㎝を測る。胴部内外面粗いハケメ、口縁部外面はハケメをヨコナデで消す。内面は粗いヨコハケメ後ナデ。215は復元完存で、復元口径は36.6㎝、器高62.0㎝を測る。胴部最大径は上半にある。胴部内外面粗いハケメで、肩部から口縁部には叩き痕が残る。口縁部内外面はハケメ、口唇部にはヘラによる刻みが付く。216は後期の甕底部。底部中央に径２㎝程の焼成後の穿孔がある。底部は雑なナデ。胴部は密なタテハケ、内面はナデ。217・218は高坏脚部。いずれも脚がラッパ状に開く形態。217は大形で復元脚裾径19.0㎝を測る。外面タテミガキ、内面タテハケメ後ナデ。坏部内面は丁寧なナデでやや磨滅する。218は小型で磨滅し調整は不明。弥生時代後期前半か。219・220は同形態の椀形の鉢。219は口径18.2㎝を測る。表面は磨滅するが、内面には粗いハケメが残る。220はほぼ完存。口径は16.3㎝、器高は9.4㎝を測る。調整はナデで、内面には粗いハケメ、底部には指押さえ痕が残る。中期後半のものか。221は完存のコップ形土器である。口径7.5㎝、器高12.8㎝を測る。体部外面から内面上半は丁寧なヘラミガキ、内面下半は工具によるナデと内底境はケズリ、外底部もナデ。作りが良く、祭祀土器であろう。222～226は器台。222は弥生終末頃か。器壁は薄手で、外面平行叩きで、内面はナデ。223は小型の器台。復元口径8.4㎝、器高8.1㎝を測る。厚手で指押さえ痕が明瞭に残る。224は屈曲が体部上方にあり、口縁が外折する器形。復元口径は9.0㎝を測る。外面細かいタテハケメ、内面指ナデ調整である。225・226は屈曲部が口縁部下にある。225は口端部が上方に跳ね上がる。調整は外面から口縁部内面まで工具によるナデ、体部内面はナデ。226は大形で、復元口径13.2㎝を測る。体部外面は粗いタテハケメ、口縁部はヨコナデ、体部内面は雑なナデ後粗いハケメを加える。

M1は鉄製小刀の一部。残存長15.8㎝、最大幅2.4㎝、刃厚約0.4㎝を測る。全体に錆がひどいが木質が残り、鞘の痕跡と思われる。右端に段がつき、茎と思われる。

## 土器・土製品

### Tab.4　第2区出土遺物観察表

| 報告番号 | Fig. | PL. | 出土遺構 | 出土位置 | 器種・器形 | 法量（cm）[ ]は復元・残存 | | | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径・長さ | 底径・幅 | 器高・厚さ | | | | | |
| 1 | 143 | | SD362 | 上層 | 黒色土器A類・椀 | (14.8) | | (4.1) | 粗砂少量混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 口縁部1/6残存 | |
| 2 | 143 | 107 | SD362 | 上層 | 土師器・Ⅲ | 14.8 | 10.6 | 2.2 | 精良 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 口縁部一部欠 | |
| 3 | 143 | | SD362 | 上層 | 土師器・Ⅲ | (14.8) | (13.0) | 1.6 | 精良 | 鈍い褐色 | 良好 | 1/3残存 | |
| 4 | 143 | 107 | SD362 | 上層 | 須恵器・坏 | 13.1 | 8.8 | 4.2 | 精良、僅かに白色細砂粒混入 | 灰色・灰白色 | 良好 | 完存 | |
| 5 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | (13.4) | (8.6) | 3.15 | 精良 | 鈍い橙色 | 普通 | 1/3残存 | |
| 6 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | 13.6 | 8.4 | 4.3 | 赤色粒子多量混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | ほぼ完存 | |
| 7 | 143 | | SD362 | | 土師器・坏 | (12.6) | (7.8) | 2.8 | 2㎜内砂粒少量混入 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 1/4残存 | |
| 8 | 143 | | SD362 | | 土師器・坏 | 13.5 | 6.6 | 3.3 | 精良、橙色 | 鈍い黄橙色 | 普通 | ほぼ完存 | |
| 9 | 143 | | SD362 | 粗砂 | 土師器・坏 | (12.6) | (6.4) | 2.0 | 精良 | 鈍い褐色 | 良好 | 1/5残存 | |
| 10 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | 12.5 | 7.3 | 3.3 | 精良、赤褐色粒子少量混入 | 灰黄褐色 | 良好 | 口縁部3/4残存 | |
| 11 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | (14.2) | (6.0) | 3.2 | 精良、粗砂少量混入 | 灰褐色 | 良好 | 口縁部1/6残存 | |
| 12 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | 13.2 | 8.8 | 3.9 | 精良、金雲母僅かに混入 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 底部1/2残存 | |
| 13 | 143 | 107 | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | 13.3 | 8.2 | 3.7 | 精良 | 灰黄色 | 普通 | 1/3残存 | |
| 14 | 143 | 107 | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | (13.0) | (8.6) | 4.1 | 精良、黒色粒子少量混入 | 鈍い黄色 | やや不良 | 1/2残存 | |
| 15 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | (12.2) | (6.4) | 3.85 | 2㎜内砂粒少量混入 | 褐灰色 | やや不良 | 1/4残存 | |
| 16 | 143 | 107 | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | 13.1 | 7.2 | 3.4 | 1㎜内外砂粒少量混入 | 灰黄色 | 良好 | 1/3残存 | |
| 17 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | (13.5) | 8.8 | (3.3) | 精良 | 鈍い黄橙色～鈍い橙色 | 普通 | 底部片 | |
| 18 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | 13.6 | 8.4 | 4.3 | 赤色粒子多量混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | ほぼ完存 | |
| 19 | 143 | 107 | SD362 | R-5 | 土師器・坏 | 13.4 | 9.75 | 4.1 | 1㎜内外白色砂粒少量混入 | 灰白～黄灰色 | 良好 | ほぼ完存 | |
| 20 | 143 | | SD362 | | 土師器・坏 | 13.8 | 7.8 | 3.6 | 赤色粒子・金雲母少量混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 1/3残存 | |
| 21 | 143 | 107 | SD362 | | 土師器・坏 | 13.3 | 内底7.7 | 3.6 | 精良 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 1/2強存 | |
| 22 | 143 | 107 | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | (13.4) | 7.6 | 3.7 | 精良、僅かに砂粒混入 | 灰褐～鈍い橙色 | 良好 | 3/4残存 | |
| 23 | 143 | 107 | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | (13.1) | 7.9 | 4.05 | 精良、1～2㎜白色砂粒・赤色粒子混入 | 灰褐～橙色 | 良好 | 2/3残存 | |
| 24 | 143 | | SD362 | | 土師器・坏 | | 8.2 | (3.0) | 精良 | 浅黄橙色 | やや不良 | 底部片 | |
| 25 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | (14.6) | | 4.0 | 1㎜内外砂粒混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 1/2残存 | |
| 26 | 143 | 107 | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | 14.7 | | 3.9 | 1㎜内外砂粒混入 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 完存 | |
| 27 | 143 | 107 | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | (14.2) | | 4.1 | 2㎜内砂粒やや多く混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 1/3残存 | |
| 28 | 143 | 107 | SD362 | | 土師器・坏 | (13.2) | | 3.4 | 精良 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 1/2残存 | |
| 29 | 143 | | SD362 | | 土師器・坏 | (12.8) | | 3.6 | 精良 | 灰褐色 | 普通 | 1/3残存 | |
| 30 | 143 | 107 | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | (14.3) | | 3.4 | 2㎜内砂粒少量混入 | 鈍い橙色 | 普通 | 1/3残存 | |
| 31 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | (13.6) | (9.0) | 3.9 | 精良 | 鈍い黄褐色 | 普通 | 1/2残存 | |
| 32 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | (13.0) | (7.0) | 4.0 | 精良 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 1/4残存 | |
| 33 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・坏 | (13.6) | | 3.05 | 0.5～3㎜砂粒混入 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 1/6残存 | |
| 34 | 143 | 107 | SD362 | R-1 | 土師器・高台付坏 | 14.3 | 8.1 | 5.4 | 精良、白色砂粒・金雲母微粒・赤色粒子僅かに混入 | 鈍い橙色、底部：黄橙色 | 良好 | 完存 | |
| 35 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・高台付坏 | | (9.0) | (2.7) | 精良 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 1/2残存 | |
| 36 | 143 | 108 | SD362 | 下層 | 土師器・高台付坏 | (15.0) | 8 | 5.9 | 精良、赤色粒子混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 1/2残存 | |
| 37 | 143 | | SD362 | | 土師器・高台付坏 | | (7.5) | (2.3) | 精良 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 底部1/2残存 | |
| 38 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・高台付坏 | | (10.8) | (2.15) | 精良、白色細砂粒僅かに混入 | 浅黄橙色 | 良好 | 底部1/4残存 | |
| 39 | 143 | 108 | SD362 | 粗砂 | 土師器・鉢 | (18.2) | | (7.6) | 精良 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 1/4残存 | 脚が付くと思われる |
| 40 | 143 | | SD362 | 下層 | 土師器・Ⅲ | (15.0) | (9.2) | 2.0 | 精良 | 灰黄色 | 普通 | 1/3残存 | |
| 41 | 143 | | SD362 | | 土師器・Ⅲ | (14.0) | | 1.75 | 赤色粒子混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 口縁部1/6残存 | |
| 42 | 143 | 108 | SD362 | 下層 | 土師器・Ⅲ | 14.9 | | 2.3 | 赤色粒子少量混入 | 鈍い黄色 | 良好 | 完存 | |
| 43 | 143 | 108 | SD362 | 下層 | 土師器・Ⅲ | 15.1 | | 1.2～2.8 | 粗砂やや多く混入 | 浅黄色 | 普通 | ほぼ完存 | |
| 44 | 143 | 108 | SD362 | 下層 | 土師器・Ⅲ | (14.8) | 11.9 | 1.9 | 1～5㎜粗砂混入 | 灰黄色 | 普通 | 1/3残存 | |
| 45 | 144 | 108 | SD362 | 下層 | 土師器・Ⅲ | 15.4 | | 2.4 | 粗砂少量混入 | 鈍い橙色 | 普通 | 口縁部1/4欠 | |
| 46 | 144 | | SD362 | 下層 | 土師器・Ⅲ | (14.8) | (11.2) | 1.7 | 1㎜内外砂粒少量混入 | 灰黄色 | 普通 | 1/3残存 | |

| 報告番号 | Fig. | PL. | 出土遺構 | 出土位置 | 器種・器形 | 法量（cm）( )は復元・残存 | | | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径・長さ | 底径・幅 | 器高・厚さ | | | | | |
| 47 | 144 | 108 | SD362 | 下層 | 土師器・皿 | (17.1) | 13.3 | 2.1 | 精良 | 鈍い褐色 | 良好 | 1/2 残存 | |
| 48 | 144 | 108 | SD362 | 下層 | 土師器・皿 | (15.9) | 12.4 | 1.8 | 2 mm内砂粒僅かに混入 | 鈍い橙～黒褐色 | 良好 | 1/6 残存 | |
| 49 | 144 | | SD362 | 下層 | 土師器・皿 | (16.2) | (14.2) | 2.1 | 精良、金雲母粒僅かに混入 | 鈍い橙色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 50 | 144 | | SD362 | 下層北壁トレンチ | 土師器・甕 | (30.0) | | (16.5) | 粗砂多量混入 | 暗灰黄色 | 良好 | 口縁部～胴部 1/5 残存 | |
| 51 | 144 | | SD362 | | 土師器・甕 | (25.0) | | (6.8) | 2 mm内砂粒多量混入 | 鈍い橙色 | 普通 | 1/8 残存 | |
| 52 | 144 | | SD362 | | 土師器・甕 | (12.3) | | (5.3) | 粗砂粒少量混入 | 鈍い橙色 | 普通 | 口縁部 1/4 残存 | |
| 53 | 144 | | SD362 | 下層 | 土師器・蓋 | (16.2) | | (1.6) | 精良 | 暗灰黄色 | 良好 | 蓋 1/8 残存 | |
| 54 | 144 | | SD362 | 下層北壁トレンチ | 須恵器・坏 | (13.2) | (8.4) | 3.1 | 精良 | 灰色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 55 | 144 | | SD362 | 下層 | 須恵器・坏 | (13.0) | (6.6) | 3.8 | 精良 | 灰色 | やや不良 | 1/4 残存 | |
| 56 | 144 | 108 | SD362 | 下層 | 須恵器・坏 | (12.4) | (7.0) | 3.45 | 精良、胎土密 | 灰色 | やや不良 | 1/3 残存 | |
| 57 | 144 | | SD362 | 下層 | 須恵器・坏 | | (8.4) | (2.6) | 精良 | 灰白色 | 普通 | 底部 1/4 残存 | |
| 58 | 144 | 108 | SD362 | 粗砂中 | 須恵器・坏 | | 7.3 | (1.4) | 粗砂粒少量混入 | 明黄褐色 | 良好 | 底部 | |
| 59 | 144 | | SD362 | 下層 | 須恵器・坏 | | | | 2 mm内砂粒多量混入 | 灰色 | 良好 | 底部小片 | 墨書の痕跡あり |
| 60 | 144 | 108 | SD362 | 下層 | 須恵器・高台付坏 | | 9.2 | (2.9) | 粗砂粒多量混入 | 灰色 | 良好 | 底部片 | |
| 61 | 144 | | SD362 | 下層 | 須恵器・高台付坏 | (13.4) | (8.9) | 4.45 | 精良、白色細砂粒僅かに混入 | 黄灰～鈍い橙色 | 良好 | 底部 1/4、口縁部一部 | |
| 62 | 144 | | SD362 | 西側底 | 須恵器・高台付坏 | (13.2) | 9.0 | 4.5 | 2 mm内外粗砂混入 | 赤灰褐色、底部：灰色 | やや不良 | 1/6 残存 | |
| 63 | 144 | 108 | SD362 | | 須恵器・高台付坏 | (13.6) | 10.2 | 4.35 | 2 mm内粗砂粒小量混入 | 灰色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 64 | 144 | | SD362 | 下層 | 須恵器・高台付坏 | | (8) | (1.9) | 精良 | 黄灰色 | やや不良 | 底部片 | |
| 65 | 144 | | SD362 | | 須恵器・高台付坏 | | (11.7) | (1.3) | 2 mm内粗砂粒混入 | 灰白色 | やや不良 | 底部片 | |
| 66 | 144 | 108 | SD362 | | 須恵器・高台付坏 | (13.6) | 7.6 | 3.7 | 精良 | 灰色 | 普通 | 2/3 残存 | |
| 67 | 144 | | SD362 | | 須恵器・蓋 | (14.8) | | 2.1 | 精良、1 mm内外砂粒少量混入 | 灰色 | 良好 | 口縁部 1/8 残存 | |
| 68 | 144 | 108 | SD362 | 下層 | 須恵器・皿 | (14.2) | 9.6 | 2.0 | 2 mm内粗砂少量混入 | 鈍い黄褐色 | 良好 | 1/8 残存 | |
| 69 | 144 | 108 | SD362 | 下層 | 須恵器・鉢 | (18.2) | 8.8 | 6.8 | 1～2 mmの粗砂粒少量混入 | 鈍い黄色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 70 | 144 | 109 | SD362 | 下層 | 須恵器・甕 | (18.8) | | (6.7) | 精良 | 灰色 | 良好 | 口縁部 1/5 残存 | |
| 71 | 144 | 108 | SD362 | 西側 | 須恵器・蓋 | (16.8) | | 3.8 | 精良 | 灰色 | 普通 | 1/4 残存 | 酸化鉄分付着 |
| 72 | 144 | | SD362 | | 須恵器・高坏 | | 脚径 (8.3) | (4.8) | 精良 | 灰白色 | 不良 | 脚部 3/4 残存 | |
| 73 | 144 | | SD362 | | 須恵器・高坏 | | | (6.6) | 精良 | 青灰色 | 良好 | 脚部片 | |
| 74 | 144 | 108 | SD362 | 上層 | 須恵器・高坏 | | 脚裾径 (9.0) | (2.3) | 1 mm内外砂粒多量混入 | 褐灰色 | 普通 | 脚部 1/2 残存 | |
| 75 | 145 | 109 | SD362 | 粗砂 | 平瓦 | 長 12.0 | 最大幅 6.7 | 厚 2.3 | 2 mm内粗砂混入 | 赤みを帯びた鈍い黄褐色 | 良好 | 細片 | |
| 76 | 145 | 109 | SD362 | 下層 | 平瓦 | 長 7.7 | 最大幅 7.2 | 最大厚 2.6 | 粗砂粒多量混入 | 暗褐色 | 良好 | 細片 | |
| 77 | 145 | | SD362 | 下層粗砂 | 弥生土器・甕 | 頸部 (12.6) | | (5.1) | 2 mm内砂粒多量混入 | 黄灰色 | 良好 | 胴頸部 1/4 残存 | 畿内第Ⅴ様式 |
| 78 | 145 | | SD362 | | 弥生土器・甕 | | 2.6 | (3.0) | 2 mm内砂粒多量混入 | 灰黄色 | 普通 | 底部 | 畿内系 |
| 79 | 145 | 109 | SD362 | 下層北壁トレンチ | 弥生土器・壺 | (34.0) | | (6.3) | 精良 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 口縁部小片 | |
| 80 | 145 | | SD362 | 北際粗砂 | 弥生土器・壺 | (26.0) | | (5.0) | 2 mm内砂粒多量混入 | 灰黄褐色 | 良好 | 口縁部小片 | |
| 81 | 145 | | SD362 | 下層黒粒 | 弥生土器・甕 | | | (10.1) | 2 mm内砂粒多量混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 細片 | |
| 82 | 145 | | SD362 | 下層粗砂 | 弥生土器・甕 | (27.0) | | (14.9) | 1 mm内外砂粒多量混入 | 暗灰色 | 良好 | 口縁部～胴部 1/8 残存 | |
| 83 | 145 | 109 | SD362 | | 弥生土器・鉢 | 19.9 | 6.4～7.0 | 18.2 | 2 mm内砂粒多量混入 | 鈍い黄色 | 普通 | 完存 | |
| 84 | 145 | | SD362 | 下層北壁トレンチ | 弥生土器・壺か甕 | | 7.2 | (11.1) | 2 mm内砂粒多量混入 | 灰黄色 | 良好 | 底部片 | |
| 85 | 145 | | SD362 | 下層R-2 | 弥生土器・甕 | | 7.8 | (6.8) | 0.5mm内外前後砂粒・黒雲母粒少量混入 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 底部 | |
| 86 | 145 | | SD362 | 下層北壁トレンチ | 弥生土器・壺 | | 6.1 | (7.8) | 2 mm内砂粒多量混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 底部片 | |
| 87 | 145 | | SD362 | 下層 | 弥生土器・高坏 | (25.0) | | (7.7) | 1 mm内外砂粒・金雲母粒混入 | 橙色 | やや不良 | 坏部 1/4 残存 | |
| 88 | 145 | | SD362 | 下層北壁トレンチ | 弥生土器・鉢 | (19.0) | | (8.4) | 精良、1 mm砂粒少量混入 | 鈍い黄色 | 普通 | 1/5 残存 | |
| 89 | 145 | 109 | SD362 | 北東隅 | 弥生土器・蓋 | 6.8～7.0 | | 最大厚 0.9 | 精良 | 灰黄褐色 | 良好 | 一部欠 | 最大厚 0.9、孔径 0.3～0.4 |
| 90 | 148 | 109 | SX395 | | 土師器・坏 | (12.6) | 7.2 | 2.7 | 2 mm内砂粒混入 | 灰黄褐色 | 普通 | 1/3 残存 | |
| 91 | 148 | | SX395 | | 土師器・坏 | (13.7) | 8.6 | 3.5 | 精良、赤色粒子混入 | 鈍い褐色 | 普通～良好 | 口縁部 1/4 残存 | |

| 報告番号 | Fig. | PL. | 出土遺構 | 出土位置 | 器種・器形 | 法量（cm）（ ）は復元・残存 | | | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径・長さ | 底径・幅 | 器高・厚さ | | | | | |
| 92 | 148 | 109 | SX395 | | 土師器・坏 | 12.4 | | 3.5 | 精良、若干細砂粒混入 | にぶい黄橙色 | 普通 | 3/4 残存 | |
| 93 | 148 | | SX395 | | 土師器・坏 | (12.6) | | (3.3) | 2 mm内砂粒多量混入・赤色粒子も混入 | 灰黄褐色 | 普通 | 口縁部 2/3 残存 | |
| 94 | 148 | 109 | SX395 | | 土師器・坏 | 13.2 | | 4.1 | 2 mm内砂粒多量混入・赤色粒子も混入 | 明褐灰色 | 普通 | 2/3 残存 | |
| 95 | 148 | | SX395 | | 土師器・坏 | 12.6 | | 3.4～3.8 | 細砂粒・赤色粒子少量混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | ほぼ完存 | |
| 96 | 148 | | SX395 | 下層 | 土師器・坏 | (13.0) | | 3.3 | 1 mm内外砂粒少量混入 | 灰黄褐色 | 普通 | 1/2 弱残存 | |
| 97 | 148 | 109 | SX395 | | 土師器・坏 | 13.4 | | 3.85～4.1 | 砂粒多量混入 | 灰黄色 | 普通 | 完存 | |
| 98 | 148 | 109 | SX395 | | 土師器・坏 | (14.8) | 8.2 | 3.0 | 2 mm内砂粒多量混入 | 浅黄橙色 | 普通 | 1/4 残存 | |
| 99 | 148 | | SX395 | 南側落込み | 土師器・坏 | (15.2) | | (2.8) | 精良 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 1/6 残存 | |
| 100 | 148 | | SX395 | 南側落込み | 土師器・皿 | (14.2) | (10.8) | 1.4 | 粗砂多量混入 | 明赤褐色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 101 | 148 | 109 | SX395 | 北側畦上層ベルト | 土師器・皿 | (15.8) | | 1.8 | 1 mm内外砂粒少量混入 | 鈍い黄橙色 | やや良好 | 口縁部一部か | |
| 102 | 148 | 109 | SX395 | 南側落込み | 土師器・皿 | 15.4 | | 2.3 | 細砂少量混入 | 鈍い橙色 | 普通 | 1/2 強残存 | |
| 103 | 148 | | SX395 | 南側落込み | 土師器・皿 | (18.4) | (11.6) | 2.45 | 赤色粒子少量混入 | 鈍い褐色 | 普通 | 1/6 残存 | |
| 104 | 148 | 109 | SX395 | | 土師器・高台付坏 | (14.4) | (8.2) | 6.6 | 精良、細粒混入 | 鈍い褐色 | 普通 | 1/4 残存 | 高台 |
| 105 | 148 | | SX395 | | 土師器・高台付坏 | | | (3.3) | 精良 | 鈍い橙色 | 普通 | 底部細片 | 高台 |
| 106 | 148 | | SX395 | | 土師器・壺 | | | (4.8) | 赤色粒子多量混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 底部細片 | |
| 107 | 148 | 109 | SX395 | | 土師器・甕 | (28.6) | | (10.8) | 2 mm内砂粒多量混入 | 鈍い黄褐色 | 良好 | 口縁部～胴部 1/8 残存 | 一部炭化物付着し黒化する |
| 108 | 148 | 110 | SX395 | | 土師器・高台付鉢か皿 | 24.9 | 16.2 | 8.1 | 3 mm内粗砂粒多量混入 | 橙色 | 良好 | 口縁部 2/3 残存 | |
| 109 | 148 | | SX395 | 北側 | 黒色土器B類・塊 | | (8.6) | (2.1) | 精良 | 黒色、高台部：オリーブ黒色 | 精良 | 底部 1/3 残存 | |
| 110 | 148 | | SX395 | | 須恵器・坏 | (12.6) | 7.0 | 3.5 | 1 mm内外砂粒やや多く混入 | 灰白色 | やや不良 | 1/4 残存 | |
| 111 | 148 | | SX395 | | 須恵器・坏 | (13.8) | (8.2) | 3.9 | 2 mm内外砂粒多量混入 | にぶい黄橙色 | 不良 | 1/2 残存 | |
| 112 | 148 | | SX395 | 北側 | 須恵器・坏 | (12.5) | (8.3) | 4.2 | 1 mm内外砂粒多量混入 | 灰白色 | 普通 | 1/3 残存 | |
| 113 | 148 | | SX395 | | 須恵器・高台付坏 | | (9.0) | (2.3) | 1 mm内外砂粒多量混入 | 灰色 | 良好 | 底部 1/4 残存 | |
| 114 | 148 | | SX395 | | 須恵器・高台付坏 | | (7.8) | (2.8) | 精良 | 青灰色 | 良好 | 底部 1/4 残存 | |
| 115 | 148 | 110 | SX395 | | 須恵器・高台付坏 | (13.2) | | (3.9) | 2 mm内砂粒多量混入 | 暗灰色 | 良好 | 1/4 残存 | |
| 116 | 148 | | SX395 | | 須恵器・高台付坏 | | (10.2) | (2.7) | 1 mm内外砂粒少量混入 | 灰色 | 良好 | 底部 2/3 残存 | |
| 117 | 148 | | SX395 | 北側 | 須恵器・蓋 | | | | 精良、1 mm内外砂粒少量混入 | 灰色 | 良好 | 天井部 1/3 残存 | つまみ径 3.0 |
| 118 | 148 | 110 | SX395 | | 須恵器・高台付坏か鉢 | (19.4) | (13.8) | 4.4以上 | 1 mm内外砂粒少量混入 | 紫灰色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 119 | 148 | | SX395 | | 須恵器・高台付鉢 | (18.8) | | (6.3) | 1 mm内外砂粒多量混入 | 灰黄色 | やや不良 | 口縁部 1/4 残存 | |
| 120 | 148 | 110 | SX395 | | 須恵器・壺 | (17.4) | | (7.4) | 精良 | 暗青灰色 | 良好 | 口縁部 1/4 残存 | |
| 121 | 148 | 110 | SX395 | | 須恵器・高坏の脚部 | | 脚裾径 (12.0) | (3.7) | 2 mm内砂粒多量混入 | 青灰色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 122 | 148 | 110 | SX395 | | 須恵質土器・平瓦 | 長最大 9.6 | 幅 4.5 | 厚 1.9～2.0 | 1 mm内外砂粒多量混入 | 灰白色 | やや不良 | 細片 | |
| 123 | 153 | 110 | SX933 | | 土師器・坏 | 14.2 | | 4.2 | 精良 | 灰黄色 | 良好 | 口縁部 1/3 欠 | |
| 124 | 153 | 110 | SX933 | | 土師器・坏 | (12.8) | (8.4) | 3.3 | 赤色粒子多量混入 | 灰黄褐色 | 普通 | 1/2 弱残存 | |
| 125 | 153 | 110 | SX933 | | 土師器・坏 | 13.2～13.8 | 7.5～7.7 | 3.55 | 精良、赤色粒子僅かに混入 | 鈍い黄褐色 | 良好 | 完存 | |
| 126 | 153 | 110 | SX933 | | 土師器・坏 | 16.0 | 8.6 | 3.8 | 精良 | 灰黄褐色 | 良好 | 完存 | |
| 127 | 153 | | SX933 | | 土師器・坏 | (13.2) | (7.7) | (3.1) | 精良、金雲母細粒混入 | 鈍い褐色 | 良好 | 1/2 弱残存 | |
| 128 | 153 | 110 | SX933 | 堰内 | 土師器・坏 | (13.5) | 8.3 | 3.7 | 粗砂多量混入 | 鈍い褐色 | 普通 | 1/2 残存 | |
| 129 | 153 | | SX933 | 砂層中 | 土師器・皿 | (17.0) | (12.2) | 1.9 | 精良 | 鈍い橙色 | 良好 | 1/5 残存 | |
| 130 | 153 | 110 | SX933 | | 土師器・蓋 | (17.6) | | 3.4 | 精良 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 131 | 153 | | SX933 | | 土師器・甕 | (23.6) | | (6.7) | 2 mm内砂粒多量混入 | 灰褐色 | 良好 | 口縁部 1/6 残存 | |
| 132 | 153 | | SX933 | | ミニチュア土器・皿 | 5.0 | | 1.1 | 細砂多量混入 | 黒褐色 | 良好 | 完存 | |
| 133 | 153 | 110 | SX933 | | 須恵器・坏 | 13.5 | 8.5 | 4.3 | 精良 | 灰白色 | 不良 | 1/2 残存 | |
| 134 | 153 | | SX933 | 堰内 | 須恵器・坏 | (13.4) | (8) | (3.7) | 精良 | 黄灰色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 135 | 153 | | SX933 | 堰内 | 須恵器・高台付坏 | (13.8) | 9.8 | 3.5 | 精良 | 灰色 | 普通 | 1/6 残存 | |
| 136 | 153 | 110 | SX933 | | 須恵器・高台付坏 | (13.0) | (9.0) | 3.5 | 精良 | 灰色 | 良好 | 1/4 残存 | |
| 137 | 153 | | SX933 | | 須恵器・皿 | (17.3) | (13.6) | 1.5～2.0 | 粗砂粒少量混入 | オリーブ灰色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 138 | 153 | | SX933 | | 須恵器・皿 | (18.6) | | 2.7 | 精良 | 灰白～灰色 | 不良 | 1/6 残存 | |

| 報告番号 | Fig. | PL. | 出土遺構 | 出土位置 | 器種・器形 | 法量（cm）（ ）は復元・残存 | | | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径・長さ | 底径・幅 | 器高・厚さ | | | | | |
| 139 | 153 | | SX933 | 堰内 | 須恵器・蓋 | (14.2) | | (2.2) | 精良 | 灰色 | 良好 | 1/4 残存 | |
| 140 | 153 | | SX933 | | 須恵器・坏蓋 | (14.0) | | (3.8) | 精良 | 灰色 | 良好 | 1/4 残存 | |
| 141 | 153 | | SX933 | | 須恵器・甕 | | | (7.3) | 2 mm内砂粒少量混入 | 灰色・釉がかかる | 良好 | 1/6 残存 | |
| 142 | 153 | | SX933 | | 須恵器・甕 | | | (14.1) | 精良 | 灰色 | 良好 | 胴部片 | |
| 143 | 153 | | SX933 | | 土師器・甕 | (16.8) | | (10.2) | 細砂少量混入 | 黄灰色 | 普通 | 口縁部～胴部 1/5 残存 | 布留式土器 |
| 144 | 153 | 110 | SX933 | | 弥生土器・壺 | | 4.5 | (13.8) | 2 mm内砂粒多量混入 | 黄褐色 | 良好 | 胴～底部小片 | |
| 145 | 153 | 110 | SX935 | | 土師器・坏 | 13.0 | | 3.5 | 赤色粒子多量混入 | 橙色 | やや不良 | 完存 | |
| 146 | 153 | 110 | SX935 | | 土師器・坏 | 13.1 | 7.8 | 4.2 | 精良、赤褐色微粒子多量混入 | 鈍い橙色 | 良好 | 完存 | |
| 147 | 153 | | SX935 | | 土師器・坏 | (13.0) | (7.2) | 4.1 | 精良 | 鈍い赤褐～鈍い橙色 | 普通 | 1/2 残存 | |
| 148 | 153 | | SX935 | | 土師器・坏 | (14.6) | (9.2) | 3.55 | 精良 | 暗灰黄色 | 良好 | 1/6 残存 | |
| 149 | 153 | 111 | SX935 | 堰 | 土師器・坏 | (16.2) | 10.4 | 3.8 | 精良 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 完存 | |
| 150 | 153 | 111 | SX935 | | 土師器・皿 | 14.0 | 10.5 | 1.9 | 5 mm内粗砂粒少量混入 | 黄灰色 | 良好 | ほぼ完存 | |
| 151 | 153 | 111 | SX934 | | 土師器・皿 | 17.1 | 8 | 1.7 | 精良 | 灰褐色 | 良好 | 完存 | |
| 152 | 154 | 111 | SX930 | SX395 周辺落込み | 土師器・坏 | 13.0 | 7.8 | 3.8 | 精良 | 鈍い橙色 | やや不良 | 2/3 残存 | |
| 153 | 154 | 111 | SX930 | SX395 周辺落込み | 土師器・坏 | (14.8) | 9.4 | 3.8 | 精良、金雲母粒混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 口縁部 1/3 強残存 | |
| 154 | 154 | | SX930 | SX395 周辺落込み | 須恵器・高台付坏 | | (7.7) | (1.3) | 2 mm内砂粒少量混入 | 灰色 | 良好 | 底部 1/3 強残存 | |
| 155 | 154 | | SX930 | SX395 周辺落込み | 須恵器・高台付坏 | | (8.8位) | (3.1) | 精良 | 灰色 | 普通～良好 | 底部 1/4 残存 | |
| 156 | 154 | | SX930 | | 土師器・蓋 | (16.0) | | 2.1 | 精良 | 浅黄色 | 良好 | 1/4 残存 | |
| 157 | 154 | 111 | SX931 | | 土師器・坏 | (12.4) | (7.0) | 2.8 | 精良、赤色粒子少量混入 | 灰黄褐色 | やや不良 | 1/3 残存 | |
| 158 | 154 | | SX931 | | 土師器・坏 | (12.2) | (6.2) | 3.2 | 精良 | 褐灰色 | 普通 | 1/3 残存 | |
| 159 | 154 | 111 | SX931 | | 土師器・坏 | (14.6) | (7.0) | 3.8 | 精良 | 灰黄色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 160 | 154 | 111 | SX932 | | 土師器・坏 | (14.2) | 8 | 4.8 | 精良 | 鈍い黄褐色 | 良好 | 口縁部 1/5 欠 | |
| 161 | 154 | | SX932 | | 土師器・坏 | 13.2 | 8.8 | 4.25 | 赤色粒子多量混入 | 明赤褐色 | 普通 | 2/3 残存 | |
| 162 | 154 | 111 | SX932 | | 土師器・坏 | (13.0) | 8 | 3.2 | 精良 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 1/3 残存 | |
| 163 | 154 | | SX932 | 杭内 | 土師器・坏 | (14.0) | (7.8) | 3.1 | 精良 | 鈍い橙色 | 普通 | 1/3 残存 | |
| 164 | 154 | | SX932 | | 土師器・坏 | (15.0) | (8.6) | 3.5 | 精良 | 灰黄色 | 良好 | 1/4 残存 | |
| 165 | 154 | 111 | SX932 | 杭 | 土師器・坏 | (13.0) | 7.9 | 3.1 | 2 mm内砂粒多量混入 | 鈍い黄色 | 普通 | 2/3 弱残存 | |
| 166 | 154 | | SX932 | 杭 | 土師器・坏 | (13.0) | 7.7 | 3.3 | 細砂・金雲母混入 | 灰黄色 | 良好 | 1/2 弱残存 | |
| 167 | 154 | | SX932 | 西側 | 土師器・坏 | (14.6) | | 2.8 | 精良 | 灰黄色 | 普通 | 1/3 残存 | |
| 168 | 154 | | SX932 | 堰内 | 土師器・高台付坏 | | (9.5) | (2.9) | 精良 | 鈍い黄橙色 | 不良 | 1/2 残存 | |
| 169 | 154 | 111 | SX932 | | 土師器・蓋 | (21.0) | | 2.4 | 精良 | 鈍い黄色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 170 | 154 | 111 | SX932 | | 土師器・皿 | (17.2) | 11.2 | 2.4 | 粗砂粒若干混入 | 黄褐色 | 良好 | 1/2 残存 | |
| 171 | 154 | 111 | SX932 | | 土師器・皿 | 14.8 | 11.5 | 2.5 | 精良 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 口縁部一部欠 | |
| 172 | 154 | | SX932 | 西側 | 土師器・皿 | (14.6) | | 2.1 | 精良 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 1/3 残存 | |
| 173 | 154 | | SX932 | | 土師器・甕 | (26.2) | | (5.5) | 2 mm砂粒多量混入 | 灰黄褐色 | 良好 | 口縁部 1/4 残存 | |
| 174 | 154 | | SX932 | | 土師器・甕 | | | (4.9) | 3 mm内粗砂粒多量混入 | オリーブ黒色 | 良好 | 口縁部細片 | |
| 175 | 154 | | SX932 | | 土師器・甕 | | | (5.9) | 粗砂粒多量混入 | オリーブ黒色 | 良好 | 口縁部細片 | |
| 176 | 154 | | SX932 | | 土師器・高坏 | | 脚裾径 (12.6) | (8.5) | 2 mm内粗砂・赤色粒子多量混入 | 鈍い橙色 | 不良 | 脚部 1/2 残存 | |
| 177 | 154 | 111 | SX932 | | 須恵器・坏 | 12.1 | 8.5 | 2.8 | 1 mm内砂粒僅かに混入 | 灰黄色 | やや不良 | 2/3 残存 | |
| 178 | 154 | 111 | SX932 | | 須恵器・坏 | 11.6 | 7.2 | 3.5 | 1 mm内外砂粒少量混入 | 灰オリーブ色 | 不良 | 2/3 残存 | |
| 179 | 154 | 111 | SX932 | | 須恵器・坏 | 13.6 | 10.3 | 3.2 | 精良 | 灰白色 | やや不良 | 1/2 残存 | |
| 180 | 154 | 111 | SX932 | | 須恵器・坏 | (13.6) | 7.8 | 3.3 | 精良 | 灰色～黒色 | 普通 | 1/3 残存 | |
| 181 | 154 | | SX932 | | 須恵器・高台付坏 | | (9.0) | (3.7) | 精良 | 灰色 | 良好 | 底部 1/3 残存 | |
| 182 | 154 | | SX932 | | 須恵器・壺 | | | (2.4) | 精良 | 灰色 | 良好 | 高台部で壷の底部か | |
| 183 | 154 | 111 | SX932 | 西側 | 須恵器・蓋 | (17.2) | | 2.5 | 精良 | 灰オリーブ色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 184 | 154 | | SX932 | | 土師器・蓋 | (15.8) | | (2.2) | 1 mm内外細砂粒僅かに混入 | 鈍い黄橙色 | やや不良 | 1/4 残存 | |
| 185 | 154 | 112 | SX932 | | 須恵器・蓋 | (14.2) | | 1.5 | 1 mm内外砂粒多量混入 | 灰色 | 普通 | 1/2 残存 | 天井部には墨書あり |
| 186 | 154 | 112 | SX932 | | 須恵器・皿 | (16.2) | (12.6) | 1.7 | 3 mm内粗砂粒多量混入 | 灰色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 187 | 155 | 112 | SX932 | 杭内 | 黒色土器A類・椀 | | (6.8) | (2.1) | 精良 | 鈍い褐色 | 良好 | 底部片 | |
| 188 | 155 | | SX932 | | 須恵器・坏身 | (13.6) | | 2.7 | 精良 | 灰色 | 良好 | 坏身 1/6 残存 | |

| 報告番号 | Fig. | PL. | 出土遺構 | 出土位置 | 器種・器形 | 法量（cm）（ ）は復元・残存 | | | 胎土 | 色調 | 焼成 | 残存状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径・長さ | 底径・幅 | 器高・厚さ | | | | | |
| 189 | 155 | 112 | SX932 | | 須恵器・甕 | | | (10.5) | 精良 | 灰色 | 良好 | 頸胴部片 | 復元頸部 15.4 |
| 190 | 155 | 114 | SX932 | | 丸瓦 | 残存長 20.0 | 復元幅 16.2 | (7.3) | 3 mm内粗砂粒混入 | 灰黄色 | 良好 | 丸瓦片 | |
| 191 | 155 | 112 | SX932 | | 平瓦 | | 残存幅 12.2 | 厚 1.8 | 精良 | 浅黄色 | やや不良 | 平瓦細片 | |
| 192 | 159 | | SD362 | 上層 | 不明土製品 | 縦 8.4 | 横 5.7 | 厚 3.5 | 精良 | 鈍い褐色 | 普通 | 完存 | |
| 193 | 159 | | SD362 | 底 | 穿孔のある土器片 | | | | 2 mm内砂粒多量混入 | 灰黄褐色 | 普通 | | |
| 194 | 161 | | 包含層 | 底 | 土師器・坏 | (13.1) | 7.7 | 2.8 | 精良 | 灰黄色 | 良好 | 口縁部～底部 1/6 残存 | |
| 195 | 161 | | 包含層 | 粗砂中 | 土師器・坏 | (14.0) | 8.3 | 3.45 | 精良 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 口縁～底部 1/2 弱残存 | |
| 196 | 161 | | 包含層 | 底 | 土師器・皿 | 14.5 | 9.9 | 2.5 | 2 mm内砂粒混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 完存 | |
| 197 | 161 | | 包含層 | | 土師器・皿 | 15.0 | 10～11 | 1.5～3.0 | 精良、赤褐色粒子多量混入 | 鈍い褐色 | 良好 | 2/3 残存 | |
| 198 | 161 | | 包含層 | | 土師器・皿 | | (17.8) | (1.9) | 精良 | 灰黄色 | 普通 | 底部 1/6 残存 | |
| 199 | 161 | | 包含層 | | 須恵器・皿 | | | 2.5 | 精良 | 橙色 | 良好 | 1/8 残存 | |
| 200 | 161 | 112 | 包含層 | | 須恵器・坏 | (13.6) | 10.0 | 2.0 | 精良 | 黄灰色 | 良好 | 1/3 残存 | |
| 201 | 161 | | 包含層 | | 須恵器・皿 | (15.6) | 12.3 | 2.15 | 白色粒子多量混入 | 灰色 | 良好 | 1/4 残存 | |
| 202 | 161 | | 包含層 | | 土師器・皿 | 13.1 | 8.3 | 3.7 | 精良 | 灰黄色 | 良好 | 2/3 残存 | |
| 203 | 161 | | 包含層 | 粗砂中 | 平瓦 | 縦 7.2 | 横 9.2 | 厚 2.8 | 2～3 mm粗砂粒多量混入 | 灰白色 | 良好 | 平瓦片 | |
| 204 | 161 | 112 | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・甕 | (14.0) | | 13.0以上 | 3 mm内粗砂多量混入 | 暗灰黄色 | 良好 | 1/3 残存 | 庄内式土器、最大胴径 16.3 |
| 205 | 161 | | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・甕 | (9.8) | | (5.1) | 精良 | 鈍い黄褐色 | 普通 | 口縁部～胴部 1/4 残存 | |
| 206 | 161 | 112 | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・壺 | | 7.2 | (10.8) | 最大 7 mm内粗砂多量混入 | 灰黄色 | 普通 | 頸～胴部 1/2～2/3 残存 | |
| 207 | 161 | 112 | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・壺 | 15.3 | 7.4 | 16.8 | 2 mm内砂粒多量混入 | 鈍い黄褐色 | 良好 | 口縁部一部欠 | 胴部下半に版黒斑あり |
| 208 | 161 | 112 | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・壺 | (22.0) | | (16.4 | 3 mm内粗砂粒多量混入 | 灰黄褐色 | 良好 | | |
| 209 | 161 | 112 | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・壺 | 18.8 | | (16.8) | 2 mm内粗砂粒多量混入 | 暗灰黄色 | 良好 | 口縁部～頸部片 | |
| 210 | 161 | 112 | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・壺 | (22.6) | | (21.8) | 2 mm内粗砂粒多量混入 | 灰黄褐色 | 良好 | 口縁部 1/2～胴部残存 | |
| 211 | 162 | 113 | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・甕 | (21.6) | | (22.0) | 2 mm内粗砂混入 | 暗灰黄色 | 良好 | 底部欠損 | 最大胴径 22.7 |
| 212 | 162 | | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・甕 | (19.0) | 8 | | 5 mm内粗砂粒混入 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 口縁部 1/8～底部片 | |
| 213 | 162 | 113 | 包含層 | | 弥生土器・甕 | (19.0) | 8 | | 5 mm内粗砂混入 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 口縁部 1/8～底部片 | 212と213は同一個体と思われるが、歪みが大きく接合出来ない |
| 214 | 162 | 113 | 包含層 | | 弥生土器・甕 | (36.6) | | (21.0) | 2 mm内砂粒多量混入 | 灰黄色 | 良好 | 口縁部 1/4 残存 | |
| 215 | 162 | 113 | 包含層 | | 弥生土器・甕 | (36.6) | 10.4 | (62.0) | 2 mm内砂粒混入 | 上：灰黄褐色<br>下：鈍い黄褐色 | 良好 | 復元完存 | |
| 216 | 162 | | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・甕 | | 8.7 | (7.3) | 1 mm内外砂粒少量混入 | 鈍い褐色 | 良好 | 底部 | 底部中央に 2 cm程の焼成後の穿孔がある |
| 217 | 162 | 113 | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・高坏 | | 脚裾径 (19.0) | (17.8) | 3 mm内粗砂粒多量混入 | 灰黄色 | 良好 | 脚部 2/3 残存 | |
| 218 | 162 | 113 | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・高坏 | | 脚裾径 10.15 | (9.8) | 粗砂粒多量混入 | 灰黄褐色 | 普通 | 脚部 1/2 残存 | |
| 219 | 163 | | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・鉢 | (18.2) | | (5.6) | 2 mm内砂粒多量混入 | 鈍い橙色 | 普通 | 口縁部 1/3 残存 | |
| 220 | 163 | 113 | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・鉢 | (16.3) | 5.7 | 9.4 | 5 mm内粗砂多量混入 | 灰黄褐色 | 良好 | ほぼ完存 | |
| 221 | 163 | 113 | 包含層 | 黒色粘土 | コップ形土器・鉢 | 7.5 | 4.8 | 12.8 | 精良、金雲母細砂混入 | 鈍い黄褐色 | 良好 | 完存 | |
| 222 | 163 | | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・器台 | | (14.2) | (9.7) | 3 mm内粗砂粒多量混入 | 鈍い黄橙色 | 普通 | 1/2 残存 | 弥生終末頃か |
| 223 | 163 | | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・器台 | (8.4) | (10.0) | 最大8.1 | 1 mm内外砂粒多量混入 | 鈍い橙色 | 良好 | 1/2 残存 | |
| 224 | 163 | | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・器台 | (9.0) | | (11.6) | 4 mm内粗砂粒混入 | 鈍い褐色 | 良好 | 口縁部 1/6 残存 | |
| 225 | 163 | | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・器台 | 10.6 | | (10.7) | 2 mm内砂粒多量混入 | 鈍い黄橙色 | 良好 | 口縁部～胴部上半 | |
| 226 | 163 | 113 | 包含層 | 黒色粘土 | 弥生土器・器台 | (13.2) | | (16.4) | 5 mm粗砂粒多量混入 | 灰黄褐色 | 良好 | 口縁部～胴部片 | |

## 石器・石製品

| 報告番号 | Fig. | PL. | 出土遺構 | 出土位置 | 器種・器形 | 法量（cm）は残存 | | | 石材 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 長 | 幅 | 厚 | | | |
| S1 | 159 | 113 | SD362 | | 砥石 | 13.1 | 7.2 | | 砂岩 | 黄味がかった灰白色 | 目の細かさ普通、砥面 4 面で敲打調整痕が部分的に残る |
| S2 | 159 | | SD362 | 台地部 | 砥石 | 7.8 | | 2.4 | 粘板岩か泥岩 | 褐灰色 | 上下、左面が砥面 |
| S3 | 159 | 113 | SX933 | 粗砂中 | 石包丁 | 8.9 | 4.2 | 0.7 | 粘板岩か泥岩 | 灰色 | 孔間2.0cm。表面研磨仕上げ |
| S4 | 159 | 113 | SX933 | | 祭祀具・円板 | 径2.3 | | | 滑石 | 灰白色、少し黄味がかかる | 表面研磨調整 |

## 木器・木製品

| 報告番号 | Fig. | PL. | 出土遺構 | 出土位置・層位 | 器種 | 法量（単位：cm）（ ）は復元・残存 | | | | 木取り | 備考 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 長さ・口径・底径 | 幅・高さ・短軸 | 厚さ・直径 | その他 | | | |
| W1 | 146 | 114 | SD362 | | 祭祀具・人形 | (36.9) | (3.6) | 0.5 | | 柾目 | | ヒノキ |
| W2 | 146 | 114 | SD362 | 下層 | 加工板材 | (55.6) | (7.4) | (0.8) | | 柾目 | | |
| W3 | 146 | 114 | SD362 | 堰東側下層 | 曲物（側板） | (19.6) | 1.4 | 0.2 | | 柾目 | | ヒノキ |
| W4 | 146 | 114 | SD362 | | 曲物（底板または蓋）？ | (10.1) | 18.4 | 最大0.6 | | 板目 | 両側2か所径0.3程の孔あり。樹皮部分的残存 | ヒノキ |
| W5 | 146 | 114 | SD362 | | 曲物（底板または蓋） | (15.5) | 15.0 | 0.8 | | 板目 | 2か所に径0.4～0.5の孔あり、木釘が残る。 | ヒノキ |
| W6 | 146 | 114 | SD362 | | 曲物（底板または蓋） | 14.0 | | 1.0 | | 板目 | 側面に4か所の木釘残る。 | ヒノキ |
| W7 | 146 | 114 | SD362 | | 建築材? | (73.9) | 最大30.6 | 3.3～4.3 | | 板目 | | スギ |
| W8 | 151 | | SD362 | | 建築材 | 157.0 | | 5.0～6.5 | | 芯持ち | | マツ属複維管束亜属 |
| W9 | 149 | 114 | SX395 | | 祭祀具・人形 | (65.4) | 最大10.25 | 0.3～0.5 | 足部最大幅10.1<br>頭部最大幅10.15 | 板目 | | スギ |
| W10 | 149 | 114 | SX395 | | 板状木製品 | (45.2) | 最大4.9 | 0.6 | | 板目 | | ヒノキ |
| W11 | 149 | 114 | SX395 | | 斎串？ | 24.3 | 2.5 | 5.0 | | 柾目 | | スギ |
| W12 | 149 | | SX395 | | 不明木製品 | (7.3) | (6.1) | (3.3) | | ？ | | |
| W13 | 149 | 115 | SX935 | | 紡織具・部材 | (9.6) | 3.6 | 1.0 | | 板目 | | ヒノキ |
| W14 | 149 | 115 | SX935 | | 紡織具・部材 | (14.7) | 3.3 | 1.0 | | 板目 | | ヒノキ |
| W15 | 149 | 115 | SX935 | 周辺 | 加工材 | 18.0 | 1.0 | 0.5 | | 柾目 | 祭祀具の一部？ | ヒノキ |
| W16 | 149 | 115 | SX935 | 周辺 | 加工材 | 16.4 | 1.2 | 1.0 | | 柾目 | | ヒノキ |
| W17 | 149 | 115 | SX935 | | 荷札木簡 | (11.8) | 2.7 | 0.5 | | 柾目 | | ヒノキ |
| W18 | 149 | | SX395 | | 曲物（底板？） | (31.1) | (13.8) | 0.6 | | 柾目 | 2か所側板を留める径0.5程の孔あり。 | 針葉樹 |
| W19 | 149 | 115 | SX395 | | 曲物（底板または蓋） | 17.7 | | 0.6 | | 柾目 | 周縁4か所紐通し孔あり。樹皮部分的残存。 | スギ |
| W20 | 149 | 115 | SX395 | | 曲物（底板または蓋） | (7.6) | 14.5 | 0.6 | | 板目 | | モミ属 |
| W21 | 150 | | SX395 | | 曲物（底板または蓋） | 19.6 | | 0.8 | | | 側面に2か所木釘が残る。 | スギ |
| W22 | 150 | 115 | SX395 | | 曲物（底板または蓋） | 17.3 | (12.1) | 0.7 | | 板目 | 両端2か所に紐通し孔あり | モミ属 |
| W23 | 150 | | SX395 | | 曲物（底板または蓋） | (17.7) | (14.6) | 0.6 | | | 3か所紐通し孔あり。本来は4か所か | モミ属 |
| W24 | 151 | 116 | SX395 | | 護岸杭 | (175.1) | | | 基部8.7×6.0<br>先端5.4×5.1 | 芯持ち | | ミツバウツギ |
| W25 | 156 | 115 | SX933 | | 祭祀具・舟形 | (7.6) | 3.7 | 残存高3.3 | | ？ | | スダジイ |
| W26 | 156 | | SX933 | | 下駄 | (17.5×9.1+α) | 6.8 | | 台部厚：1.2<br>歯部厚：3.2～3.9 | | 連歯下駄 | チシャノキ |
| W27 | 156 | | SX933 | | 板状木製品 | 28.3 | 3.3 | 0.7 | | 板目 | | |
| W28 | 156 | 115 | SX933 | | 板材 | (24.8) | (1.2) | (0.3) | | 柾目 | | ヒノキ |
| W29 | 156 | 115 | SX933 | | 祭祀具・斎串？ | (24.1) | 最大6.3 | 最大0.7 | | 柾目 | | スギ |
| W30 | 156 | | SX933 | | 曲物（底板または蓋） | (18.2) | (10.5) | 0.4 | | | 周縁1か所に紐通し孔と紐が残る。 | |
| W31 | 156 | | SX933 | | 曲物（底板または蓋） | 18.7 | (3.4) | | 底板厚：0.8<br>側板厚：0.3 | 底板：板目 | 側板を接合する紐孔が2孔対で4か所残る。 | スギ |
| W32 | 156 | | SX933 | | 曲物（底板または蓋） | (44.2) | (13.2) | 1.2 | | | 周縁に沿って2か所づつ紐通し孔あり。 | モミ属 |
| W33 | 157 | 116 | SX933 | | 折敷？ 底板 | (58.0) | (18.7) | 0.3～0.5 | | 板目 | 縁に1か所接合孔あり、桜皮残る。 | チシャノキ |
| W34 | 157 | 116 | SX935 | | 板材 | 54.0 | (10.8) | 0.7 | | 柾目 | 孔が2か所あり。 | |
| W35 | 157 | | SX935 | | 曲物（底板） | 27.0 | | 1.1 | | 板目 | 側面に釘孔あり。 | |
| W36 | 158 | 116 | SX933 | | 堰の横木 | (327.0) | | 15.8 | | 芯持ち | 建築柱材転用 | マツ属複維管束亜属 |
| W37 | 158 | 116 | SX934 | | 棒状木製品 | 111.1 | | 2.2×2.6～1.4×2.1 | | 芯持ち | | アワブキ属 |
| W38 | 158 | 116 | SX934 | | 棒状木製品 | (99.8) | | 2.3×1.8～3.0×2.7 | | 芯持ち | | アワブキ属 |
| W39 | 158 | 116 | SX934 | | 棒状木製品 | 89.0 | | 3.1×2.4 | | 芯持ち | 両端に加工痕 | クスノキ科A |
| W40 | 158 | 116 | SX934 | | 板材 | (149.8) | | 5.0×5.2 | | 芯持ち | | ハイノキ属<br>ハイノキ節 |

# 第Ⅳ章　自然科学分析

## 1．第７次調査出土の植物遺体の分析結果について

那須　浩郎
佐藤洋一郎

### 1）古墳時代後期～奈良時代の水田跡

古墳時代後期～奈良時代の水田跡17地点（B～R）から、50種類合計3199個体の植物遺体が産出した。栽培植物としては未炭化のイネの籾殻（内外頴）がD, E, F, G, IおよびJの６地点から産出した。この水田でイネを栽培していたことを裏付ける証拠になる。産出量は、G地点の35個体を除くと、他の地点すべてで１点のみであった。これは、籾殻が水田内にはほとんど残っていなかったことを示すものと思われ、廃絶が花芽形成前または収穫後であったことを暗に物語る。G地点は排水口の付近にあり、水を抜くときに水田内に残った籾殻がこの地点に集中したため、G地点だけ多くの籾殻が堆積したのかもしれない。G地点だけ他の植物遺体の産出量が多いことからも、堆積状況に何らかの違いがあったことが考えられる。

イネ以外で栽培植物の可能性のあるものとして、ザッソウメロンが挙げられる。ザッソウメロンの種子はGとMの２地点からそれぞれ１粒ずつ産出している。水田の畦畔に、自然にせよ、半栽培的にせよ、生育していたものが流れ込んで堆積したものと考えられる。

木本植物は、アカメガシワの種子が１個体B地点から産出しており、エゴノキの核果がR地点から１個体産出した。B地点とR地点は、大畦畔か通路と考えられる比較的大きめの高まりと水路と考えられる溝を挟んだ地点に位置しており、この路傍と溝周辺にはアカメガシワやエゴノキなどの落葉樹が生育していたと考えられる。さらに、B地点からはキイチゴ属の１種やブドウ属の１種のような潅木またはつる性の木本植物の核果が産出しており、B地点付近の路傍には、アカメガシワやエゴノキのような落葉樹とともに、キイチゴ属やブドウ属の潅木類やつる性植物が生育していたといえる。

水田雑草にもなる水湿地の雑草は、ヤナギタデ、イヌタデ属、ミチヤナギ属、ミズオトギリ、ウリカワ、ヘラオモダカ、オモダカ科、スブタ、マルミスブタ、ヒルムシロ属、ホッスモ、イトトリゲモ、コナギ、イボクサ、ウキヤガラ、ホタルイ、フトイ、ハリイ属、スゲ属アゼスゲ節などが産出し、それぞれの地点において種数割合で46.2～100%、個体数割合で79.6～100%の高い割合を示した。

一方、畦畔、路傍や畑地の雑草は、オオイヌタデ／サナエタデ、ノミノフスマ、ハコベ属、アカザ科／ヒユ科、ナズナ、カタバミ、スミレ属、チドメグサ、セリ科、シロネ属、イヌコウジュ属、トウバナ属、オドリコソウ属、ナス属、メナモミ、オナモミ、キク科、キンエノコロなどで、種数割合で10.0～29.6%、個体数割合で1.6～13.7%であった。

田畑の両方に生育が考えられる種類として、カヤツリグサ科、イヌビエ近似種、イネ科が挙げられた。これらは、種数割合で０～15.4%、個体数割合で０～7.4%と少ない値を示した。

以上のように、水田跡から産出した植物遺体の種類構成は、基本的にはほとんどが水田雑草で占められており、イネの籾殻も６地点で見られることから、水稲栽培が行われていたことは確実であろう。ただし、地点ごとの種類組成の違いも見られた。畦畔に比較的隣接するI, J, H, G, E地点では畦畔・路傍雑草が個体数割合で10%以上産出しており、周りの畦畔・路傍雑草が流れ込んで比較的多い種類組成を示した。また、B地点では、木本が多く認められた。Q, R, P地点では、ヤナギタデの果実が圧

倒的に多く産出しており、全体の種数も少ない特徴があり、籾殻も産出していない。これは、この地点は水田というよりも、ヤナギタデを主とする水湿地草本の群落が成立していたと考えるほうが妥当である。そうすると遺構全体としては、水田と湿地性草本が自生する土地が混在していたことになる。

表１　第７次調査の水田跡（古墳時代後期～奈良時代）から産出した植物遺体の一覧
B～Rの17地点から産出した植物遺体を個体数で示してある。B～Rの地点は図１を参照。01－122などの番号は佐藤研で割り振ったサンプル番号。

表２　第７次調査の水田跡（古墳時代後期～奈良時代）から産出した植物遺体のグループごとの産出割合。
産出した分類群を、栽培植物、木本、水田・水湿地雑草、畦畔・路傍・畑地雑草、田畑共通雑草の５つのグループに分けて、個体数、種数の割合を比較した。

図１　第７次調査の水田跡（古墳時代後期～奈良時代）から産出した主要植物遺体の分布図。
B～Rがサンプル採取地点。それぞれの地点から産出した特徴的な植物を示してある。アルファベットを○で囲んだものは、畦畔・路傍・畑地雑草の個体数割合が10％を超える地点。△で囲んだものは、水田ではなく、ヤナギタデの水湿地群落だった可能性のある地点。

## 表1

| 分類群 | | 産出部位 | サンプル番号 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | R | | |
| | | | 01-122 | 01-123 | 01-124 | 01-125 | 01-126 | 01-127 | 01-128 | 01-129 | 01-130 | 01-131 | 01-132 | 01-133 | 01-134 | 01-135 | 01-136 | 01-137 | 01-138 | 合計 | |
| 栽培植物 | イネ | 外顔 | | | 1 | 1 | 1 | 35 | | 1 | 1 | | | | | | | | | 40 | Oryza sativa L. |
| | ザッソウメロン | 種子 | | | | | | 1 | | | | | | 1 | | | | | | 2 | Cucumis melo L. var. agrestis Naud. |
| 木本 | アカメガシワ | 種子 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | Mallotus japonicus (L.f.) Mull.Arg. |
| | エゴノキ | 核果 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | Styrax japonica Siebold et Zucc. |
| 食利用木の実 | キイチゴ属の１種 | 核果 | 2 | | | | | 1 | | | 1 | | | 1 | | | | | | 5 | Rubus sp. |
| | ブドウ属の１種 | 核果 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | Vitis sp. |
| 水田・水湿地雑草 | ヤナギタデ | 果実 | | 7 | 20 | | | 3 | 1 | 1 | 4 | 8 | | 2 | | 2 | 89 | 22 | 102 | 261 | Persicaria hydropiper (L.) Spach |
| | イヌタデ属の１種 Aタイプ | 果実 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | Persicaria sp. A |
| | イヌタデ属の１種 Bタイプ | 果実 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | Persicaria sp. B |
| | ミチヤナギ属の1種 | 果実 | | | | | | | 1 | | | | | | | 1 | | | | 2 | Polygonum sp. |
| | ミズオトギリ | 種子 | 2 | 1 | 3 | 1 | 2 | | | 2 | 2 | | 2 | | | | | 2 | | 17 | Triadenum japonicum (Blume) Makino |
| | ウリカワ | 果実 | | | | 1 | 1 | | | | | 1 | | | | | | 1 | | 4 | Sagittaria pygmaea Miq. |
| | ヘラオモダカ | 果実 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | 1 | Alisma canaliculatum A.Braun et C.D.Bouch? |
| | オモダカ科の複数種 | 果実 | 5 | 12 | 3 | 10 | 19 | 105 | 5 | 10 | 22 | 23 | 25 | 22 | 10 | 10 | 1 | 6 | 2 | 290 | Alismataceae ssp. |
| | スブタ | 種子 | 2 | 6 | 3 | 4 | 2 | 74 | 3 | 1 | 6 | 2 | 8 | 1 | 7 | 7 | | 5 | | 131 | Blyxa echinosperma (C.B.Clarke) Hook.f. |
| | マルミスブタ | 種子 | 12 | 10 | 21 | 20 | 14 | 99 | 25 | 19 | 25 | 8 | 21 | 18 | 30 | 35 | | 22 | | 379 | Blyxa aubertii Rich. |
| | ヒルムシロ属の複数種 | 果実 | 5 | 2 | 6 | 2 | 1 | | 3 | 5 | 1 | 5 | 7 | 6 | 2 | 8 | | 2 | | 55 | Potamogeton ssp. |
| | ホッスモ | 種子 | 9 | 1 | 2 | 6 | 5 | 106 | 4 | 7 | 24 | 21 | 13 | 20 | 15 | 8 | | 13 | 2 | 256 | Najas graminea Delile |
| | イトトリゲモ | 種子 | | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | 5 | Najas gracillima (A.Braun ex Engelm.) Magnus |
| | コナギ | 種子 | 1 | 4 | | 1 | 6 | 134 | 2 | | 12 | 1 | 2 | 3 | 7 | | | 3 | | 176 | Monochoria vaginalis (Burm.f.) C.Presl |
| | イボクサ | 種子 | 2 | 3 | 4 | 2 | 1 | 25 | | 8 | 6 | 2 | 2 | 12 | 4 | 1 | 2 | 2 | 5 | 81 | Murdannia keisak (Hassk.) Hand.-Mazz. |
| | ウキヤガラ | 果実 | 16 | 17 | 6 | 5 | 3 | 10 | 8 | 7 | 11 | 8 | 15 | 6 | 20 | 5 | | 3 | | 140 | Bolboschoenus fluviatilis (Torr.) Sojak subsp. yagara (Ohwi) T.Koyama |
| | ホタルイ | 果実 | 28 | 28 | 20 | 23 | 16 | 50 | 26 | 35 | 21 | 55 | 48 | 44 | 59 | 41 | 1 | 14 | 3 | 512 | Schoenoplectus hotarui (Ohwi) Holub |
| | フトイ | 果実 | 3 | 3 | 8 | 3 | 3 | 15 | 10 | 4 | 10 | 13 | 12 | 10 | 2 | 7 | | 5 | 1 | 109 | Schoenoplectus tabernaemontani (C.C.Gmel.) Palla |
| | ハリイ属の１種 | 果実 | 18 | 24 | 9 | 4 | 11 | 24 | 11 | 17 | 22 | 17 | 18 | 19 | 15 | 13 | 1 | 6 | 1 | 230 | Eleocharis sp. |
| | スゲ属アゼスゲ節の１種 | 果実 | 2 | 2 | 5 | 2 | 2 | 13 | 3 | 6 | 3 | 2 | 5 | 1 | 2 | 2 | | 7 | 1 | 58 | Carex sect. Carex sp. |
| | 小計 | | 108 | 125 | 110 | 84 | 86 | 658 | 102 | 122 | 169 | 167 | 178 | 164 | 173 | 140 | 94 | 113 | 117 | 2710 | |
| 畦畔・路傍・畑地雑草 | オオイヌタデ/サナエタデ | 果実 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | Persicaria lapathifolia (L.) Gray／var. tomentosa (Schrank) H.Gross |
| | ノミノフスマ | 種子 | 6 | 13 | | 2 | 5 | 58 | 10 | 11 | 13 | 14 | 2 | 6 | 7 | | | 8 | | 155 | Stellaria uliginosa Murray var. undulata (Thunb.) Fenzl |
| | ハコベ属の１種 | 種子 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 1 | Stellaria sp. |
| | アカザ科かヒユ科の１種 | 種子 | 1 | | | | | | | | | | 1 | | | | | 2 | | 4 | Chenopodiaceae/Amaranthaceae sp. |
| | ナズナ | 種子 | 1 | | | | | 13 | | 1 | 1 | | | | 1 | | | | | 17 | Capsella bursa-pastoris (L.) Medik. |
| | カタバミ | 種子 | 1 | 1 | | 4 | | | 1 | 1 | 2 | | | 1 | 3 | 2 | | 1 | | 17 | Oxalis corniculata L. |
| | スミレ属の1種 | 種子 | | | | | | 3 | | | | | | | | 1 | | | | 4 | Viola sp. |
| | チドメグサ | 果実 | | | 1 | 1 | 2 | 34 | | 2 | 3 | 1 | | | 4 | | | | | 48 | Hydrocotyle sibthorpioides Lam. |
| | セリ科の１種　Aタイプ | 果実 | | | | 2 | | | 1 | | | | | | | 1 | | 1 | | 5 | Apiaceae sp. A |
| | セリ科の１種　Bタイプ | 果実 | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | | | | 2 | Apiaceae sp. B |
| | シロネ属の1種 | 果実 | | | 1 | | | | | | 2 | | | | | | | | | 3 | Lycopus sp. |
| | イヌコウジュ属の１種 | 果実 | | | | | | 3 | 1 | 2 | | | | 1 | | 2 | | | 1 | 10 | Mosla sp. |
| | トウバナ属の１種 | 果実 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 1 | 2 | Clinopodium sp. |
| | オドリコソウ属の１種 | 果実 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | Lamium sp. |
| | ナス属の１種 | 種子 | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | 2 | Solanum sp. |
| | メナモミ | 果実 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | Sigesbeckia pubescens (Makino) Makino |
| | オナモミ | 果実 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 | Xanthium strumarium L. |
| | キク科の1種 | 果実 | | | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | 2 | Asteraceae sp. |
| | キンエノコロ | 果実 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | Setaria pumila (Poir.) Roem. et Schult. |
| | 小計 | | 11 | 14 | 2 | 10 | 8 | 113 | 13 | 17 | 24 | 15 | 3 | 8 | 17 | 7 | 0 | 12 | 3 | 277 | |
| 田畑共通雑草 | カヤツリグサ科の１種　Aタイプ | 果実 | 3 | 3 | 4 | 1 | | 10 | 6 | 3 | 5 | 2 | 2 | 3 | 7 | 2 | | 4 | 1 | 56 | Cyperaceae sp. A |
| | カヤツリグサ科の１種　Bタイプ | 果実 | 4 | 1 | 5 | | | 5 | | | 2 | | 2 | | 3 | 2 | | | | 24 | Cyperaceae sp. B |
| | カヤツリグサ科の１種　Cタイプ | 果実 | | 1 | | | | 2 | | 2 | | | | 7 | | | | 1 | | 13 | Cyperaceae sp. C |
| | イヌビエ近似種 | 果実 | | | | 1 | | 2 | | | 1 | | | | 2 | | | 1 | | 7 | cf. Echinochloa crus-galli (L.) P.Beauv. |
| | イネ科の１種 | 果実 | | | | | | | 3 | | | | | 4 | | | | | | 7 | Poaceae sp. |
| | 小計 | | 7 | 5 | 9 | 2 | 0 | 19 | 9 | 5 | 8 | 2 | 4 | 14 | 12 | 4 | 0 | 6 | 1 | 107 | |
| 不明 | | | 5 | 3 | 1 | 2 | 2 | 25 | 2 | | 2 | | | | 3 | | | 1 | | 46 | Unknown |
| 炭化植物片 | | | | | | | | 9 | | | | | | | | | | | | 9 | Charcoal |
| 合計 | | | 135 | 147 | 123 | 99 | 97 | 861 | 126 | 145 | 205 | 184 | 185 | 188 | 205 | 151 | 94 | 132 | 122 | 3199 | |

表2

| | | サンプル番号 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | R | |
| | | 01-122 | 01-123 | 01-124 | 01-125 | 01-126 | 01-127 | 01-128 | 01-129 | 01-130 | 01-131 | 01-132 | 01-133 | 01-134 | 01-135 | 01-136 | 01-137 | 01-138 | 合計 |
| 個体数割合（%） | 栽培植物 | - | - | 0.8 | 1.0 | 1.1 | 4.4 | - | 0.7 | 0.5 | - | - | 0.5 | - | - | - | - | - | 1.3 |
| | 木本 | 3.1 | - | - | - | - | 0.1 | - | - | 0.5 | - | - | 0.5 | - | - | - | - | 0.8 | 0.3 |
| | 水田・水湿地雑草 | 83.1 | 86.8 | 90.2 | 86.6 | 90.5 | 79.6 | 82.3 | 84.1 | 83.3 | 90.8 | 96.2 | 87.2 | 85.6 | 92.7 | 100.0 | 86.3 | 95.9 | 86.2 |
| | 畦畔・路傍・畑地雑草 | 8.5 | 9.7 | 1.6 | 10.3 | 8.4 | 13.7 | 10.5 | 11.7 | 11.8 | 8.2 | 1.6 | 4.3 | 8.4 | 4.6 | - | 9.2 | 2.5 | 8.8 |
| | 田畑共通雑草 | 5.4 | 3.5 | 7.4 | 2.1 | - | 2.3 | 7.3 | 3.4 | 3.9 | 1.1 | 2.2 | 7.4 | 5.9 | 2.6 | - | 4.6 | 0.8 | 3.4 |
| | 合計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 種数割合（%） | 栽培植物 | - | - | 5.6 | 4.5 | 5.6 | 7.7 | - | 4.8 | 3.7 | - | - | 4.8 | - | - | - | - | - | 4.0 |
| | 木本 | 11.5 | - | - | - | - | 3.8 | - | - | 3.7 | - | - | 4.8 | - | - | - | - | 7.7 | 8.0 |
| | 水田・水湿地雑草 | 57.7 | 75.0 | 72.2 | 63.6 | 77.8 | 46.2 | 68.4 | 61.9 | 51.9 | 83.3 | 76.5 | 61.9 | 57.1 | 65.0 | 100.0 | 68.2 | 61.5 | 40.0 |
| | 畦畔・路傍・畑地雑草 | 23.1 | 10.0 | 11.1 | 22.7 | 16.7 | 26.9 | 21.1 | 23.8 | 29.6 | 11.1 | 11.8 | 14.3 | 28.6 | 25.0 | - | 18.2 | 23.1 | 38.0 |
| | 田畑共通雑草 | 7.7 | 15.0 | 11.1 | 9.1 | - | 15.4 | 10.5 | 9.5 | 11.1 | 5.6 | 11.8 | 14.3 | 14.3 | 10.0 | - | 13.6 | 7.7 | 10.0 |
| | 合計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

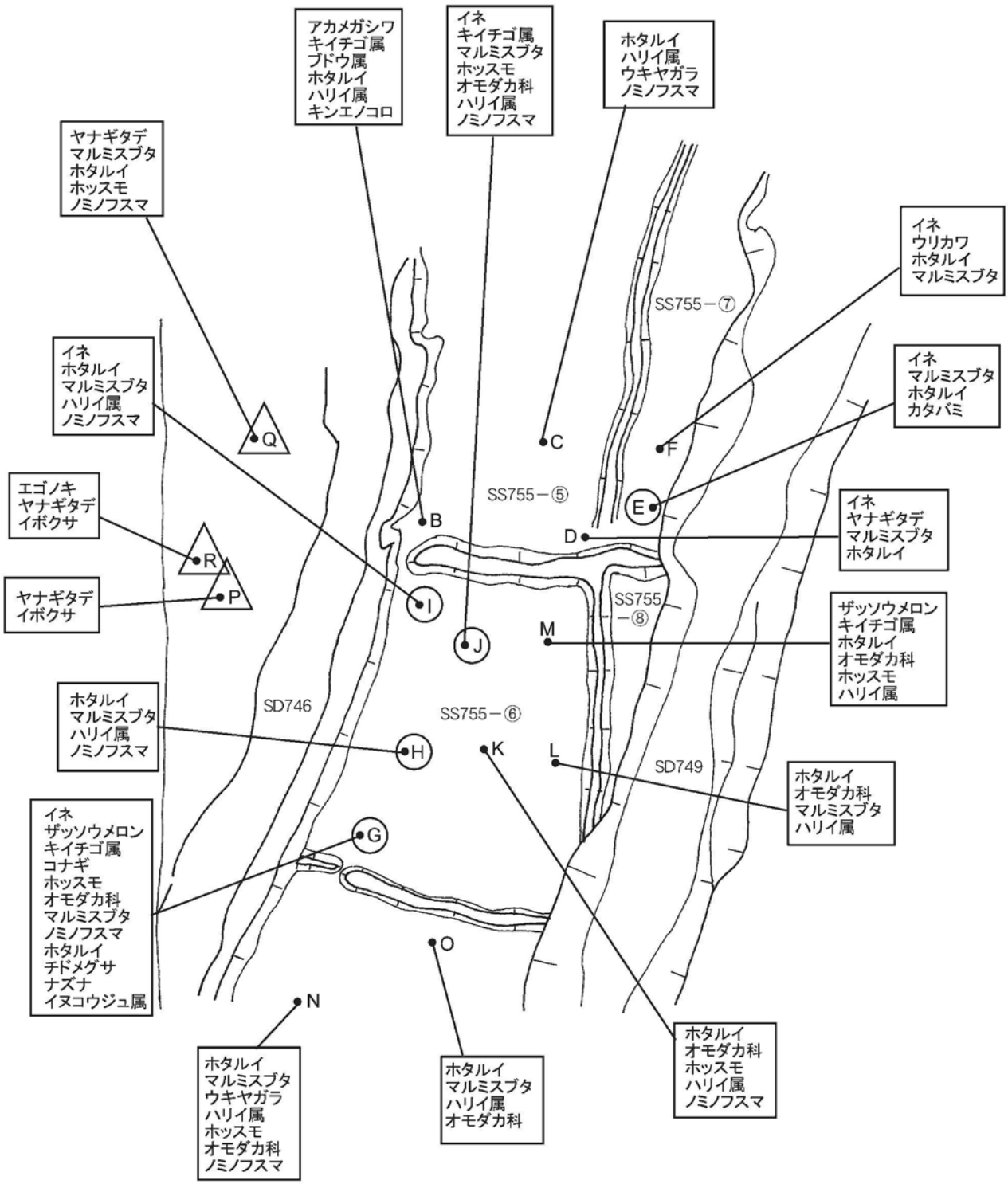

アカメガシワ
キイチゴ属
ブドウ属
ホタルイ
ハリイ属
キンエノコロ
イネ
キイチゴ属
マルミスブタ
ホッスモ
オモダカ科
ハリイ属
ノミノフスマ
ホタルイ
ハリイ属
ウキヤガラ
ノミノフスマ
ヤナギタデ
マルミスブタ
ホタルイ
ホッスモ
ノミノフスマ
イネ
ウリカワ
ホタルイ
マルミスブタ
SS755－⑦
イネ
ホタルイ
マルミスブタ
ハリイ属
ノミノフスマ
イネ
マルミスブタ
ホタルイ
カタバミ
Q
C
F
エゴノキ
ヤナギタデ
イボクサ
SS755－⑤
E
B
D
イネ
ヤナギタデ
マルミスブタ
ホタルイ
R
ヤナギタデ
イボクサ
P
I
SS755
－⑧
ザッソウメロン
キイチゴ属
ホタルイ
オモダカ科
ホッスモ
ハリイ属
M
J
ホタルイ
マルミスブタ
ハリイ属
ノミノフスマ
SD746
SS755－⑥
H
K
L
SD749
ホタルイ
オモダカ科
マルミスブタ
ハリイ属
イネ
ザッソウメロン
キイチゴ属
コナギ
ホッスモ
オモダカ科
マルミスブタ
ノミノフスマ
ホタルイ
チドメグサ
ナズナ
イヌコウジュ属
G
O
N
ホタルイ
マルミスブタ
ウキヤガラ
ハリイ属
ホッスモ
オモダカ科
ノミノフスマ
ホタルイ
マルミスブタ
ハリイ属
オモダカ科
ホタルイ
オモダカ科
ホッスモ
ハリイ属
ノミノフスマ

図1

# ２．第７次調査出土の中世人骨

九州大学大学院比較社会文化研究院
中橋　孝博

## はじめに

福岡市の南東部に位置する福岡空港とその周辺は、これまで板付遺跡や雀居遺跡など重要な遺跡が密集する地域として知られ、人類学的にも、金隈遺跡（中橋、他、1985）や上月隈遺跡（中橋、1991）などから、弥生～近世期の多くの人骨資料が出土している。当地の重要課題である渡来人問題に直結した弥生人骨はもとより、歴史時代人骨もまた形質の時代変化を追う上で貴重であり、当地はそうしたテーマを追求する上で全国的にも数少ない地域として注目されよう。

平成10年度から福岡市教育委員会によって空港の南に位置する下月隈C遺跡の調査が開始され、平成13年度の第７次調査によって新たに鎌倉時代の人骨が出土した。ほとんど頭蓋のみで保存状態は必ずしも良くないが、これまで資料数が限られている中世期の人骨として貴重であり、以下に得られた知見を報告する。

## 遺跡・資料・方法

下月隈C遺跡は、福岡市博多区月隈４丁目の、ちょうど福岡空港の南に隣接する一帯で検出された遺跡である。福岡平野を縦断する御笠川東岸の沖積地にあたり、標高９～10mの微高地に位置する。当遺跡では従来の調査で弥生時代前期から中世初期に至る遺構面が検出され、「皇后宮職」と書かれた木簡や第６次調査では木製祭祀具も出土している（山崎、2002）。

人骨は中世期の水田地帯の水路中から頭蓋骨のみ出土した。図に示したように、下顎は無く、頭蓋冠から顔面上半郎にかけての部分が遺存している。土圧による歪みに加えて、湿地から掘り出された影響で、骨表面の剥離、変形が著しい。

人骨の所属時代は、伴出遺物に関する考古学的な検証から、ほぼ13世紀所属のものと考えられている。

## 所見

性別・年齢：眉間部や乳様突起など性判定に有効な部位は欠損しているが、遺存している頭蓋冠部のサイズが大きく（表１）、推定値ながら最大長は183㎜以上、最小前頭幅も111㎜以上に達している。表１に示した中世や弥生人集団の平均値との比較結果からも明らかなように、これらの数値は各集団の男性平均値をも上回っており、また側頭線の発達、および前頭骨頬骨突起部の発達が良好である点からみても、男性である可能性が高い。一方、縫合が観察可能な部分のすべてで癒合しており、かなり高齢のおそらくは老年に達した個体であると見なされる。

一般的に中世人は長頭性が強いことが知られているが、計測結果を見る限り、当男性には特にそうした傾向は認められない。ただし土圧による歪みも認められるので、この点の確認は困難である。

もう一つ、当人骨の特徴として、鼻骨の彎曲がかなり弱い点を指摘しておきたい。その彎曲示数は86.8で、ほぼ吉母浜中世人の男性平均に近い（表２）。残念ながら上顎骨はほとんど遺存しておらず、もう一つの中世人の特徴として知られる歯槽性突顎の程度は不明である。

なお、当人骨が当時の田園の水路中から頭蓋骨のみの形で見い出された点については、単に別の埋

葬地にあった遺体の一部が何らかの擾乱作用によってこの水路に流れ込んだものか、それとも、例えば首離断のような行為の結果なのか、幾つか可能性が考えられるが、保存不良のためもあって検証は困難である。少なくとも頭蓋骨表面に人為的な傷跡は認められず、また頭蓋底部は破損により観察不能であり、いずれとも判断しがたい。

以上、今回、福岡市の下月隈C遺跡から出土した中世人男性は、保存不良のためその詳しい特徴は不明であったが、一部、鼻骨形態にその時代性の一端（扁平性）が見て取れた。

文　献

中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県下関市吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
中橋孝博・土肥直美・永井昌文（1985）：「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」、史跡金隈遺跡、福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集、福岡市教育委員会。
中橋孝博（1991）：「福岡市上月隈遺跡出土人骨（近世・弥生）」、福岡市埋蔵文化財調査報告書第257集、福岡市教育委員会。
山崎龍雄（2002）：　福岡市博多区下月隈C遺跡第6次調査出土の木製祭祀具」、祭祀考古22号、祭祀考古学会。

**表１．計測値の比較　（mm）**

| 計測項目 | | 下月隈Ｃ７次（中世） | 吉母浜（中世）＊ 男性 | 吉母浜（中世）＊ 女性 | 金隈（弥生）＊＊ 男性 | 金隈（弥生）＊＊ 女性 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| M１ | 頭最大長 | 183 | 181.8 | 176.4 | 182.3 | 176.8 |
| M８ | 頭最大幅 | 149 | 136.2 | 132 | 142 | 138.3 |
| M９ | 最小前頭幅 | 111 | 93.3 | 91.4 | 94.9 | 93.7 |

＊：中橋・永井（1985）、＊＊：中橋、他（1985）

**表２．鼻根部の計測結果（男性）**

| 計測項目 | | 下月隈Ｃ７次（中世） | 吉母浜（中世） | 金隈（弥生） |
|---|---|---|---|---|
| M50 | 前眼窩間幅 | 20.4 | 18.8 | 18.5 |
| F | 鼻根横弧長 | 23.5 | 21.7 | 20.7 |
| 50/F | 鼻根彎曲示数 | 86.8 | 86.6 | 89.4 |

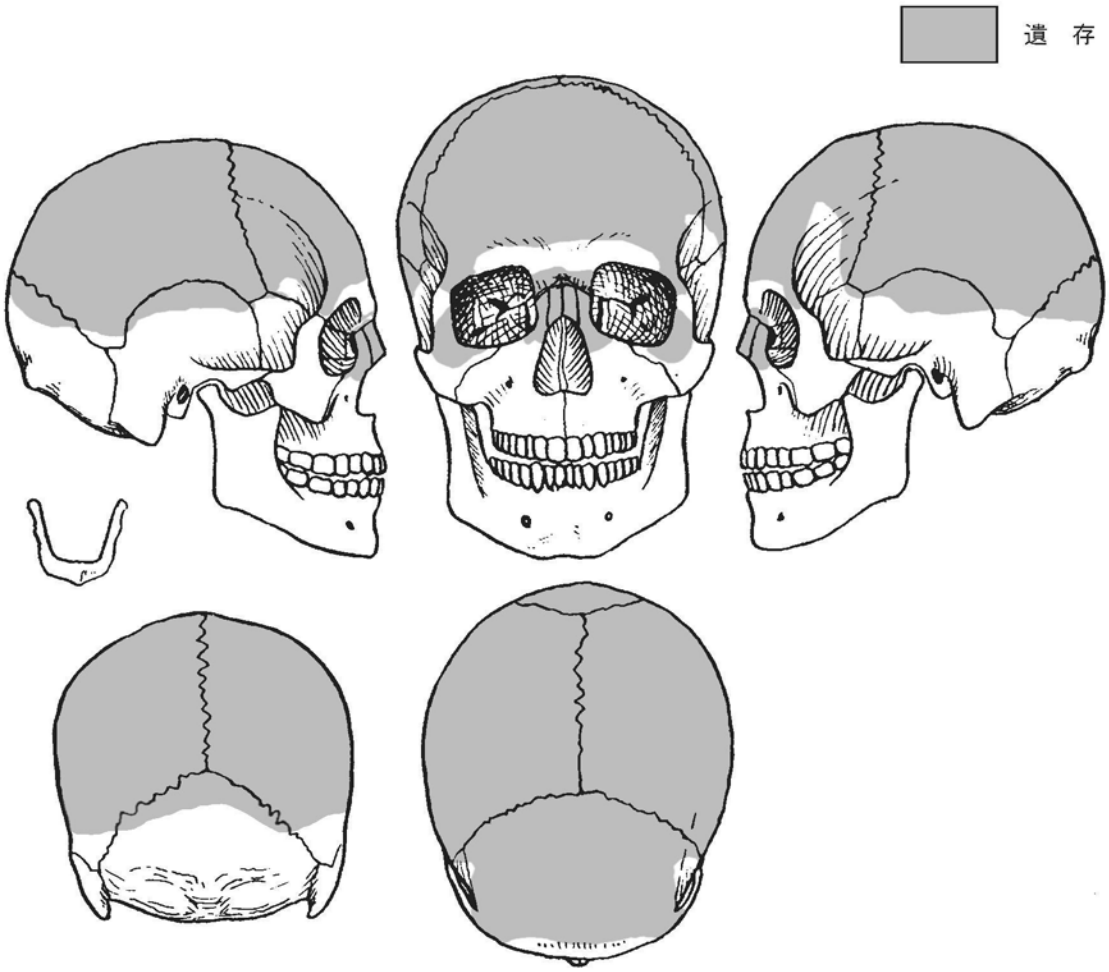



図1．遺存部位

# 3．第７次調査出土動物遺存体について

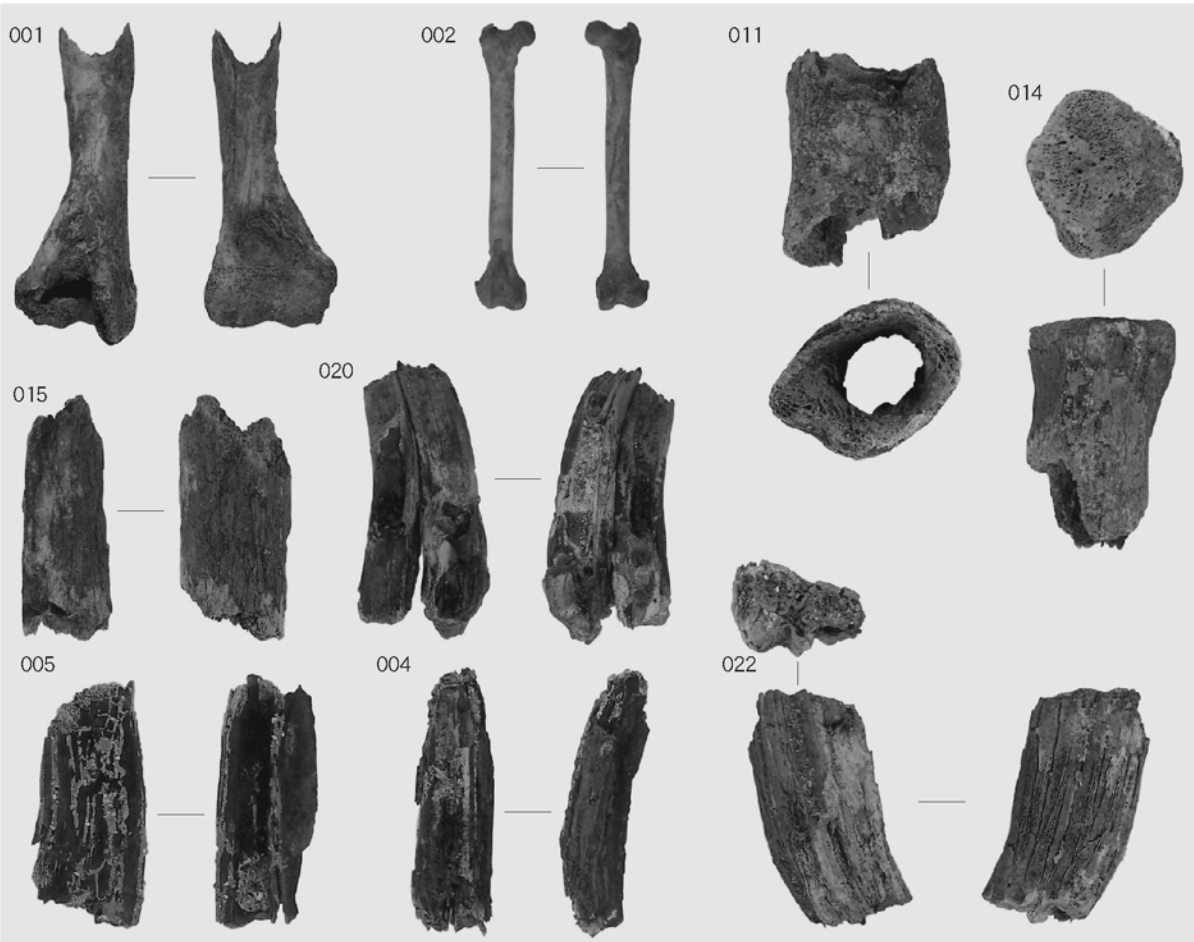
屋山　　洋

動物遺存体が出土した遺構の時期は古代から近代であるが、古代には木簡が出土しているため、調査地の近隣には官衙施設等があった可能性がある。

獣骨は主に溝と包含層から出土した。調査地点は沖積地でかなり水気が多いため、骨のカルシウムと水中の鉄分が結合したビビアナイトが析出しており、かなり劣化が進んた状態である。出土した獣骨のうち同定できたのは002のネコを除くとすべてウシ・ウマの大型獣である。ウシ・ウマは歯と四肢骨が出土しており、遺体を埋葬・廃棄したものと思われる。しかし、出土状況が不明なことや、また、遺存状態の悪さから解体痕等を確認できる状態ではないため、埋葬か廃棄かは不明である。ウシ・ウマは官衙で使役後埋葬された可能性の他、水に関連した祭祀や、調査区は水が豊富であることから、解体場所であった可能性などが考えられる。

| 報告番号 | 地区 | 層位 | 大分類 | 小分類 | 部位名 | 左右 | 部分１ | 部分２ | 成長度 | 切痕 | 火熱 | 備考 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 001 | SD703 | F-23区下面 | 哺乳類 | ウマ | 上腕骨 | 左 | 遠位部 | | 骨化済み | 不明 | 不明 | 表面剥離 | 近世～近代 |
| 002 | SD703 | G-30区 | 哺乳類 | ネコ | 大腿骨 | 右 | 完形 | | 骨化済み | なし | なし | ＧＬ　10.36cm | 〃 |
| 003 | 第１面　SD720 | G-29区下層 | 哺乳類 | | 長骨 | | | | | | | | 中世前半 |
| 004 | 第２面 | E-30区　R-1 | 哺乳類 | ウマ | 上顎歯？ | | 細片化 | | | 不明 | 不明 | 歯冠高　6.23cm | ６Ｃ後半～８Ｃ後 |
| 005 | 第２面 | E-30区　R-2 | 哺乳類 | ウマ | 左上顎歯　1本 | | 後側半分欠損 | | 若獣 | | | 残存歯冠高　6.2cm | 〃 |
| 006 | 第２面 | E-30区　R-3 | 哺乳類 | ウマ | 上顎歯 | 左？ | 細片化 | | | 不明 | 不明 | 歯冠高　6.6cm | 〃 |
| 007 | 第２面　SD746 | C-31区黒色粘土中 | 哺乳類 | | 長骨片 | | 細片化 | 表面剥離 | 不明 | 不明 | 不明 | | ８Ｃ後半 |
| 008 | 第２面　SD746 | G-31区中層 | 哺乳類 | | 長骨片 | | 細片化 | | 不明 | 不明 | 不明 | 表面剥離 | 〃 |
| 009 | 第２面　SD746 | H-31区 | 哺乳類 | ウシ・ウマ | 長骨片 | | 細片化 | 表面剥離 | 不明 | 不明 | 不明 | | 〃 |
| 010 | 第２面　SD746 | H-31区 | 哺乳類 | ウシ・ウマ | 長骨片 | | 細片化 | 表面剥離 | 不明 | 不明 | 不明 | | 〃 |
| 011 | 第２面　SD746 | H-31区 | 哺乳類 | ウシ・ウマ | 長骨片 | | 細片化 | 表面剥離 | 不明 | 不明 | 不明 | | 〃 |
| 012 | 第２面　SD746 | I-30区 | 哺乳類 | ウシ・ウマ | 長骨片 | | 細片化 | | 不明 | 不明 | 不明 | 表面剥離 | 〃 |
| 013 | 第２面　SD746 | I-31区 | 哺乳類 | | 骨片 | | | | | | | | 〃 |
| 014 | 第２面　SD746 | I-31区　R-1 | 哺乳類 | ウマ | 中足骨 | | 近位部 | 表面剥離 | 骨化済み | 不明 | 不明 | | 〃 |
| 015 | 第２面　SD786-A | C-32区　砂土中 | 哺乳類 | ウシ・ウマ | 長骨 | | 幹部 | 表面剥離 | 不明 | 不明 | 不明 | 細片化 | ６Ｃ後半～ |
| 016 | 第２面　SD786-A | C-32区　砂土中 | 哺乳類 | ウシ・ウマ | 長骨 | | 幹部 | 表面剥離 | 不明 | 不明 | 不明 | 細片化 | ８Ｃ後半 |
| 017 | 第２面　SD786-B | C-32区　砂土中 | 哺乳類 | ウシ・ウマ | 長骨 | | 幹部 | 表面剥離 | 不明 | 不明 | 不明 | 脛骨？細片化 | ８Ｃ後半 |
| 018 | 第２面　SD786-C | C-32区　砂土中 | 哺乳類 | ウシ | 下顎後臼歯？ | | | | | | | | ８Ｃ後半 |
| 019 | 第２面　SD786-D | C-32区　砂土中 | 哺乳類 | ウシ | 上顎歯 | | P2か？ | | | | | | ８Ｃ後半 |
| 020 | 第２面　SD786-D | C-32区　砂土中 | 哺乳類 | ウシ | 上顎歯 | 左？ | 後臼歯 | | 若獣 | | | 残存歯冠高　6.86cm | ８Ｃ後半 |
| 021 | 第２面　SD786-F | C-32区　砂土中 | 哺乳類 | ウシ・ウマ | 長骨 | | 幹部 | 表面剥離 | 不明 | 不明 | 不明 | 細片化 | ８Ｃ後半 |
| 022 | 第２面　SS729-5 | D-33区 | 哺乳類 | ウマ | 右下顎歯 | | 周辺エナメル欠損 | | | 不明 | 不明 | 残存歯冠高　5.38cm | ８Ｃ後半 |

表１　下月隈Ｃ遺跡７次調査出土動物遺存体一覧




図版１　出土獣骨写真（番号は表の報告番号である）

# 4．第６次・第７次調査出土木製品の年輪年代

独立行政法人奈良文化財研究所
光谷　拓実

このたび、福岡市下月隈C遺跡第６次・第７次調査において、年輪年代法による年代測定が可能と思われる木製品（曲物底板）が２点出土した。この遺跡は、弥生時代～中世にかけての集落遺跡である。曲物底板は古代（奈良～平安）の地層から出土したものであるが、古代の年代幅のなかのどの年代に属する遺物なのか、そのことを考古学的に明らかにすることは難しい。しかし、曲物底板類には、年輪密度の高い良質のヒノキ材が使われていることが多く、年輪年代法にとって格好の測定対象物である。こうした出土遺物に辺材が残っておれば、原木の伐採年に近い年代が導き出される結果、比較的、遺構、遺物の年代に近い年代とみなすことができる。そこで今回は、この２点の曲物底板を当研究室に搬入してもらい、年代測定を実施することとした。

## 試料と方法

福岡市教育委員会から持ち込まれた曲物底板は２点、それぞれ№１、№２としておく。いずれもヒノキの柾目板を使用しており、年輪密度の高い良質の材が用いられていた。№１には心材に続く辺材部の無い形状のものであるが、№２には2.1cm残存していた。

年輪幅の計測には、曲物底板から直接、年輪読取器（実体顕微鏡付き、0.01mmまで計測可）を使用し、非破壊・非接触にて実施した。年代を割り出すにあたっては、近畿・中国地方の遺跡出土木材で作成したもの（512年～1322年：Aパターン）と、兵庫県下の遺跡出土木材で作成したもの（354年～807年：Bパターン）の２種類の暦年標準パターンを使用することとした。

コンピュータによる年輪パターンの照合は、相関分析手法[1]によった。このとき、測定対象材の年輪パターンと暦年標準パターンとの照合においては、相関係数rを求めた後、t検定による検定をおこない、照合が成立したと認めてもよいt値の基準値（t≧5.0前後）が検出された年代位置でもって、相方の年輪パターングラフを重ね合わせ、目視で詳細にチェックし、最終的に年輪年代を確定することとした。

## 結果

曲物底板２点の計測年輪数は№１－247層、№２－138層であった。ヒノキの暦年標準パターンとの照合は、№１の年輪パターンはBパターンとの照合において成立し、最外年輪の年代は690年と確定した。このときのt値は5.7であった。№2の場合はAパターンとの照合において成立し、最外年輪の年代は850年と確定した。このときのt値は4.3とやや低いものの、相方の年輪パターングラフを比較した結果、間違いなく合致していることを確認した。ここで重要なのは、№２の年輪年代850年＋α年である。α年は辺材の一部が加工時に幾分削除されている可能性はあるが、どうみてもこの曲物底板の伐採年は850年を大きく下ることはない。この木製品が出土した遺構は、ほぼこの頃のものである可能性は高い。

**表1　下月隈C遺跡出土木製品の年輪年代**

| №. | 木製品名 | 遺構名 | 樹種 | 年輪数（層） | 年輪年代（年） | t値 | 辺材 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 曲物底板 | SD743 | ヒノキ | 247 | 690 | 5.7（：Bパターン） | - |
| 2 | 曲物底板 | SX395 | ヒノキ | 134 | 850 | 4.3（：Aパターン） | 2.1cm |

1）田中琢、光谷拓実、佐藤忠信『年輪に歴史を読む－日本における古年輪学の成立－』、奈良国立文化財研究所学報第48、同朋舎出版、1990

図１．曲物底板№1（18.4cm×18.8cm，厚さ0.3mm～0.4mm）

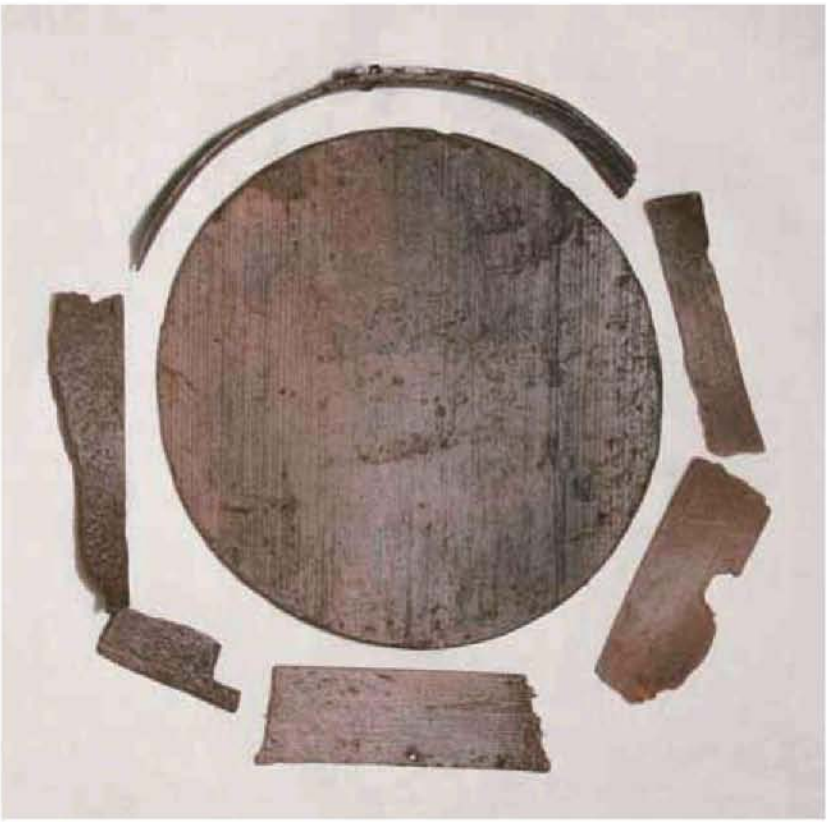


図２．曲物底板№2（20.1cm×20.0cm，厚さ 0.6mm）

# 5．第７次調査出土試料の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

下月隈C遺跡の第７次調査において、主に溝状遺構より土壌試料が採取された。以下にはこの土壌試料について行った花粉分析の結果を示し、弥生時代から奈良時代にかけての遺跡周辺の植生変遷について検討した。

## １．試料

試料の一覧を表１に示す。各試料の土相について、試料１（SX728）は砂質シルト（色調は乾燥のため不明）、試料２（SD745）は黒褐色の砂質有機質粘土、試料３（SD746）は黒褐色の砂質有機質粘土～粘土質砂、試料４は粘土混じり砂レキ（色調は乾燥のため不明）、試料５（SX737の４層）は黒色の分解質泥炭、試料６（同５層）は褐色を帯びた黒灰色の砂質泥炭質粘土、試料７（同27層）は小レキ混じりの黒色砂質分解質泥炭である。試料８（SD826）も小レキ混じりの黒色砂質分解質泥炭、試料９（SD818）は黒褐色の砂質泥炭質粘土、試料10（SD818）は黒灰色の泥炭質粘土、試料11（SD818）は黒色の分解質泥炭、試料12（SD818）は黒～黒褐色の砂質泥炭～泥炭質粘土、試料13（SK810）はやや砂質の黒色分解質泥炭、試料14（SK903）黒色の分解質泥炭、試料15（SD913）は小レキが混じる黒褐色の泥炭質粘土である。

## ２．分析方法

花粉分析は上記した15試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料（湿重３～５g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

## ３．分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉44、草本花粉38、形態分類を含むシダ植物胞子６の総計88である。これら花粉・シダ植物胞子・藻類の一覧を表２に、それらの分布を図１に示した。なお分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を基数として、草本花粉，シダ植物胞子については全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。また表および図においてハイフ

**表１　試料一覧**

| 試料番号 | 調査面 | 地区 | 出土状況 | 時期 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 第Ⅱ面 | E-32 | 黒褐色粘土 | 古墳時代後期 |
| 2 | 〃 | | 北側ベルト　３層 | 奈良時代 |
| 3 | 〃 | | 北側ベルト　７・10層 | 古墳時代後期～奈良時代 |
| 4 | 〃 | C-29 | 水田土 | 古墳時代後期 |
| 5 | 〃 | | 第４層 | 古墳時代後期 |
| 6 | 〃 | | 第５層 | 古墳時代後期 |
| 7 | 〃 | | 第27層 | 古墳時代後期 |
| 8 | 第Ⅲ面 | | | 古墳時代中期 |
| 9 | 〃 | | １～２区ベルト上層１ | 弥生時代後期～古墳時代前期 |
| 10 | 〃 | | １～２区ベルト下層 | 弥生時代後期～古墳時代前期 |
| 11 | 〃 | | ３～４区ベルト上層 | 弥生時代後期～古墳時代前期 |
| 12 | 〃 | | ３～４区ベルト下層 | 弥生時代後期～古墳時代前期 |
| 13 | 〃 | | 下層 | 弥生時代中期 |
| 14 | 〃 | | | 弥生時代 |
| 15 | 〃 | | | 弥生時代中期～後期 |

## 表2．産出花粉化石一覧表

| 和名 | 学名 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 樹木 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| マキ属 | *Podocarpus* | - | 2 | - | - | 1 | 1 | 4 | - | 1 | 2 | 5 | 1 | 3 | 1 | 4 |
| モミ属 | *Abies* | 1 | 4 | 1 | 1 | 4 | - | - | 4 | 1 | 1 | 3 | 1 | 1 | 1 | 3 |
| ツガ属 | *Tsuga* | - | 3 | 1 | 1 | 1 | - | 3 | 1 | 1 | 3 | - | 3 | - | 1 | - |
| マツ属複維管束亜属 | *Pinus* subgen. *Diploxylon* | 6 | 5 | 9 | 3 | 7 | 3 | 4 | 11 | 10 | 19 | 15 | 14 | - | 2 | 22 |
| マツ属（不明） | *Pinus* (Unknown) | 3 | 1 | - | 1 | 2 | 1 | 1 | 3 | 3 | 3 | 2 | 2 | 2 | 2 | 6 |
| コウヤマキ属 | *Sciadopitys* | - | - | - | - | - | - | - | 2 | 1 | - | 1 | - | - | - | - |
| スギ | *Cryptomeria japonica* D. Don | 4 | 23 | 10 | 11 | 18 | 3 | 22 | 20 | 17 | 20 | 17 | 23 | 2 | 5 | 15 |
| イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科 | T.- C. | 1 | 3 | 4 | 1 | 2 | 1 | 5 | - | - | - | 4 | 3 | - | 2 | 4 |
| ヤナギ属 | *Salix* | - | - | 2 | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | 1 | - |
| ヤマモモ属 | *Myrica* | 1 | 2 | - | 1 | 1 | 3 | 2 | 4 | 4 | 5 | 5 | 2 | - | - | 4 |
| ノグルミ属 | *Platycarya* | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| クルミ属 | *Juglans* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 3 | - | - | - | - | - |
| クマシデ属－アサダ属 | *Carpinus* - *Ostrya* | 2 | 5 | 4 | 3 | 3 | 2 | 2 | 5 | 2 | 5 | 5 | - | 3 | 2 | 6 |
| カバノキ属 | *Betula* | - | 1 | 1 | - | 1 | - | - | 2 | - | 2 | - | 1 | - | - | - |
| ハンノキ属 | *Alnus* | 7 | 2 | 2 | 2 | 1 | 5 | 5 | 2 | 2 | 3 | 4 | 1 | 2 | - | 1 |
| ブナ | *Fagus crenata* Blume | - | 1 | - | 1 | 1 | - | - | 3 | 1 | 2 | - | - | - | - | - |
| コナラ属コナラ亜属 | *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* | 11 | 16 | 7 | 13 | 20 | 4 | 12 | 16 | 28 | 22 | 21 | 13 | 14 | 15 | 13 |
| コナラ属アカガシ亜属 | *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* | 53 | 76 | 69 | 73 | 51 | 51 | 59 | 91 | 83 | 72 | 86 | 76 | 31 | 53 | 88 |
| クリ属 | *Castanea* | 3 | - | - | 2 | - | 1 | - | - | - | - | 1 | - | - | - | 1 |
| シイノキ属－マテバシイ属 | *Castanopsis* - *Pasania* | 120 | 57 | 95 | 99 | 78 | 135 | 75 | 48 | 39 | 41 | 47 | 62 | 22 | 28 | 56 |
| ニレ属－ケヤキ属 | *Ulmus* - *Zelkova* | - | 1 | - | 1 | 3 | - | 4 | 1 | 1 | - | - | 2 | - | - | - |
| エノキ属－ムクノキ属 | *Celtis-Aphananthe* | 1 | 2 | 1 | 3 | 4 | - | - | 1 | 6 | 8 | 3 | 1 | - | - | 8 |
| カツラ属 | *Cercidiphyllum* | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| シキミ属 | *Illicium* | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| イスノキ属 | *Distylium* | - | 2 | 6 | 1 | 5 | - | 4 | 6 | - | 3 | 5 | 2 | - | - | 4 |
| フウ属 | *Liquidamber* | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| サンショウ属 | *Zanthoxylum* | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| ユズリハ属 | *Daphniphyllum* | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| アカメガシワ属 | *Mallotus* | 1 | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| ウルシ属 | *Rhus* | 1 | - | - | - | - | 1 | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - |
| モチノキ属 | *Ilex* | - | - | - | - | - | 1 | - | - | 2 | - | 1 | - | 1 | - | - |
| ニシキギ科 | Celastraceae | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - |
| カエデ属 | *Acer* | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - |
| ムクロジ属 | *Sapindus* | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| クロウメモドキ科 | Rhamnaceae | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| ブドウ属 | *Vitis* | - | 4 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| ノブドウ属 | *Ampelopsis* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| マタタビ属 | *Actinidia* | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | 1 |
| ジンチョウゲ科 | Thymelaeaceae | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - |
| グミ属 | *Elaeagnus* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - |
| ウコギ科 | Araliaceae | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| ツツジ科 | Ericaceae | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| イボタノキ属 | *Ligustrum* | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | 1 | - |
| スイカズラ属 | *Lonicera* | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 草本 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ガマ属 | *Typha* | - | - | - | - | 1 | 1 | 2 | 3 | - | - | 1 | - | 1 | 1 | 2 |
| ミクリ属 | *Sparganium* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| ヒルムシロ属 | *Potamogeton* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| サジオモダカ属 | *Alisma* | - | - | 1 | - | 1 | - | 1 | 5 | - | - | 1 | - | - | - | 1 |
| オモダカ属 | *Sagittaria* | - | 1 | 1 | 1 | 1 | - | 1 | 6 | 2 | - | 4 | 4 | - | - | 5 |
| クロモ | *Hydrilla verticillata* Royle. | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - |
| スブタ属－ミズオオバコ属 | *Blyxa* - *Ottelia* | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - |
| イネ科 | Gramineae | 46 | 246 | 171 | 117 | 186 | 58 | 272 | 339 | 269 | 286 | 297 | 187 | 32 | 78 | 282 |
| カヤツリグサ科 | Cyperaceae | 32 | 119 | 62 | 25 | 59 | 31 | 88 | 154 | 46 | 54 | 86 | 44 | 3 | 6 | 85 |
| ホシクサ属 | *Eriocaulon* | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| ツユクサ属 | *Commelina* | - | 1 | 1 | 2 | - | - | - | 1 | - | 1 | 1 | - | - | - | 1 |
| イボクサ属 | *Aneilema* | - | - | - | - | 1 | 1 | - | 2 | - | - | - | - | - | - | - |
| ミズアオイ属 | *Monochoria* | - | 11 | 8 | 3 | 5 | 1 | 3 | 10 | 2 | 4 | 6 | 3 | - | - | - |
| ユリ科 | Liliaceae | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| クワ科 | Moraceae | - | 2 | 3 | 2 | - | - | - | - | 5 | 1 | 3 | 2 | - | - | 3 |
| ギシギシ属 | *Rumex* | - | 4 | 5 | 1 | 1 | - | 1 | 2 | - | 1 | 1 | 1 | - | - | 1 |
| サナエタデ節－ウナギツカミ節 | *Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon | 1 | 2 | - | 1 | 1 | 1 | - | 3 | - | 2 | - | 5 | - | - | - |
| イタドリ節 | *Polygonum* sect. Reynoutria | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - |
| アカザ科－ヒユ科 | Chenopodiaceae - Amaranthaceae | - | 3 | 2 | 1 | 1 | 4 | 2 | - | - | 1 | - | 3 | 3 | - | 3 |
| ナデシコ科 | Caryophyllaceae | - | - | - | 1 | 1 | - | 1 | 1 | - | - | 1 | 1 | - | - | - |
| カラマツソウ属 | *Thalictrum* | - | - | - | 1 | - | 1 | - | - | - | - | - | - | 1 | 6 | - |
| アブラナ科 | Cruciferae | 2 | 11 | 4 | 6 | 5 | 2 | 4 | - | 2 | 5 | 2 | 2 | - | 2 | 3 |
| バラ科 | Rosaceae | 1 | 1 | - | 1 | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - |
| マメ科 | Leguminosae | - | 1 | 1 | 1 | - | - | - | 3 | - | - | 1 | 3 | - | - | - |
| フウロソウ属 | *Geranium* | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| ミソハギ属 | *Lythrum* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - |
| ヒシ属 | *Trapa* | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| アリノトウグサ属 | *Haloragis* | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| セリ科 | Umbelliferae | 3 | 1 | 4 | 5 | 5 | 7 | 4 | 3 | - | 3 | 2 | 1 | - | 3 | 4 |
| シソ科 | Labiatae | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - |
| オオバコ属 | *Plantago* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| アカネ属－ヤエムグラ属 | *Rubia* - *Galium* | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| ヘクソカズラ属 | *Paederia* | - | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| ゴキヅル属－アマチャヅル属 | *Actinostemma* - *Gynostemma* | - | 1 | - | 1 | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - |
| ツルニンジン属 | *Codonopsis* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | - | - |
| ヨモギ属 | *Artemisia* | 14 | 14 | 12 | 13 | 21 | 11 | 21 | 12 | 7 | 7 | 4 | 18 | 25 | 18 | 8 |
| 他のキク亜科 | other Tubuliflorae | - | 4 | 1 | 3 | 5 | 2 | 3 | 3 | 3 | - | 3 | 3 | 19 | 2 | 1 |
| タンポポ亜科 | Liguliflorae | 1 | 3 | 3 | 1 | 12 | - | 6 | 5 | 1 | 5 | 4 | 5 | 27 | 10 | 7 |
| シダ植物 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ヒカゲノカズラ属 | *Lycopodium* | 2 | 3 | - | 1 | - | - | - | - | - | 6 | - | - | - | - | - |
| ゼンマイ科 | Osmundaceae | 2 | - | 1 | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| ミズワラビ属 | *Ceratopteris* | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| サンショウモ | *Salvinia natans* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 | - | - | 1 |
| 単条型胞子 | Monolete spore | 10 | 19 | 17 | 3 | 8 | 10 | 15 | 4 | 3 | 6 | 5 | 11 | 4 | 7 | 7 |
| 三条型胞子 | Trilete spore | 10 | 5 | 1 | 1 | 2 | 3 | 2 | - | 2 | 3 | 3 | 1 | 2 | 3 | 1 |
| 樹木花粉 | Arboreal pollen | 215 | 214 | 216 | 218 | 205 | 213 | 204 | 222 | 202 | 216 | 226 | 208 | 83 | 114 | 238 |
| 草本花粉 | Nonarboreal pollen | 102 | 428 | 282 | 187 | 307 | 121 | 409 | 554 | 340 | 370 | 419 | 283 | 115 | 126 | 408 |
| シダ植物胞子 | Spores | 24 | 27 | 19 | 6 | 11 | 13 | 17 | 4 | 5 | 16 | 8 | 13 | 6 | 10 | 9 |
| 花粉・胞子総数 | Total Pollen & Spores | 341 | 669 | 517 | 411 | 523 | 347 | 630 | 780 | 547 | 602 | 653 | 504 | 204 | 250 | 655 |
| 不明花粉 | Unknown pollen | 16 | 19 | 18 | 17 | 9 | 14 | 17 | 9 | 13 | 11 | 11 | 8 | 11 | 18 | 7 |

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

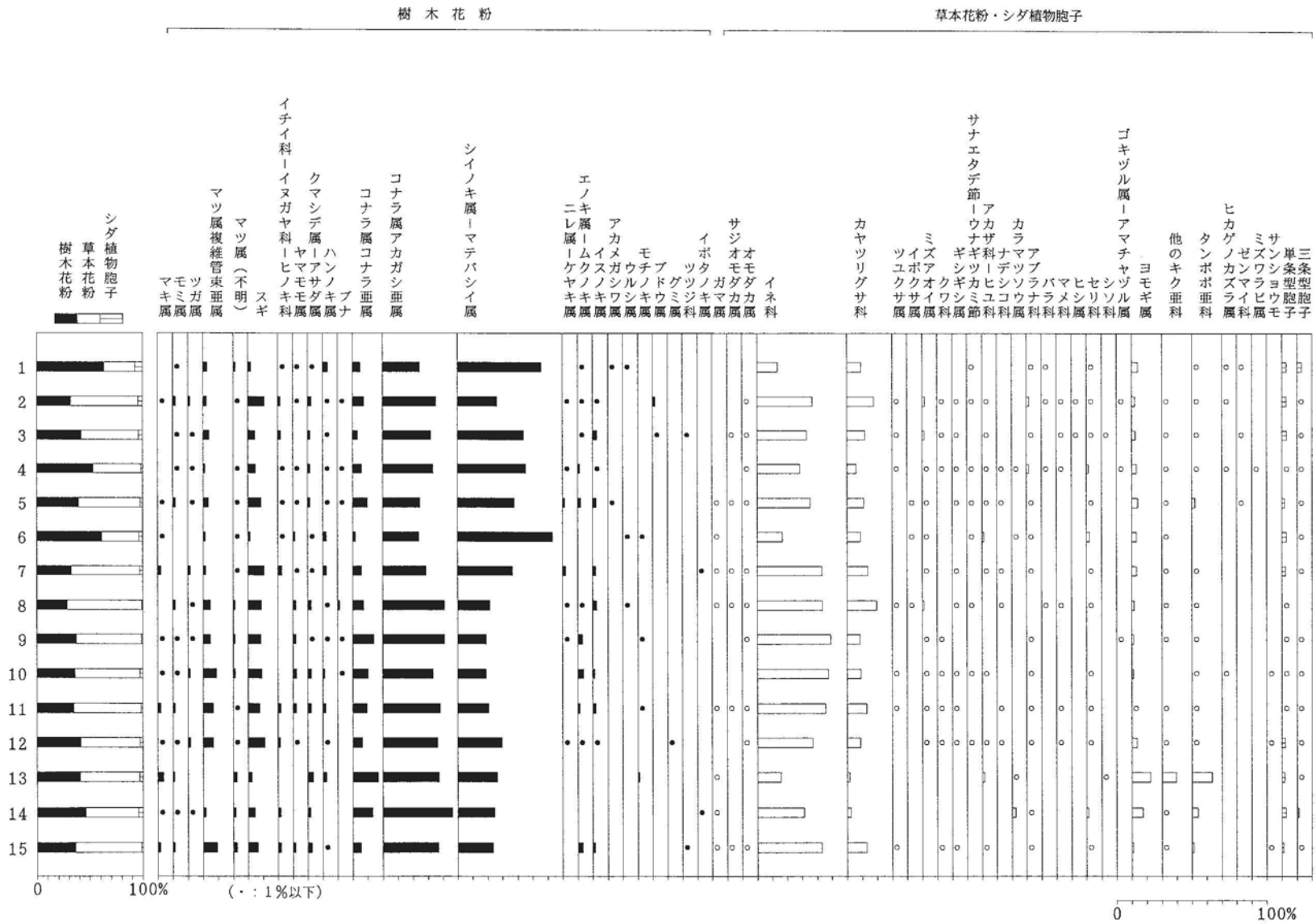



図1．各遺構試料の主要花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

ンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

検鏡の結果、コナラ属アカガシ亜属とシイノキ属－マテバシイ属（以後シイ類と略す）の優占で特徴づけられるが、その中でも二つに分けることができる。すなわち試料２を除き１～７ではシイ類が最優占しており、８～15ではアカガシ亜属が最優占している。次いでコナラ属コナラ亜属が10％前後を示して多く、スギは多くの試料で５～10％を示している。マツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）もほぼ全試料１％を越え、その他、針葉樹のマキ属，モミ属，ツガ属，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）、落葉広葉樹のクマシデ属－アサダ属，ハンノキ属，ニレ属－ケヤキ属，エノキ属－ムクノキ属、常緑広葉樹と考えられるヤマモモ属，モチノキ属，イスノキ属などが多くの試料より検出されている。草本類ではイネ科が圧倒的に多く、大半の試料が30％を越える出現率を示している。次いでカヤツリグサ科が多く、10％前後の出現率を示している。ヨモギ属は多くの試料で１～５％を示しており、試料13では10％を越えている。また同試料においてヨモギ属を除くキク亜科（他のキク亜科）とタンポポ亜科も目立った出現を示している。その他、ツユクサ属，ギシギシ属，アカザ科－ヒユ科，ナデシコ科，アブラナ科，セリ科などが多くの試料で観察されている。さらに水生植物が多く検出されており、浮葉植物のヒシ属や抽水植物のサジオモダカ属，オモダカ属，ミズアオイ属などが観察されている。

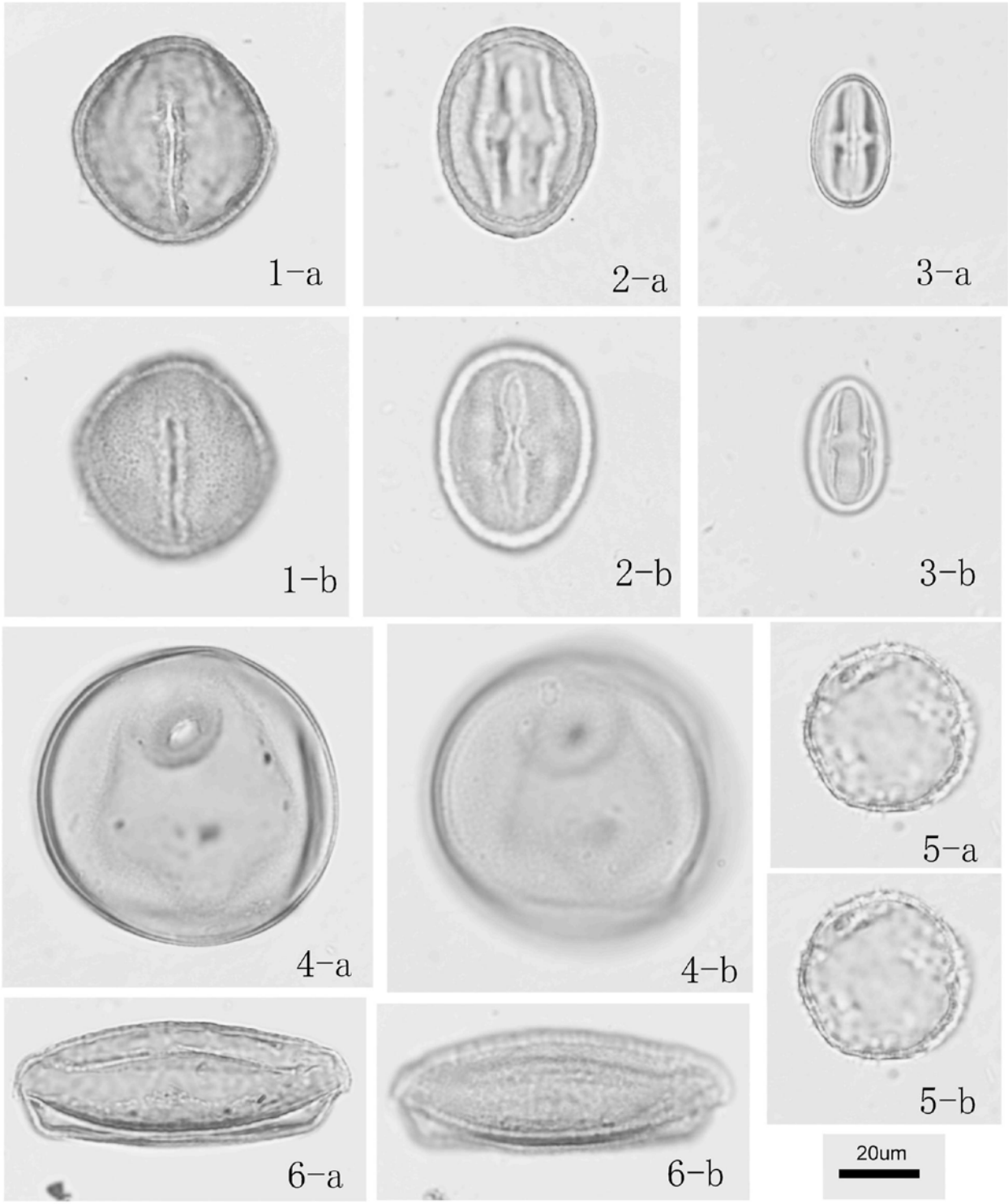
## ４．遺跡周辺の古植生

弥生時代から古墳時代を通してアカガシ亜属とシイ類が中心となった照葉樹林が広く成立していた。しかしながら試料１～７と８～15でアカガシ亜属とシイ類の優占に違いが認められ、これは面の違いを示し、前者が調査第Ⅱ面、後者が第Ⅲ面にあたる。すなわち弥生時代～古墳時代中期（第Ⅲ面）の遺跡周辺丘陵部や微高地上にはアカガシ亜属を主体とした照葉樹林が成立しており、ヤマモモ属，イスノキ属，モチノキ属なども生育していた。その後の古墳時代後期以降はシイ類が中心となった照葉樹林が成立していた。こうした交代については水田稲作による農耕具の利用が関係していることが推測される。千葉県茂原市の国府関遺跡群では鋤鍬にアカガシ亜属を用いるという強い指向性が示されており（能城・鈴木　1993)、下月隈C遺跡においてもこうした指向性によりアカガシ亜属からシイ類への交代がみられたと推察されよう。

弥生時代から古墳時代を通して上記照葉樹林とともにマキ属，モミ属，ニヨウマツ類，スギなどの針葉樹類やコナラ亜属を中心にクマシデ属－アサダ属，ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹類も一部に分布していた。さらにこれら樹木類に絡まるようにブドウ属，ノブドウ属，スイカズラ属，ヘクソカズラ属などの蔓植物も生育していた。一方低地部では溝周辺にハンノキ属がみられ、肥沃なところを好むエノキ属－ムクノキ属も溝近くに生育していたと推測される。この低地部では植物珪酸体分析から稲作地の存在が予想され、この水田には水田雑草を含む分類群と考えられるサジオモダカ属，オモダカ属，スブタ属－ミズオオバコ属，ミズアオイ属などの水生植物（抽水植物）が生育しており、水生シダ植物のミズワラビ属やサンショウモなどもみられた。また溝内にはこれらに加えガマ属やイボクサ属なども生育していたことが考えられ、浮葉植物のヒシ属も産出していることからやや水深のある水域の存在も予想される。この溝の土手部にはツユクサ属，ギシギシ属，アカザ科－ヒユ科，ナデシコ科，アブラナ科，セリ科，オオバコ属，ゴキヅル属－アマチャヅル属，ヨモギ属，タンポポ亜科などの雑草類が生育していた。

引用文献

能城 修一・鈴木三男（1993）国府関遺跡から出土した木製品の樹種.　（財）長生郡市文化財センター調査報告 第15集 国府関遺跡群，（財）長生郡市文化財センター，p.285-310p.




**図版１　下月隈Ｃ遺跡試料８の花粉化石（scale bar：20μm）**

１：コナラ属コナラ亜属　PLC.SS 3610
２：コナラ属アカガシ亜属　PLC.SS 3611
３：シイノキ属－マテバシイ属 PLC.SS 3615
４：イネ科　PLC.SS 3609
５：オモダカ属　PLC.SS 3612
６：ミズアオイ属　PLC.SS 3613

# 6．第7次調査出土試料の植物珪酸体

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

イネ科植物は根より大量の珪酸分を吸収することが知られており、植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）はこの吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたものである。そのうち機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネの機動細胞珪酸体個数から稲作の有無についての検討も行われている（藤原　1984）。このような研究成果から、近年植物珪酸体分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われており、本遺跡においても同様の目的から植物珪酸体分析を行い、稲作の有無について検討した。

## 1．試料と分析方法

分析用試料はSD818の2～3区ベルト上層粘土（試料1）および同下層粘土（試料2），E-32区のSD826（試料3），E-32杭より北2.4m,東0.7m地点の地山より6～15cm上（試料4），E-32杭より北7.1m,東0.5m地点の地山より7～13cm上（試料5）の5試料である。植物珪酸体分析はこの5試料について下記の方法にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

## 2．分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各機動細胞珪酸体個数を求め（表1）、それらの分布を図1に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、全試料よりイネの機動細胞珪酸体が検出され、個数的には20,000個以上と非常に高い数値を示している。イネ以外ではネザサ節型が最も多く、溝試料で100,000個を越えている。次いでウシクサ族が20,000個前後を示して多く、ヨシ属も全試料10,000個以上と生産数が少ないヨシ属としては比較的多く検出されている。クマザサ属型は半数近い試料で10,000個を越え，キビ族は全試料で5,000個～10,000個弱を示している。その他サヤヌカグサ属などが若干得られている。

**表1　試料1g当たりの機動細胞珪酸体個数**

| 試料番号 | イネ（個/g） | ネザサ節型（個/g） | クマザサ属型（個/g） | 他のタケ亜科（個/g） | サヤヌカグサ属（個/g） | ヨシ属（個/g） | キビ族（個/g） | ウシクサ族（個/g） | 不明（個/g） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 39,000 | 159,700 | 7,500 | 6,300 | 0 | 17,600 | 7,500 | 34,000 | 27,700 |
| 2 | 22,900 | 152,500 | 10,200 | 2,500 | 0 | 22,900 | 3,800 | 19,100 | 21,600 |
| 3 | 25,600 | 242,400 | 1,500 | 1,500 | 1,500 | 12,000 | 6,000 | 18,100 | 13,500 |
| 4 | 30,600 | 49,300 | 2,700 | 0 | 0 | 16,000 | 9,300 | 13,300 | 17,300 |
| 5 | 34,300 | 74,900 | 7,600 | 0 | 2,500 | 14,000 | 5,100 | 16,500 | 31,700 |

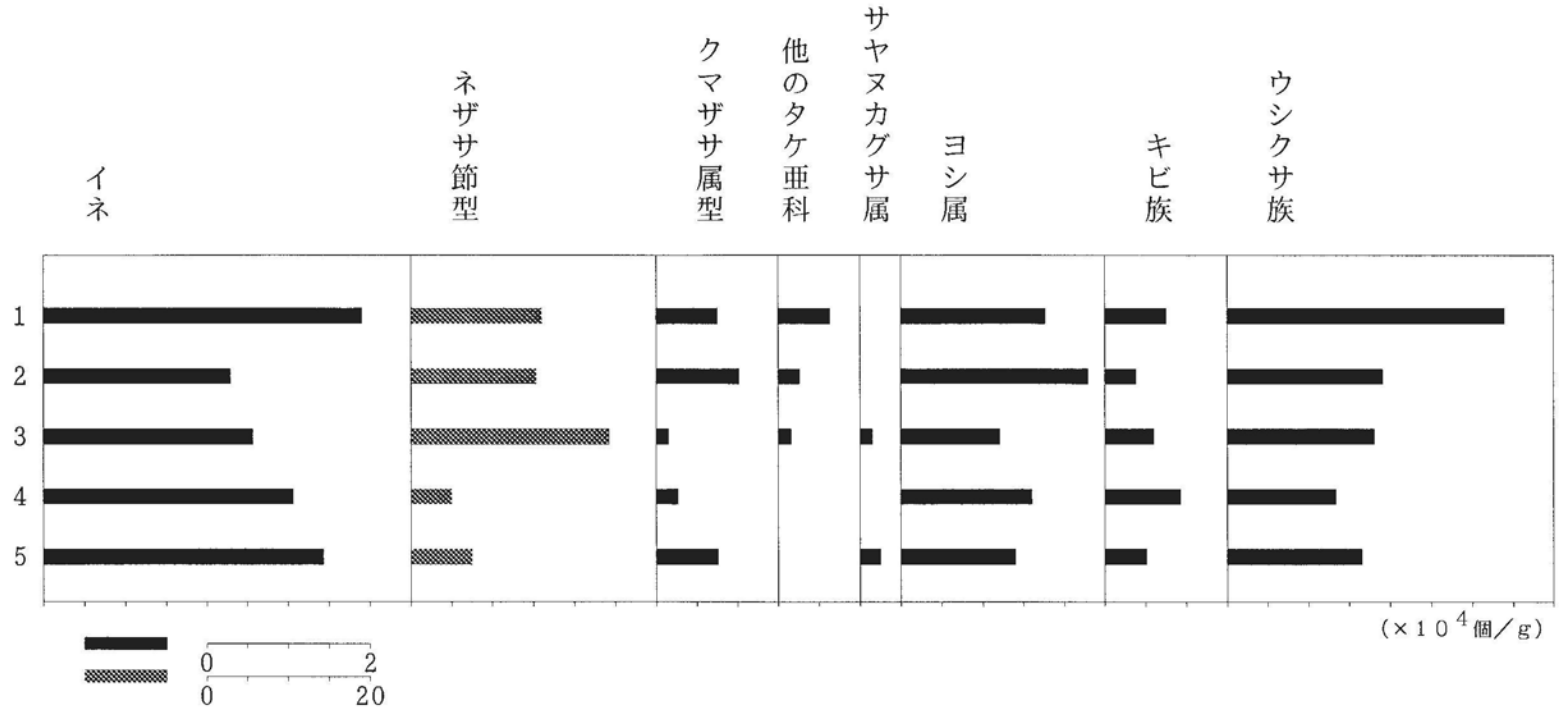



図1．各遺構試料の機動細胞珪酸体分布図

## ３．稲作について

上記したように、全試料よりイネの機動細胞珪酸体が検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、福岡市の板付北遺跡では、イネの機動細胞珪酸体が試料１g当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原　1984)。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。下月隈C遺跡第７次調査試料においては全試料20,000個以上と5,000個をはるかに越える個数が得られており、試料４，５の遺構面試料については稲作を支持する結果が得られたと判断される。また試料１～３は溝状遺構の埋積土より採取されたものであることから試料採取地点での水田稲作は考えられず、稲作はこうした遺構の周辺地域で行われていたと考えられよう

## ４．遺跡周辺のイネ科植物

ネザサ節型が最も多く検出されており、このネザサ節型のササ類（ゴキダケ，ケネザサ(ミヤコネザサ)など）は日のあたる開けたところでの生育が考えられる。また次に多く観察されているウシクサ族（ススキ，チガヤなど）も同様のところでの生育が考えられる。本遺跡周辺には花粉分析から照葉樹林が広がっていたと考えられ、この林縁部や上記水田稲作地周辺空き地などにケネザサースススキ群集といった草地が分布していたことが推測される。一方クマザサ属型のササ類（スズダケ，ミヤコザサなど）については、主に林下での生育が予想され、遺跡周辺に成立していたであろう森林の下草的存在でみられたと推測される。

ヨシ属も多く検出されており、溝状遺構内や上記水田内およびその周辺水路などにヨシやツルヨシといったヨシ属が多く生育していたのであろう。またサヤヌカグサ属もこの溝や水路内に一部生育していたと推測される。

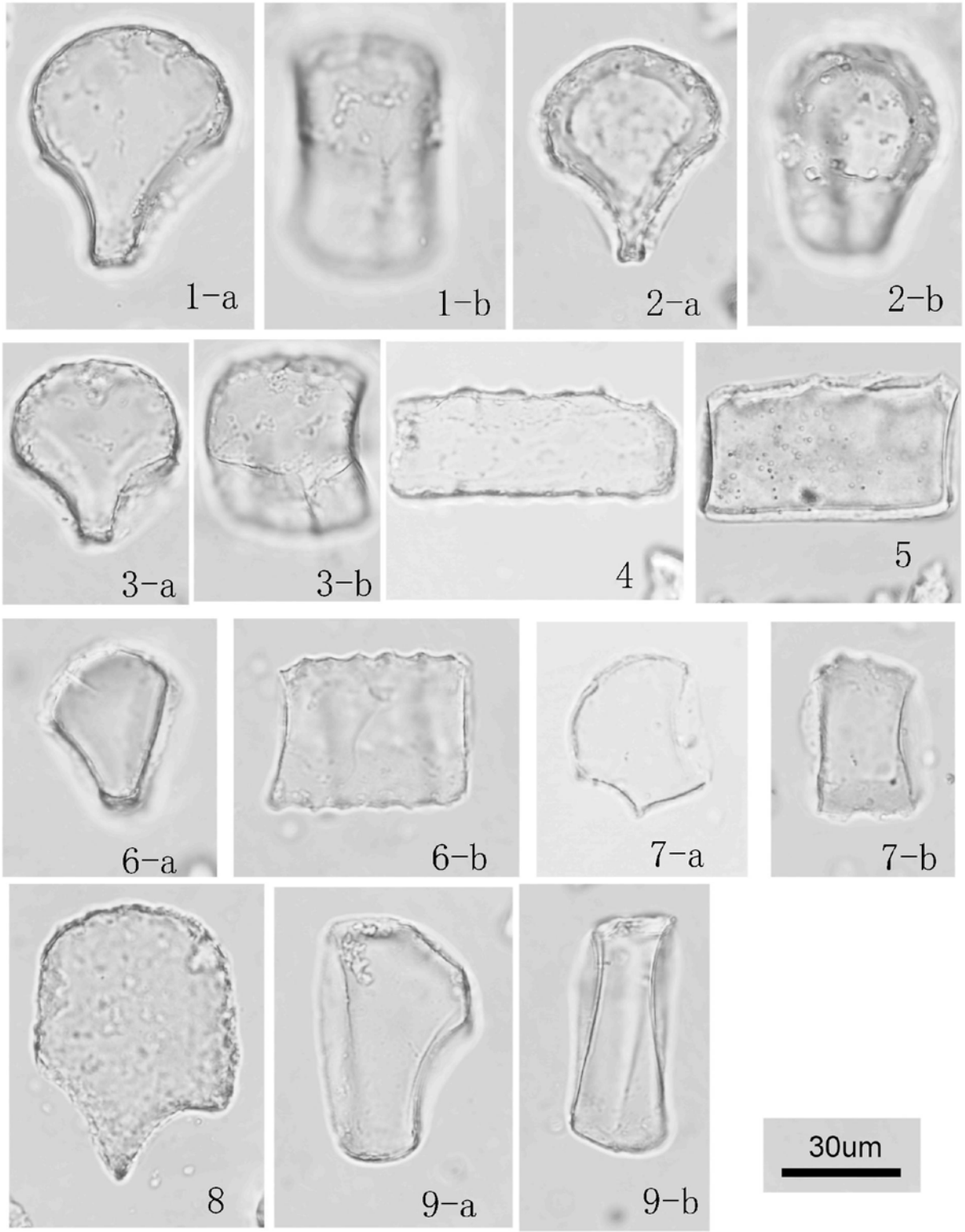
なおキビ族については、その形態からアワ，ヒエ，キビといった栽培種によるものか、エノコログサ，スズメノヒエ，タイヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類できず不明であるが、上記したように水田稲作地が予想されていることからここではエノコログサやタイヌビエなどの水田雑草類に由来するキビ族が主体と推察される。

引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9，　p.15-29.

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－. 考古学ジャーナル, 227,p.2-7.

藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（２）－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－. 考古学と自然科学, 11, p.9-20.




**図版１　下月隈Ｃ遺跡の機動細胞珪酸体（scale bar:30μm）**

１～３：イネ（ａ：断面、ｂ：側面）　１：No.２，２：No.４，３：No.５
４、５：キビ族（側面）　４：No.１，５：No.２
６：ネザサ節型（ａ：断面、ｂ：側面）　No.１　　８：ヨシ属（断面）　No.２
７：クマザサ属型（ａ：断面、ｂ：側面）　No.１　　９：ウシクサ族（ａ：断面、ｂ：側面）　No.３

# 7．第７次調査の珪藻化石群集

黒澤　一男（パレオ・ラボ）

## 1．　はじめに

珪藻は淡水から海水に至るほとんどすべての水域に生息し、水域生態系の一次生産者として重要な位置を占めている。微小（0.01～0.5㎜程度）ながら珪酸体からなる殻を形成するため、化石として地層中によく保存される。また種類ごとに様々な水域に適応し生息するため古環境の指標としてもよく利用されている。

ここでは福岡県福岡市にある下月隈C遺跡から採取した試料を用いて珪藻化石群集を調べ、その堆積環境について検討する。

## 2．　試料及び分析方法

分析試料には、下月隈C遺跡の第７次調査により採取された土層試料15試料（表１）を用いて、以下の珪藻分析をおこなった。

① 試料を湿潤重量で約１～２g程度取り出し、秤量した後にトールビーカーに移し、30％過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。

② 反応終了後、水を加え、１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業は上澄み液が透明になるまで７回以上繰り返し行った。

③ ビーカーに残った残渣は遠心管に回収した。

④ マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し、乾燥した。乾燥後にマウントメディア（封入剤）で封入し、プレパラートを作成した。

⑤ 各プレパラートを光学顕微鏡下400～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数を行った。なお、珪藻化石が少ない試料はプレパラート全面について精査した。

**表1　分析試料一覧**

| 試料番号 | 調査面 | 遺構番号 | 地区 | 出土状況 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 第Ⅱ面 | SX728 | E-32 | 黒褐色粘土 | 古墳後期 |
| 2 | | SD745 | | 北側ベルト３層 | 奈良 |
| 3 | | SD746 | | 北側ベルト7･10層 | 古墳後期 |
| 4 | | SS733 | C-29 | 水田土 | 古墳後期 |
| 5 | | SX737 | | 第4層 | 古墳後期 |
| 6 | | | | 第5層 | 〃 |
| 7 | | | | 第27層 | 〃 |
| 8 | 第Ⅲ面 | SD826 | | | 古墳中期 |
| 9 | | SD818 | | １～２区ベルト上層１ | 弥生後期～古墳前期 |
| 10 | | | | １～２区ベルト下層 | 弥生後期～古墳前期 |
| 11 | | | | ３～４区ベルト上層 | 弥生後期～古墳前期 |
| 12 | | | | ３～４区ベルト下層 | 弥生後期～古墳前期 |
| 13 | | SK810 | | 下層 | 弥生中期 |
| 14 | | SK903 | | | 弥生 |
| 15 | | SD913 | | | 弥生中期～後期 |

## 3．　珪藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群は、主に安藤（1990）により設定された環境指標種群に基づいた。安藤（1990）は淡水域における環境指標種群を設定した。なお環境指標種群以外の珪藻種については広布種として扱い、破片であるため属レベルで同定した分類群は不明種として扱った。以下に安藤（1990）において設定された環境指標種群の概要を記す。

**上流性河川指標種群（J）**　河川上流の渓谷部に集中して出現する種群。

**中～下流性河川指標種群（K）**　中～下流域、すなわち河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群。

**最下流性河川指標種群（L）**　最下流域の三角州の部分に集中して出現する種群。

表2-1．堆積物中の珪藻化石産出表（種群は安藤（1990）に基づく）

| 分類群 | 種群 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 15 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| *Achnanthes crenulata* | W | 11 | 1 | 2 | 2 | 3 | 6 | 1 | - | - | - | 1 | - | - |
| *A. inflata* | W | - | 1 | - | 1 | - | - | - | 2 | - | - | - | - | - |
| *A. lanceolata* | K | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - |
| *Actinella brasiliensis* | O | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | 1 | - |
| *Amphora ovalis var.libyca* | W | 4 | 9 | 14 | 3 | 8 | 9 | 10 | 11 | 4 | 4 | 6 | 8 | 5 |
| *A.* spp. | ? | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Amphipleura lindheimeri* | W | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - |
| *Anomoeoneis sphaerophora* | W | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | 1 |
| *Bacillaria paradoxa* | W | 1 | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| *Caloneis bacillum* | W | - | - | - | - | 2 | 2 | 2 | 1 | - | - | - | 1 | 1 |
| *C. lauta* | W | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - |
| *C. schroederi* | W | - | - | - | - | 1 | - | - | 1 | - | - | - | - | 1 |
| *C. silicula* | W | - | 14 | 5 | 4 | 10 | 5 | 10 | 1 | 1 | - | 1 | 6 | 12 |
| *C.* spp. | ? | 1 | 2 | - | 1 | 2 | 4 | 2 | - | - | - | - | 1 | - |
| *Cocconeis placentula* | W | 5 | 4 | 1 | 3 | - | 7 | 1 | 1 | 1 | - | - | - | - |
| *Cymbella aspera* | O | - | - | 1 | 4 | 4 | 3 | 2 | 23 | 7 | 5 | 41 | 26 | 4 |
| *C. cistula* | O | - | - | - | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - |
| *C. cuspidata* | W | - | 4 | 4 | 4 | 6 | 4 | 4 | 23 | 2 | 3 | 3 | 1 | 6 |
| *C. gracilis* | W | - | 3 | 3 | - | - | 1 | 2 | - | - | - | - | - | - |
| *C. minuta* | W | 2 | 6 | 1 | 1 | 8 | 2 | 11 | 4 | 1 | 1 | - | 1 | 2 |
| *C. naviculiformis* | O | - | 2 | 4 | - | - | - | 1 | 2 | - | - | - | - | 1 |
| *C. sinuata* | K | - | - | 2 | - | - | 1 | - | - | - | - | 1 | - | - |
| *C. tumida* | W | 4 | 1 | - | - | 1 | 12 | 4 | - | 2 | 2 | 1 | - | 3 |
| *C.* spp. | ? | - | - | - | 1 | - | 1 | 2 | 2 | 1 | - | - | - | - |
| *Diploneis elliptica* | Q | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - |
| *D. finnica* | W | - | - | 6 | 2 | 1 | 4 | - | 1 | - | 6 | 3 | 2 | 6 |
| *D. ovalis* | W | - | - | 1 | - | 1 | - | 1 | 2 | - | - | - | - | - |
| *D. subovalis* | W | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| *D. yatukaensis* | W | 4 | 4 | 3 | - | 8 | 4 | 12 | 7 | 1 | 3 | 2 | 1 | 5 |
| *D.* spp. | ? | 1 | 2 | 1 | - | 3 | - | - | 1 | 1 | 1 | - | 1 | 2 |
| *Epithemia turgida* | W | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Eunotia diodon* | W | - | - | - | - | - | - | - | 5 | - | 1 | - | 1 | - |
| *E. formica* | W | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 22 | 2 |
| *E. pectinalis* | O | 1 | 8 | 3 | - | 6 | 2 | - | 1 | 3 | - | 2 | 73 | 1 |
| *E. praerupta var.bidens* | O | 1 | - | - | - | - | 3 | - | 6 | - | 1 | - | - | 3 |
| *E.* spp. | ? | 2 | 1 | 7 | 3 | 2 | 4 | 3 | 1 | 2 | 1 | - | 18 | 2 |
| *Fragilaria fasciculata* | W | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *F.* spp. | ? | - | - | 2 | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| *Frustulia vulgaris* | W | - | - | - | - | - | - | 2 | - | - | - | - | - | - |
| *Gomphonema acuminatum* | O | 1 | - | 1 | - | 4 | - | 1 | 2 | 2 | - | 1 | 2 | 3 |
| *G. augur* | W | 2 | 2 | 2 | 1 | - | - | - | - | 1 | 1 | 5 | 5 | - |
| *G. clevei* | W | 3 | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *G. gracile* | O | 2 | 5 | 9 | - | - | - | 1 | 2 | 2 | - | - | 2 | - |
| *G. parvulum* | W | - | - | 1 | - | 2 | - | 2 | 1 | - | - | - | - | - |
| *G. truncatum* | W | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *G.* spp. | ? | - | 2 | 5 | - | 5 | - | - | 1 | 1 | 1 | - | 1 | 2 |
| *Gyrosigma acuminatum* | W | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | 1 | - | 5 |
| *G.* spp. | ? | - | 3 | - | 4 | 8 | - | 3 | 3 | 4 | 9 | 5 | - | 22 |
| *Hantzschia amphioxys* | Q | 2 | 2 | 4 | 1 | 4 | 3 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 2 | 5 |
| *Melosira ambigua* | N | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 5 |
| *M. granulata* | M | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *M. italica* | W | - | - | 1 | - | - | - | - | 2 | 1 | - | - | - | - |
| *M. pensacolae* | N | 2 | - | 1 | 1 | 1 | 1 | - | - | - | 1 | - | - | 1 |
| *M. varians* | K | - | 2 | 1 | 1 | - | 2 | - | 1 | - | - | - | - | - |
| *M.* spp. | ? | 2 | 4 | 1 | 2 | - | 2 | 2 | 2 | 4 | 2 | - | - | 1 |
| *Navicula americana* | W | - | - | 1 | - | - | - | - | 3 | - | - | - | - | - |
| *N. bacillum* | W | - | - | - | - | 1 | 1 | 2 | - | - | - | - | - | 1 |
| *N. cryptocephala* | W | - | 4 | 1 | - | 4 | 1 | 2 | - | - | 1 | - | 1 | 1 |
| *N. cuspidata* | W | - | 8 | 5 | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 3 | - | 4 |
| *N. elginensis* | O | - | 7 | 1 | 1 | 1 | - | 1 | - | - | - | - | - | - |

表2-2．堆積物中の珪藻化石産出表（種群は安藤（1990）に基づく）

| 分類群 | 種群 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 15 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| *Navicula mutica* | Q | 1 | - | 1 | - | - | - | - | 2 | - | - | - | 1 | - |
| *N. pupula* | W | - | 8 | 5 | - | 2 | 1 | 6 | 2 | - | - | - | - | 3 |
| *N. pusilla* | W | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 | - | - | - | - | - |
| *N. tokyoensis* | W | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 |
| *N. viridula* | W | - | - | 1 | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - |
| *N.* spp. | ? | 2 | 7 | 2 | - | 2 | 2 | 1 | - | - | 2 | - | - | 2 |
| *Neidium bisulcatum* | W | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - |
| *N. iridis* | O | - | 2 | 6 | - | 1 | 1 | - | 2 | 2 | 2 | - | 1 | 4 |
| *N.* spp. | ? | 1 | 4 | 2 | 2 | 1 | 2 | 4 | 6 | 2 | - | 1 | 1 | 3 |
| *Nitzschia brevissima* | W | - | 3 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. palea* | W | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - |
| *N. tryblionella* | W | - | 4 | 2 | 1 | 8 | 2 | 11 | - | - | - | - | - | 2 |
| *N. umbonata* | W | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | 2 | - | - | - |
| *N.* spp. | ? | - | 1 | 2 | 1 | 3 | - | 9 | 1 | 1 | - | - | 1 | 2 |
| *Pinnularia acrosphaeria* | O | 1 | 6 | 2 | - | 5 | 2 | 9 | 1 | 1 | - | - | 1 | 4 |
| *P. borealis* | Q | - | - | 1 | - | - | - | 1 | - | - | - | - | 1 | - |
| *P. cardinaliculus* | W | - | - | - | - | 1 | - | - | 3 | 1 | - | - | - | 1 |
| *P. gibba* | O | - | 4 | 6 | - | 6 | 1 | 5 | 10 | 5 | 1 | 4 | 3 | 12 |
| *P. hemiptera* | W | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| *P. interrupta* | W | - | 6 | 1 | - | 2 | - | 3 | - | - | - | 1 | 2 | 4 |
| *P. maior* | W | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | 1 | - |
| *P. microstauron* | W | - | 4 | 5 | 1 | 12 | 2 | 9 | 2 | 1 | - | - | 1 | 4 |
| *P. nodosa* | O | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | 1 | - | - |
| *P. subcapitata* | O | - | 3 | 3 | - | 4 | 2 | 2 | 2 | - | - | 1 | - | - |
| *P. viridis* | O | - | 25 | 24 | 11 | 33 | 10 | 31 | 42 | 24 | 4 | 22 | 13 | 31 |
| *P.* spp. | ? | 1 | 8 | 14 | 1 | 12 | 9 | 5 | 2 | - | 2 | 1 | 1 | 3 |
| *Rhoicosphenia abbreviata* | W | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Rhopalodia gibba* | W | - | - | - | 1 | 1 | 1 | - | 1 | - | - | - | - | 5 |
| *R. gibberula* | W | - | 8 | 3 | - | 2 | - | 6 | 6 | 3 | 2 | - | 2 | - |
| *Stauroneis acuta* | W | 2 | - | - | - | - | - | - | 3 | 3 | - | 1 | - | 1 |
| *S. nobilis* | W | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 2 | - | 1 | 1 | - |
| *S. phoenicenteron* | O | 1 | 16 | 25 | 1 | 11 | 6 | 7 | 6 | 8 | 3 | 2 | - | 8 |
| *S.* spp. | ? | 2 | 6 | 6 | - | 3 | 5 | 6 | 4 | 4 | 1 | 2 | 1 | 4 |
| *Surirella* spp. | ? | - | 2 | 2 | 1 | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - |
| *Synedra ulna* | W | - | 3 | 3 | 1 | 1 | 1 | - | - | 2 | - | - | - | 2 |
| *Tabellaria fenestrata* | O | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 4 | - |
| 中～下流性河川 (K) | | - | 2 | 3 | 1 | - | 4 | - | 1 | - | - | 1 | - | - |
| 湖沼沼沢湿地 (N) | | 2 | - | 1 | 1 | 1 | 1 | - | - | - | 1 | - | - | 6 |
| 沼沢湿地付着生 (O) | | 7 | 78 | 85 | 17 | 76 | 32 | 61 | 99 | 54 | 16 | 74 | 126 | 71 |
| 陸域 (Q) | | 3 | 2 | 6 | 1 | 4 | 3 | 3 | 4 | 2 | 2 | 1 | 4 | 5 |
| 広布種 (W) | | 42 | 100 | 74 | 26 | 90 | 69 | 103 | 85 | 29 | 31 | 31 | 57 | 81 |
| 不明 (?) | | 12 | 43 | 44 | 16 | 41 | 29 | 38 | 23 | 21 | 19 | 9 | 25 | 43 |
| 珪藻殻数 | | 66 | 225 | 213 | 62 | 212 | 138 | 205 | 212 | 106 | 69 | 116 | 212 | 206 |

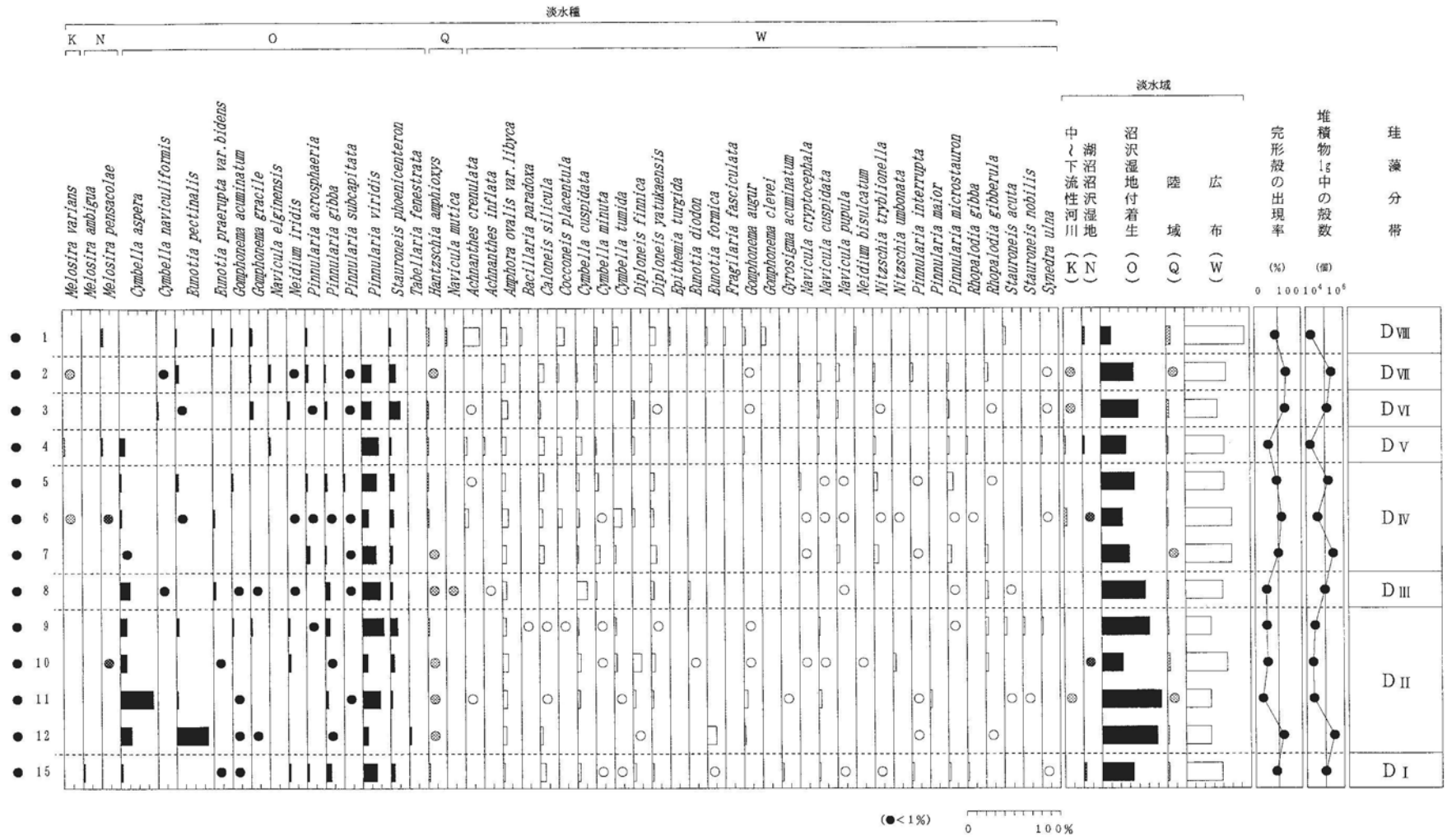



図1．堆積物中の珪藻化石分布図（2％以上の分類群を表示）

**湖沼浮遊性指標種群（M）**　水深が1.5m以上で、水生植物が水底には生息していない湖沼に生息する種群。

**湖沼沼沢湿地指標種群（N）**　湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群。

**沼沢湿地付着生指標種群（O）**　水深が１m内外で、植物が一面に繁茂しているところおよび湿地において付着状態で優勢な出現が見られる種群。

**高層湿原指標種群（P）**　ミズゴケを主とした植物群落および泥炭地の発達が見られる場所に出現する種群。

**陸域指標種群（Q）**　前述の水域に対して、陸域を生息域として生活している種群（陸生珪藻）。

## ４．珪藻化石群集の特徴（表２、図１）

下月隈C遺跡において検出された珪藻化石は、96分類群28属79種２亜種である。これらの珪藻種から設定された環境指標種群は、広布種を含め５種群である。以下にその特徴と堆積環境を地点別に述べる。

**【SX728（試料１）】**

堆積物１g中の珪藻殻数は$1.82\times10^4$個、完形殻の出現率は約44％となる。この試料からは広布種が多いものの、*Gomphonema gracile*や*Stauroneis phoenicenteron*などの沼沢湿地付着生指標種群が特徴的に出現し、陸域指標種群が随伴して出現する。

このことから陸域に近い沼沢地もしくは湿地環境と推定される。

**【SD745（試料２）】**

堆積物１g中の珪藻殻数は$2.15\times10^5$個と多く、完形殻の出現率は約67％と高くなる。この試料からは*Pinnularia viridis*や*Stauroneis phoenicenteron*などの沼沢湿地付着生指標種群が特徴的に出現する。

このことから沼沢地もしくは湿地環境と推定される。

**【SD746（試料３）】**

堆積物１g中の珪藻殻数は$1.30\times10^5$個、完形殻の出現率は約64％と高くなる。この試料からは試料２と同様に、*Pinnularia viridis*や*Stauroneis phoenicenteron*などの沼沢湿地付着生指標種群が特徴的に出現する。

このことから沼沢地もしくは湿地環境と推定される。

**【SS733（試料４）】**

堆積物１g中の珪藻殻数は$1.64\times10^4$個、完形殻の出現率は約29％となる。この試料からは沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia viridis*が特徴的に出現する。

このことから沼沢地もしくは湿地環境と推定される。

**【SX737（試料５～７）】**

堆積物１g中の珪藻殻数は$3.95\times10^4$～$2.68\times10^5$個、完形殻の出現率は約47～57％となる。これらの試料からは*Pinnularia viridis*や*Cymbella aspera*, *Stauroneis phoenicenteron*などの沼沢湿地付着生指標種群が特徴的に出現する。また、試料６では*Melosira varians*などの中～下流性河川指標種群が検出されている。

これらのことから沼沢地もしくは湿地環境と推定され、試料6では河川の影響があったと考えられる。

**【SD826（試料8）】**

堆積物1g中の珪藻殻数は$9.64\times10^4$個、完形殻の出現率は約25%とやや低くなる。この試料からは沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia viridis*が特徴的に出現し、沼沢湿地付着生指標種群の*Cymbella aspera*と*Pinnularia gibba*が随伴して出現する。

これらのことから沼沢地もしくは湿地環境と推定される。

**【SD818（試料9～12）】**

堆積物1g中の珪藻殻数は$2.17\times10^4$～$2.93\times10^5$個、完形殻の出現率は約16～60%となる。これらの試料からは*Cymbella aspera*や*Pinnularia viridis*, *Eunotia pectinalis*などの沼沢湿地付着生指標種群が特徴的に出現する。

これらのことから沼沢地もしくは湿地環境と推定される。

**【SK810・SK903（試料13・14）】**

珪藻殻は検出されなかった。そのため堆積環境は推定できない。

**【SD913（試料15）】**

堆積物1g中の珪藻殻数は$1.00\times10^5$個、完形殻の出現率は約45%となる。この試料からは沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia viridis*が特徴的に出現し、*Pinnularia gibba*や*Cymbellaaspera*, *Stauroneis phoenicenteron*などの沼沢湿地付着生指標種群が随伴して出現する。

これらのことから沼沢地もしくは湿地環境と推定される。

## 5．おわりに

下月隈C遺跡の堆積物中の珪藻化石を検討した結果、珪藻化石が検出された13試料における堆積環境は概ね沼沢地もしくは湿地環境であった。

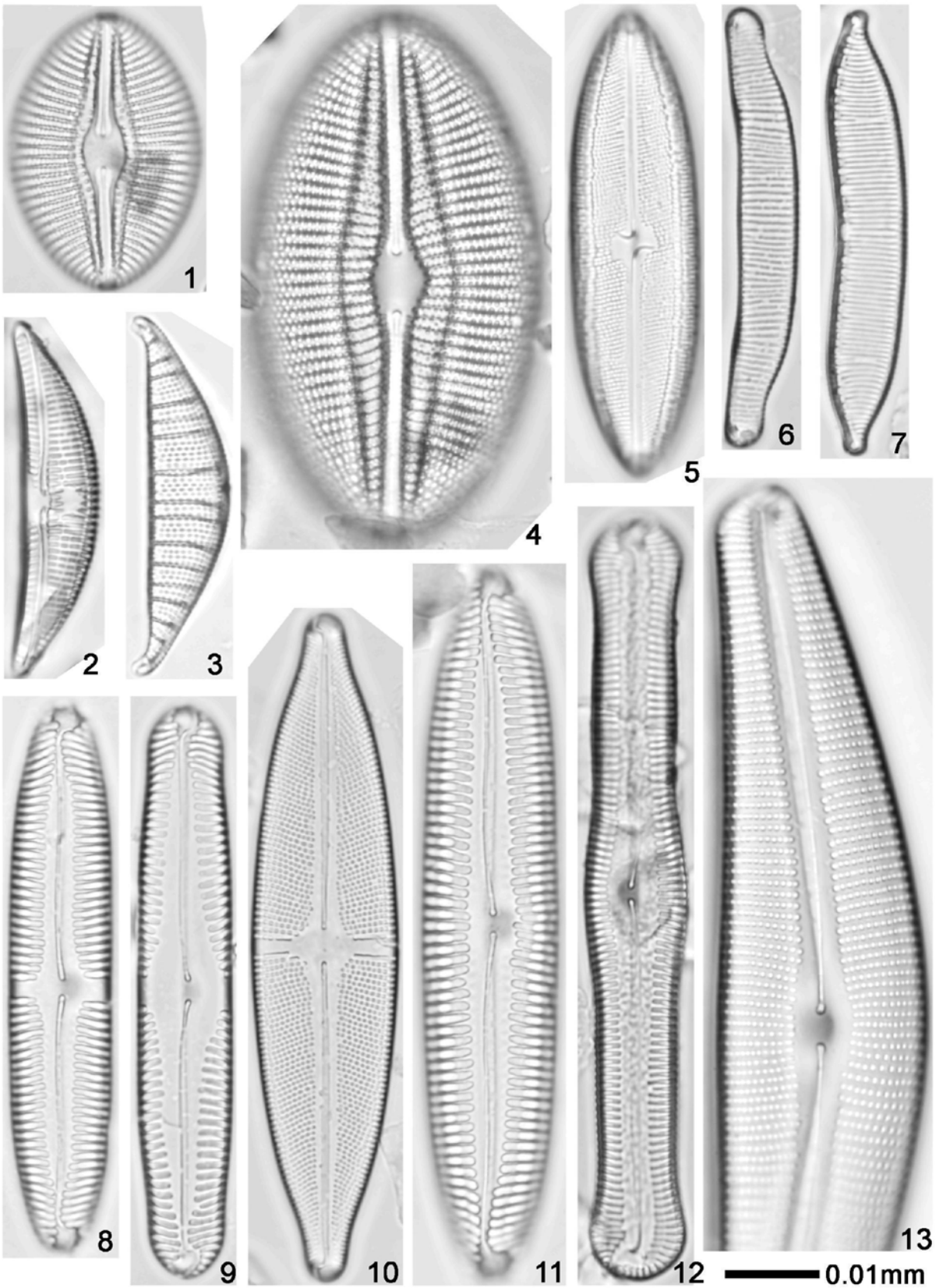
SX737の堆積環境は、概ね沼沢地もしくは湿地環境であり、第5層の堆積環境は、河川の影響を受けるような環境下であったと考えられる。

SX728、SD745、SD746は溝状遺構であるが、水の流れはほとんどない沼沢地もしくは湿地環境であったと考えられる。

SK810とSK903では、珪藻化石があまり検出されない為、堆積環境は推定できない。珪藻化石が検出されなかった理由として、珪藻が水生植物であることから水のない環境、乾燥した環境が考えられる。また乾燥した環境下では花粉化石は保存されにくく、これら2地点の試料においても花粉化石は少なく、これらのことから2地点の堆積環境は乾燥した環境下であったと考えられる。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理、42、73-88。




図版１　堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真

1 *Diploneis yatukaensis*（試料２）　2 *Amphora ovalis* var. *libyca*（試料２）　3 *Rhopalodia gibberula*（試料２）
4 *Diploneis finnica*（試料12）　5 *Neidium iridis*（試料15）　6 *Eunotia pectinalis*（試料12）
7 *Hantzschia amphioxys*（試料15）　8 *Pinnularia viridis*（試料15）　9 *Pinnularia gibba*（試料15）
10 *Stauroneis phoenicenteron*（試料15）　11 *Pinnularia viridis*（試料15）　12 *Pinnularia acrosphaeria*（試料２）
13 *Cymbella aspera*（試料15）

# 8．第7次調査出土の大型植物化石

新山雅広・植田弥生（パレオ・ラボ）

## 1．試料と方法

検討した試料は、1）種実同定試料、2）土壌分析試料、3）植物遺体分析試料の3種類に分けられる。種実同定試料は、既に抽出済みであり、タッパーに液浸保存された試料である。土壌分析試料は、堆積物試料がタッパーに保存されており、最小0.25㎜目の篩を用いて水洗洗浄し、残渣を回収した。なお、土壌分析試料は、花粉分析および珪藻分析も行われた。植物遺体分析試料は、土壌の付着した植物遺体がタッパーに保存されており、植物遺体のクリーニングおよび付着した土壌の洗浄を行い、残渣を回収した。これら試料について、肉眼および実体顕微鏡・光学顕微鏡を用いて、採集・同定・計数を行った。なお、種実類の分析は新山が、植物遺体分析試料の木材・茎などの分析は植田が行い、本文は新山がまとめた。

## 2．出土した植物遺体

出土した植物遺体の一覧を第1表～第3表に示した。以下に、各試料の植物遺体について記載する。

### 1）種実同定試料（67試料、第1表）

中世試料（No.1～14）：木本は、モモが多くの試料で得られ、ウメも比較的目立った。他に、クロマツ、マツ属複維管束亜属、ヤマモモ、コナラ属、シリブカガシ、エノキ属、クスノキ、フジ属、センダン、エゴノキが稀に得られた。草本は、No.10とNo.12のみで得られ、No.10は、メロン仲間のみが僅かであった。No.12は、エノコログサ属、ホタルイ属、ミゾソバ、サナエタデ近似種、ボントクタデ、ヤナギタデが得られた。

奈良試料（No.15～21,51）、および古代試料（No.61～67）：木本は、クロマツ、アカガシ亜属、ツブラジイ、ムクノキ、クスノキ、クロモジ属近似種、モモ、センダン、エゴノキなどが得られ、No.51,66ではモモが多産した。草本は、No.19,20でヒョウタン仲間が、No.61でホタルイ属が得られた。

古墳後期試料（No.22～35）：木本は、クロマツ、オニグルミ、イチイガシ、コナラ属、ツブラジイ、モモ、トチノキ、ブドウ属、エゴノキが得られた。草本は、No.24,34,35のみで得られ、No.24はサデクサ、ノブドウ、ヒシ属であった。No.34は、カヤツリグサ属、ウキヤガラ、ホタルイ属、No.35は、ノブドウのみであった。

弥生後期試料（No.37～40）：木本は、ツブラジイ、モモが得られた。

弥生時代試料（No.36,41～50,52～60）：木本は、イチイガシ、ツクバネガシ近似種、コナラ属、ツブラジイ、モモ、イヌザンショウが得られ、モモが比較的多くの試料で得られた。また、イチイガシは、SD913（No. 45～47）で非常に多産した。草本は、イネ、カナムグラ、メロン仲間が得られ、No.49でカナムグラが目立った。

### 2）土壌分析試料（14試料、第2表）

奈良試料（No.2）：木本は、ヒサカキ属のみであった。草本は、コナギが最も多産し、ホタルイ属、ハリイ属、イボクサが比較的目立った。他に、オモダカ属、スゲ属、カヤツリグサ属、ミズ属、カタバミ属、チドメグサ属、イヌコウジュ属、キランソウ属などが得られた。

古墳後期試料（No.1，3～7）：木本は、No.3でハンノキ亜属、ブドウ属、ヒサカキ属が得られ、他は、No.5でエゴノキが得られたのみであった。草本は、SX737（No.5～7）では、ホタルイ属、コナギ、チドメグサ属が多産する傾向であり、サガミトリゲモ、オモダカ科、スゲ属、イボクサ、ナデシ

## 第１表　種実同定試料の一覧表（その１）　数字は個数、（ ）内は半分ないし破片の数を示す

| 分類群・部位＼No.遺構・時期など | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | SD712 | SD720 | SD720 | SD720 | SD720 | SD720 | SD720 | SD720 | SX725 | SX725 | SX725 | SX725 | SX725 | SX726 | SD734 | SD735 | SD735 | SD735 | SD735 | SD735 | SD735 | SD746 |
| | | | 井堰北側 | 堰北側 | 堰南側 | | 東側 | | | 西側 | 南側 | 南 | 堰前西東側 | | 北側 | | | | | | | | |
| | | | | 下層 | 下層 | 下層 | | 下層 | 下層 | 土堰ｻﾝﾌﾟﾙ | 上層 | 黒褐色粘土下 | | 上面 | | | 中層 | 下層 | 下層 | 下層W-4 | 下層 | 砂層中 | |
| | | D-25 | G-24 | G-24 | G-24 | G-25 | G-25 | G-29 | G・H32 | | | | | | G-23 | | C-25 | C-25 | C-28 | | D-23 | F-25 | H-30 |
| | | 中世 | 中世 | 中世 | 中世 | 中世 | 中世 | 中世 | 中世 | 中世 | 中世 | 中世 | 中世 | 中世 | 中世 | 奈良 | 奈良 | 奈良 | 奈良 | 奈良 | 奈良 | 奈良 | 古墳後期 |
| クロマツ | 球果 | | | | | | | 1 | | | | | | 1 | | | | | 1 | | | | |
| マツ属複維管束亜属 | 球果 | | | | | 1 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| ヤマモモ | 核 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| コナラ属 | 果実 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| シリブカガシ | 果実 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| エノキ属 | 核 | | | | | | | | | | -1 | | | | | | | | | | | | |
| クスノキ | 種子 | | | | | | | | | | -1 | | | | | | | | | | | | |
| ウメ | 核 | | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | 4 | | | | | | | | | | | |
| モモ | 核 | 1 | | 4 | | 2 | | 1 | 2 | 1 | | 1 | | | 1 | | 2 | | | | | 1 | |
| フジ属 | 芽 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | |
| センダン | 核 | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | |
| エゴノキ | 種子 | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | 1 | | | | | |
| 不明 | 種実 | | | | | | | | | | | | | | | -1 | | | | | | | 10(6) |
| エノコログサ属 | 穎 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | |
| ホタルイ属 | 果実 | | | | | | | | | | | | 4 | | | | | | | | | | |
| ミゾソバ | 果実 | | | | | | | | | | | | 1(1) | | | | | | | | | | |
| サナエタデ近似種 | 果実 | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | |
| ボントクタデ | 果実 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | |
| ヤナギタデ | 果実 | | | | | | | | | | | | 2(1) | | | | | | | | | | |
| メロン仲間 | 種子 | | | | | | | | | | 1(1) | | | | | | | | | | | | |
| ヒョウタン仲間 | 果実 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | -5 | -6 | | |

## 第１表　種実同定試料の一覧表（その２）　数字は個数、（ ）内は半分ないし破片の数を示す

| 分類群・部位＼No.遺構・時期など | | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | SD746 | SD746 | SD747 | SD750 | SD750 | SD759 | SD760 | SD762 | SS729 | SS755 | SS | 畦畔 | SX758 | SD811 | SD818 | SD818 | SD818 | SD818 | SD854 | SD856 | SD909 | SD913 |
| | | | 北ベルト | | | | | | | | | 西側水田上層 | 7下木列 | | | | | | | | | | |
| | | | 土ｻﾝﾌﾟﾙ | | | 下層 | | | 砂層 | | | | | | | 下層砂層 | 下層粘土 | 北側 | W-12の下 | | | | 上層黒色粘土 |
| | | H-30 | | G-31 | H-26 | | | H-32 | | F032 | I-25 | | | I-31 | CD-22 | | | G-23 | | | I-23 | H-30 | G-29 |
| | | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 弥生 | | 弥生後期～古墳前期 | | | 弥生 | 弥生 | 弥生 | 弥生 |
| クロマツ | 球果 | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | |
| オニグルミ | 核 | 1 | | -1 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | |
| イチイガシ | 果実 | | | | | | | | | | | 1(1) | | | | | | | | | | | |
| コナラ属 | 果実 | | | | 1 | | | | | | 1 | 2 | | | | | | | | | | -1 | 1(5) |
| ツブラジイ | 果実 | | | | | -3 | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | |
| モモ | 核 | | | | | | | | 3 | 1 | | | | | 1 | 2 | | | | 1 | 1 | | |
| トチノキ | 果実 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ブドウ属 | 種子 | | | | | | | | | | | | | -1 | | | | | | | | | |
| エゴノキ | 種子 | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| カヤツリグサ属 | 果実 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | |
| ウキヤガラ | 果実 | | | | | | | | | | | | 4 | | | | | | | | | | |
| ホタルイ属 | 果実 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | |
| サデクサ | 果実 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ノブドウ | 種子 | | 2 | | | | | | | | | | | -1 | | | | | | | | | |
| ヒシ属 | 果実 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 不明 | 不明 | | | | | | | | | | | | | | | | | | -4 | | | | |

## 第１表　種実同定試料の一覧表（その３）　数字は個数、（ ）内は半分ないし破片の数を示す

| 分類群・部位＼No.遺構・時期など | | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | SD913 | SD913 | SD913 | SD921 | SK884 | SP223 | SX743 | SX805 | SX895 | SX895 | SX910 | SX911 | SX911 | 遺構検出面 | 包含層800 | 包含層800 | SD362 | SX930 | SX932 | SX933 | SX934 | SX935 | SX935 |
| | | | | | | | | | | | SX905付近 | | | | | | ベルト南 | | | | | | | |
| | | 黒色粘土 | | | R-1 | 土ｻﾝﾌﾟﾙ | | | 土器群 | | | | 下層粘土 | 上層粘土 | | | | 黒色粘土 | | | | | | |
| | | G-29 | G-30 | G-29 | | | G-22 | | | I-22・23 | | | | | D-26 | D-22 | I-23 | Q-32 | S-29 | R-30 | R-30 | | Q-30 | |
| | | 弥生 | 弥生 | 弥生 | 弥生 | 弥生 | 弥生 | 奈良 | 弥生 | 弥生 | 弥生 | 弥生 | 弥生 | 弥生 | 弥生 | 弥生 | 弥生 | 古代 | 古代 | 古代 | 古代 | 古代 | 古代 | 古代 |
| クロマツ | 球果 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | |
| イチイガシ | 果実 | 5(6) | 97(17) | 177(18) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ツクバネガシ近似種 | 果実 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| コナラ属アカガシ亜属 | 果実 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | -2 | | | | |
| | 幼果 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ツブラジイ | 果実 | | | | | | | -2 | | | | | -3 | | | | | | | | | | | |
| ムクノキ | 種子 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | -1 | | | | |
| クスノキ | 種子 | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| クロモジ属近似種 | 種子 | | | | | | | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| モモ | 核 | | | | | | 1 | 14(5) | 1 | 1 | | | | 1 | 1 | 1 | 1 | | 1 | | | | 26 | 4(3) |
| センダン | 核 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| イヌザンショウ | 種子 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| エゴノキ | 種子 | | | | | | | 1(1) | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 1 |
| 不明 | 芽 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 | | | | |
| 不明 | 種実 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| イネ | 炭化胚乳 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ホタルイ属 | 果実 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| カナムグラ | 種子 | | | | 1(5) | 17(16) | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| メロン仲間 | 種子 | | | | | | | | | | | -1 | | | | | | | | | | | | |
| 虫えい | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | |

第２表　土壌分析試料の一覧表　数字は個数、（ ）内は半分ないし破片の数を示す

| 分類群・部位＼No.・遺構面・遺構・時期等 | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅲ面 | 第Ⅲ面 | 第Ⅲ面 | 第Ⅲ面 | 第Ⅲ面 | 第Ⅲ面 | 第Ⅲ面 |
| | | SX728 | SD745 | SD746 | SS733 | SX737 | SX737 | SX737 | SD826 | SD818 | SD818 | SD818 | SD818 | SK810 | SK903 |
| | | E-32 | | | C-29 | | | | | | | | | | |
| | | 黒褐色粘土 | 北側ベルト3層 | 北ベルト7・10層 | 水田土 | 第４層 | 第５層 | 第27層 | | 1～2区ベルト上層 | 1～2区ベルト下層 | 3～4区ベルト上層 | 3～4区ベルト下層 | 下層 | |
| | | 古墳後期 | 奈良 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳中期 | 弥生後期～古墳前期 | | | | 弥生中期 | 弥生 |
| ハンノキ属ハンノキ亜属 | 果実 | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| ブドウ属 | 種子 | | | (2) | | | | | | | | | | | |
| ヒサカキ属 | 種子 | | 1 | 1(1) | | | | | | | | | | | |
| エゴノキ | 種子 | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| 不明 | 芽 | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| ヒルムシロ属 | 核 | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| イトトリゲモ | 種子 | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | |
| サガミトリゲモ | 種子 | | | 1 | | 8 | 2 | | | | | | | | |
| ヘラオモダカ | 果実 | | | | | | | | 8 | | | | | | |
| オモダカ属 | 果実 | | 6 | 1 | | | | | 1 | | | | | | |
| オモダカ科 | 種子 | | | | | 1 | 2 | 3 | 5 | | | | | | |
| スブタ | 種子 | | | | | | | 3 | | | | | | | |
| イヌビエ | 穎 | | | (1) | | | | | | | | | | | |
| エノコログサ属 | 穎 | | | 2(1) | | | | | | | | | | | |
| スゲ属 | 果実 | 1 | 5 | 4 | | 1 | 1 | 2 | 13 | 1 | 11 | 7 | 4 | 6 | |
| カヤツリグサ属 | 果実 | | 9 | 6 | | | | 1 | | 2 | | | | | |
| ウキヤガラ | 果実 | | | | | | | | 12 | 2 | | | | | |
| ホタルイ属 | 果実 | | 10 | 6(1) | | 13(3) | 1 | 15(3) | 57(1) | 117(10) | 19(2) | 11 | 6(2) | 12(1) | 1 |
| ハリイ属 | 果実 | | 17 | 6 | | 1 | | 3 | 2 | 3 | | 1 | | | |
| イボクサ | 種子 | | 10 | 2 | | 1 | 1 | 3 | | | 1 | | | | |
| ツユクサ属 | 種子 | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| コナギ | 種子 | | 47 | 49 | | 22 | 3 | 17 | 3 | 7 | | | | | |
| カナムグラ | 種子 | | | (1) | | | | | | (1) | | | | | |
| カラムシ属 | 種子 | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| ミズ属 | 種子 | | 3 | 2 | | | 3 | | | | | | | | |
| ミゾソバ | 果実 | | | 3(1) | | | | | | | | | | | |
| サデクサ | 果実 | | | 1 | | | | | (2) | | | | | | |
| イシミカワ | 果実 | | | | | | | | 2(3) | | | | | | |
| サナエタデ近似種 | 果実 | | | | | | | | | | | | 1 | | |
| ボントクタデ | 果実 | | | (3) | | | | | 1 | (1) | (1) | | (2) | | |
| ヤナギタデ | 果実 | | 1 | 2 | | | | 1 | 4 | | | | 1 | | |
| タデ属 | 果実 | | | | | | | | 2 | | | | | 1 | |
| ギシギシ属 | 果実 | | | | | | | | 1 | | 4 | | | | |
| ヒユ属 | 種子 | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| ナデシコ科 | 種子 | | 3 | 15 | | 6 | 5 | 8 | 2 | | 1 | 1 | | | |
| ザクロソウ | 種子 | | | 1 | | | | | | 1 | 2 | | | | |
| コウホネ属 | 種子 | | | | | | | | | | | | 1 | | |
| タガラシ | 果実 | | | 1 | | | | | | | 1 | | 3 | | |
| キンポウゲ属 | 果実 | | | | | | | | | | 1(1) | | | 1 | |
| カタバミ属 | 種子 | | 2 | | | 2 | 1 | 4 | | | | | | | |
| エノキグサ | 種子 | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| ツリフネソウ | 種子 | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| ミズオトギリ | 種子 | | | | | | | 1 | | | | | | | |
| ノブドウ | 種子 | | | (1) | | | | | | | | | | | |
| スミレ属 | 種子 | | | | | | | 1 | | | | | | | |
| チドメグサ属 | 果実 | 1 | 5 | 3 | | 25 | 67 | 5 | | 3 | | 1 | | | |
| ドクゼリ属またはセリ属 | 果実 | | | | | 1 | | | 2 | | 3(1) | | | | |
| セリ科 | 果実 | | | | | | 3 | | 2 | | 1 | | | | |
| シロネ属 | 果実 | | | | | | | 1 | 3 | | | 1 | | | |
| イヌコウジュ属 | 果実 | (1) | 7(4) | 2(1) | | (2) | | (7) | 7(1) | 1 | (1) | | 2(3) | 1 | |
| イヌコウジュ属またはシソ属 | 果実 | | 1 | | | | | | 1 | | | | | | |
| キランソウ属 | 果実 | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | |
| ナス属 | 種子 | | | | | | | | | | 2 | | | 1 | |
| ゴキヅル | 種子 | | | | | | | | | | | | | (1) | |
| メロン仲間 | 種子 | | | | | | | | | (1) | (1) | | | | |
| タカサブロウ | 果実 | | | | | 1 | | 3 | 2 | | | | 8(1) | | |
| キク科 | 果実 | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| 菌核 | | 3 | | 2 | | | | | | | | | | | |

第３表　植物遺体分析試料の一覧表（その１）　数字は個数、( )内は半分ないし破片の数を示す

| 分類群・部位＼No.・遺構面・遺構・時期等 | | 3 | 6 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 16 | 17 | 18 | 19-1 | 19-2 | 22 | 24 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 第Ⅰ面 | 第Ⅰ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 |
| | | SX725堰 | SX725堰 | SD738 | SD738 | SD738 | SD746 | SD746 | SD746 | SX737 | SX737 | SX737 | SX737 | SX773 | SX773 |
| | | 南側上層 | 堰の埋没土 | W-1 | W-2 | W-3 | 北ベルト | [illegible] | 北ベルト | 水口 | 水口サンプル№3 | スノコ | 水口サンプル№3 | W-1 | W-4 |
| | | 中世 | 中世 | 古代 | 古代 | 古代 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期 | 古墳後期~古代 | 古墳後期~古代 | 古墳後期~古代 | 古墳後期~古代 |
| アカマツ | 材 | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| マツ属複維管束亜属 | 材 | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| | 葉 | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | |
| ヤナギ属 | 材 | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | |
| クヌギ節 | 材 | | | | 1 | | | | | | | 1 | | | |
| フジ属 | 芽 | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| サンショウ属 | 種子 | | | | | | | | (1) | | | | | | |
| ブドウ属 | 種子 | | | | | | 1 | | | | | | | | |
| ヒサカキ属 | 種子 | | | | | | | 1 | | | | | | | |
| 広葉樹 | 材 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 不明 | 材 | | | ○ | | ○ | | | | | | | | | |
| ヒルムシロ属 | 核 | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| オモダカ属 | 果実 | | | | | | 36 | | 18 | | | | | | |
| オモダカ科 | 種子 | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| イネ | 穎 | | | | | | 4 | | (6) | | | | | | |
| イヌビエ | 穎 | | | | | | | | 2 | | | | | | |
| エノコログサ属 | 穎 | 1 | | | | | 3(4) | | 3(1) | | | | | | |
| イネ科 | 穎 | | | | | | 2 | | | | | | | | |
| スゲ属 | 果実 | | | | | | 2 | | 2 | | | 1 | | | |
| カヤツリグサ属 | 果実 | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | |
| ウキヤガラ | 果実 | | | | | | 1 | | 1(2) | | | | | | |
| ホタルイ属 | 果実 | | | | | | 31(1) | | 5(2) | | | 3 | | | |
| ハリイ属 | 果実 | | 1 | | | | 12 | 1 | | | | | | | |
| イボクサ | 種子 | | | | | | 10 | | 13 | | | | | | |
| コナギ | 種子 | | | | | | | 1 | | | | | | | |
| カナムグラ | 種子 | | | | | | | | (1) | | | | | | |
| カラムシ属 | 種子 | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| ミゾソバ | 果実 | | | | | | 3(1) | | 1(1) | | | | | | |
| サデクサ | 果実 | | | | | | 1 | | | | | | | | |
| サナエタデ近似種 | 果実 | | 1 | | | | | | (1) | | | | | | |
| ボントクタデ | 果実 | | | | | | 2 | | (3) | | | | | | |
| ヤナギタデ | 果実 | | 1 | | | | | | (1) | | | | | | |
| ギシギシ属 | 果実 | 3 | 1 | | | | | | | | | | | | |
| ヒユ属 | 種子 | | | | | | | 1 | | | | | | | |
| ナデシコ科 | 種子 | | 5 | | | | | | | | | | | | |
| タガラシ | 果実 | | 1 | | | | 4 | | | | | | | | |
| キンポウゲ属 | 果実 | | | | | | 3 | | 2 | | | | | | |
| ハスノハカズラ | 種子 | | | | | | | | (1) | | | | | | |
| クサネム | 果実 | | | | | | (30) | | (8) | | | | | | |
| エノキグサ | 種子 | 1 | | | | | | | (1) | | | | | | |
| ミズオトギリ | 種子 | | | | | | 1 | | | | | | | | |
| ノブドウ | 種子 | | | | | | | | (1) | | | | | | |
| スミレ属 | 種子 | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| ヒシ属 | 果実 | | | | | | | | (5) | | | | | | |
| アリノトウグサ | 核 | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| チドメグサ属 | 果実 | | 1 | | | | 15 | | 1 | | 1 | | | | |
| ドクゼリ属またはセリ属 | 果実 | | | | | | 3 | | 1 | | | | | | |
| セリ科 | 果実 | | | | | | | | 3 | | | | | | |
| シロネ属 | 果実 | | | | | | 1 | | | | | | | | |
| イヌコウジュ属 | 果実 | 1 | | | 3 | | 18(56) | | (23) | 1 | | | | | |
| イヌコウジュ属またはシソ属 | 果実 | | | | | | 2(1) | | | | | | | | |
| キランソウ属 | 果実 | | | | | | 1 | | | | | | | | |
| スズメウリ | 種子 | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| ゴキヅル | 種子 | | | | | | (3) | | | | | | | | |
| メロン仲間 | 種子 | | | | | | | | (1) | | | | | | |
| タカサブロウ | 果実 | | | | | | 4 | | 1 | | | | | | |
| 単子葉類 | 茎 | | | | ○ | ○ | | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ |
| 単子葉類？ | 茎 | | | | | | | | | | | ○ | | | |
| 双子葉類 | 茎 | | | | | | | | | | | | | ○ | |

第3表　植物遺体分析試料の一覧表（その2）　数字は個数、( )内は半分ないし破片の数を示す

| 分類群・部位＼No.・遺構面・遺構・時期等 | | 25 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 40 | 41 | 42 | 44 | 46 | 48 | 49 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅱ面 | 第Ⅲ面 | 第Ⅲ面 | 第Ⅲ面 | 第Ⅲ面 | 第２区 | 第２区 | 第２区 | |
| | | SX773 | 畦10 | 土堤775 | 土堤775 | 水田畦畔 | 水田畦畔 | SP240 | SX910 | SX910 | SP212 | SX933 | SX932 | SX934 | |
| | | | | | | H-22 | H-32 | | | | | | R-30 | | |
| | | W-10 | | W-1 | W-1 | | | 下層腐植土層 | W-4 | ワラ | 柱穴埋土 | 植物サンプル | 植物サンプル | | |
| | | 古墳後期~古代 | 古墳後期~古代 | 古墳後期~古代 | 古墳後期~古代 | 古墳後期~古代 | 古墳後期~古代 | 古墳後期~古代 | 古墳後期~古代 | 古墳後期~古代 | 古墳後期~古代 | 古代 | 古代 | 古代 | |
| ヒノキ | 材 | | | | | | | | | | | | 1 | | |
| ハンノキ属ハンノキ亜属 | 果実 | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| コナラ属 | 材 | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | |
| コナラ属？ | 材 | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| イヌビワ | 材 | | | | | | | | | | | 1 | | | |
| ヒサカキ | 材 | | | | | | | | | | | 2 | | | |
| 広葉樹 | 材 | | | | | | | | | | | 1 | | | |
| | 葉 | ○ | | | | ○ | ○ | | | | | | | | |
| 不明 | 材 | | | | | | | | | | | ○ | | ○ | |
| イネ | 穎 | | | | | | | | | | | | (1) | | |
| キビ | 炭化胚乳 | | | | | | | | | | 3 | | | | |
| ヒエまたはアワ | 炭化胚乳 | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| キビ族 | 炭化胚乳 | | | | | | | | | | 2(2) | | | | |
| イヌビエ | 穎 | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| イネ科 | 穎 | | | | | | | 1 | | | | | | | |
| ホタルイ属 | 果実 | | 1 | | | | | | | | 3(2) | | | | |
| ハリイ属 | 果実 | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| ボントクタデ | 果実 | | | | | | | | | (1) | | | | | |
| ヤナギタデ | 果実 | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| イヌタデ近似種 | 果実 | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| シロザ近似種 | 種子 | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| ナデシコ科 | 種子 | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| タガラシ | 果実 | | | | | | | | | | | | 2 | | |
| マメ科 | 種子 | | | | | | | | | | (1) | | | | |
| エノキグサ | 種子 | | | | | | | | | | (1) | | | | |
| イヌコウジュ属 | 果実 | (1) | | | | | | | | | | | | | |
| ナス属 | 種子 | | | | | | | | 2 | | | | | | |
| スズメウリ | 種子 | | | | | | | | | | | | | | |
| 虫えい | | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| 単子葉類 | 茎 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | | |
| 不明 | 茎状 | | | | | | | ○ | | | | | | | |

第４表　植物遺体分析試料（木材、茎などの詳細）

| 試料No. | | 検出植物遺体 | 部位 | 年輪数 | 直径・幅 | 樹皮 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | | マツ属複維管束亜属 | 材 | ２年輪生 | 直径0.4㎝ | ○ | 早材部形成 |
| 6 | | アカマツ | 材 | ４～５年輪生 | 直径1.2㎝ | ○ | 小枝輪生 |
| 11 | －１ | クヌギ節 | 材 | ２年輪生 | 直径1.0㎝ | ○ | 早材部形成 |
| | －２ | 単子葉類茎の塊 | 草本茎 | | | | 扁平に潰れている<br>同一方向に集積 |
| 12 | | 単子葉類茎の塊 | 草本茎 | | | | 扁平に潰れている<br>同一方向に集積 |
| 14 | | 単子葉類茎の塊 | 草本茎 | | | | 扁平に潰れている<br>同一方向に集積 |
| 17 | | ヤナギ属 | 材 | １～２年輪生? | 直径1.0㎝ | ○ | |
| 18 | | ヤナギ属 | 材 | ２年輪生 | 直径0.8㎝ | ○ | |
| 22 | －１ | 単子葉類茎の塊 | 草本茎 | | 一本の茎の<br>幅0.2～0.5㎝ | | 扁平に潰れている<br>同一方向に集積<br>節部(葉鞘基部?)あり |
| | －２ | 双子葉類の茎 | 草本茎 | | 幅0.8㎜ | | 側芽互生 |
| 24 | －１ | 不明広葉樹 | 材 | 当年枝 | 直径0.7㎝ | ○ | 扁平に潰れている |
| | －２ | 単子葉類茎の塊 | 草本茎 | | | | 扁平に潰れている<br>同一方向に集積 |
| 25 | | コナラ属？ | 材 | | 直径0.8㎝ | ○ | 乾燥している |
| 28 | | 単子葉類茎の塊 | 草本茎 | | | | 扁平に潰れている<br>同一方向に集積 |
| 29 | －１ | 単子葉類茎の塊 | 草本茎 | | | | 扁平に潰れている<br>同一方向に集積<br>乾燥している |
| | －２ | 単子葉類茎 | 草本茎 | | 直径0.5㎝ | | 扁平に潰れている |
| | －３ | コナラ属 | 材 | | 直径1.3㎝ | | 乾燥している |
| 30 | －１ | 単子葉類茎の塊 | 草本茎 | | | | 扁平に潰れている<br>同一方向に集積 |
| | －２ | コナラ属 | 材 | １年輪生 | 直径0.8㎝ | ○ | 乾燥している |
| 31 | | 単子葉類茎の塊 | 草本茎 | | | | 扁平に潰れている<br>同一方向に集積 |
| 41 | | 単子葉類茎の塊 | 草本茎 | | | | 扁平に潰れている<br>同一方向に集積 |
| 42 | | 単子葉類茎の塊 | 草本茎 | | | | 扁平に潰れている<br>同一方向に集積 |
| 46 | －１ | ヒサカキ | 材 | 11年輪生 | 直径1.5㎝ | ○ | 晩材形成 |
| | －２ | ヒサカキ | 材 | 11年輪生？ | 直径1.5㎝ | ○ | 晩材形成 |
| | －３ | イヌビワ | 材 | ２年輪生 | 直径0.8㎝ | ○ | |
| 48 | －１ | ヒノキ | 材 | | 0.5×3.5㎝ | | 削りかすか？ |
| | －２ | 単子葉類茎 | 草本茎 | | 幅1～1.5㎝ | | 節部(葉鞘基部?)あり |
| | －３ | 単子葉類茎の塊 | 草本茎 | | | | 扁平に潰れている<br>同一方向に集積 |
| 19-1 | －１ | 単子葉類の茎？ | | | 幅７㎜ | | 扁平に潰れている |
| 19-1 | －２ | クヌギ節 | 材 | ２年輪生 | 直径1.3㎝ | ○ | 早材部形成 |
| 19-2 | －３ | 単子葉類茎の塊 | 草本茎 | | | | 扁平に潰れている<br>同一方向に集積 |

コ科、カタバミ属、イヌコウジュ属、タカサブロウなどが概ねいずれの試料からも得られた。No.1はチドメグサ属、イヌコウジュ属、キランソウ属が僅かに得られ、No.4は全く得られなかった。

古墳中期試料（No.8）：木本は得られず、草本は、ホタルイ属が最も多産し、スゲ属、ウキヤガラが比較的目立った。他に、ヘラオモダカ、オモダカ科、コナギ、イシミカワ、ヤナギタデ、シロネ属などが得られた。

弥生後期～古墳前期前半試料（No.9～12）：木本は得られず、草本はホタルイ属、スゲ属が多産する傾向であった。他に、ハリイ属、コナギ、ボントクタデ、イヌコウジュ属、タカサブロウが一部試料でやや目立つか、多くの試料で得られた。また、No.9,10では、メロン仲間も僅かに得られた。

弥生中期（No.13）および弥生試料（No.14）：木本は得られなかった。草本は、No.13では、ホタルイ属、スゲ属が比較的目立ち、ヒルムシロ属、キンポウゲ属、イヌコウジュ属、ゴキヅルなどが僅かに得られた。No.14は、ホタルイ属のみが僅かに得られた。

3）植物遺体分析試料（27試料、第3・4表）

本試料中には、木材・葉・茎などの植物遺体が多く含まれていたが、これらの部位は、計数が困難であるため、一覧表中では各試料に含まれる部位を丸印で示した。また、これらの遺体の一部を選択して、可能な限り同定を試みたが、詳細については第4表を参照されたい。

中世試料（No.3，6）：SX725（No.3，6）は、マツ属複維管束亜属の葉が多数含まれ、僅かに含まれていた木材を調べたところ、No.6にはアカマツが含まれていた。また、種実類では、エノコログサ属、カヤツリグサ属、ハリイ属、サナエタデ近似種、ヤナギタデ、ギシギシ属、ナデシコ科、タガラシ、エノキグサ、アリノトウグサ属、チドメグサ属、イヌコウジュ属などが検出された。

古代試料（No.10～12,46～49）：SD738（No.10～12）は、単子葉類の茎が多く含まれ、枝材などの木材も含まれていた。その中には、クヌギ節が含まれていた。種実類は少ないが、フジ属、イヌコウジュ属が含まれていた。SX932～934（No.46～49）は、単子葉類の茎や木材から成る。木材の中には、ヒノキと不明（広葉樹）が含まれていた。種実類では、ハンノキ亜属、タガラシが含まれていた。

古墳後期～古代試料（No.19－1～44）：多くの試料が単子葉類の茎を含んでおり、No.22では双子葉類の茎も検出された。また、No.25,30,31では、広葉樹の葉片を多数含んでいたが、いずれも非常に細かい状態の悪い破片であり、同定には至らなかった。木材では、クヌギ節、広葉樹、コナラ属などが得られた。種実類は、No.19－1でホタルイ属、No.25でシロザ近似種、イヌコウジュ属、No.27でホタルイ属、ハリイ属などが得られた。また、No.44では、キビ、ヒエまたはアワ、キビ族の炭化胚乳が得られたほか、ホタルイ属、ヤナギタデ、エノキグサなども含まれていた。

古墳後期試料（No.13～18）：SD746（No.13～16）は、No.14は単子葉類の茎を含んでいたが、他は植物遺体というよりは堆積物試料であった。草本を主体とした種実類を豊富に含み、オモダカ属、ホタルイ属、イヌコウジュ属などが多産するほか、ヒルムシロ属、イネ、イボクサ、ヒシ属、チドメグサ属など含んでいた。SX737（No.17,18）は、枝材などの木材を含んでいたが、その中にヤナギ属が検出された。

## 3．考察

### 1）森林植生について

[弥生時代]

付近には、針葉樹のクロマツ、落葉のムクノキ、センダン、イヌザンショウ、エゴノキ、常緑のイチイガシ、ツクバネガシ近似種ツブラジイなどが生育していたと予想される。花粉分析の結果では、

弥生時代には、アカガシ亜属、シイ類から成る照葉樹林が発達していたと予想されたが、アカガシ亜属はイチイガシ、ツクバネガシ近似種を含んでいたと考えられる。

［古墳時代］

付近には、針葉樹のクロマツ、落葉のヤナギ属、オニグルミ、エゴノキ、サンショウ属、常緑のイチイガシ、ツブラジイ、ヒサカキ属などが生育しており、これらに蔓性のブドウ属が絡み付いていたであろう。花粉分析の結果も考慮すると、引き続き、イチイガシを含むアカガシ亜属とツブラジイを含むシイ類から成る照葉樹林が発達していたと予想される。

［奈良・平安時代（古代）］

付近には、針葉樹のクロマツ、ヒノキ、落葉のハンノキ亜属、クヌギ節ムクノキ、クロモジ属近似種、フジ属センダン、エゴノキ、常緑のアカガシ亜属、ツブラジイ、クスノキ、ヒサカキなどが生育していたと予想される。なお、花粉化石では反映されないクスノキが得られたが、クスノキも照葉樹林を構成する普通の要素であった可能性が考えられる。

［中世］

付近には、針葉樹のアカマツ、クロマツ、落葉のエノキ属、センダン、エゴノキ、常緑のヤマモモ、シリブカガシ、クスノキが生育していたと予想される。この時期の花粉分析は行われていないが、照葉樹林要素のヤマモモ、シリブカガシ、クスノキが得られたことから、多少なりとも照葉樹林は存続していたであろう。

### 2）栽培・利用状況について

［弥生時代］

栽培植物と考えられる分類群は、モモ、イネである。モモは、種実同定試料の多くで得られたが、付近で栽培されていたか生活の場で廃棄されたものが埋積したのであろう。イネは、SP223（№50）で得られたが、炭化胚乳であり、栽培地からの流入というよりは、生活の場からの流入であろう。

［古墳時代］

栽培植物と考えられる分類群は、モモ、イネ、メロン仲間である。他に、オニグルミが食用として有用であるが、完形と自然半割であり、出土核については利用されたものではない。

［奈良平安（古代）］

栽培植物と考えられる分類群は、モモ、イネ、ヒョウタン仲間である。ヒョウタン仲間は、SD735（№19,20）から果実（果皮）のみが得られたが、水に関連する祭祀的な意味合いで投棄されたものかもしれない。

［中世］

栽培植物と考えられる分類群は、ウメ、モモである。モモは、弥生時代以降の利用植物と考えられるが、ウメは中世になって初めて出土することから、モモの利用よりもやや遅れていた可能性が考えられる。

### 3）主要遺構の堆積環境について

［弥生時代］

SK810：ヒルムシロ属、ホタルイ属、ゴキヅルなどが生育する水域であったと予想され、弱い流れも伴っていた可能性もある。

［古墳時代］

SD746：ホタルイ属、コナギをはじめとした多様な水湿地性植物が得られた。ヒルムシロ属、ヒシ属の出土から、幾分水深の深い地点もあり、弱い流れを伴っていた可能性もある。なお、イネ未炭化

穎が得られることから、付近には水田が存在していた可能性があり、SD746は水田に関連した溝状遺構であるかもしれない。コナギ、タガラシなどのいわゆる水田雑草は、水田からの流入とも考えられる。

SX737：ホタルイ属、コナギをはじめ、サガミトリゲモ、オモダカ科などの多様な水湿地性植物が得られた。イネの産出はなく、水田に類似した水位の低い湿地ないし水溜りであり、弱い流れも伴っていた可能性がる。

［奈良平安（古代）］

SX932：イネとタガラシの産出から付近に水田が存在していた可能性がある。

SD745：コナギ、ハリイ属、ホタルイ属、オモダカ属などが生育する水位の低い湿地ないし水溜りであったと予想される。

［中世］

SX725：植物遺体が保存されていることと、ハリイ属、サナエタデ近似種、ヤナギタデ、タガラシの産出から、堆積の場は湿地であったと予想される。しかし、周辺には、ギシギシ属、エノキグサ、アリノトウグサ属、イヌコウジュ属などが生育する乾いた草地が存在しており、そのような場所にマツが生育していたのであろう。

## 4．主な大型植物化石の形態記載

### 1）種実類

クロマツ　*Pinus thunbergii* Parlatore　毬果

鱗片の中央が凹み、突起は小さく突出する。風化が激しく表面の状態の悪いものは、マツ属複維管束亜属にとどめた。

オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr.　核

核は灰褐色ないし茶褐色、側面観は卵形から卵円形。表面には縦に不規則な筋があり、明瞭な１本の縫合線が縦に走る。

イチイガシ　*Quercus gilva* Blume　幼果

果実上部は、輪状紋があり、真っ直ぐ立ちあがって花柱につながる。柱頭は短く、傘状で外側を向く。

ツクバネガシ近似種　*Quercus* cf.　*sessilifolia* Blume　果実

果実は楕円形。花柱・柱頭は、保存されていない。やや不明瞭ではあるが、頂部に輪状紋が認められる。首の部分がアカガシほど顕著に突出しないので、ツクバネガシ近似種とした。

ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* var.　*cuspidata*（Thunb.）Schottky　果実

果実は、やや光沢のある黒褐色で果実長は10mm前後。

ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* var.　*cuspidata*（Thunb.）Schottky　果実

果実は卵形ないし卵円形で果実長は約10㎜弱～12㎜程度。

ウメ　*Prunus mume*　（Sieb.）　Sieb. et Zucc.　核

核は楕円形～卵形。下端に臍があり、一方の側面には縫合線が発達する。表面には小さく、深い穴が散在する。長さ18～22㎜程度。

モモ　*Prunus persica* Batsch　核

核は卵円形～卵形～楕円形。下端に臍があり、一方の側面には縫合線が発達する。表面には不規則な流れるような溝と穴がある。長さ19～31.5㎜程度。

センダン　*Melia azedarach* Linn var.　*subtripinnata*　核
核は楕円形。縦方向に溝が走り、中には各室に1個ずつ種子が入る。
オモダカ属　*Sagittaria*　果実
果実は淡褐色、側面観は歪んだ倒卵形、上面観は扁平。周囲の翼は発達し広がる。
キビ　*Panicum miliaceum* Linn.　炭化胚乳
長さ1.1～1.4㎜、幅1.1～1.2㎜程度。胚の長さは、果実長の半分程度と短い。臍は不明瞭。
ヒエまたはアワ　*Echinochloa crus－galli* P. Beauv. var. *fumentacea* Trin. and／or *Setaria italica* Beauv.　炭化胚乳
長さ1.2㎜、幅1.0㎜程度。胚の長さは果実長の2／3程度。臍は欠損で不明瞭。なお、キビ族としたものは、状態が悪く胚や臍が確認できない。
エノコログサ属　*Setaria*　穎
側面観は卵形、上面観は片凸レンズ形。表面の基部には台形状の隆起があり、表面には横方向の隆起がある。
スゲ属　*Carex*　果実
三稜形と二面のものが含まれていたが一括した。
カヤツリグサ属　*Cyperus*　果実
黒色で長さ1㎜強の三稜形。
ホタルイ属　*Scirpus*　果実
果実は黒色で広倒卵形～倒卵形、表面には横方向の皺がある。
イボクサ　*Aneilema keisak* Hassk.　種子
側面観は楕円形、上面観は三日月形。向軸面に一文字状の臍がある。
カナムグラ　*Humulus scandens*（Lour.）Merill　種子
二面の円形で臍は白く心形。
サデクサ　*Polygonum maackianum* Regel　果実
果実は黒色で三稜形。稜はかなり丸みを帯びる。
イシミカワ　*Polygonum perfoliatum* Linn.　果実
果実は黒色で断面は円形。
サナエタデ近似種　*Polygonum* cf. *scabrum* Moench　果実
果実は黒褐色で2面の卵形。
ボントクタデ　*Polygonum pubescens* Blume　果実
果実は黒色で三稜形。表面には網目模様がある。
ヤナギタデ　*Polygonum hydropiper* Linn.　果実
果実は二面の片凸レンズ形。表面には網目模様がある。
ヒユ属　*Amaranthus*　種子
種子は黒色で偏平な円形。唇状の臍がある。
ナデシコ科　Caryophyllaceae　種子
偏平円形で表面には、多数の突起がある。
コウホネ属　*Nuphar*　種子
種子は光沢のある黒褐色で広卵形。一端に臍があり、表面には細かい網目模様がある。
タガラシ　*Ranunculus sceleratus* Linn.　果実

果実はレンズ形で中央部は褐色、周縁部は白色でスポンジ状。

カタバミ属　*Oxalis*　種子

黒色で偏平な卵形。表面は、両側面に横長の網目が3列に並ぶ。

エノキグサ　*Acalypha australis* Linn.　種子

種子は黒色、側面観は先端がやや尖る倒卵形、上面観は円形。表面には細かな網目模様がある。

ノブドウ　*Ampelopsis brevipedunculata*（Maxim.）Trautv.　種子

種子は灰褐色で背面に棍棒状の臍があり、腹面には穴が2つある。

ヒシ属　*Trapa*　果実

下端が欠損した2本の角を持つものと、角の部分のみが得られた。小型で、果皮は硬い。

シロネ属　*Lycopus*　果実

果実は淡褐色、倒卵形で断面は広い扇形。

イヌコウジュ属またはシソ属　*Mosla* and／or *Perilla*　果実

果実は茶褐色で側面観は円形、上面観は楕円形。長さ1.4～1.6㎜程度。

イヌコウジュ属　*Mosla*　果実

果実は茶褐色で側面観は円形、上面観は楕円形。表面は網目模様。長さ1.2～1.3㎜程度。

メロン仲間　*Cucunis melo* Linn.　種子

種実同定試料№10はモモルディカメロン型、他はマクワ・シロウリ型。

タカサブロウ　*Eclipta prostrata*（Linn.）Linn.　果実

側面観は長倒卵形、上面観は菱形。周縁はやや翼状にでっぱり、中央部は瘤状である。

2）木材など

アカマツ　*Pinus densiflora*　Sieb. et Zucc.　マツ科　図版3　1a－1c（試料6）

直径1.2㎝で4～5年輪ある細い枝材であった。垂直と水平の樹脂道があり、早材から晩材への移行はゆるやかな針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には鋸歯状肥厚があることから、アカマツと同定した。試料№3は、材年齢が若く保存もあまり良くなく、放射仮道管壁の肥厚の特徴は不明瞭であったので、マツ属複維管束亜属の同定に留めた。

アカマツは暖帯から温帯下部のやや乾燥した陽光地に生育し、人間活動との関係も深く開発地の二次林の主要樹でもある。

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.　図版3　2a－2c（試料48－1）

出土破片は、製材過程で出る削り屑のようであった。

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。春材から晩材への移行は緩やかである。分野壁孔は孔口が斜めに細く開いたヒノキ型で1分野に1～2個、おもに2個が水平に配列している。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれ、建築材・曲物などによく使われる。

ヤナギ属　*Salix*　ヤナギ科　図版3　3a－3c（試料18）

試料17と18は、直径1.0㎝前後で1～2年輪ある細い枝材であった。小型の管孔が単独または2～4個が複合し、均一に分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は単列異性、道管との壁孔は大きく交互状に密在し特に上下端で明瞭である。

ヤナギ属は暖帯から温帯の水湿地や丘陵地の日当りのよい所に生育する落葉高木または低木で多くの種類がある。 材からは樹種を特定することはできない。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節　*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*　ブナ科　図版３４a－４c（試料11－１）

試料11－１と試料19－２は、直径1.0cm前後で２年輪ある細い枝材である。２試料共に、樹皮に接する最終年輪部には大きな管孔が形成されていた。従って、早春に母樹から離脱した材と言える。成長を開始した１年輪目は、小型の管孔が単独で放射状から火炎状に配列し、２年輪目では晩材部の管孔は非常に小型となり、環孔性が見られる。広放射組織があり、晩材部道管は小型となり孔口は円形・厚壁であり単独で分布することから、クヌギ節と同定される。

クヌギ節は落葉広葉樹で、クヌギとアベマキが属する。いずれの種も暖帯の山林に普通で、二次林にも多い。材は重厚で割裂性が良く、住居材や板材などに利用され、薪炭材としても重要である。

コナラ属　*Quercus*　ブナ科　図版３　８a（試料30－２）

試料25・29－３・30－２は、直径1.0cm前後の1～２年輪生ほどの細い枝材である。１年目の材で、小型で孔口が円形の管孔が単独で放射状に配列し、広放射組織がある。従って、コナラ属コナラ亜属のクヌギ節・コナラ節や、コナラ属アカガシ亜属の材であるが、若齢のため管孔配列の特徴が発現されていないので、これ以上は特定できない。

イヌビワ　*Ficus erecta* Thunb.　クワ科　図版３　５a－５c（試料46－３）

直径0.8cmで２年輪生の材である。２年輪部はやや小型の管孔が単独あるいは２～３個が放射方向に接合して均一に分布している。２～４細胞幅の帯状柔組織が特徴的である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は、異性、１～２細胞幅、細胞高は高く、放射組織の輪郭がいびつなものがある。

イヌビワは、関東以西の暖帯に普通に成育する落葉低木または小高木である。

ヒサカキ　*Eurya japonica* Thunb.　ツバキ属　図版３　６a－６c（試料46－１）

試料46－１と46－２は接合しないが、直径1.5cmで11年輪ほどの枝材で、樹皮の内側の最終年輪は年輪幅も広く、晩材部の形成が見られた。非常に小型で多角形の管孔が密に散在する散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、１～２細胞幅、道管との壁孔は交互状・階段状である。２細胞幅の部分が少なく、直立細胞が非常に多いのがやや気になるが、若齢材であるためかも知れない。

ヒサカキは暖帯の林下にきわめて普通の常緑の小高木である。 材は小物器具や薪炭材につかわれる。

広葉樹　broad－leaved tree　図版３　７a－７c（試料24－１）

潰れて扁平になった直径１cm弱の細い茎で、二次組織の材構造がある。中心には大きな髄があり、非常に小型の管孔が主に単独で放射状に分布している。道管の壁孔は交互状、穿孔は単独のようであった。放射組織は１～３細胞幅ぐらい、非常に大きな直立細胞からなるようであった。充分な組織観察ができなかったが、潅木類の材のようであった。

双子葉類の茎　Dicotyledoneae　図版３　９a－９b（試料22－２）

潰れて扁平になった直径１cm弱の細い茎で、側芽跡が２か所付いていた。 横断面において、大きな並立維管束が表皮の内側に１層配列している事から、双子葉類の茎部と思われる。

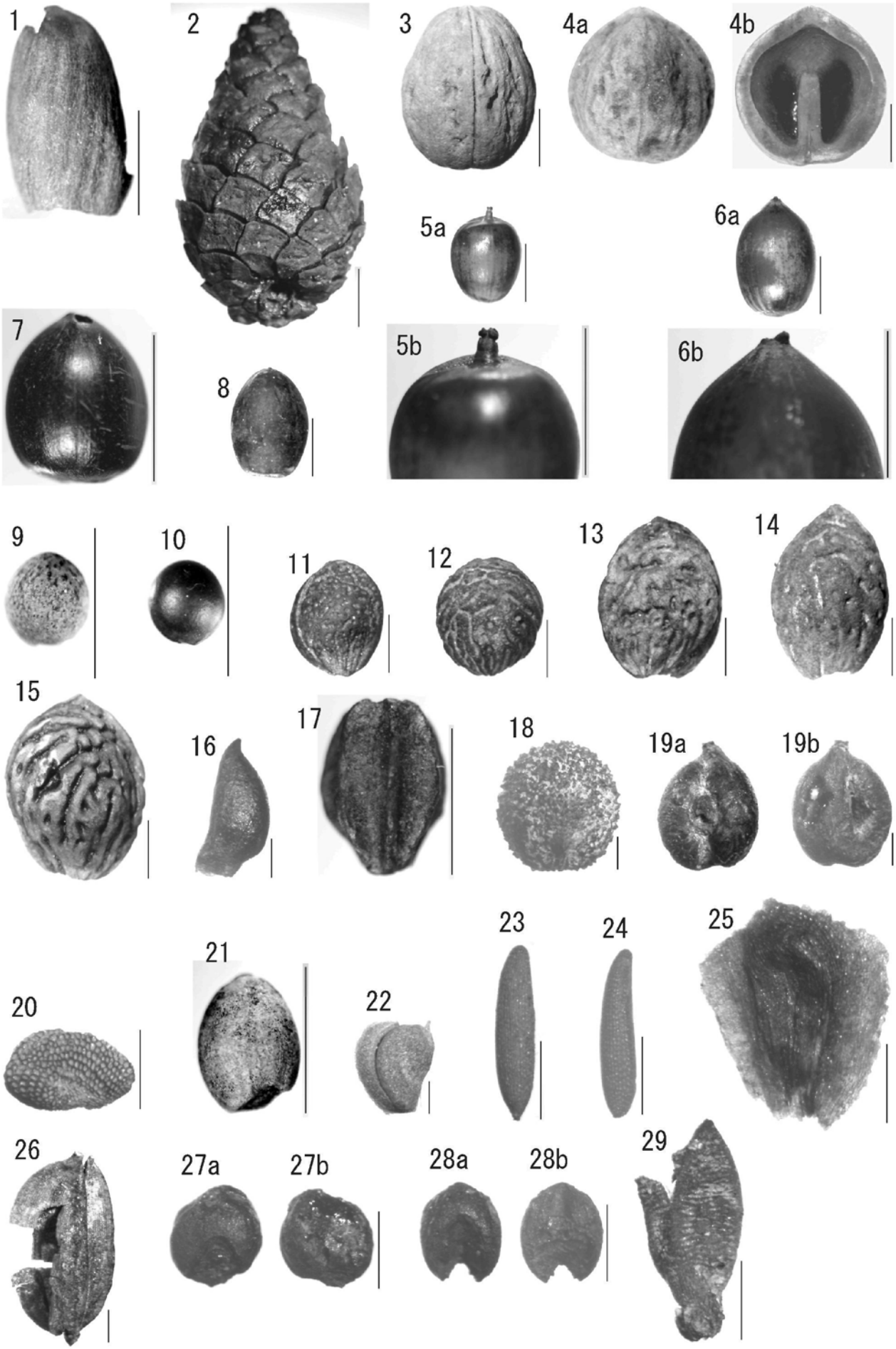
単子葉類の茎の塊　Monocotyledoneae　図版３　10（試料48－２）　11（試料11－２）　12（試料48－２）

多数の同質の細い茎が、同一方向に集積した状態で潰れている。22－１と48－２の一部では、葉鞘付着跡と思われる節部が観察された。また表皮の薄片を観察したところ、イネ科などの表皮に見られ

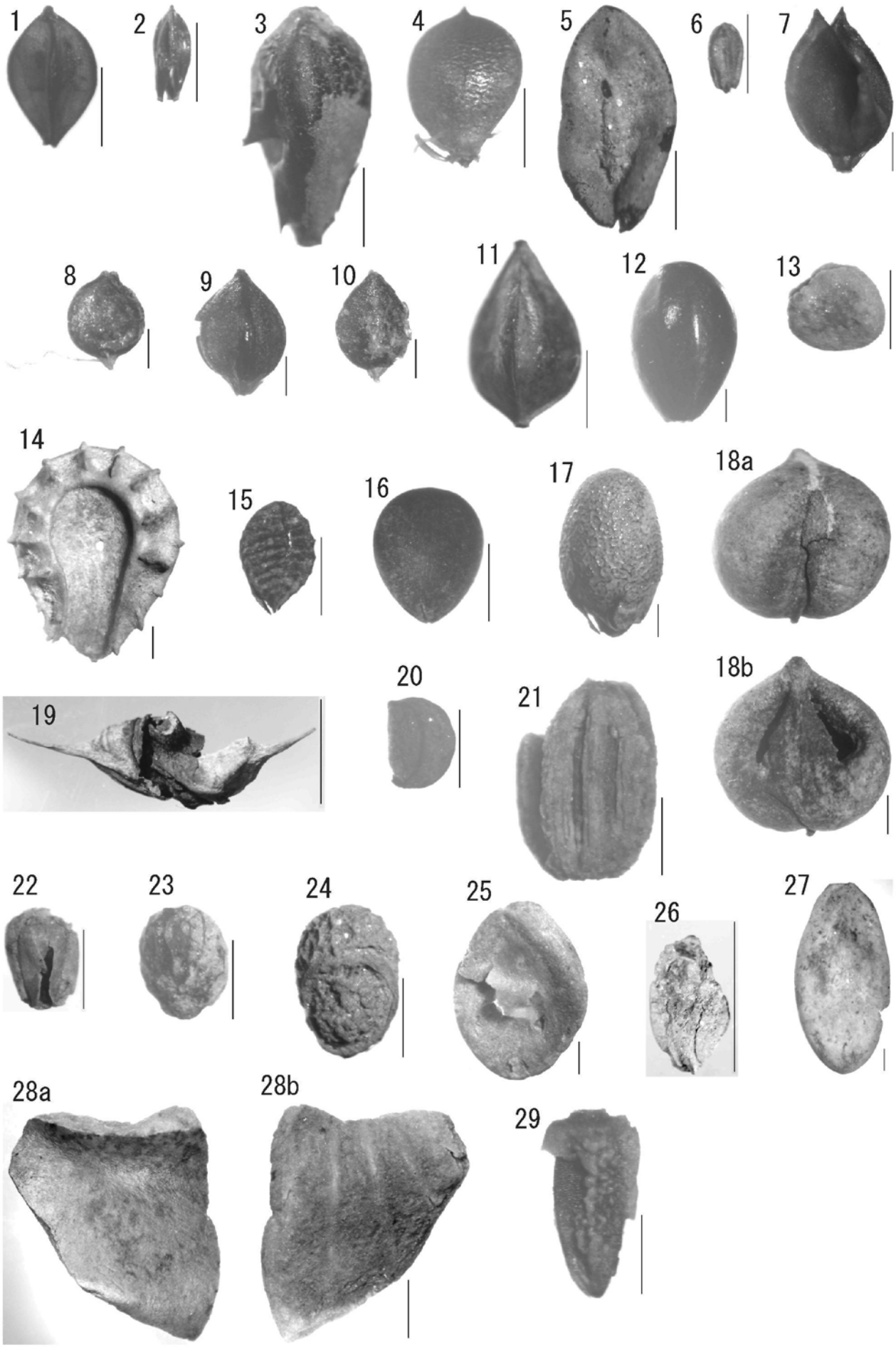
る波状の輪郭を成す細胞の配列が見られた。このような特徴から、単子葉類の茎部思われる。なお茎部とは直接関係しないが、これらの塊から薄片を取りプレパラートを見ると、様々な形態のプラントオパールが付着していたようである。

図版１　出土した大型植物化石（スケールは1～15、17、21が１㎝、16、18～20、22～29が１㎜）
１．カヤ、種子、種実同定№51　２．クロマツ、毬果、種実同定№18　３．オニグルミ、核、種実同定№29　４．オニグルミ、核、種実同定№25　５．イチイガシ、果実、種実同定№47
６．ツクバネガシ近似種、果実、種実同定№47　７．ツブラジイ、果実、種実同定№39　８．シリブカガシ、果実、種実同定№６　９．クスノキ、種子、種実同定№51　10．クロモジ属近似種、種子、種実同定№51　11．ウメ、核、種実同定№11　12．モモ、核、種実同定№21　13．モモ、核、種実同定№16　14．モモ、核、種実同定№７
15．モモ、核、種実同定№15　16．フジ属、芽、種実同定№12　17．センダン、核、種実同定№10　18．アカメガシワ、種子、土壌№10　19．ブドウ属、種子、植物遺体№13
20．ヒサカキ属、種子、土壌№２　21．エゴノキ、種子、種実同定№24　22．ヒルムシロ属、核、植物遺体№16　23．イトトリゲモ、種子、土壌№７　24．サガミトリゲモ、種子、土壌№５
25．オモダカ属、果実、土壌№２　26．イネ、穎、植物遺体№13　27．キビ、炭化胚乳、植物遺体№44　28．ヒエまたはアワ、炭化胚乳、植物遺体№44　29．エノコログサ属、穎、種実№12

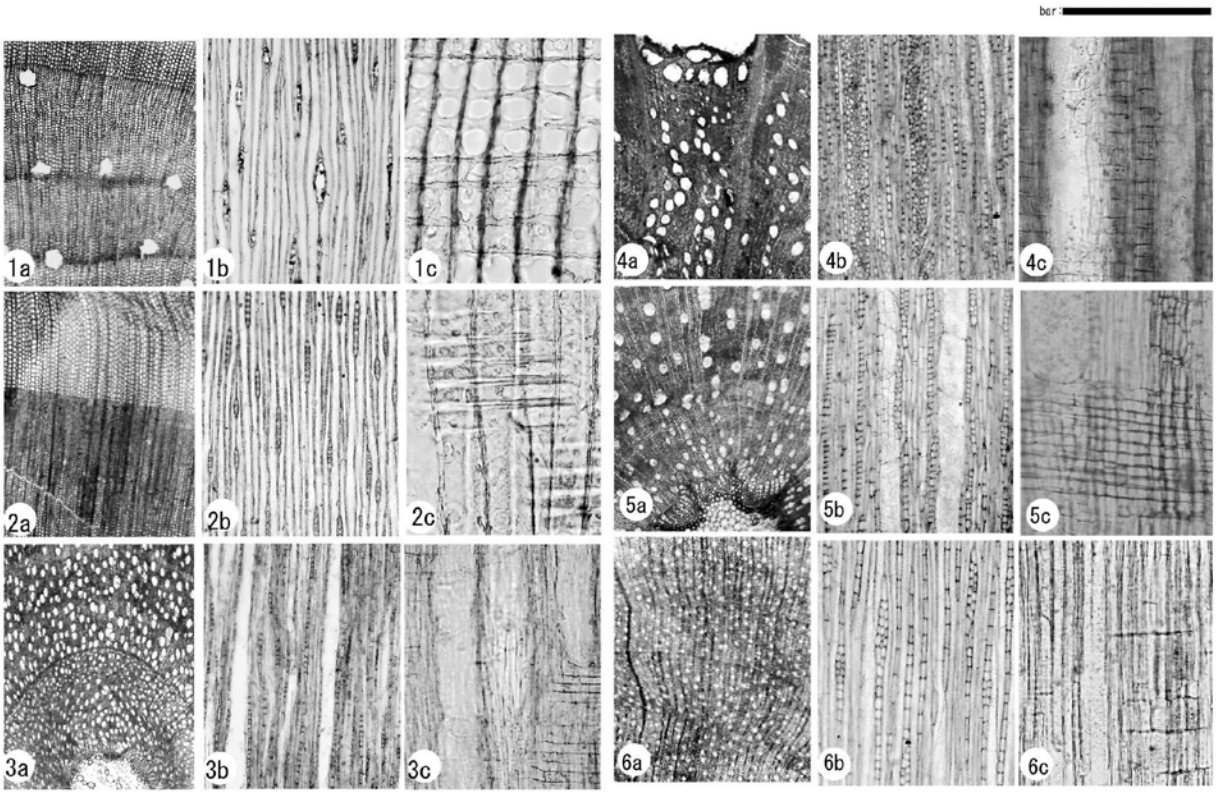
図版２　出土した大型植物化石(スケールは１～18、20～25、27、29が１㎜、19、26、28が１㎝)
１．スゲ属、果実、土壌№８　２．カヤツリグサ属、果実、土壌№３　３．ウキヤガラ、果実、土壌№８　４．ホタルイ属、果実、種実同定№12　５．イボクサ、種子、土壌№３ ６．コナギ、種子、土壌№３　７．ミゾソバ、果実、種実同定№12　８．サナエタデ近似種、果実、種実同定№12　９．ボントクタデ、果実、種実同定№12　10．ヤナギタデ、果実、種実同定№12
11．ギシギシ属、果実、土壌№10　12．コウホネ属、種子、土壌№1213．タガラシ、果実、土壌№12　14．ハスノハカズラ、種子、植物遺体№16　15．カタバミ属、種子、土壌№７　16．エノキグサ、種子、土壌№３　17．ツリフネソウ、種子、土壌№３　18．ノブドウ、種子、種実同定№24　19．ヒシ属、果実、種実同定№24
20．チドメグサ属、果実、土壌№６　21．ドクゼリ属またはセリ属、果実、土壌№10
22．シロネ属、果実、土壌№８　23．イヌコウジュ属、果実、土壌№２　24．キランソウ属、果実、土壌№２　25．スズメウリ、種子、植物遺体№16　26．ゴキヅル、種子、土壌№11
27．メロン仲間、種子、種実同定№10　28．ヒョウタン仲間、果実、種実同定№2029．タカサブロウ、果実、土壌№８

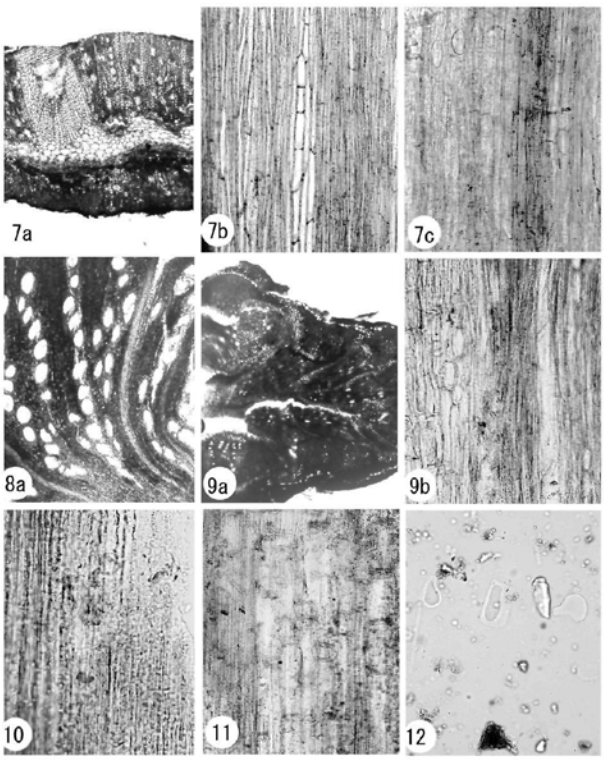



図版１．出土した大型植物化石




図版２．出土した大型植物化石




**図版 3　洗い出し試料出土木材の材組織光学顕微鏡写真**

1a-1c: アカマツ（試料 6）

2a-2c: ヒノキ（試料 48-1）

3a-3c: ヤナギ属（試料 18）

4a-4c: クヌギ節（試料 11-1）

5a-5c: イヌビワ（試料 46-3）

6a-6c: ヒサカキ（試料 46-1）

7a-7c: 広葉樹（試料 24-1）

8a: コナラ属（試料 30-2）

9a・9b: 双子葉類の茎（試料 22-2）

a: 横断面　b: 接線断面　c: 放射断面　9b: 縦断面

10: 単子葉類茎の表皮細胞（試料 48-2）

11: 単子葉類茎の表皮細胞（試料 11-2）

12: プラントオパール（試料 48-2）

bar: 1c: 0.1mm　10・11・12: 0.2mm

そのほかは a=1.0mm, b=0.4mm, c=0.2mm

# 9．第7次調査出土木材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

下月隈C遺跡第7次調査では、第Ⅲ面の遺物包含層が検出されている。包含層の時期は、第Ⅰ面が中世初頭～近代、第Ⅱ面が古墳時代後期～奈良時代、第Ⅲ面が弥生時代前期～古墳時代前期となる。また、第2区からは、古代（平安時代）の遺物包含層が確認されている。遺跡が沖積地に位置しているため、これらの遺物包含層からは土器等の遺物と共に、木材や種子等の植物質遺物も大量に出土している。木材は、自然木の他、加工された木製品も多数含まれている。

本報告では、本遺跡における木材利用や古植生に関する資料を得るため、出土した木製品や自然木の樹種同定を行う。

## 1．試料

試料は、木製品と自然木に大別される。木製品は、第Ⅰ面124点、第Ⅱ面57点、第Ⅲ面176点、第2区57点の合計414点について試料を採取した。また、杭材は、第Ⅰ面26点、第Ⅱ面253点、第Ⅲ面82点、第2区93点の合計454点について試料を採取した。一方、自然木は、第Ⅱ面22点、第Ⅲ面178点の合計200点について試料を採取した。したがって、樹種同定点数は合計1068点である。なお、杭材については、杭材試料の他に木製品のリスト中にも杭材とされる試料が認められる。また、自然木とされる資料中にも先端加工が施された杭材と考えられる試料が混在していた。

## 2．分析方法

木材試料のうち、木製品は、接合する部品がある場合には接合面内から木片を採取した。接合する部品がない場合には、破損部から小片を採取した。破損部もほとんど無い場合には、直接切片を採取した。自然木については、既に切り分けられていたものもあり、基本的には全量を試料とした。ただし、輪切りなどで大きな木片の場合には小片を採取して試料とした。木材試料は、基本的は炭化していない部分から採取したが、3点は他の部分で採取することが難しく、炭化部分を試料とした。なお、木材試料の採取にあたっては、同一試料名や試料名が混同しやすいものも多くあったため、混乱を避けるために採取時に用意された試料表に付された仮の通し番号を試料番号として採取した。また、1試料中に複数点の木材が入っていたり、複数の部品で構成されていた場合には、枝番号またはアルファベットの小文字を通し番号に付して採取した。

木片は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

## 3．結果

木製品のうち、第2区№13aは試料採取時の段階で既に保存状態が悪く、切片の作成を試みたものの、観察できる組織が認められず、種類は不明である。また、自然木・杭材のうち、第Ⅱ面SX743杭列№30は、散孔材の道管配列を有する広葉樹材であるが、収縮などにより組織の観察が不十分で種類

の同定には至らなかった。その他の試料は、針葉樹７種類（マツ属複維管束亜属・モミ属・スギ・ヒノキ・マキ属・イヌガヤ・カヤ）、広葉樹56種類（ヤマモモ・ヤナギ属・カバノキ属・クマシデ属イヌシデ節・ブナ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・コナラ属＜根株＞・クリ・マテバシイ属・ツブラジイ・スダジイ・ムクノキ・ケヤキ・ヤマグワ・イヌビワ属・ヤマモガシ・シキミ・クスノキ・タブノキ属・ハマビワ属・クスノキ科・ツバキ属・サカキ・ヒサカキ・モッコク・マンサク属・ウツギ属・ウメ・サクラ属・バラ科ナシ亜科・ネムノキ・シラキ・ユズリハ属・キハダ近似種・アワブキ属・モチノキ属・ニシキギ属・ミツバウツギ・キブシ・クマノミズキ類・ミズキ属・タカノツメ・シャシャンボ・ネジキ・タイミンタチバナ・カキノキ属・エゴノキ属・ハイノキ属ハイノキ節・イボタノキ属・チシャノキ・ムラサキシキブ属・ガマズミ属・タニウツギ属・スイカズラ属）とイネ科タケ亜科に同定された。このうち、クスノキ科は道管配列が異なる３タイプが認められた。なお、紙面の関係から各種類の解剖学的特徴等については割愛する。

## ４．考察

### ⑴弥生時代前期～古墳時代前期の木材利用

第Ⅲ面の試料が該当し、木製品176点について樹種同定を行い、合計24種類が確認された。木製品の器種別種類構成を表１に示す。木製品は、農具（鍬・鋤類・えぶり・杵）、建築材（柱。礎板・ネズミ返し）、容器、杓子などがあるが、用途不明の試料も多い。全体的には、針葉樹が30点、広葉樹が146点であり、広葉樹材の利用が多い傾向がある。樹種別にみると、アカガシ亜属が65点で最も多く、次いでスギ（25点）、クスノキ（15点）、スダジイ（10点）、クヌギ節・コナラ節（各９点）、クリ（７点）等となる。

各製品についてみると、農具のうち、鍬・鋤類は全てアカガシ亜属であった。市内では、本遺跡にも近い板付遺跡等で農具の樹種同定が行われているが、基本的にはアカガシ亜属が多い種類構成となっている（嶋倉,1976a,1976b,1977,1981;松本・林,1979a,1979b;林・松本,1980）。アカガシ亜属は、重硬で強度が高い材質を有していることから、耕作時の衝撃などに耐える木材として選択・利用されたことが推定される。杵やえぶり等でもアカガシ亜属が認められることから、鍬・鋤類以外にも強度を有する用途に利用されていたことがうかがえる。一方、同じく強度を必要とする柱材等の建築部材にはアカガシ亜属は少なく、スダジイ、クスノキ、ツバキ属、クリ、複維管束亜属など様々な木材が認められる。材質も様々であるが、強度の高い種類が多いことから、周辺に生育しているなど、入手条件の良い木材の中から強度を有する種類を利用した可能性がある。

容器にはサクラ属、スギ、槽にはクスノキ、杓子にはアカガシ亜属が認められた。このうち、槽は同定を行った４点ともクスノキであり、選択的な利用が推定される。クスノキの利用は、これまでにも確認されている。比較的大径木が得られること、加工が比較的容易であることなどが利用された背景に考えられる。

第６次調査区の結果（三村・高橋,2005）では、弥生時代中期～後期にかけてクリが最も多く、次いでタブノキ属が多い結果が得られているが、今回の結果ではクリやタブノキ属は少ない。第６次調査区のクリの用途を見ると、柱根と礎板に集中していることから、第６次調査区と第７次調査区の種類構成の違いは器種構成の違いを反映したものと考えられる。

### ⑵古墳時代後期～奈良時代の木材利用

第Ⅱ面の試料が該当し、木製品57点について樹種同定を行い、合計18種類が確認された。木製品の器種別種類構成を表２に示す。木製品は、農具（鍬・鋤類・杵・柄）、建築材、曲物、木簡等がある

が、用途不明の試料もある。針葉樹材26点、広葉樹材31点であり、針葉樹材と広葉樹材の利用量はほぼ同じである。樹種別に見ると、スギが12点で最も多く、次いでヒノキ（10点）、アカガシ亜属およびアワブキ属（各６点）、ツブラジイ（５点）等となる。

製品別にみると、針葉樹材は曲物や板材に集中しているが、建築部材や農具には少ない。一方、広葉樹材は、杭や農具に多い傾向があるが、器種不明の試料も多い。鍬や杵アカガシ亜属が利用される結果は、第Ⅲ面と同様である。建築材では、アワブキ属などの利用が見られ、第Ⅲ面と共通する点があるが、点数が少ないため種類構成等の詳細は不明である。曲物は、第Ⅲ面には認められなかった器種であるが、底板、側板、蓋板と板状の加工を施すことから、木理が通直で割裂性の高い種類（スギ、ヒノキ、モミ属）が利用されたと考えられる。

第６次調査区では、同時期の木製品の樹種同定試料数が少ないが、曲物側板のヒノキ、鍬のアカガシ亜属など今回と同様の利用例が認められている。

### ⑶古代（平安時代）の木材利用

第２区の試料が該当し、木製品57点について樹種同定を行い、合計15種類が確認された。木製品の器種部種類構成を表３に示す。木製品は、曲物、斎串、人形、建築部材、柱等がある。針葉樹42点、広葉樹15点であり、針葉樹の利用が多い傾向がある。樹種別にみると、モミ属の14点が最も多く、次いでスギ・ヒノキ（各11点）、複維管束亜属４点、アワブキ属・ミツバウツギ（各３点）等となる。第Ⅲ面および第Ⅱ面で多く見られたアカガシ亜属は１点も認められなかった。

器種構成をみると、曲物、人形、斎串、板材など板状の製品が多くを占めており、このことも針葉樹材が多い理由として考えられる。第Ⅱ面では曲物はスギとヒノキのみであったが、第２区ではモミ族が多くを占めており、古墳時代後期～奈良時代と平安時代とで曲物の木材利用に違いが認められる。第６次調査区では、古代の曲物にモミ属、スギ、ヒノキが認められているが、出土点数には大きな違いが認められないことから、曲物の木材利用についてはさらに資料を蓄積することが必要である。一方、斎串や人形では、同じく板状を呈する製品でありながらスギとヒノキのみが利用され、モミ属は利用されていない。同様の傾向は第６次調査区の製品でも見られることから、祭祀具ではスギとヒノキに利用が集中し、モミ属は利用していなかった可能性がある。今後、祭祀具系の木製品の樹種同定を増やし、統計的に検討する必要がある。

建築材についてみると、複維管束亜属の利用が見られる。複維管束亜属は、第Ⅲ面の柱材にも認められており、柱材として継続して利用されていたことが推定される。

### ⑷中世初頭～近代の木材利用

第Ⅰ面の試料が該当し、木製品124点について樹種同定を行い、合計18種類が認められた。木製品の器種別種類構成を表４に示す。鍬？、建築部材、下駄、板草履、漆器、曲物等があるが、半数以上の製品が用途不明である。針葉樹105点、広葉樹19点で、古代よりもさらに針葉樹の利用量が多くなるが、第２区で比較的多かったモミ属は全く認められない。樹種別に見ると、スギが72点で全試料の半数以上を占めており、次いでヒノキ（25点）、複維管束亜属（６点）、ブナ属（４点）、クリ（３点）等となる。この結果から、中世初頭～近代では、スギを中心とした針葉樹材に利用が集中していたことが推定される。

器種別にみると、下駄、板草履、曲物、しゃもじ、箸、斎串、板材等を中心に針葉樹が多く利用される。スギとヒノキは、基本的に同様の用途に利用されているが、板材でスギが圧倒的に多く、ヒノキが少ない点は特筆される。

広葉樹では、鍬？にアカガシ亜属、建築部材？にサカキとカキノキ属、木槌にマテバシイ属、漆器・

椀にクリ、ケヤキ、ブナ属等が認められる。鍬？のアカガシ亜属は、第Ⅱ面や第Ⅲ面と同様の結果である。漆器・椀に認められた種類のうち、ハイノキ節を除く3種類（ブナ属、クリ、ケヤキ）は、民俗事例（農商務省山林局,1912;橋本,1979）でも漆器によく利用される種類である。とくに、近世の調査事例が豊富な東京都の例では、ブナ属はトチノキと共に最も多く確認されている種類である（能城・高橋,1996）。挽物用材の研究（橋本,1979）によれば、ブナ属は、軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しくて狂いも多いとされる。ブナ属は冷温帯落葉広葉樹林の主構成種で、九州ではブナやイヌブナが山地に生育しているが、本遺跡周辺の低標高地には生育していない。したがって、ブナ属は他地域から製品あるいは木材が搬入されたと考えられる。挽物用材の伐採・加工については、木地屋の活動との関係が指摘されている（中川,1985）。そのため、本遺跡の漆器についても木地屋によって樹木の伐採と加工が行われた後、塗り師による漆塗りが施されて、製品として流通していたものが持ち込まれた可能性がある。

下駄は、一木で台と歯をつくる連歯下駄と台に別材から作った歯を差し込む差歯下駄の2種類がある。差歯下駄は、歯の差込方法で陰卯下駄と露卯下駄に分類されるが、今回分析対象となった差歯下駄はいずれも陰卯下駄であった。また、本遺跡の下駄は、その大きさから大人用と子供用とに分けられている。このほか、差歯下駄の歯が6点ある。これらの下駄材は、複維管束亜属とカバノキ属が各1点認められた他はスギとヒノキであり、形状や年齢による木材利用の違いは認められなかった。スギやヒノキは、中世から近世にかけての下駄材として最もよく利用されている種類であり、多くの報告例が知られている（能城・高橋,1996）。また、明治時代に編纂された「木材ノ工藝的利用」（農商務省山林局,1912）でも下駄材の樹種として挙げられている。なお、カバノキ属は、基本的に温帯から亜寒帯にかけて生育している種類であり、九州ではミズメ1種が山地に生育しているのみである。そのため、製品あるいは木材が本地域に搬入されていたことが推定される。履物については、下駄のほかにも板草履の芯も出土しているが、下駄と同様に針葉樹のスギとヒノキが利用されている。

### (5)古植生について

本遺跡からは自然木も多数出土している。また、杭材も多数確認されているが、今回の試料中では、自然木とされる試料中にも杭材が混在しており、杭材と自然木とを完全に分離することが難しかった。杭材は基本的には遺跡周辺で入手可能な木材が利用された可能性があり、古植生を反映していることが推定される。したがって、今回については自然木と杭材とを合わせて古植生に関する検討を行う。なお、木製品中にも杭材が認められたが、木製品リストの器種に用途が記載されていないものも多く、集計の際に木製品リスト中から杭材のみを抽出することが困難であったため、今回は除外して、杭材および自然木のリストに記載されている試料のみを対象とした。

樹種同定を行った自然木・杭材は、第Ⅰ面が26点、第Ⅱ面が252点、第Ⅲ面が258点、第2区が116点である。各層位別の種類構成を表5、図1に示す。第Ⅲ面ではクヌギ節を中心に31種類が確認された。ツブラジイ、スダジイ、タブノキ属、アカガシ亜属は暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）を構成する種類である。その他の種類にも照葉樹林中に生育する種類が多く含まれている。一方、クヌギ節やコナラ節は、森林伐採後の二次林を構成する種類であり、クリやヤマグワ等もそうした二次林内に生育する。遺跡の立地を考慮すれば、周囲の台地上や沖積地の微高地上等に常緑広葉樹やクヌギ節やコナラ節等の落葉広葉樹が生育していたと推定される。一方、比較的多く見られたヤナギ属には低地など水分条件の良い場所に生育する種類が含まれていることから、周囲の低地に生育していたことが推定される。

第Ⅱ面では、合計40種類が認められた。基本的に第Ⅲ面と検出された種類に大きな違いは見られな

いが、ツブラジイ、スダジイ、ツバキ属、アワブキ属等が比較的多く、第Ⅲ面で多かったクヌギ節やヤナギ属は少ない。ツブラジイ、スダジイ、ツバキ属、アワブキ属は常緑広葉樹あるいは常緑広葉樹を含む分類群であり、周囲に常緑広葉樹を主とした植生が見られたことが推定される。また、第Ⅱ面では、複維管束亜属が第Ⅲ面に比較して多くなる傾向があることから、森林の伐採などにより陽地が拡大した結果、複維管束亜属の二次林が見られるようになった可能性がある。ただし、複維管束亜属は、ほとんどが杭材としての出土であり、耐水性の高い複維管束亜属の木材が実際よりも強調されて利用されている可能性もある。これらについては花粉分析も含めた検討が必要である。

第２区では、合計32種類が認められた。第Ⅱ面までと同様に検出された種類に大きな違いは認められない。第Ⅱ面と比較すると、ツブラジイ、スダジイ、ツバキ属、アワブキ属、ハイノキ節など、第Ⅱ面で比較的多く見られた種類が減少している。一方、複維管束亜属とクスノキ科が増加していることから、構成種に大きな違いはないものの、周囲の植生景観は変化した可能性がある。

第Ⅰ面では、合計９種類が認められ、複維管束亜属が多い。確認された種類は遺跡周辺で入手できたことが推定される。基本的には第Ⅱ面、第Ⅲ面、第２区で認められた種類と同様の種類が確認されている。人間活動に伴う森林の減少等がみられた可能性は残るが、生育していた種類に大きな変化は無かったと考えられる。しかし、全体的に資料数が少ない上に全て杭材であるため、複維管束亜属等の木材が実際よりも強調されている可能性もある。当該期の古植生については、さらに資料の蓄積が必要である。

引用文献

林　弘也・松本　昺, 1980, 瑞穂遺跡から出土した木製遺物の樹種同定.「瑞穂　福岡市比恵台地遺跡」, 日本住宅公団, 209-216.
松本　昺・林　弘也, 1979a, 門田遺跡谷地区出土の木材片の樹種名について.「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第11集　春日市大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡谷地区の調査」, 福岡県教育委員会, 159-161.
松本　昺・林　弘也, 1979b, 辻田遺跡から出土した木材試料の樹種同定について.「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第12集　春日市大字上白水所在辻田遺跡の調査」, 福岡県教育委員会, 144-155.
三村　昌史・高橋　敦, 2005, 第６次調査出土材の樹種からみた木材利用. 2005,「下月隈Ｃ遺跡Ⅴ」, 福岡市, 埋蔵文化と調査報告書　第839集, 福岡市教育委員会.
中川　重年, 1985, 木地屋の世界　その移動と森林の変化. 思索社,165-184.
能城　修一・高橋　敦, 1996, 中・近世における木材利用. 第11回植生史学会シンポジウム「中世・近世の植生史」発表要旨, ７-11.
嶋倉　巳三郎, 1976a, 木材の材質.「福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集　板付　－市営住宅建設にともなう発掘調査報告書1971-1974－」, 福岡市教育委員会, 67-75.
嶋倉　巳三郎, 1976b, 福岡市鶴町遺跡出土木質遺物の材質調査報告.「福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集　福岡市西区大字免鶴町遺跡」, 福岡市教育委員会, 63-68.
嶋倉　巳三郎, 1977, 福岡市板付遺跡H-5地点から出土した木質品の樹種について.「福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集　板付周辺遺跡調査報告書(4)」, 福岡市教育委員会, 111-114.
嶋倉　巳三郎, 1981, 樹種の鑑定.「福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集　福岡市博多区　那珂深ヲサ遺跡Ⅰ」, 福岡市教育委員会, 67-70.
橋本　鉄男, 1979, ろくろ（ものと人間の文化史31）. 法政大学出版局,444p.
農商務省山林局（編）, 1912, 木材ノ工藝的利用. 大日本山林會,1308p.

表1.　第Ⅲ面出土木製品の器種別種類構成

| 器種＼樹種 | マツ属複維管束亜属 | スギ | マキ属 | イヌガヤ | カヤ | クヌギ節 | コナラ節 | アカガシ亜属 | クリ | マテバシイ属 | ツブラジイ | スダジイ | ムクノキ | シキミ | クスノキ | タブノキ属 | クスノキ科 | ツバキ属 | サカキ | ウメ | サクラ属 | アワブキ属 | モチノキ属 | カキノキ属 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 柱 | 1 | 1 | | | | | 2 | 1 | 6 | | 2 | 1 | | | | 2 | 1 | 1 | | 1 | | 1 | | | |
| 建築材 | | 3 | | | | 3 | 1 | 2 | | 1 | | | | | | 2 | | | | | | | | | |
| 礎板 | 1 | | | | | | 2 | | | | | 2 | 1 | | | | | | | | | | | | |
| 礎板・ネズミ返し | | | | | | | | | | | | | | | 4 | | | | | | | | | | |
| ネズミ返し | | | | | | | | | | | | 1 | | | 3 | | | | | | | | | | |
| 梯子 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| 矢板 | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 角杭 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | |
| 杭 | | | | | | 2 | | | | | 1 | 1 | | | | | | 1 | 1 | | 1 | 2 | | 1 | |
| 杭建築材 | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 |
| クサビ | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 平鍬 | | | | | | | | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| 二又鍬 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 三又鍬 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 又鍬 | | | | | | | | 10 | | | | | | | | | | | | | | | | | 10 |
| 鍬 | | | | | | | | 8 | | | | | | | | | | | | | | | | | 8 |
| えぶり | | | | | | | | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 |
| 杵 | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | 3 |
| 柄 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 農具 | | | | | | | | 9 | | | | | | | | | | | | | | | | | 9 |
| 杓子 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 槽 | | | | | | | | | | | | | | | 4 | | | | | | | | | | 4 |
| 容器 | | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 | | | | 3 |
| 背板 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 槍 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 板材 | | 11 | | | | 1 | | 4 | | | 2 | 3 | | | | | | | | | | | | | 21 |
| 割板 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 部材 | | 3 | | | | | | 1 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 5 |
| 円盤型板材 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 円盤型木製品 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 剣状木製品 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 板状製品 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 棒状木製品 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 切断痕のある木材 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| 不明木製品 | | 3 | 1 | 1 | 1 | 3 | 2 | 12 | | | 1 | 2 | | | 2 | | | | 1 | | | | 2 | | 31 |
| 合　計 | 2 | 25 | 1 | 1 | 1 | 9 | 9 | 65 | 7 | 1 | 7 | 10 | 1 | 1 | 15 | 4 | 1 | 3 | 3 | 1 | 2 | 3 | 2 | 2 | 176 |

表2.　第Ⅱ面出土木製品の器種別種類構成

| 器種＼樹種 | マツ属複維管束亜属 | モミ属 | スギ | ヒノキ | カヤ | ヤナギ属 | アカガシ亜属 | クリ | ツブラジイ | スダジイ | ツバキ属 | サカキ | モッコク | サクラ属 | アワブキ属 | モチノキ属 | クマノミズキ類 | タイミンタチバナ | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 建築部材 | | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | | | 2 |
| 建築部材転用の杭 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 杭 | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | 2 |
| 矢板 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 1 |
| 鍬頭 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 1 |
| 二又鋤 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 1 |
| 杵 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 1 |
| 木の柄 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| 曲物 | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 曲物（蓋） | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 曲物板材 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 曲物側板 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 曲物底板 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 側板 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 底板 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 丸太 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| 木製品 | | | 2 | 1 | | | 1 | 1 | 1 | 1 | | | 1 | | | | | | 8 |
| 割板材 | | | | | | | | | 2 | 1 | | | | | | | | | 3 |
| 板 | | 1 | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | 4 |
| 器種不明 | 1 | | 4 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | | 1 | | | | 4 | | 3 | 1 | 22 |
| 合　計 | 1 | 1 | 12 | 10 | 2 | 1 | 6 | 2 | 5 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 6 | 1 | 3 | 1 | 57 |

表3．第2区出土木製品の器種別種類構成

| 器種＼樹種 | マツ属複維管束亜属 | モミ属 | スギ | ヒノキ | マキ属 | カヤ | スダジイ | ヤマグワ | クスノキ科 | サカキ | ヒサカキ | アワブキ属 | ミツバウツギ | チシャノキ | ハイノキ節 | 不明 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 柱 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 建築部材 | 2 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 3 |
| 曲物 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 曲物底板 | | 8 | 3 | | | 1 | | | | | | | | | | | 12 |
| 曲物側板 | | 3 | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| 曲物蓋板 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 曲物板材 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 側板 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 底板 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 下駄 | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| 下駄歯 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| 斎串 | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 人形 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 人形形木製品 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 船形木製品 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 |
| 木製祭祀具 | | | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | 3 |
| 板材 | | 1 | 3 | 2 | | | | | | | | | | | | | 6 |
| 棒状木製品 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 1 |
| 木製加工品？ | 1 | | 1 | 3 | | | | 1 | 1 | 1 | 1 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 16 |
| 合　計 | 4 | 14 | 11 | 11 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 3 | 3 | 2 | 1 | 1 | 57 |

表4．第Ⅰ面出土木製品の器種別種類構成

| 器種＼樹種 | マツ属複維管束亜属 | スギ | ヒノキ | ヒノキ属 | カヤ | カバノキ属 | ブナ属 | アカガシ亜属 | クリ | マテバシイ属 | スダジイ | ケヤキ | ツバキ属 | サカキ | ウツギ属 | キハダ近似種 | カキノキ属 | ハイノキ節 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 建築部材？ | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | 1 | | 2 |
| 木槌 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| 鍬（？） | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 |
| 連歯下駄 | 1 | 3 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 5 |
| 差歯下駄の台 | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 高下駄の歯 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 下駄の歯 | | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | 4 |
| 子供下駄 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 下駄 | | 5 | 1 | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | | | 8 |
| 下駄状板 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 板草履 | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 漆器 | | | | | | | | | 3 | | | 1 | | | | | | | 4 |
| 底板 | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 曲物 | | 2 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | 6 |
| 曲物底板 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 木（蓋） | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 椀 | | | | | | | 3 | | | | | | | | | | | 1 | 4 |
| 漆器（棒） | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 漆器（板） | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 栓 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| しゃもじ | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 箸 | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 |
| 斎串 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 板状部材 | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 板 | | 24 | 3 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 28 |
| 角材 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 棒 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 丸木 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| 細枝 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 木片 | 3 | 9 | 4 | | | | | 1 | | | | | 1 | | 1 | 1 | | | 20 |
| 木製品 | | 5 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | 7 |
| 木（加工品） | | 3 | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 5 |
| ミカン割材 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 不明 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 合　計 | 6 | 72 | 25 | 1 | 1 | 1 | 4 | 2 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 124 |

表5.　杭材・自然木の遺構面別種類構成

| 樹種 | 第Ⅰ面 | 第2区 | 第Ⅱ面 | 第Ⅲ面 |
|---|---|---|---|---|
| マツ属複維管束亜属 | 13 | 18 | 14 | 2 |
| スギ | | | 1 | 2 |
| ヤマモモ | | | 1 | |
| ヤナギ属 | | | 1 | 20 |
| クマシデ属イヌシデ節 | 1 | | 1 | |
| コナラ属コナラ亜属クヌギ節 | | 5 | 13 | 102 |
| コナラ属コナラ亜属コナラ節 | | 3 | 1 | 27 |
| コナラ属アカガシ亜属 | | 2 | 15 | 10 |
| コナラ属＜根株＞ | | 1 | | |
| クリ | | 2 | 4 | 6 |
| ツブラジイ | | 2 | 21 | 13 |
| スダジイ | 2 | 4 | 35 | 8 |
| ムクノキ | | 1 | | 10 |
| ヤマグワ | | | 1 | 1 |
| イヌビワ属 | | | 1 | |
| ヤマモガシ | | | | 1 |
| シキミ | | 5 | 9 | 1 |
| タブノキ属 | | | 4 | 2 |
| ハマビワ属 | | 1 | 1 | |
| クスノキ科A | 4 | 19 | 10 | 6 |
| クスノキ科B | | 2 | | 1 |
| クスノキ科C | | 1 | 1 | 1 |
| ツバキ属 | | 3 | 11 | 5 |
| サカキ | 1 | 4 | 26 | 9 |
| ヒサカキ | | 3 | 6 | 2 |
| マンサク属 | | 1 | | 1 |
| サクラ属 | 1 | 1 | 2 | |
| バラ科ナシ亜科 | | 8 | | |
| ネムノキ | | 1 | | |
| シラキ | | | | 1 |
| ユズリハ属 | | 2 | 6 | |
| アワブキ属 | | 7 | 18 | 5 |
| モチノキ属 | | | 1 | |
| ニシキギ属 | 1 | | | |
| ミツバウツギ | | 3 | 8 | |
| キブシ | 2 | 1 | 1 | |
| クマノミズキ類 | | | 2 | |
| ミズキ属 | | | 1 | |
| タカノツメ | | | 1 | 1 |
| シャシャンボ | | 2 | 6 | 1 |
| ネジキ | | | 1 | |
| タイミンタチバナ | | | 2 | 1 |
| カキノキ属 | | 3 | 2 | 3 |
| エゴノキ属 | | 2 | | |
| ハイノキ属ハイノキ節 | 1 | 2 | 10 | 4 |
| イボタノキ属 | | | 1 | |
| チシャノキ | | | | 5 |
| ムラサキシキブ属 | | | 1 | |
| ガマズミ属 | | 3 | 5 | 4 |
| タニウツギ属 | | 2 | 5 | 3 |
| スイカズラ属 | | | 1 | |
| イネ科タケ亜科 | | 2 | | |
| 広葉樹（散孔材） | | | 1 | |
| 合　計 | 26 | 116 | 252 | 258 |

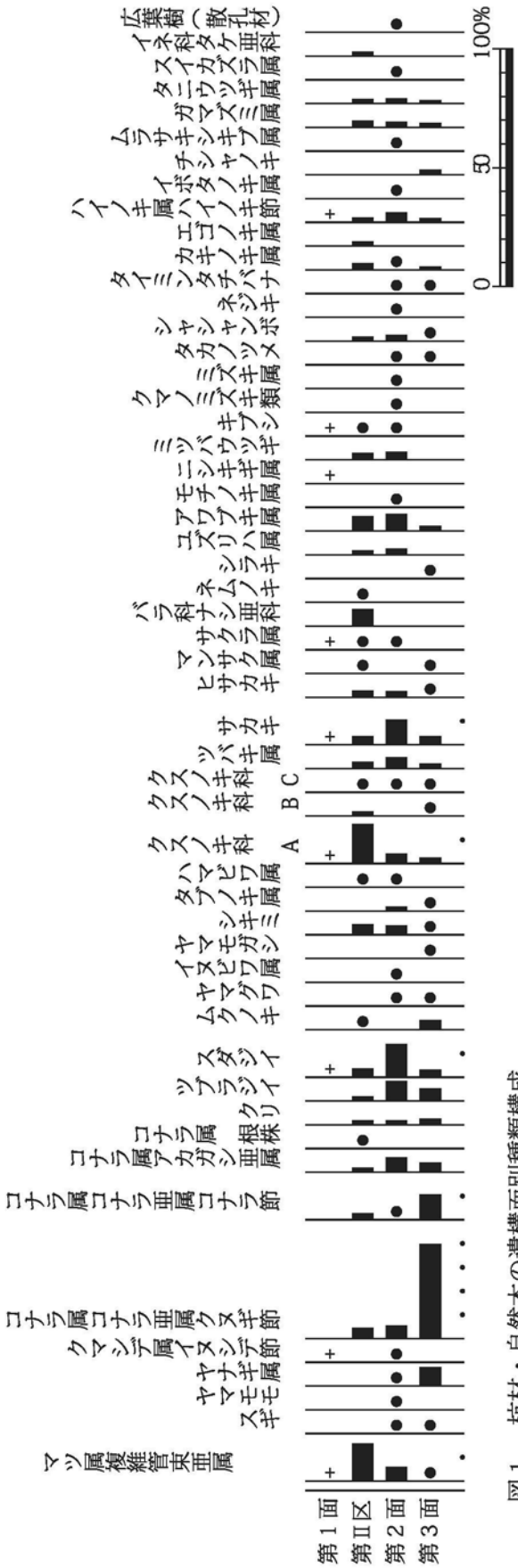
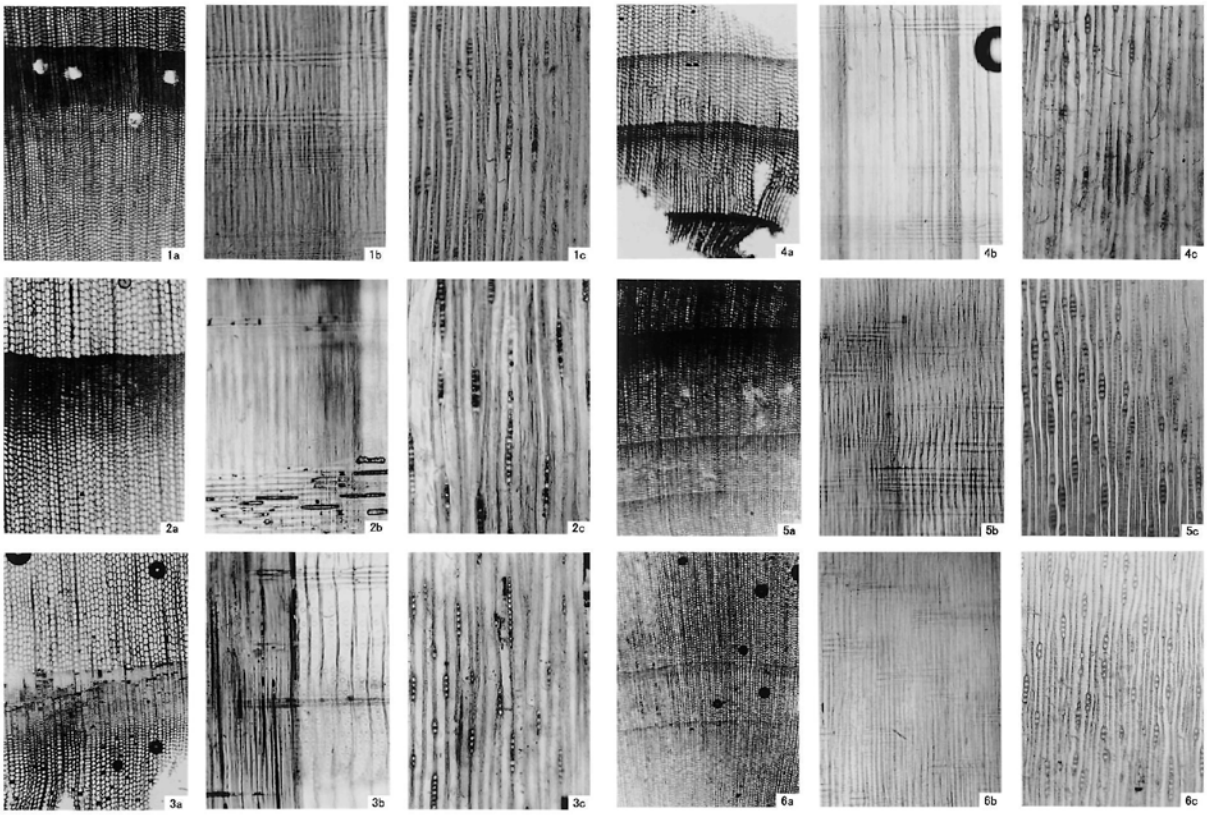



図1.　杭材・自然木の遺構面別種類構成
同定点数が1%に満たない分類群については、●で表示した。また、試料総数が100点に満たない層位は同定された種類を＋で表示した。

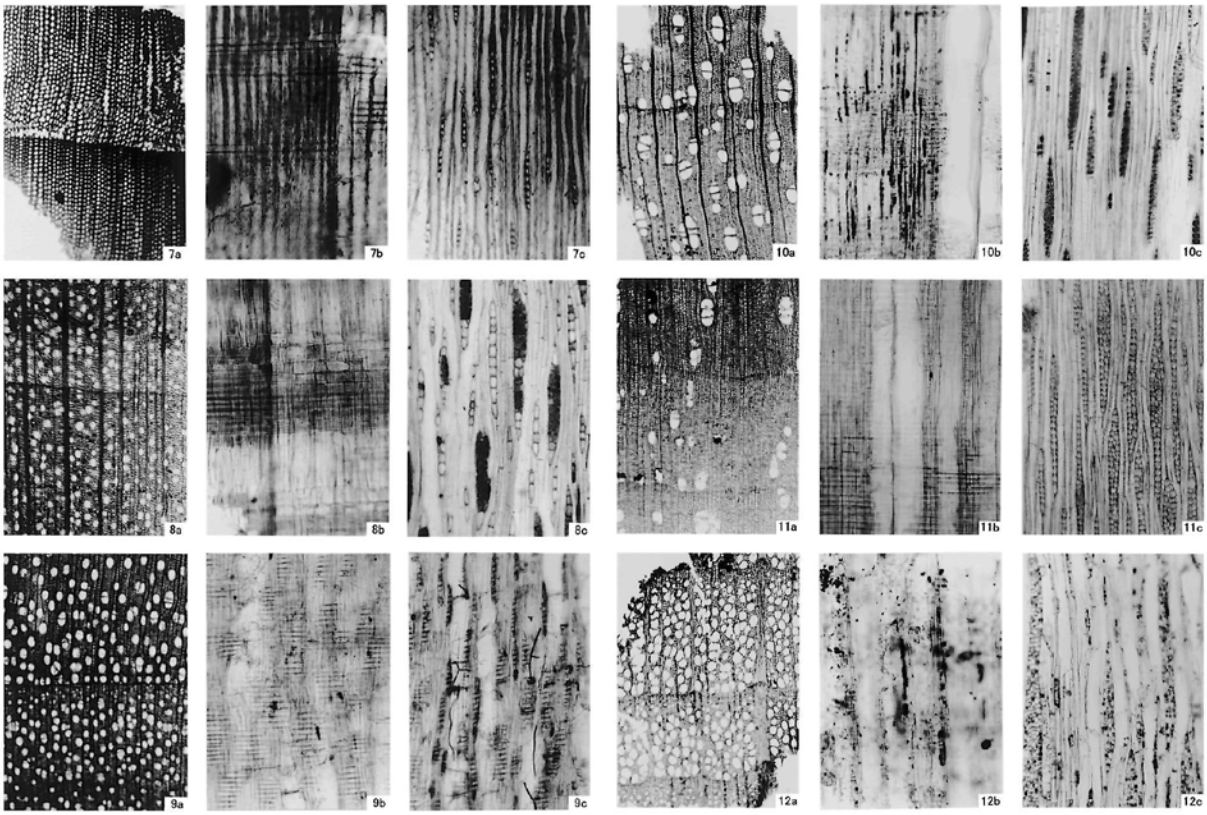



1．マツ属複維管束亜属（第Ⅱ面杭列G30-6 No.2）
2．モミ属（第Ⅱ面 木製品No.31）
3．スギ（第Ⅲ面 木製品No.275）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

4．ヒノキ（第Ⅱ面 木製品No.24）
5．マキ属（第Ⅲ面 木製品No.301）
6．イヌガヤ（第Ⅲ面 木製品No.36）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c




7．カヤ（第Ⅲ面 木製品No.7）
8．ヤマモモ（第Ⅱ面 SX770 W-4）
9．ヤナギ属（第Ⅲ面 SX905 W-28）
　a：木口，b：柾目，c：板目

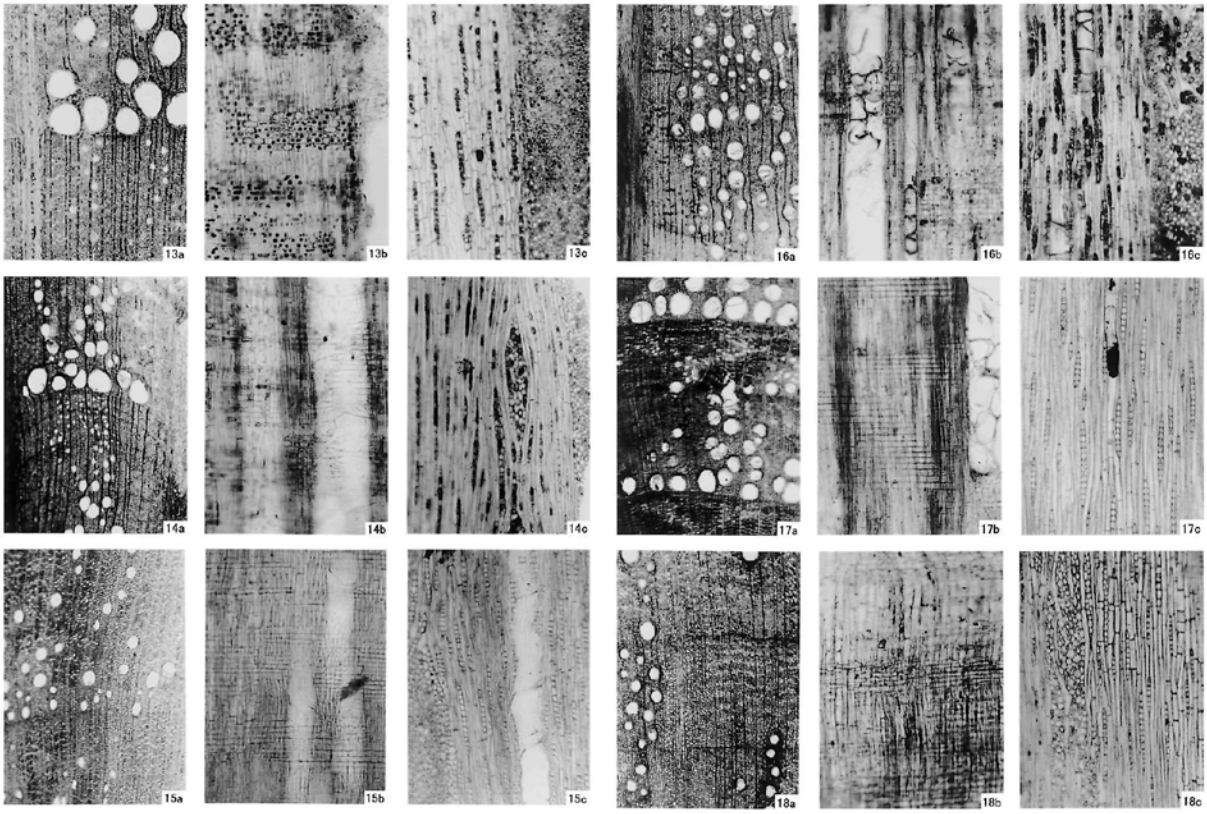
200 μ m:a
200 μ m:b,c

10．カバノキ属（第Ⅰ面 木製品No.30）
11．クマシデ属イヌシデ節（第Ⅱ面 G-26畦杭No.7）
12．ブナ属（第Ⅰ面 木製品No.2）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

※木製品番号は本報告の遺物番号に一致しない

図版1．出土材・木材組織光学顕微鏡写真（1～12）

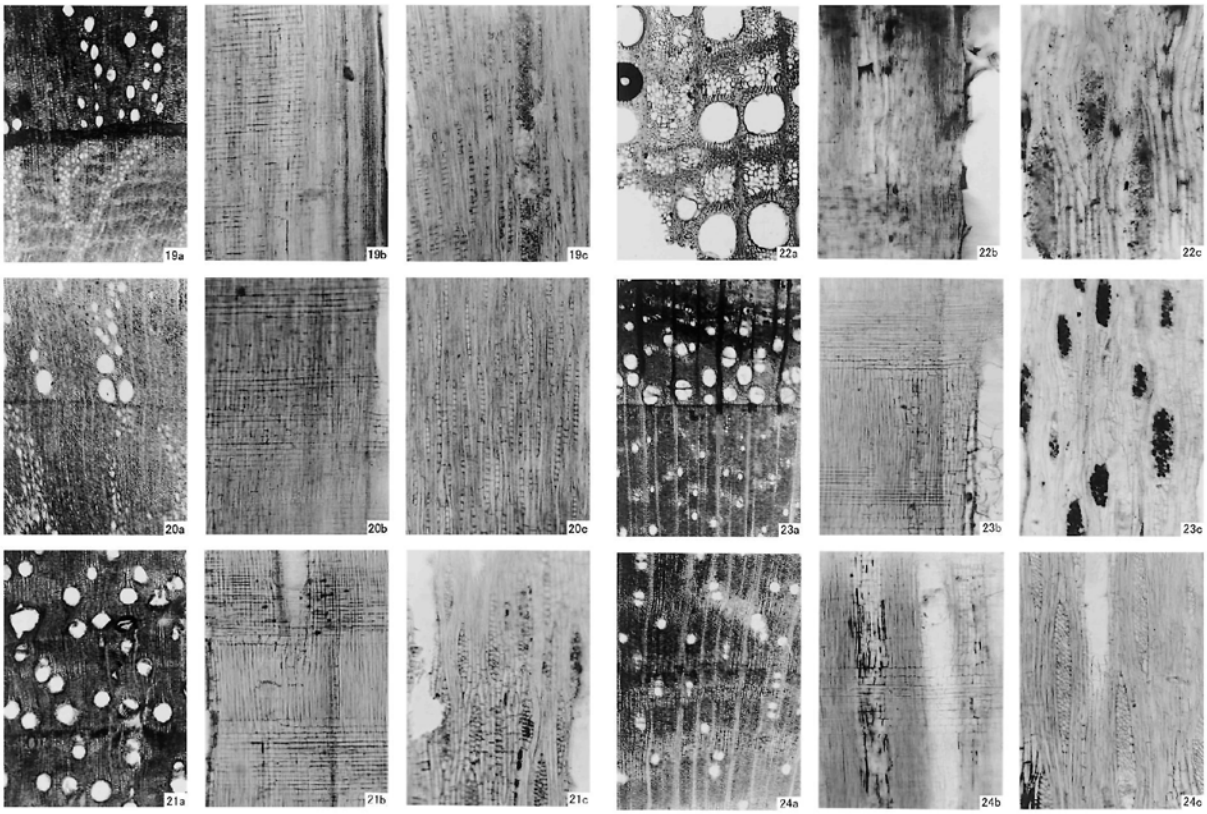



13. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（第Ⅲ面 SX905 W-32）
14. コナラ属コナラ亜属コナラ節（第Ⅲ面 SX905 W-35）
15. コナラ属アカガシ亜属（第Ⅱ面 杭列G32 No.1）
a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

16. コナラ属〈根株〉（第２区 SX935堰）
17. クリ（第Ⅱ面 SX743 堰内No.25）
18. マテバシイ属（第Ⅲ面 木製品No.302）
a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c




19. ツブラジイ（第Ⅱ面 杭列3 No.4）
20. スダジイ（第Ⅱ面 杭列G-28 No.4）
21. ムクノキ（第Ⅲ面 SD826 W3）
a：木口，b：柾目，c：板目

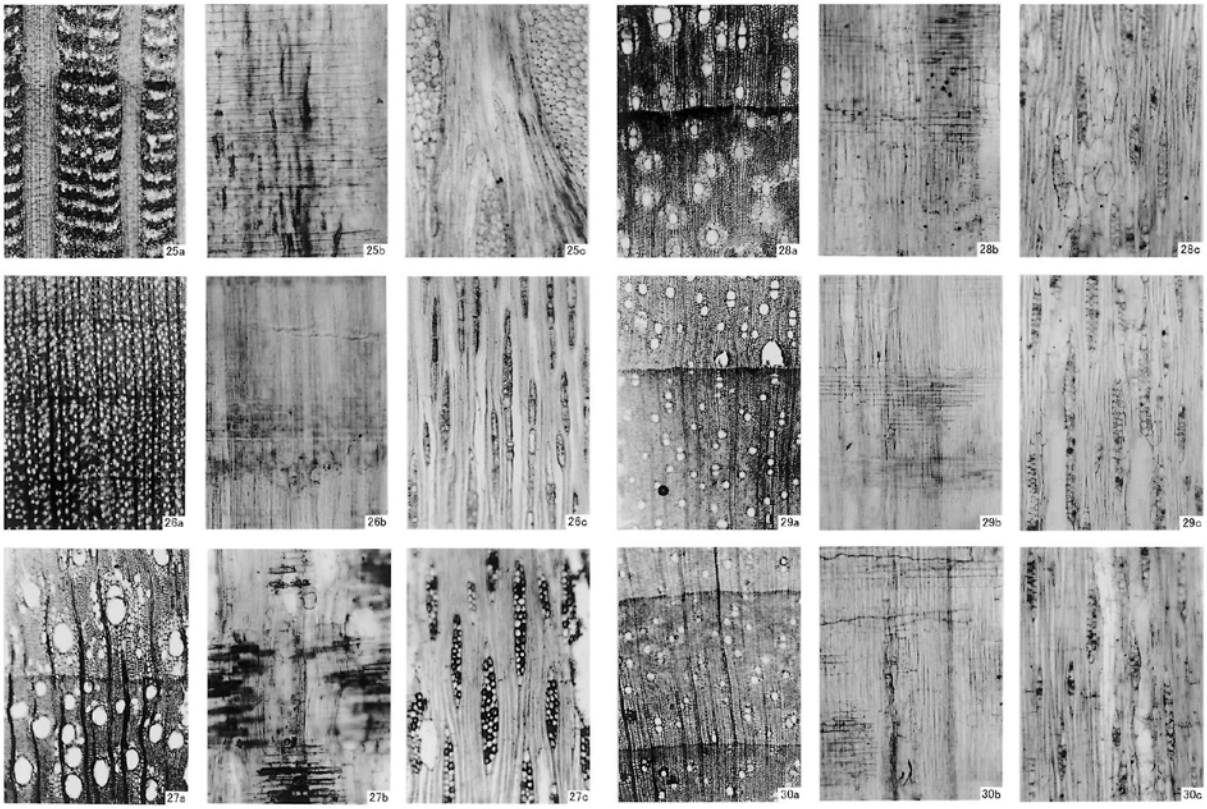
200 μ m:a
200 μ m:b,c

22. ケヤキ（第Ⅰ面 木製品No.10）
23. ヤマグワ（第Ⅱ面 SX743 堰内No.24）
24. イヌビワ属（第Ⅱ面 1-27畦杭No.10）
a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

※木製品番号は本報告の遺物番号に一致しない

図版２．出土材・木材組織光学顕微鏡写真（13～24）

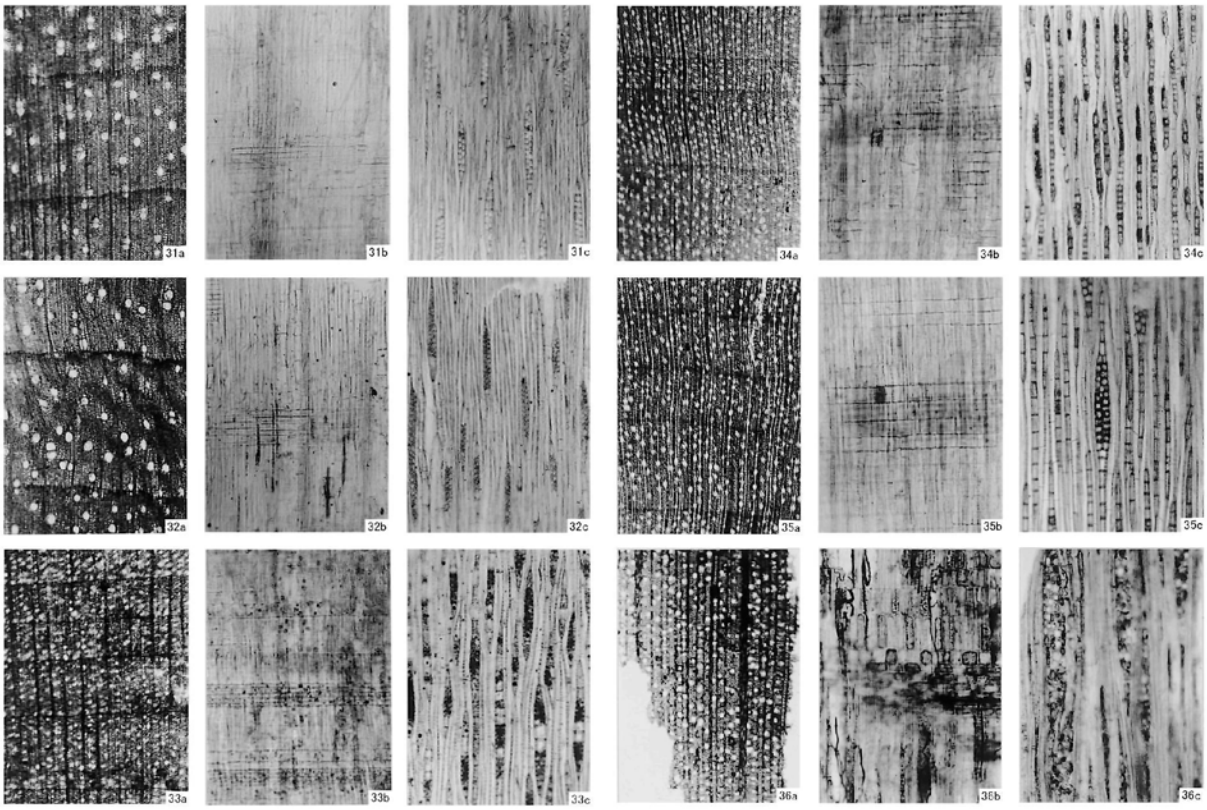



25. ヤマモガシ（第Ⅲ面 SD18南側 下層砂層）
26. シキミ（第Ⅱ面 杭列G-28 No.4）
27. クスノキ（第Ⅲ面 木製品No.297）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

28. タブノキ属（第Ⅱ面 杭列C-29 No.9）
29. ハマビワ属（第Ⅱ面 杭列G-32 No.4）
30. クスノキ科A（第Ⅱ面 畦畔7下 No.19）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c




31. クスノキ科B（第Ⅱ面 SD762 No.21）
32. クスノキ科C（第Ⅱ面 杭列F-31 No.5）
33. ツバキ属（第Ⅱ面 杭列C-28 No.4）
　a：木口，b：柾目，c：板目

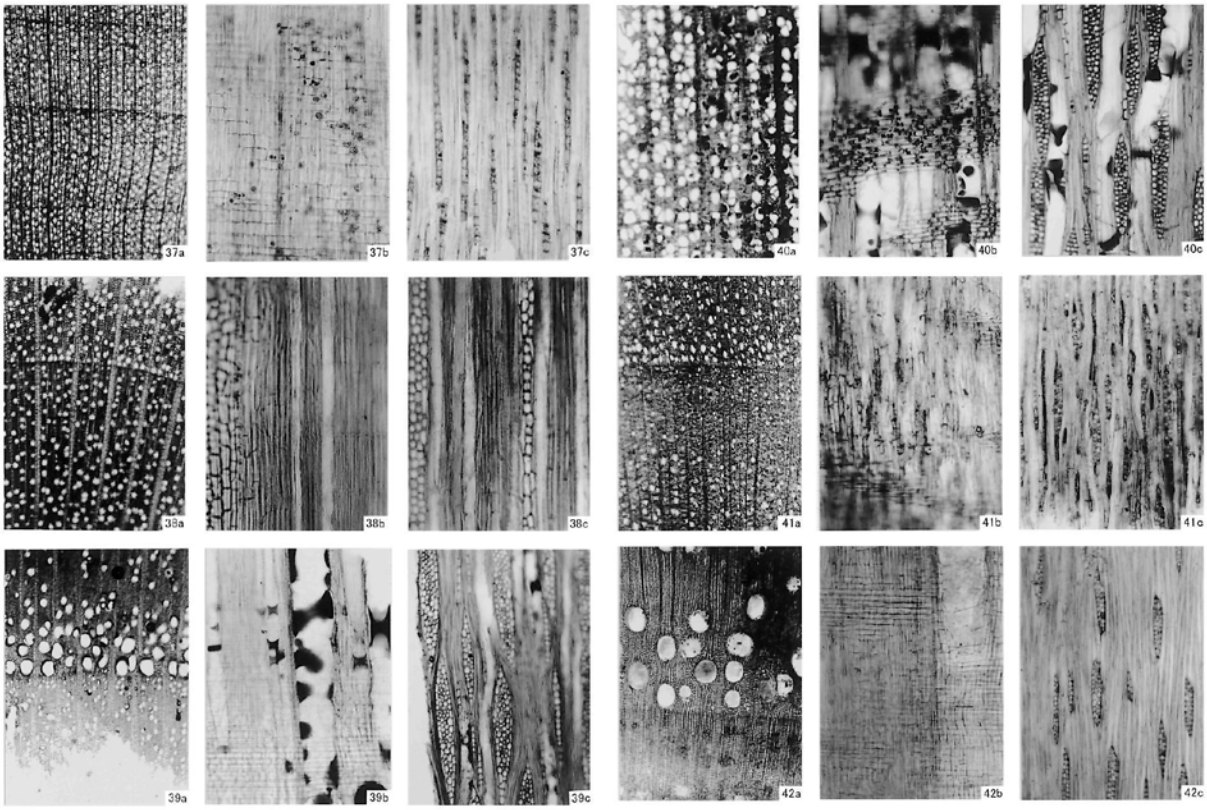
200 μ m:a
200 μ m:b,c

34. サカキ（第Ⅱ面 杭列G-28 No.6）
35. ヒサカキ（第Ⅱ面 杭列C-29 No.8）
36. モッコク（第Ⅱ面 木製品No.39）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

※木製品番号は本報告の遺物番号に一致しない

図版３．出土材・木材組織光学顕微鏡写真（25～36）

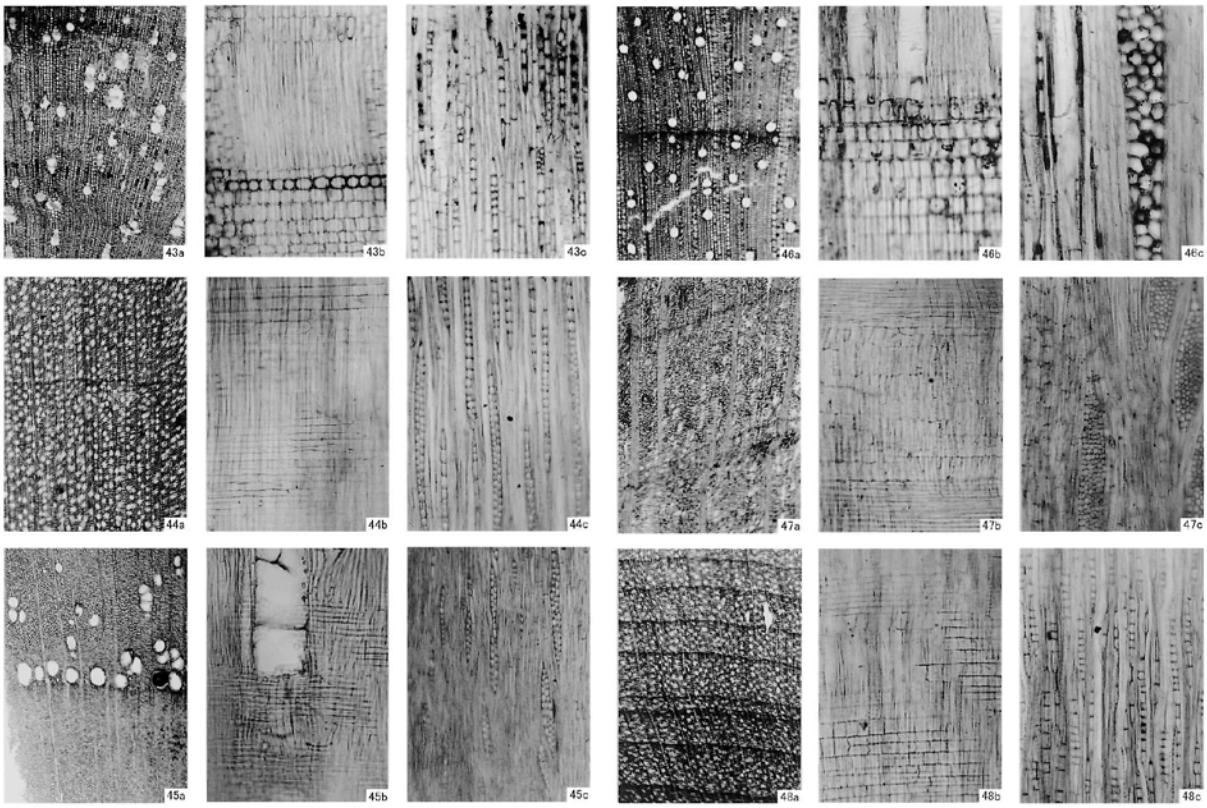



37. マンサク属（第２区 SX395 S-30 No.3）
38. ウツギ属（第Ⅰ面 木製品No.49b）
39. ウメ（第Ⅲ面 木製品No.265）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

40. サクラ属（第Ⅲ面 木製品No.24）
41. バラ科ナシ亜科（第２区 SX934 W-3 No.2）
42. ネムノキ（第２区 SX932 R-32 No.6）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c




43. シラキ（第Ⅲ面 SD818-3 No.14）
44. ユズリハ属（第Ⅱ面 SX743 杭列No.23）
45. キハダ近似種（第Ⅰ面 木製品No.68b）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

46. アワブキ属（第Ⅱ面 杭列C28・29 No.7）
47. モチノキ属（第Ⅱ面 SX782 No.12）
48. ニシシギ属（第Ⅰ面 SD720 東側杭列 No.7）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

※木製品番号は本報告の遺物番号に一致しない

図版４．出土材・木材組織光学顕微鏡写真（37～48）

# 第V章　総　　括

## 1. 調査のまとめ

月隈調節池の調査は平成10年から15年度迄調査を実施した大規模なものであり、全体の総括は今後に委ねることとして、本報告書では、主に第7次調査で得られた成果をFig164～167の第4～9次調査全体図を参考にしながら行う。

### (1) Ⅰ面のまとめ

第Ⅰ面は中世の時期である。検出遺構としては水田と溝である。溝は水田に伴うもので、水利施設の堰を伴っていた。遺構の時期としては時期幅があり、古代後期（平安時代）から中世後期（室町期）までのものを検出した。西側の第4次～6次調査区ではこの時期集落（10世紀～12世紀）になっており、西側が集落部で、東側が水田部という遺構配置となる。第6次調査区では9世紀代に洪水によって川が埋没し微高地化し、そこに集落が出現した。西側が相対的に微高地化したことによって東側の第7次・8次調査区が低地化し引き続き水田が営まれたものと考える。また水田は地割が崩れているものの条里制に基づいたものであり、第6次調査区で検出された坪境の大畦畔の延長が本調査区でも検出された。ただ第6次調査区では幅1m程の大畦畔であったが、本調査区では畔土が流れたのか杭列で確認された。この境の畦畔は南北を貫流する溝SD720迄続く。SD720は第6次調査区の南北方向の坪境から凡そ1町（約109m）の間隔があき、条里制の坪境に沿っている。また内部で検出した水利施設の堰もその延長上に築かれたものであり、SD720から東に延びる溝SD712・713なども条里地割に規制されたものである。溝の時期は出土遺物から12世紀頃からであり、この時期に条里地割に沿って溝が掘削されたものであり、西側の集落が廃絶した後は調査地全体が再び水田となり、その後現在迄続き、条里制の痕跡を残したものであろう。

本調査区で検出した水田の継続時期についてであるが、西側のSS721が古代9世紀頃の遺物を多く含み、且つSS710の畔の中からは9世紀代と思われる土師器椀が出土しており、本調査区での条里水田の始まりを考える上に一つの手がかりとなろう。

### (2) 第Ⅱ面のまとめ

86頁で既述したこととも重なる部分もあるが、概略をまとめておきたい。検出された畦畔の時期は6世紀後半までは遡り、その下限は8世紀後半代にまで及ぶと考えられる。しかし、この間多くの修復や造り替えが行われたことを窺わせる遺構も数多く検出された。そのなかで、調査区西側で検出された水路SD746を踏襲しながらも、切り替えも行い、また、畦畔も地形的な制約から脱却し、方形に近く直線的な部分が多く見受けられるようなものに造り変えていく進歩が見受けられた。これは次の条里に基づく地割りを遂行できる技術が備わりつつあったことを示しているように思われる。

また、水防に関わる畦畔や土堤の修復や築造においても近世における農法と変わらない知識と技術がそこにあった。

しかし、水田農業の大きな画期である条里地割の施行は前述の第Ⅰ面においてみられ、その時期は平安遺文にのる高子内親王にまつわる記事から9世紀前半までには遂行されていると考えられる。また、遺物にもとづく発掘調査の知見からは第Ⅱ面で検出された8世紀後半の水路SD746の切り替え以後から第Ⅰ面の畦畔から出土した土師器との間に実施されたことになる。

その後、第Ⅰ面で検出された12世紀代に築かれた水路SD720に基づく水利の基本的な配置が現代まで踏襲されたことも大きな画期といえる。

SD735から出土した「皇后宮職」が書かれた木簡については、本文P-50と巻末の坂上泰俊氏の考察に詳しいので参照されたい。

### (3) 第Ⅲ面まとめ

本調査面の時期は弥生時代中期～古墳時代中期までである。

溝についてまとめると、溝は大きく高所部集落部分で検出した小溝と、低所部で検出した溝に分かれる。高所部で検出したものは住居などを区画する溝と考える。低地部を南北に貫流するSD818は内部に水利施設の堰があり、低地部に明確には確認出来なかったが、水田が営まれていたものと考える。これは溝内から農具が多く出土し、また第6次調査区で炭化米が出土し、且つ第6次・第7次調査区で倉庫建物が多数検出されていることからも、推定出来る。

集落については概略P-178で既述したので概略のみ記しておく。

集落は板付Ⅰ式期からはじまり弥生終末には盛んな活動が弥生終末期にみられる。廃絶される時期は未だ確定できないが布留式期に降る可能性は高い。集落がその後に移った場所は不明であるが、候補としては上流域の立花寺付近もあげられる。

水田に関しては踏襲されたものと改変されたものがあったことを推察した（86頁、164頁）。特に水利に関する水路網の基本的な配置は継承されていると思われる。すなわち、第Ⅲ面で検出された北西部のSD882、883は第Ⅱ面のSD746に、また、第Ⅲ面中央部のSD818は第Ⅱ面のSD734、そして、条里地割が施行後は第Ⅰ面のSD714そして現代まで使用されたSD712、713に引き継がれているとみられる。また、幹線となる水路は第Ⅲ面では検出されなかったが、第Ⅱ面のSD735は条里施行後に第Ⅰ面のSD720に継承された可能性がある。また、各遺構面の水路に築かれた堰が近接していることは単に地形的な制約による水利が考慮されたばかりではなく、水利権を含む人為的な影響や作為も生じていたことによるものと思われる。

### (4) 第2区のまとめ

第6次調査区の北側延長部分で、河川跡と護岸杭列SX395の延長部分を検出したが、杭列は真直ぐに北に延びず、第6次調査区のSX403と同じように堰に変わっていく。川の護岸と周辺の水田に水を供給するための水利施設としての堰が築かれた状況を示すものであろう。第6次調査区のSX403と本調査区のSX395は同じ流れを受けて築かれているが、残りはSX403が悪く、SX403が洪水などで破損し使用不能になった後、本調査区に再構築されたものと考える。堰が構築された時期は8世紀から9世紀前半頃の遺物が堰内外から多く出土しており、9世紀前半には構築されていたのであろう。木簡の出土したSD735は洪水で8世紀代に埋没したと考えられることから、流路が西側第6次調査区に移動し、その後そこに堰が築かれたと推定する。

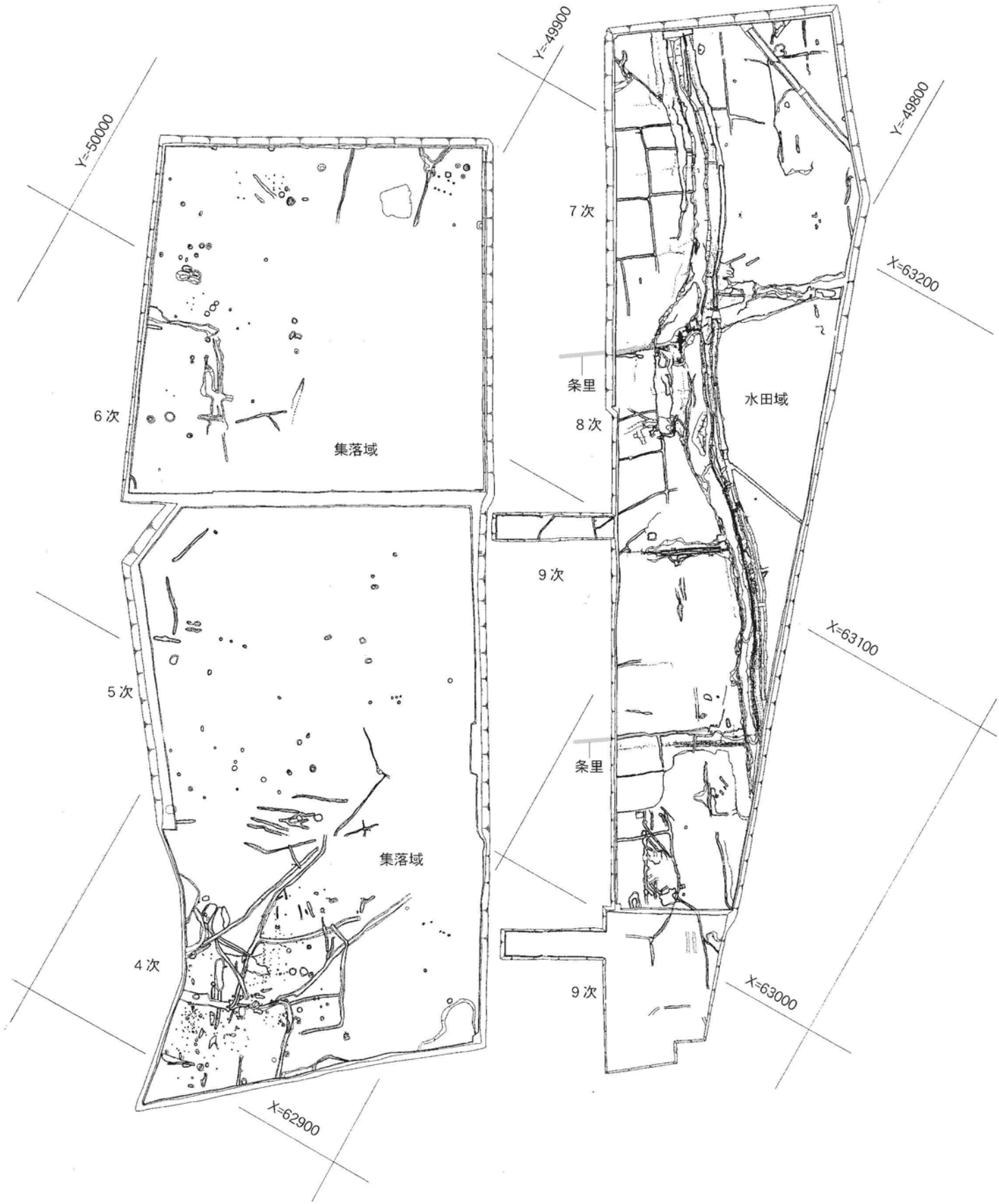



Fig.165　第4～9次中世遺構面（1/1,500）

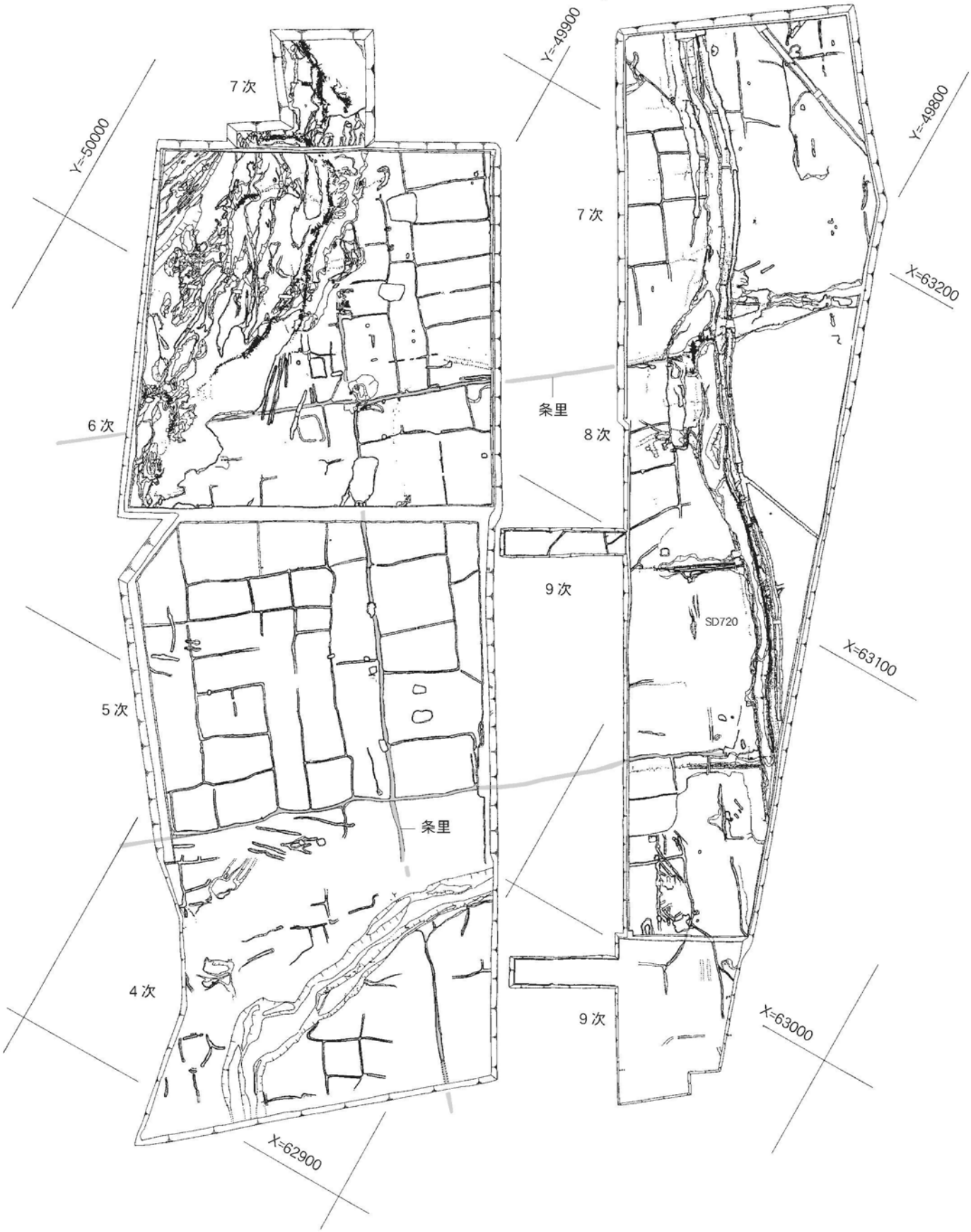



Fig.166　第4～9次古代遺構面（1/1,500）

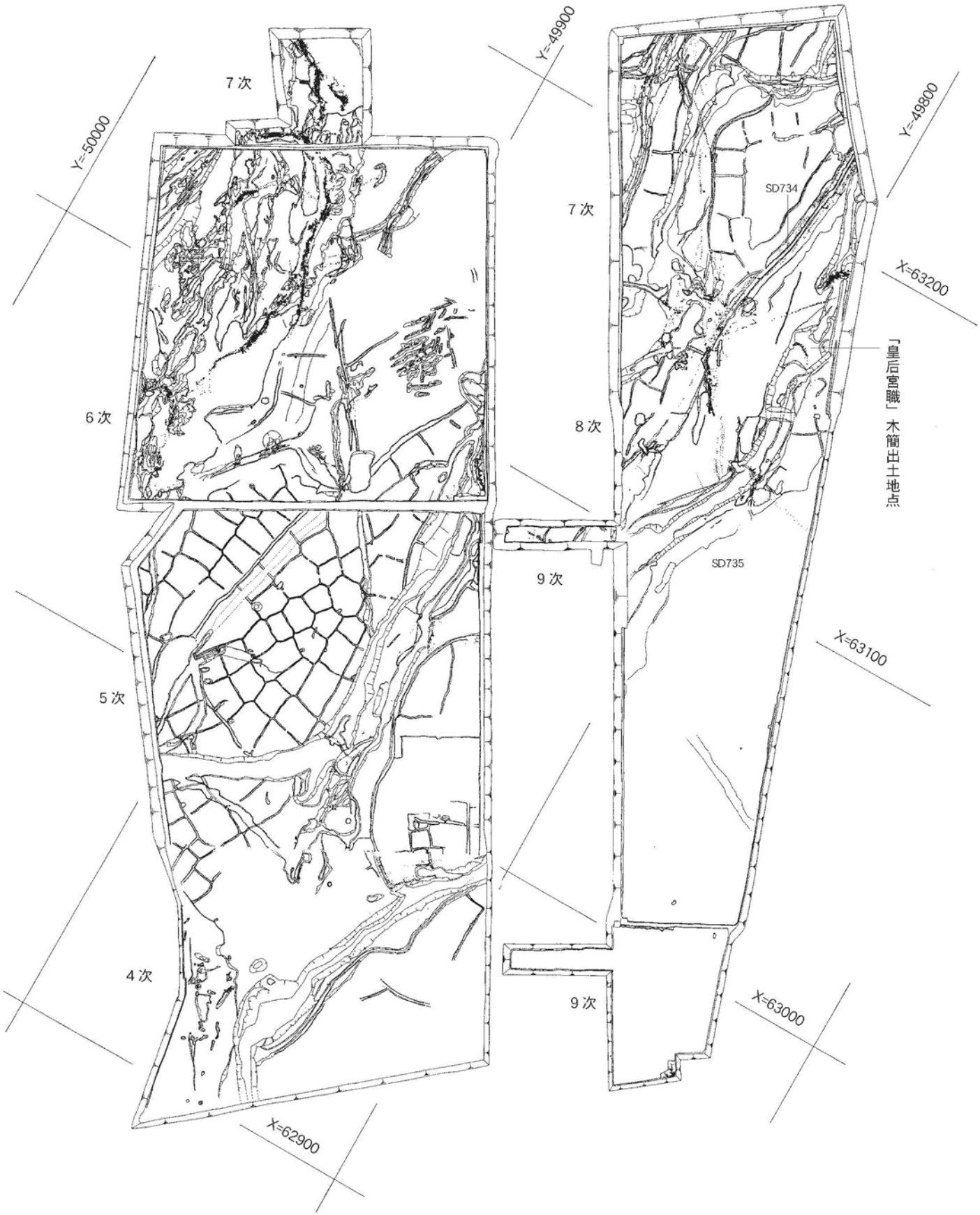



Fig.167　第４～９次古墳時代後期から古代前期遺構面（1/1,500）

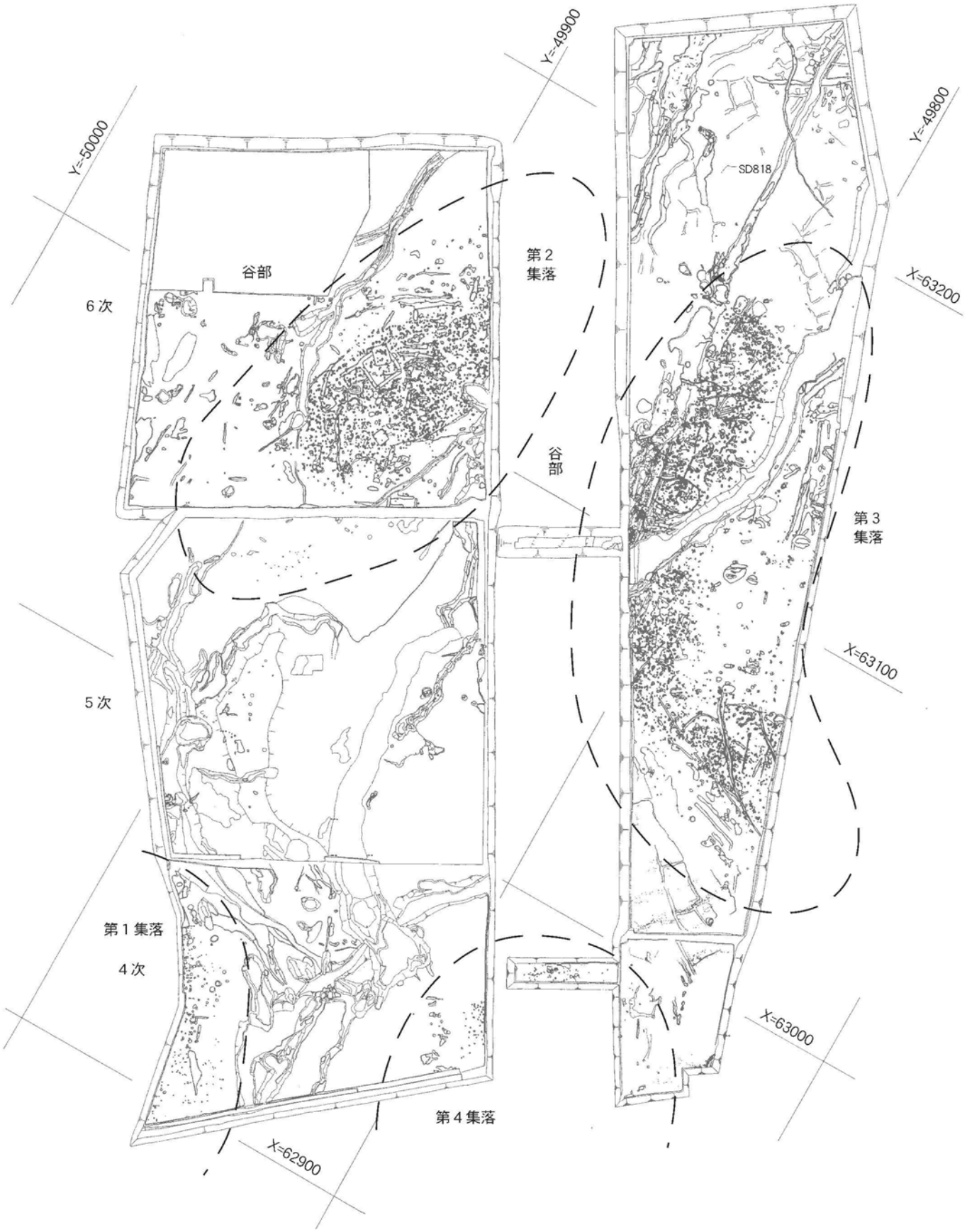



Fig.168　第4～9次弥生時代前期から古墳時代前期遺構面（1/1,500）

# 2．福岡平野出土の楽浪系土器

財団法人大阪市文化財協会
寺井　誠

「奴国」の所在地とされる福岡平野はこれまで楽浪系土器が少ないとされてきた地域であるが、近年の調査の進展や既報告資料を再検討した結果、博多・比恵・那珂・雀居・下月隈Cの各遺跡で出土を確認することができた。なお、ここで楽浪系土器の定義を十分に説明する余裕はないが、下記の4点を基準に認定した。まず、第一に内面に平行文もしくは同心弧の当て具痕跡があること、第二に平底の底部に静止糸切り痕があること、第三に器面にロクロ回転によるナデが施されていること、第四に還元焔焼成軟質（以下では、「瓦質」と表記）で胎土が泥質であること（滑石混和土器や石英混入系土器を除く）、である。以下で紹介する資料については報告では楽浪系土器と記されていないものもあるが、すべて筆者が実見し、確認したものを挙げた。よって、その責は筆者にあることを最初に断っておく(注)。

福岡平野における楽浪系土器は表のように、管見による限り14点あり、短頸壺（の可能性があるもの）、壺、椀、筒杯、盆といった器種が確認されているが、壱岐や糸島で出ているような滑石混和土器は出土していない。那珂遺跡21次調査のSK48・49出土資料（図の8～10）の胴部片はおそらく短頸壺の破片と思われるが、日本列島に楽浪系土器が搬入される先駆けのものである。一方、筒杯（図の7・12）は古墳時代前期初頭～前葉、椀（図の11）は古墳時代前期初頭、平底の盆（図の6）は古墳時代前期前葉の地層・遺構から出土している。楽浪郡では筒杯や平底の盆は2世紀以降に登場すると考えられており（鄭仁盛2003・2004）、これら福岡平野の事例は楽浪郡での年代観に矛盾ないといえる。なお、高畑遺跡19次調査ではハケで仕上げられる平底で円筒形の土器が出土しており（図の14）、筒杯を模倣した可能性もあると考え、問題提起のため挙げた（第799集）。筒杯の模倣品は原の辻遺跡（鄭2003）や岡山県の門前池東方遺跡（則武他1994）でも確認されている。

一方、福岡平野では弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけて三韓系土器も出土している。雀居遺跡4・5次調査（第405・406集）では、瓦質の格子タタキの土器や在地で製作の可能性がある縄文タタキの土器などが約30片出土している。また、比恵遺跡6次SE30（下大隈式古相）の上層で縄文タタキの瓦質短頸壺の底部（第130集）、同79次調査SE008（庄内式併行期）から巾着袋形壺が出土している（第821集）。須玖遺跡群一帯では、須玖永田遺跡で外面が縄文タタキ、内面がナデで仕上げられ、平行文の当て具痕跡が見られない瓦質土器が数片出土しているが（春日市教育委員会1987・2005）、楽浪系土器の出土例はない。

ここで全国的な楽浪系土器の出土状況について簡単にふれてみよう。楽浪系土器は対馬・壱岐・北部九州を中心に出土しており、島根県鹿島町沖でも確認されている。出土時期は主に弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭で、前期前葉以降は三韓・三国系と入れ替わるようにして、急激に減少する（寺井誠2005）。

出土量が圧倒的に多いのは、壱岐と糸島である。壱岐の原の辻遺跡では100点を超える楽浪系土器が出土しており（宮崎貴夫2005）、糸島では数遺跡での出土が確認され、特に三雲遺跡番上地区では一箇所で30点あまりがまとまって出土している。以上2地域に関しては古墳時代前期初頭以前に限るなら、楽浪系土器が三韓系土器の出土量を凌駕し、出土器種も福岡平野よりも多く、滑石混和土器も出土している。一方、対馬での出土量は少ないが、近年調査が行なわれた対馬市峰町の三根遺跡山辺地区で数点出土していることから（峰町教育委員会2003）、今後の調査の進展で増加する可能性も残

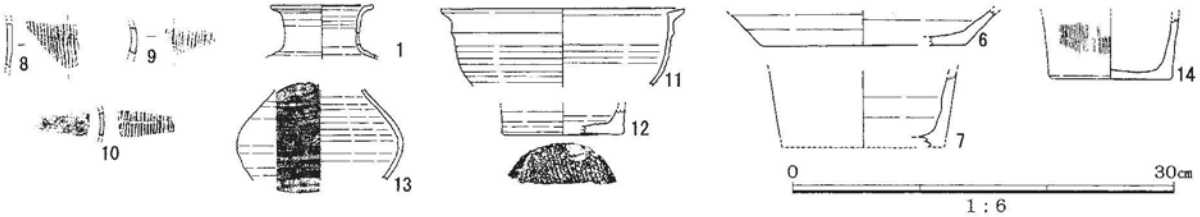



Fig. 169　福岡平野出土の楽浪系土器

される。また、早良平野ではコノリ遺跡で１点出土しているのみである（第728集）。

福岡平野では三韓系土器の出土量が多い雀居遺跡を除けば、楽浪系土器が三韓系土器よりも量が多いといえるが、これは庄内式併行期以前の日本列島への朝鮮半島系土器の出土傾向と一致する。ただ、先行研究で指摘されているように、糸島と比べると三韓系が多いのも確かである（武末純一2004）。今後の調査の進展でこの割合がより増減する可能性も十分考えられ、評価については将来的な課題としたい。

本稿をなすに当り、資料を観察し、執筆する機会を与えてくださった調査担当者の山崎龍雄氏、資料調査の際にさまざまなご教示を下さった常松幹雄氏、瀧本正志氏、久住猛雄氏に心より御礼申し上げます。なお、本稿に関わる研究は科学研究費補助金（若手研究（B）17720206）の助成を得た。

注　図の**11・13**については寺井が実測したものをトレースして用い、参考文献については遺物を観察の上、報告書の図を改変した。また、**6・7**については、2006年報告予定の比恵遺跡91次調査の実測図をトレースして用いた。

参考文献（紙面の制約上、福岡市教育委員会発行の報告書は文中で通し番号を示すにとどめた）
春日市教育委員会1987『須玖永田遺跡』
2005『須玖永田A遺跡』２
武末純一2004「遺物からみた楽浪郡と北部九州の交流－土器を中心に－」『海を越えたメッセージ～楽浪交流展～』伊都国歴史博物館
鄭　仁盛2003「楽浪円筒形土器の性格」『東京大学考古学研究室紀要』第18号
2004「楽浪土城の土器」『韓国古代史研究』34 韓国古代史学会（韓国語）
寺井　誠2005「朝鮮半島系土器」『九州における渡来文化の受容と展開』九州前方後円墳研究会
則武忠直・岡秀昭・塩見真康1994「岡山県山陽町門前池東方遺跡の朝鮮半島系資料」『古文化談叢』32
峰町教育委員会2003『峰町日韓共同遺跡発掘事業記録集』
宮崎貴夫2005「土器（弥生土器・古式土師器,朝鮮半島系土器）」『原の辻遺跡　総集編』Ⅰ

Tab. 5　福岡平野出土の楽浪系土器一覧（一部早良平野を含む）

| No. | 器種 | 遺跡名 | 遺構 | 備考 | 時期（註1） | 文献 | 報告図 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺口縁部 | 博多17次 | SB169 | 泥質胎土で内外面にロクロによるナデ。別個体と報告された2点は同一個体の可能性高い。 | （古墳前期） | 第118集 | 17－2・3 |
| 2 | 胴部片 | 比恵16次 | 古墳周溝 | 外面縄文タタキ、内面平行文当て具痕 | 古墳前期 | 第174集 | 49－101 |
| 3 | 胴部片 | 比恵16次 | 古墳周溝 | 外面縄文タタキ、胎土が泥質 | 古墳前期 | 第174集 | 49－102 |
| 4 | 胴部片 | 比恵18次 | P-164 | 外面縄文タタキ、内面平行文当て具痕 | | 第227集 | 87－32 |
| 5 | 胴部片 | 比恵50次 | SB204柱穴 | 外面縄文タタキ、内面平行文当て具痕 | | 第451集 | （註2） |
| 6 | 盆 | 比恵92次 | 包含層中層 | 底部平底でロクロによるナデの痕が残る、泥質胎土 | 古墳前期前葉 | 第898集 | 29－235 |
| 7 | 筒杯 | 比恵92次 | SC13 | ロクロによるナデの痕が残る、泥質胎土 | 古墳前期初頭 | 第898集 | 29－234 |
| 8 | 胴部片 | 那珂21次 | SK-48 | 外面縄文タタキ、内面平行文当て具痕 | 弥生中末～後初 | 第291集 | 232－73 |
| 9 | 胴部片 | 那珂21次 | SK-48 | 外面縄文タタキ、内面平行文当て具痕 | 弥生中末～後初 | 第291集 | 232－74 |
| 10 | 胴部片 | 那珂21次 | SK-49 | 外面縄文タタキ後沈線、内面平行文当て具痕 | 弥生中末～後初 | 第291集 | 239－32 |
| 11 | 椀 | 下月隈C4次 | SD116 | 口縁端部は断面三角形に張り出す、内外面ともロクロによるナデの痕残る | 古墳前期初頭 | 第750集 | PL. 82－545 |
| 12 | 筒杯 | 下月隈C7次 | SD818 | 底部に静止糸切痕、内面にロクロによるナデ | 古墳前期前葉 | 本書 | 72－118 |
| 13 | 壺胴部 | 雀居4次 | SD03上層 | 胴部内外面にロクロによるナデ器表は灰色で、破断面は灰白色の瓦質焼成 | 古墳前期初頭 | 第406集 | 131－1233 |
| 14 | 筒杯模倣品？ | 高畑19次 | SD-030 | 円筒状の器形で、外面にハケが施される | 古墳前期初頭 | 第799集 | 12－28 |
| 15 | 胴部片 | コノリ3次 | 包含層 | 外面縄文タタキ、内面平行文当て具痕 | | 第728集 | 15－114 |

（註１）上記表の時期区分について、「弥生中末～後初」は須玖Ⅱ式新段階～高三瀦式古段階、「弥生後期後半」は下大隈式、「古墳前期初頭」は近畿地方の庄内式に併行する時期、「古墳前期前葉」は布留式古段階に併行する時期を指す。
（註２）この資料は報告書には掲載されていないが、久住猛雄氏よりご教示いただいた。なお、注記には「HIE50　SB204　SP2028　940127」と記されており、古墳時代後期の掘立柱建物から出土したことがわかる。

たる地点に、博多湾から大宰府に向かって走る西海道に置かれた駅、即ち『古今著聞集』巻一九では筵田駅と呼ばれ、『延喜式』兵部省では馬十匹を置くとされている久爾駅があったことである。本木簡の上端は故意に破損されているので、所謂郡符木簡の例を参照すれば、本木簡は差し出し人の手許に戻ってきて廃棄された可能性が大きい。とすれば、本木簡の出土地点ないし溝の更に上流に、席田郡家のような何らかの公的施設があって、筵田駅（久爾駅）との密接な連携のもと、皇后宮職少属の必要とする物資を調達したという筋書きが想定できるのである。

そこで皇后宮職少属であるが、大宰府に派遣される官僚は、必ずしもその官僚としての肩書きに沿った役割を負わされているとは限らない点に注意しなければならない。例えば神亀五年六月、大宰帥として任地にあった大伴旅人の妻が都で死去した際、弔問のための勅使として式部大輔石上堅魚が大宰府に遣わされているが、この役割は式部大輔という役職と直接の関係は無い。こういった例に準じて、皇后宮職少属が大宰府に派遣されることも、またあり得たこととせねばなるまい。天平年間の大宰府は、疫病の流行や藤原広嗣の乱など、特使を派遣する機会には事欠かない。こういった使者が、駅路を通って大宰府に入る直前に何らかの必要品を求め、それを郡家等の公的施設で誂えた際に、本木簡が使用された可能性もあるのである。

**おわりに**　結局、何を持ってこいという命令なのかが鍵であるのに、その語が読み取れないために、幾つかの解釈の可能性を提示するにとどまったのは遺憾である。皇后宮職そのものの活動と直接結びつけるにはなお慎重であったほうが良いこと、しかしながら土地柄から言えば、皇室の財政に縁のない地域ではないこと、ただし、皇后宮職という官職にあまり囚われると、かえって解釈を誤ってしまう可能性があることを述べ、あとは今後の検討に委ねたい。

主要参考文献

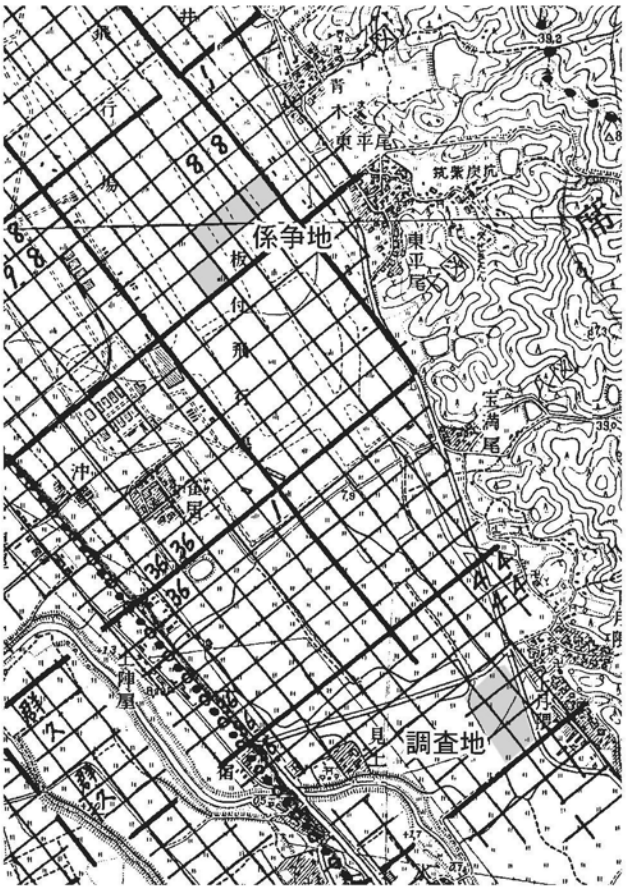
鬼頭清明「皇后宮職論」『古代木簡と都城の研究』塙書房、二〇〇〇年
中村隆之「律令制下の皇后宮職」『新潟史学』三一号、一九九三年・三二号、一九九四年
宮内庁書陵部『皇室制度史料　后妃　三』吉川弘文館、一九八九年
日野尚志「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」『佐賀大学教育学部紀要』二四号、一九七六年
平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系41福岡県の地名』平凡社、二〇〇四年

依二牒状一、以二去九月一申レ府引二勘図帳一、明注二寺家田一也。望請、下二符国司一、早被二勘糺一」者。国宜二承知、早速弁行一。不レ得二疎略一。符到奉行。

従四位上行大貳茂世王　　従六位上行少典官枝（ママ）者宿祢貞行

貞観十年閏十二月廿五日

以上要するに、延暦十一年に一切経料田として観世音寺に施入された土地と、前斎院の高子内親王家の所領で、後に内蔵寮が買得して博太庄と名付けた土地とが錯綜して散在し、ある地点では両者がその所有権を主張するという事態が生じたのである。問題の内蔵寮領博太庄は席田郡に存在しており、その全貌は掴みきれないが、〔史料7〕に見える係争地を地図に落としてみれば、そこは本木簡の出土地と指呼の間にあるということができる。




日野尚志「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」に一部加筆。

問題は何故に前斎院たる高子内親王の所領が、このような位置にあったかということにある。高子内親王は仁明天皇の娘で、母は、当時皇室との間に濃密な婚姻関係を結んでいた百済王家の出身の永慶であった。高子内親王の所領は、売却という形ではあっても、帝室財政を担当する内蔵寮の所領となっているのであって、広い意味では皇室財産として確保され続けたわけである。とすれば、高子内親王家の所領となる以前にも、何らかの皇室財産的な存在であった可能性があり、それは遡れば皇后宮職の所領の一部を構成していたのではなかろうか、という推論が成り立たないでもないのである。ただし、そのような状況がいつ頃からどのように始まったかについては、一切不明とせざるを得ない。

**筵田駅（久爾駅）**　以上、皇后宮職と出土地点とが結びつく可能性を探ってみたが、はかばかしい成果が得られたとは到底言えない。そこで今度は視点を変えて、本木簡の命令内容と出土地点との関連について検討を試みよう。初めに見たように、本木簡の命令内容は、当日の午後八時までに何らかの物品を馬や脚力を用いて持ってこいという緊急指令である。脚力というのは、「前烽不レ応者、即差二脚力一往告二前烽一」（職員令兵部省条集解伴云、一〇〇頁）とあるように、走って伝える使者を指すこともあれば、「謂、輸レ租之処、均出二脚力一、送二大炊寮一、猶如レ運二送調庸一」（田令田租条義解、三四七頁）とあるように、特に急がない単なる担夫を指すこともあるが、ともあれ「国伝送者、不レ可レ発レ駅、令二脚力送一耳」（公式令駅使在路条集解穴云師説、八六五頁）とあるように、駅馬を用いるのではなく、公的に指名されて、自らの脚力を用いる伝達者ないし運搬者を指す。烽や国衙等には、すぐに進発を命じることのできる人間が配置されていたのであろう。

そこで問題となるのが、この木簡の差出人と宛先である。このことを考える際に問題となるのは、本木簡の出土地点とは御笠川を挟んだ対岸にあ

に対して事実関係を明確にせよと命じた。これに対して席田郡司は同月九日に、承和十四年の校図帳・目録には確かに一切経田寺田が観世音寺の主張する面積だけ記載されているが、ただ坪付は寺の主張とは異なっているので、施入の際の文書（これにも坪付が記載されていて、それは承和十四年の校図帳・目録と一致していたのであろう）を筑前国に通知した、と観世音寺への返答があった。そこで貞観十年二月五日付で、寺は筑前国に裁定を願い、その文書は同月二十一日に筑前国に到来した。ところが筑前国は、既に昨年三月五日付けの内蔵寮の牒を受け取っており、その中で内蔵寮は、例の庄は故高子内親王の所領だったが、今は内蔵寮が購入しており、内蔵寮の別当たる右大臣（藤原良相）は、寮から筑前国に通知して、寮の土地の面積や便不・品質を調査させよという命令を発し、それを受けた内蔵寮は、伊勢春富を派遣して筑前国司とともに調査せよと命じた。これを受けた筑前国では、同年、つまり昨年の六月九日に使者を郡司のもとに連れて行き、一緒に調査した結果に、何図何里何坪に何段という位置の明細を記した坪付帳を副えて、内蔵寮に報告したのであった。ただ内蔵寮の方から提出された資料（御処分帳に基づくものであろう）に依拠すれば内蔵寮領（もと高子内親王家領）の中には寺田は混じっていないことになり、一方、承和十四年の図帳に依拠すれば内蔵寮領の中に観世音寺の田が点在することになってしまい、どちらに基づいて裁定すればよいのか筑前国では判断できないので、観世音寺の方で大宰府にお伺いを立て、府の裁定に従って筑前国では処理しようという通知が、貞観十年二月二三日に、筑前国から観世音寺に出されたのであった。

これを承けた観世音寺は、同月二七日に右の文書を引用した牒を大宰府に提出し（一五八号）、更に同年一〇月一一日には再度内蔵寮領博太庄の現地荘官たる庄預荒城長人に対して出頭を命じたが、庄預は言を左右してこれに応じなかった（一六〇号）。

結局、貞観一〇年閏一二月二五日になって、大宰府は以下のような命令を筑前国司に下し、観世音寺領の保全を命じたのであった。

〔史料7〕大宰府符案（早稲田大学所蔵文書。平安遺文一六一号）

大宰府符筑前国司

応二早弁行一観世音寺一切経田壱拾町捌段貳百陸拾肆歩在二席田郡一

三図三里十三坪四段　同里廿九坪一町
四図二里卅一坪二段　三里五坪二段
同里廿一坪二段　三里五坪（ママ）・十六坪三段
同里十九坪一段
五図四里廿二坪四段　同里廿四坪四段
同里十五坪七段百卌四歩　同里十四坪四段二百歩
三里廿七坪六段一百八十歩
六図四里十八坪二段　同里十九坪四段
同里廿八坪七段　同里廿九坪四段
同里卅坪七段　八（同カ）里廿七坪一段
同里卅四坪三段百歩
已上七町七段二百六十四歩無妨
高子内親王家庄妨取二町一段
六図三里廿八坪七段　同里廿九坪三段
同里卅坪七段　同里卅四坪四段
伊勢守源冷家妨取五図三里廿三坪一町

右、得二彼寺牒一称「件料田自二元来一為二寺家田一、作来年久。又明注二図帳一。而高子内親王家庄専当荒城長人、称二庄家田一妨取之。因レ茲、寺可二弁行一之状、以二去二月五日一牒二送於国一。国同月廿三日返牒称『拠二庄牒一勘レ之者、庄田之内不レ可レ有二寺田一。依二図帳一勘レ之者、庄田中注二寺家田一。彼此相違、難レ取二一定一。仍不レ能二弁行一』者。寺

廿九坪四段　卅坪七段

右件等坪、従去年前所障取、雖然未勘国図、但田実寺預僧定俊師作。

牒。得寺家今月廿三日牒称「荒城岑主為勘問彼寺一切経田六図三里廿八坪七段、経年序奸作之由、所召」者。須随牒旨参向弁之。今検案内、件田以去嘉祥三年八月十七日、被載御処分帳、所被行也。従爾以降経十八箇年、如此無妨之。而今称寺家田、拾坪障妨。此庄専当等、任心難弁定、今須与御処分帳・国図共、理到弁定間、件牒旨不堪承引」。仍還牒如件。以牒。

貞観九年三月廿六日　　専当春花福長

検校介永原朝臣　　別当荒城長人

右の史料によれば、相論の発端は、前斎院高子内親王家側の人間であった荒城岑主による観世音寺の所領たる一切経田の内の六図三里廿八坪の七段の長年に渉る不当な耕作を、貞観九年（八六七）三月二三日になって観世音寺が高子内親王家側に訴えてきたことにあった。観世音寺側は、荒城岑主を喚問しようとしたが、内親王家側は、問題の土地が嘉祥三年（八五〇）八月の御処分帳に既に記載されており、以後一八年間に渉って問題なく支配してきたのであり、御処分帳と国図とに基づいた決定が下されるまでは、観世音寺の喚問には応じることができないとして、観世音寺の牒を突き返したのであった。なお、内親王家の主張によれば、観世音寺は、問題の坪以外にも、六図四里でも合計二町六段の土地を自分の物と主張し、実際には僧定俊が耕作しているらしい。

〔史料6〕筑前国牒案（早稲田大学所蔵文書。平安遺文一五七号）

筑前国牒　観世音寺

不能弁行故高子内親王家庄田二十八町三段百四歩之状

牒。寺今月五日牒、廿一日到来称「件以去延暦十一年三月十三日為一切経料□施入於寺家」。自爾以降、附国郡図帳注寺田、以其地利、充用彼経料、已年序久遠。而前斎院□称家田、頃年妨煩件田。因茲、寺以去年十一月一日、可勘弁申送之状、下知郡司」。即得郡司同月九日解称『去承和十四年校図帳目録、被載寺田如数。但坪附相誤、以彼本券文申於国』者、国衙察状、早依実被弁糺、以絶論緒」者。須依牒状、勘弁行之。而得内蔵寮去年三月五日牒称「件庄故高子内親王家庄也。今沽進於寮家」。被別当右大臣宣称『寮牒送於国、令勘申町段歩数・利害便不及当土品直等』者。仍勒使従八位下伊勢朝臣春富、牒送如件。衙察之状、慇懃使勘附、可報示」者。国依牒状、以同年六月九日、下符郡司、与使者共勘注、即副坪附帳言上已訖。但拠寮牒勘之者、庄田之内不可有寺田、依図帳勘之者、庄田之中注寺家治田」。彼此雑□難一定」。因茲不可弁行」。今須寺家申府聴裁、随裁下弁行。以牒。

貞観十年二月廿三日　　少目忍海造為秀

守紀朝臣恒身　　掾　興世朝臣

介永原朝臣　　掾　紀朝臣

権介長岑宿祢恒範　　権掾　有良朝臣

大目大中臣朝臣松守

権大目刑部造

権大目佐伯造

右の史料によれば、観世音寺の主張は、問題の土地は延暦十一年（七九二）三月十三日に一切経田として施入されたもので、そのことは国・郡が保管してある図・帳にも寺田と記載されており、そこからの収益を一切経料（写経の費用？）に充ててきたのに、高子内親王家の方が自分の土地だとして押領しているというもので、寺は貞観九年十一月一日に、席田郡司

か官職・帯位が高すぎるのである。

第二の問題は、そもそも皇后宮職等の封戸が西海道に置かれたことは無かったのではないかと考えられることである。

〔史料4〕延喜式巻二二民部

凡諸家封戸、各為三分一、一分充二輸レ絁国、二分輸レ布国一。但伊賀・伊勢・参河・近江・美濃・越中・石見・備前・周防・長門・紀伊・阿波等国、不レ得レ充レ封。

禄令の規定によれば、封戸を与えられた人物即ち封主は、封戸とされた戸の成員が納める調・庸と租の半額（後、全額）を受け取る。右の規定は、そのうちの調庸について、絁（絹布の一種）と布（麻等を原料とする布）とを一対二の割合で徴収するように戸を設定せよ（具体的には封戸は五十の倍数であることが多いので、里＝郷単位となる）という規定である。

ところが西海道の諸国の調庸は、一旦すべて大宰府に集められ、大宰府から中央へは綿（真綿）及び特殊な加工品しか運ばない。残りは大宰府自体の財源として、大宰府の蔵司に貯積され、費消される仕組みになっていた。史料4に西海道の諸国が見えないのは、西海道の中にある寺社に設定する以外には、封戸を設定することがあり得ないからである。

また、封戸の租や、あるいはこれを原資としての出挙については、そもそも、

得二大宰府解一称「大宰所部、本禁二出米一。後依二太政官去延暦十二年八月十四日符一、重加二勾勘一、一切確禁。（下略）」

（『類聚三代格』巻六弘仁二年十月十五日官符）

あるいは、

検二太政官去延暦十二年八月十四日符一称「右大臣宣。奉レ勅、大宰部内出レ米先有二禁制一。而今同官人任レ意運レ米、郡司百姓、寄二言他物一、詐受二過所一、往来商賈、相続不レ絶。宜二厳禁断一、自レ今以後、不レ得二更然一」者。

（『同』巻六大同四年正月二六日官符）

とあるように、おそらくは軍事的な要請からであろう、大宰府管内から米を搬出することには強い規制が加えられていた。事実上はこれが破られていたことは間違いないが、八世紀において大宰府管内に律令制に則った封戸が中央貴顕のために設けられた可能性はかなり小さいと言わなければならない。

ただし、三代実録貞観一二年二月二三日条に載せる大宰大貳藤原冬緒の起請に「穀倉院地子交易物、比年之間、令三監一人勾二当其事一、毎年交易二軽物一輸進」とあるように、大宰府管内での収益を米以外のものに交換して京に送るという手法は咎められないので、封戸が置かれた可能性は低いとしても、何らかの形の中央権門の所領が西海道に存在し得ないというわけではないのである。

**高子内親王家庄**　そこで今度は遺跡の現地に即して考えてみると、実はこの遺跡のある所は、平安時代初期に、高子内親王家、後に内蔵寮の所領と観世音寺の所領とが錯綜して散在し、貞観年間に両者の間で相論が起こった地点にほど近いことが興味を引く。

関連の史料は、観世音寺――（写し）→東大寺→蜂須賀侯爵家→早稲田大学と伝わった観世音寺一切経田関連文書（平安遺文一五四・一五七・一五八・一六〇～一六二号）として残っている。

〔史料5〕高子内親王家荘牒案（早稲田大学所蔵文書。平安遺文一五四号）

前斎院高子内親王家庄牒　観世音寺政所

合被二障妨一田参町三段

六図三里廿八坪七段今年三月廿三日帖所レ被レ載。

四里二町六反

十八坪八段　十九坪五反　廿八坪二段

貞観四年七月二八日の時点で、ともに正八位上の者が就いているので（日本三代実録）、必ずしも時期が下るほど帯位が上がるとは言えない。以上、「皇后宮職少属正八位上」という官職・位階から、それが誰に付けられた皇后宮職で、従って本木簡の年代が何時か、ということは追求できないということを述べた。

**皇后宮職と出挙・封戸**　それでは、何故に皇后宮職の少属なる、本来都で勤務すべき官人の名が、当該木簡に記されたのだろうか。その理由としては、何らかの用務を帯びた当人が、遺跡近辺まで尋ねてきたという想定が考えやすい。その点で参考になる例が、左に掲げた史料である。

〔史料1〕天平九年但馬国正税帳

中宮職捉稲経国単二百四十五日、充稲……

舎人少初位上巨勢朝臣長野、将従一人并二人、依例出挙事起二月一日迄六月二十九日并百四十八日、又収納事起九月一日迄十二月九日并九十七日、惣二百四十五日

これは、皇太夫人藤原宮子のために設けられた中宮職の下級役人である中宮舎人が、中宮職の稲を元手に、但馬国において二百四十五日に渉って出挙活動（春・夏の本稲貸し付けと、秋の元利回収）を展開し、その際の食料費は但馬国が支出したという趣旨の記録である。元手そのものが但馬国に集積されていたと思われるので、あるいは中宮職の封戸が同国に設定されていた可能性もある。

〔史料2〕天平四年（以前？）播磨国郡稲帳

中宮職美作国主稲無位錦部主村石勝、従一人并二人……

史料1では「捉稲」、史料2では「主稲」と表現は異なるが、同様の活動をしていたものと解釈して良い。

このように、中宮職では、地方の封戸の収穫を元手に、国司から食料費を支給されるという便宜を与えられながら出挙活動を展開し、収益を挙げていたのであった。

〔史料3〕兵庫県袴狭遺跡出土木簡（『木簡研究』一一号）

「　□前マ……　額田マ□□十
出石□□〔下カ〕　六人マ……　日下マ米□四　此皇后宮税急奉上
□マ……　兵官□□〔判カ〕並　」

これは、延暦十六年正月二十日という年紀のある木簡と伴出しているので、ここでいう皇后宮職は③の藤原乙牟漏附きであった可能性が最も高い。皇后宮の税が但馬国内某所に貯積されていて、それを急ぎ進上せよと命じた木簡と解釈できる。この税も、皇后宮から派遣された役人が運営した出挙に由来すると考えるのが穏当であろう。

以上三例は、中宮職や皇后宮職が、国司の公的援助を受けつつ、地方で出挙活動を展開していたことを示すものであるが、その出挙のそもそもの財源は、かつて、あるいは継続的にその地に設定された封戸の収益のうちの田租に由来する可能性が大きい。実際に皇后宮への封戸が設定されている国としては、天平七年の時点での相模国（同年封戸租交易帳）、元永二年の時点での尾張国（朝野群載）などが容易に知られる。

それでは、本木簡の「皇后宮職少属正八位上」某も、同様の任務を帯びて下向してきたのであろうか。もとよりその可能性が全く無いわけではないが、しかし、この推論には難点がある。第一の問題は、その官職である。史料1・2の例では、そのような業務を担うのは、少初位上の中宮舎人か、あるいは無位の人物であった。これに対して皇后宮職少属は、最下級とはいえ四等官の一人であり、また無位から正八位上に昇るには、八階の昇叙、つまり普通には十二年以上に渉って勤務を怠り無くこなしていく必要があり（蔭位があればこの限りではないが）、この差は決して小さいものではない。つまり、単に出挙稲の運営の為に下向してきたとするには、いささ

后宮職」とは、具体的にはどの皇后のために設置された官庁であったのだろうか。まず上限については、「正八以上」という官位の記載から、これが大宝令の施行以後であることが、押さえられる。下限については、発掘担当者の所見では、斎串と重なり合うような形で本木簡が引っかかっていた堰を設けた旧河川（幅約一〇㍍、深さ約一・二㍍）は、八世紀後半に洪水で埋没したとされているから、八世紀後半までの皇后を検討すれば良い。この時期に皇后となった者は意外に少なく、左の三例に限られる。

①藤原安宿媛（聖武天皇の皇后、光明皇后。孝謙・称徳天皇の母）
　天平元年（七二九）八月一〇日～天平勝宝元年（七四九）七月二日？
②井上内親王（光仁天皇の皇后）
　宝亀元年（七七〇）一一月六日～宝亀三年（七七二）三月二日
③藤原乙牟漏（桓武天皇の皇后、平城及び嵯峨両天皇の母）
　延暦二年（七八三）四月一八日～延暦九年（七九〇）閏三月一〇日

従って、本木簡に記された「皇后宮職少属」が仕えた皇后は、おそらくは①～③の三人のうちの一人の中に求めなければならない。

ところで、皇后宮職少属の相当位は、令には規定されていないが、同格と考えられる中宮職の少属の相当位は、養老令では従八位上となっている。実例から検討してみると、左のｅでは「従八位下守少属」、ｋでは「正八位上行少属」との署名があり、行守の規定により、少属の相当位は正八位上よりは下、従八位下よりは上、つまり従八位上もしくは正八位下となる。一般に大宝令と養老令で相当位は変化が無いので（仁井田陞・池田温『唐令拾遺補』第三部唐日両令対照一覧、東京大学出版会、一九九七年）、八世紀以降、相当位は従八位上で固定されていたと考えるのが穏当だろう。

一方、実例を検討してみると、左のような諸例が見出される。

| 年月日 | 官位 | 人名 | | 出典 |
|---|---|---|---|---|
| a天平六年八月五日 | 従八位上 | 大蔵忌寸 | 皇后宮職移 | 大日古一―五八五 |
| b天平六年八月一〇日 | 従八位上 | 大蔵忌寸 | 皇后宮職移 | 大日古一―五八六 |
| c天平七年七月二九日 | 従八位上 | 大蔵伊美吉 | 皇后宮職移 | 大日古一―六二八 |
| d天平七年八月九日 | 従八位上 | 大蔵忌寸 | 皇后宮職移 | 大日古一―六二九 |
| e天平九年四月六日 | 従八位下 | 出雲屋麻呂 | 皇后宮職牒 | 大日古二―二九 |
| f天平一一年七月一二日 | 従七位上 | 出雲 | 皇后宮職移 | 大日古二―一七四 |
| g天平一六年七月一二日 | 従七位上 | 出雲 | 皇后宮職移 | 大日古二―三五二 |
| h天平一七年一〇月一八日 | 正七位下 | 岐連美濃万呂 | 皇后宮職解 | 大日古二―四六九 |
| i天平一八年三月一六日 | 従七位下 | 川原蔵人凡 | 皇后宮職牒 | 大日古九―一三九 |
| j天平一九年正月二八日 | | 川原凡 | 天平勝宝二年八月一七日宣 | 大日古三―四一四 |
| k天平二〇年一〇月一八日 | 正八位上 | 土師宿祢 | 皇后宮職牒 | 大日古三―一二五 |
| l延暦四年六月八日 | 正六位上 | 林連浦海 | | 続日本紀 |
| | ↓外従五位下 | | | |

以上が、九世紀前半までに知られる皇后宮職少属の全てである。木簡に見えている「皇后宮職少属正八位上」と一致するのはｋだけであるが、だからといって土師宿祢が問題の人物であるというわけにはいかない。ａ～ｅの人物が、在任中に昇叙して正八位上になることもあるし、ｆ～ｉが、これ以前に正八位上であった可能性もあるからである。そもそも皇后宮職少属は、皇后宮職が中宮職と同格ならば定員二名の筈で、該当する年度の在任者は、右の表の数倍は存在する筈である。従って、本木簡の「皇后宮職少属」の固有名詞を求めることは、不可能ということになる。

なお、右の表からは、時代が下るに従って次第に帯位が上がるようにも見えるが、皇后宮職少属と同格と考えられる皇太后宮職と中宮職の少属は、

# 第七次調査出土「皇后宮職」木簡について

坂上康俊

**はじめに**　下月隈Ｃ遺跡第七次調査地点から出土したいわゆる「皇后宮職」木簡は、その記載内容の特異性から、公表時に大きな反響を呼び起こした。しかし、本木簡の記述は、さまざまな解釈の可能性を示すとともに、逆にどの解釈にも決定的な優位性が認められないという状況が続いている。そこでこの機会に、本木簡についての基礎的なデータと、解釈の可能性とを提示し、今後の検討に備えようと思う。

**形状**　まず形状について。現状は微妙にくねった本体の上端に、角状に二本の突起を持った形状を呈しているが、発掘された当初は曲がってはおらず、自然乾燥の結果、このように曲がってしまったものである。

上端左右の突起の先端は折られたもので、凹んだ部分も強引に折られた結果と認められるが、折るために刀子等で傷を付けた痕跡は確認できない。下端は左右から見て三角形を呈するように表裏から削り込まれており、これは本木簡が使用された時の形状を残していると言えよう。

**釈読と解釈**　次に釈文を掲げよう。

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

（表）□三人右為皇后宮職少属正八位上

（馬カ）（脚カ）　（示カ）

（裏）□□　□　□力者宜知状限今日戌時□進来御□到奉行

1 2 3　4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

（354）×44×4　019形式　檜材

表面については、文字の釈読に疑問の余地は無い。「三人右為」までは、「皇后宮職」以下裏面までとは、別筆の可能性がある。裏面第15字は、一字で「筥」のようにも見えるが、「御□」の二字であった可能性もある。第19字は、文脈から見て、本木簡に記された命令自体を指す語が入る筈で、本来なら「符」等の文字が入るべきところであろうが、文字としては「示」に似ている。このように若干不安定な所はあるが、表裏を続けて読み下してみると、左のようになるだろう。

……三人。右、皇后宮職少属正八位上（某、あるいは某のしかじかの用向き）の為に、……馬、脚力の者、宜しく状を知り、今日戌の時を限り、□を進め来よ。御示到らば奉行せよ。

「皇后宮職少属正八位上」の次には、その官と位を帯びた人名があった筈であるが、前述のように下端は原状を留めていると思われるので、裏面上端に、その姓名が記されていたと考えざるをえない。またその人物の用向きも記されていた可能性がある。また、表面冒頭には三人分の役職ないし人名が記されていた可能性があり、表裏とも上端は数文字から十数文字失われていると考えられる。すなわち本木簡は、本来の長さの四分の一から三分の一が欠けていると思われるのである。

全体としては、一種の召喚状であり、

皇后宮職の少属たる正八位上某の為に何らかの物品を急ぎ必要とするので、表記の人物三名は、馬や脚力を使って、当日の午後八時までにそれを届けるように。

という内容の命令と理解できよう。

**皇后宮職少属正八位上**　本木簡が注目を集めたのは、大宰府の近傍とは言え、都から遠く離れたところで出土した木簡に、都に置かれた皇后宮職の官僚の活動を示す記載があったためである。では、本木簡に記された「皇

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | しもつきぐましーいせき ろく |
| 書名 | 下月隈C遺跡Ⅵ（本文編） |
| 副書名 | －福岡空港周辺整備工事に伴う下月隈C遺跡第7次調査報告－ |
| 巻次 | Ⅵ |
| シリーズ名 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 881 |
| 編著者名 | 山崎龍雄/荒牧宏行/佐藤洋一郎・那須浩朗/中橋孝博/光谷拓実/鈴木茂/黒澤一男/新山雅広・上田弥生/パリノ・サーサヴェイ株式会社/寺井誠/坂上康俊/屋山洋 |
| 編集機関 | 福岡市教育委員会 |
| 所在地 | 〒810－8621　福岡市中央区天神1丁目8－1　TEL092－711－4667 |
| 発行年月日 | 西暦2006年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 下月隈C遺跡群第7次調査 | 福岡市博多区月隈4丁目 | 40132 | 2625 | 333418 | 1302740 | 20010401～20020329 | 9,139 | 調節池工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 下月隈C遺跡第7次調査 | 集落・水田 | 弥生時代、古墳時代、古代、中世後期、近世 | 弥生時代－竪穴住居跡＋掘立柱建物＋土坑＋溝＋/古墳時代－溝・自然流路＋水田＋土坑/古代－溝・川跡＋堰＋水田/中世－溝＋水田＋堰/近世以降－溝 | 弥生時代－弥生土器＋楽浪系土器＋石器＋鋳型＋銅鏃＋鉄器＋木器/古墳時代－土師器＋須恵器＋木器/古代－土師器＋須恵器＋墨書土器＋木器＋木簡＋木製祭祀具/中世－土師器＋中国産陶磁器＋石製品＋木製品/近世－国産陶磁器＋木製品 | 奈良時代の川跡から『皇后宮職』木簡出土。また弥生時代後期溝から楽浪系土器や青銅器鋳型が出土した. |


| | |
|---|---|
| 要約 | 調査地が所在する下月隈C遺跡は福岡空港南側に隣接する一帯で、御笠川東側の沖積微高地上に立地する遺跡である。調査は洪水対策の調節池建設に伴って平成10年から15年迄実施した。今回の調査は平成13年度に実施した第7次調査で、過去の調査例で弥生時代から中世にかけての遺構が検出されている。今回の調査でも、弥生時代から中世にかけての遺構の調査を行った。第Ⅰ面は古代末から中世後期の時期で、条里地割された畔畔と水路と思われる溝である。溝からは堰が検出された。第Ⅱ面は古墳時代後期から奈良時代頃の時期で、水田面と水路と思われる溝や奈良時代に埋没した川跡がある。川跡中の堰内から『皇后宮職』木簡が出土した。第Ⅲ面は弥生時代前期から古墳時代前期迄の時期である。この面では南側高所部で竪穴住居跡と掘立柱建物跡から構成される集落を検出した。また西側から北側にかけての低地部には溝などを検出した。溝からは堰があり、北側では水田面と思われるような畦畔がプリントされた部分もあった。掘立建物柱穴内にはネズミ返しを転用した礎板や柱が残っていた。溝からはまた青銅器鋳型が出土した。 |



下月隈C遺跡Ⅵ

－本文編－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第881集

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8－1
平成18年3月31日

印刷　陽文社印刷株式会社
福岡市南区大楠2丁目4番10号